講演資料

ＳＦセミナー２００１

『ＳＦ』とのファースト・コンタクト

―瀬名秀明、ＳＦに対するアンビバレントな思いを語る―

2001 年 5 月 3 日（木）13:00～18:30
全電通労働会館ホール

瀬名秀明

2001 年 7 月 2 日　公開版 Ver2.1
2001 年 6 月 20 日　Ver2.0
2001 年 5 月 2 日作成　Ver.1.0

【目次】

はじめに …… 4

1. 講演録 …… 7
   - 講演内容 …… 7
   - 質疑応答 …… 33
2. 講演スライド（PowerPoint により作成、ノート表示） …… 37
3. 講演後の反響に対して …… 82

4. 文芸編集者への取材 …… 94
   - 依頼状 …… 95
   - 書面による回答 …… 98
   - インタビュー取材 ……116
   - 電話取材 ……127
5. ウェブアンケート調査 ……129
   - アンケートフォーム ……130
   - 全有効回答 ……135
   - アンケート回答結果一覧 ……221

参考資料
どれだけＳＦを読んでいるか？アンケート（筑波大学・星野力教授）
……222
ＳＦセミナー２００１プログラムブック（コピー） ……237

資料請求先 ……245

はじめに　ＳＦとエンターテインメント小説の未来に向けて

本資料は、2001 年 5 月 3 日（木）に全電通労働会館ホールで開催された「ＳＦセミナー2001」にて、瀬名秀明が「**『ＳＦ』とのファースト・コンタクト　―瀬名秀明、ＳＦに対するアンビバレントな思いを語る**―」と題して講演した内容をまとめ、日本ＳＦ出版の現状と将来を考えるきっかけづくりとなることを願って作成されたものである。

私はＳＦとなぜか関わりが多い作家である。『パラサイト・イヴ』は日本ホラー小説大賞の受賞作であったにもかかわらず、ＳＦファンの間で「これはＳＦだ」「いや、ＳＦではない」という論争が起こった。これはいまも断続的にウェブなどで続けられている。『BRAIN VALLEY』を刊行したときは、角川書店が用意したウェブの宣伝ページで大きなＳＦ論争が起こってしまった。もちろん好意的なＳＦファンも大勢いたが、一部の強い批判は当時の私にとってショックだった。単なる批判ではない。ときには義憤に駆られたような、こちらが怯えてしまうほどの強い怒りなのである。そのような批判に何度も接して戸惑い、それほど彼らを傷つけてしまうのなら『パラサイト・イヴ』を絶版にしたい、と版元に申し入れたこともある（当然、これは受け入れられなかった）。

子供の頃、私は自分がＳＦファンなのだと思っていた。藤子不二雄両氏や眉村卓氏をはじめとする日本のＳＦ作品を楽しんだ。小説を書くようになったきっかけのひとつは、明らかにＳＦなのである。だが、いつの間にか私はＳＦがわからなくなり、ＳＦとコミュニケーションができなくなっていたように思う。『BRAIN VALLEY』では日本ＳＦ大賞をいただいたが、自分から堂々とＳＦ作家であることを名乗ることはできず、歯切れの悪い「受賞のことば」を書かなければならなかった。

ＳＦやＳＦファンに対して恐怖心が募ったことは、結果的に私の作家活動を大きく変化させたと思う。実際、科学ノンフィクションに力を入れるようになったのも、やはりどうにかしてＳＦや科学と折り合いを付けたいという気持ちが後押ししたからだと思っている。私はおそらく、今後二度と『パラサイト・イヴ』のような小説を書くことはないだろう。

『八月の博物館』を書き終えたいま、ようやくＳＦの呪縛から少しずつ自由になりつつあるように感じているが、それでも恐怖心はまだ完全に払拭されていない。なぜ自分はＳＦファンとうまくコミュニケーションができないのか。なぜ自分の作品は一部のＳＦファンから強い怒りや批判を受けてしまうのか。その理由を知りたい、とずっと思っていた。

もうひとつ、心に引っかかっていたことがある。

よく、「ＳＦ小説は売れない」「ＳＦ冬の時代」といわれる。実際、作家や編集者のなかにも、ＳＦを売れないジャンルだと思っている方は多い。だが本当にＳＦは売れないのだろうか。もし

それが本当なのだとしたら、なぜ売れないのか、あるいは売れているのだとしたらなぜそのような言説がまかり通っているのか、これらを一度しっかり調べてみたいと思っていた。

私はノンジャンル・エンターテインメントを目指しているが、一方ではミステリーやホラー、ＳＦといったジャンル小説を愛している。多数のジャンル小説が豊かな作品を次々と送り出し、読者の基盤をつくることによって、はじめてノンジャンル・エンターテインメントは成立するのだと思っている。微力ながらジャンル小説の再建と見直しに協力したいと思った。それが日本のエンターテインメント小説を盛り立ててゆくことにつながればいい。作家は小説を書いて出版界を盛り立てれば充分である、という意見もあるだろう。それはそれで正論だと思うが、誰かがこのようなことをきちんとやる必要があると感じている。そして誰もやらないのなら、私がやろうと思ったのだ。

ＳＦセミナーとは、「ＳＦファン有志が運営し、ＳＦ界内外より様々なゲストを招いて開催する講演／パネルディスカッション形式のコンベンション」である。ＳＦファン有志のボランティアによって運営されており、その歴史は古く、第 1 回は 1978 年に神戸で執りおこなわれた。その後 1980 年からは東京に場所を移して、ほぼ毎年開始されている。近年の参加者は約 200 名。また同日の夜から翌朝にかけて夜の部（合宿）もおこなわれている。ＳＦ大会、京都フェスティバルと並ぶ、ＳＦの三大イベントのひとつといっていい。（ＳＦセミナーについての詳細は、ホームページ http://www.sfseminar.org/を参照のこと。また、当日のプログラムブックのコピーを末尾の「参考資料」に収録した）

数年前から私はＳＦセミナーへのお誘いを受けていたが、ずっとお断りしていたのである。だが今回、上記のような思いを一度どこかでまとめておきたいと考え、講演のご依頼を快諾することにした。そしてよい機会なので、多くの読者からＳＦ観を伺い、また一線で活躍されている文芸編集者からＳＦの現状と将来をインタビュー取材したいと思った。

私がＳＦファンのコンベンションに参加するのは、これが初めてのことである。

ウェブでアンケート調査にご協力いただいた方は 70 名を超えた。またお忙しいなかインタビューや電話取材、あるいは書面回答に快く応じてくださった編集者は、12 社 31 名にのぼった。講演後は、ＳＦセミナー夜の部で「瀬名秀明先生のＳＦに対するアンビバレントな思いを聞いて」という企画が催され、プロ作家・評論家・読者を交えた活発な議論が繰り広げられた。またセミナー終了後は、参加者がウェブ日記・ウェブ掲示板等で今回の講演内容についての感想や意見を掲載してくださった。心から御礼を申し上げる。これらの議論は、必ずＳＦ出版の未来をよい方向に変えてゆくと信じている。

本資料は、ＳＦファンだけでなく、文芸出版に関わる方々にもぜひお読みいただきたいと思っている。意見をぶつけ合い、よりよい方向を探ることは、文芸出版・文芸評論の活性化につなが

る。これはＳＦだけの問題ではない。従って本資料は、基本的に無料で広く一般に配布するつもりである。ウェブ環境を持つ方は PDF 文書形式でダウンロードできるよう整備し、またその環境を持ち合わせない方のために、ハードコピーによる冊子を作成する。PDF 文書の作成費や冊子の印刷費はすべて瀬名の個人費によって賄われる。

本資料では、ＳＦ出版隆盛のためのアイデアも提示した。もしこれにご賛同いただける方は、ぜひお声掛けいただければ幸いである。

最後になったが、このような有益なディスカッションの機会を与えてくださったＳＦセミナースタッフの皆様、そしてＳＦファンの皆様に心から感謝する。
ありがとうございました。

2001 年 6 月
瀬名秀明

１．【講演録】

『ＳＦ』とのファースト・コンタクト
―瀬名秀明、ＳＦに対するアンビバレントな思いを語る―

＊　註 2001 年 5 月 3 日におこなったＳＦセミナー2001 講演のテープ起こし原稿をもとに、読みやすいよう字句を整え、言葉足らずだった部分について大幅な加筆をおこなった。また、随時【＊註】として補足を加えた。

＊　講演はスライドを使いながら進行した。当日用いたスライド原図と、その際に用意したメモは本資料 37 ページから収録したので、適宜参照していただきたい。

＊5 月 3 日当日の夜は、本講演の内容を語り合う合宿企画「瀬名秀明先生のＳＦに対するアンビバレントな思いを聞いて」が開催された（瀬名は参加できなかった）。こちらの企画については「３．講演後の反響に対して」（82 ページ）に詳述。

（司会）

日本ホラー小説大賞受賞の『パラサイト・イヴ』で、鮮烈なデビューを飾られた瀬名秀明さん。1998 年には『BRAIN VALLEY』で第 19 回日本ＳＦ大賞を受賞され、また新作『八月の博物館』も新たな境地を開拓されました。ＳＦセミナーでは数年にわたり瀬名さんに講演のお願いをしてまいりましたが、2001 年ついにその念願が叶いまして、ご講演をいただくことができました。今日は『「ＳＦ」とのファーストコンタクト』と題しまして、編集者へのコンタクトや、インターネットでのアンケート結果を交えて瀬名さんのＳＦへの真摯な思いを語っていただきます。それでは、瀬名秀明さんよろしくお願いいたします。

１）コンタクトへ

（瀬名）

はじめまして、瀬名秀明と申します。今日はよろしくお願いいたします。

ＳＦセミナーは、来るのも講演するのも今回が初めてです。実は何年か前からこちらのセミナーのスタッフの方からお誘いをいただいていたのですが、いろいろな理由でお断りしておりました。なぜかと申しますと、まずは来たら参加者の皆様にぶちのめされるんじゃないか（笑）、なんか恐いことが起こったらどうしよう、という恐怖心が正直なところあったからです。ただ、今日初めてこちらに参ったのですが、雰囲気がよくてほっとしています。それから、実をいうとあまりＳＦを読んでいないという自覚もありまして、特に海外ＳＦをあまり読んでいないので、こちらに出てＳＦの話をしても、観客の方のほうが余程ＳＦを知っているんじゃないか、と思ったこともあります。

以前に「本の雑誌」で、“クズＳＦ論争”のきっかけとなった座談会がありましたが、ここ 10 年、20 年で読まなければいけないＳＦリストというのが掲載されていて、僕が読んでいたのはそのうち 2 割とか 3 割だったので、これを全部読むまではちょっと来られないなと思っていたんですが、今日までに全部読めたかというと読めておりません。申し訳ないです。

さて、昨年の 10 月に『八月の博物館』が出てから角川書店の縛りもなくなって、いろんな出版社とお付き合いができるようになりました。それで今日はＦセミナーに是非お伺いしよう、もしお話ができるのであれば、あまりＳＦファンの方と話をしたことがないので、僕がＳＦに対して思っている違和感のようなものを話して、外の人間がこんな事を考えているということを示そうと思った次第です。僕はもともとＳＦファンだったと思うんですが、どうもいまのＳＦファンの方とうまくコミュニケーションが取れないと感じていたものですから、そういう話をさせてくださいとお願いして、こちらのほうに参りました。どうぞよろしくお願いいたします。

今日はスライドを作ってきました。こちらのスクリーンに出しながらお話しします。1 時間という短い時間ですが……今回はスライドを 40 枚くらい作ってきているんですよね。ですから、はしょったりすることもありますし、全部は説明しません。今日は夜に合宿企画があるようですね。僕はちょっと他の用事があって、そちらにお伺いできないんですけれども、その際に資料として使っていただけると幸いかなと思ってスライドの内容を少し詳しく作ってきました。ですからこの会場では本当に眺めるようなかたちでスライドを見ていただけるとありがたいです。じゃあ、まず 1 枚めのスライドからいってみます。こんなに暗くなってしまうんですね。大丈夫……はい、こういう感じで。

【スライド１】表紙

昨日､たまたまうちの父親と電話をしたときに､「アンビバレントってどういう意味なの？　思わず辞書ひいちゃったんだよ」と訊かれたんです。Vibrant（バイブラント）という言葉がありますよね。「V」から始まるんですけれど、「あれの否定形なの？」と訊かれました。アンビバレントの英語の綴りを書ける方いらっしゃいますでしょうか？　僕も実は昨日まで書けなかったんですが（笑）、「Un」から始まるんじゃないんですね。「Amb」と始まる（＊註・Ambivarent）。辞書をひきますと、「心が不安定である」「愛憎相半ばする」「両面性である」という意味が書いてあります。名詞形では「両性愛の人」という意味がどうやらあるようですね。

【スライド２】瀬名秀明は何者か

では、2 枚目にいきましょう。こういうところで話をして、どのくらいの方が僕のことを知っているのかよくわからないんですが……。まず普通の講演会で話をしますと、僕の本を読んでいる人は、そうですね、200 人中 1 人か 2 人くらいだと思います。だからとにかく自己紹介しないといけない。僕はこういう小説を書いていて、こういう映画になって、こういうゲームが出て……と、映画やゲームのビデオを持って行って、いちいち説明してから講演を始めるんですが、今日はそういうことはしません。

僕は 1968 年の静岡生まれです。本名は「鈴木」と申しまして、「瀬名」いうのはペンネームなんですが、これは鈴木光司さんという作家がすでにいらっしゃったので、「鈴木はやめろ」という話が角川のほうからありました。「そういうときには出身地の名前を付けるのだ」といわれたので、瀬名という故郷の町の名前をつけているわけです。この前「オール讀物」で棋士の羽生善治さんと対談させていただいたんですが、そのときの編集者の方が昔「Number」という雑誌にいまして、僕がデビューした直後に電話をかけてきたことがあります。「あなたの車の描写が素晴らしい、きっとアイルトン・セナのファンに違いない」といって、セナの追悼記事を依頼し

てきたのですけれど、それはお断りせざるを得なかった（笑）。

小学校時代、僕は漫画が大好きで、藤子不二雄先生のアシスタントになるのが夢だったんです。漫画家になるのが夢ではなくて、藤子不二雄先生のアシスタントになるのが夢だったわけですね。藤子不二雄Ａ先生と藤子・Ｆ・不二雄先生、両方好きでした。手塚さんの漫画も読みましたし、テレビでは『宇宙戦艦ヤマト』とか『マジンガーＺ』とかも見ていました。ホームズや江戸川乱歩の推理小説も読みました。藤子さんとか手塚さんについては、ＳＦという感覚では読んでなかったんですが、やっぱりお二人のＳＦ短編はいまも強く印象に残っていまして、手塚さんの『ザ・クレーター』であるとか『タイガーブックス』『ライオンブックス』とかは結構読んでいました。

それから小学校卒業後の 1 年間は父親の都合で家族みんな揃ってアメリカのフィラデルフィアに行きました。そのときよく読んでいたのが「Alfred Hitchcock and the Three Investigators」シリーズですね。これは日本でも昔「ヒッチコックと 3 人の探偵団」というタイトルで翻訳が出ていました。確か挿し絵が永井豪さんです。そのときはとにかく読むものがなくて、このシリーズをずっと英語で読んでいました。日本から送られてくるのは「コロコロコミック」と「マンガ少年」ですね。「マンガ少年」はなぜか本屋さんが送ってくれたので読んでいました。

帰国して中学校に入った頃、ちょうど角川文庫のＳＦが隆盛を極めていまして、眉村卓さんにハマりました。光瀬龍さんも読みましたね。映画の『ねらわれた学園』が中学 2 年生のときです。眉村さんの本は大好きで、たぶん 9 割 5 分くらいの本は読んでいると思います。僕の小説の文体は見る人が見れば眉村さんに近いと思われるんじゃないかと思うんですが、普通に書いていると眉村さんの文体になってしまうので、意識してディーン・クーンツを入れているような状況です。

小学校高学年の頃から推理小説が大好きで、やはりエラリイ・クイーンやヴァン・ダインといったようなものを読んでいます。ハヤカワミステリ文庫や創元推理文庫を読んでいたわけです。それでそこから眉村さんと光瀬さんが好きになったものですから、中学生の頃は「もしかしたら自分はＳＦファンなのだろうか？」と勘違いをして……まあ別に勘違いをしているわけではないんですが（笑）、そう思ったことがあります。それでたくさんＳＦも読もうと思ったんですが、何かいまひとつしっくりこないと感じていた状況でした。

中学生の頃まではアニメもよく見ていたんですが、高校時代に入ってからアニメにはあまり興味がなくなりましたね。ですから僕はガンダムとかはほとんど見ていないんですね。当時のロボットアニメはほとんど見ていない。その頃からようやく早川書房でモダンホラー・セレクションが出始めましたので、それを全部買って読みました。「HORROR MAGAZINE」という別冊はガイドブックとして役立ちましたね。それからなぜか書評が好きになって、「ミステリマガジン」と「ＳＦマガジン」の書評は毎回必ず読んでいました。もっとも、立ち読みばかりで、ほとんど買わなかったんですが（笑）。

小学生の頃はずっとマンガを書いていました。小学校の高学年から推理小説やＳＦ小説を書くようになったんですけど、高校のときに受験でいったんやめてしまう。大学に合格してからサークルに入って小説書きを再開したわけです。その頃書いていたのは幻想小説っぽいものですが、やはりＳＦにはピンとこない状況でした。サークルの先輩は、「やはりコードウェイナー・スミスを読まなくてはならない」とか「『たったひとつの冴えたやりかた』が素晴らしい」といって、いろいろＳＦを貸してくれるんですけれど、面白さがいまひとつわからない。それでミステリーやホラーをよく読みました。クーンツの『ベストセラー小説の書き方』に感化されて、ノンジャンル・エンターテインメントに興味を抱いたりもしています。

【スライド３】ミトコンドリアと『パラサイト・イヴ』

僕の本でいちばんよく読まれているのは『パラサイト・イヴ』ですね。ここに示したスライドは高校の教科書からとってきたミトコンドリアの説明文です。ミトコンドリアに関して割かれている分量は 5 行。僕自身も大学生のときにはこの 5 行分の知識しかなかったわけですが、大学院に入って、ミトコンドリアの中にある酵素の研究をたまたまやることになりまして、その延長線でミトコンドリアそのものに興味を持つようになりました。そんなとき、角川書店さんとフジテレビさんの日本ホラー大賞が創設されて、「これなら応募してみようか」と思ったわけです。

一回目の応募作は、折原一さんみたいな倒叙ミステリーホラーですね。大森望さんは下読みで読んでいらっしゃると思いますけれども、これは 4 次予選で落ちました。それで 2 回目に『パラサイト・イヴ』を出して、それで大賞をいただいたわけです。

【スライド４】批判からＳＦとのコミュニケーションが始まった

ただ、『パラサイト・イヴ』に関しては、出版後にいろいろな批判もありました。お陰様で部数が出たこともありまして､あまり普段は書評されないような方からの批判もいただきましたし、ＳＦファンの方々からの評価もいただきました。良いといってくださる方もいれば、非常に反発された方がいたのも事実です。

「これはＳＦではない」というような意見もありましたし、あとは「誤った意見を科学を広めて金儲けをしている」というようなことをいわれたりもしました。そういった意見は、当時の僕にはすごくきつく聞こえまして、「これはどういうことなんだろう」とかなり悩みましたね。

その後、『BRAIN VALLEY』という長編小説を 97 年 12 月に出すわけですが、そのときに角川書店が宣伝用のホームページを開いて、そちらで掲示板を作ることになりました。僕も当時の担当編集者もウェブは全然知りませんでした。自分で実際に使ってみたのは開設の半年くらい前からです。この掲示板ですが、はじめのうち僕は出るつもりではなかったんです。ところが開設当初はほとんど書き込みがなくて、しょうがないから作者も書き込もうという話になったんですね。するとＳＦ論争になってしまった。『BRAIN VALLEY』では日本ＳＦ大賞をいただきましたが、その「受賞のことば」でもやはり歯切れの悪いことを書いています。それでいろいろとＳＦについて考えるに、まあそれまでＳＦファンの方々とあまりコミュニケーションをしていなかったことも事実ではあるんですが、どうもコミュニケーションをしようと思ってもなかなかうまくいかない。昔は自分もＳＦが好きだったはずなのに、どうしてこういう状況になるんだろうか。だからとにかくＳＦやＳＦファンをを理解したいという思いが強くありました。

【スライド５】ミトコンドリアは何色？

批判についてですが、やはり『パラサイト・イヴ』の影響が大きかったのかなと思ったことをご紹介します。これは『小説と科学』とか『ミトコンドリアと生きる』というノンフィクションにも書いたんですが、「ミトコンドリアの色は何色？」と尋ねると、大抵の人は「緑」と答える。僕は大学の看護学部で授業をして、毎年その最初の講義で「細胞とは？」という話をするわけですが、そこで訊いてもミトコンドリアは緑色という人が圧倒的多数を占めます。たぶん、映画『パラサイト・イヴ』のポスターの影響だと僕は睨んでいるんですが、どうですか？（笑）

【スライド６】これがミトコンドリアだ

本当のミトコンドリアはどういう感じかといいますと、この蛍光顕微鏡写真をご覧下さい。赤色でぼつぼつと点になって、まるで太陽のコロナのように見えるのがミトコンドリアですね。ここで赤色に見えるのは、そういう色に染める試薬を使っているからで、これがミトコンドリアの本来の色ではありませんが、とにかく核の周りに 100 個から 2～3000 個のミトコンドリアがある。大学院に入って学術雑誌などでこういう顕微鏡写真を見ていくうちに、ミトコンドリアのイメージが膨らんできて、それで『パラサイト・イヴ』を書いたわけです。

【スライド７】『パラサイト・イヴ』の波及効果

他の反響も紹介しましょう。これは「SPA！」という雑誌の 1995 年 11 月号に載った記事なんですが、自分の体にあるミトコンドリアから命令を受けて、その言葉をノートに自動書記したというおじさんが出てきています。下にそのノートの拡大図があります。

> **「これからの話は遺伝分子核の主のミトコンドリア核からの全人類へ最初で最後のメッセージ」**

……ということで、ミトコンドリアが喋った歴史的瞬間ということになります（笑）。『パラサイト・イヴ』発売後、こういう人が出てくるようになってしまったんですね。

【スライド８】養老＆米本対談

こちらは「広告批評」1995 年 11 月号に掲載された、養老孟司先生と米本昌平先生の対談です（「バイオホラーに映る日本」）。『パラサイト・イヴ』と（鈴木光司さんの）『らせん』の話が出ていますけれども、僕もこの特集では別のページで出ているんですね。こういう対談が出ると知っていれば僕は出なかったんですが（笑）。たぶん、僕がインタビューを受けた後にこの二人は対談したんでしょう。米本先生はこう仰っています。

> **「『パラサイト・イヴ』も『らせん』も僕は読んだけれど、ああいうのが売れる世の中というのは、どうもね。品がないというか、商売になるんだったらなんでもいいのかという感じで。書いているご本人の問題じゃなく、科学を素材にしていると言いながら、科学的なトリックがきわめて貧弱なああいうものが売れるというのが、なのいかいやですね。（中略）養老さんは、（中略）読まれました？」**

養老先生は**「読みましたよ、パーッと」**と答えていらっしゃる。まあ、僕はお二人を尊敬していますし、いい仕事もされているとは思いますけれども、こういうようなこともあって批判がボディーブローのように効いてきたことは確かですね（笑）。

【スライド９】作家側ができることは何か

それで、こういった批判もあって、だんだん防衛手段を考えるようになってきました。このあたり、自分でも忸怩たる思いの部分と、積極的に考えて行動に移した部分があります。

まずひとつは、フィクションとノンフィクションの仕事をきっちり分けようということ。フィクションでは物語の面白さを追求するわけですが、専門家が読んでも間違いじゃないような配慮は最大限心がけよう。特に僕の小説には研究者がよく出てきますので、彼らに怒られないようにしようという配慮です。

ふたつめは、『パラサイト・イヴ』のようなフィクションを読んだ後で、「じゃあミトコンド

リアというのは本当はどういうものなの？」という疑問が読者には出てくると思うんですね。実際そういう反響もある。そういう読者をノンフィクションにスムーズに移行させてあげることはできないか、というわけで、ノンフィクションの本のプロデュースをしようということなんです。ミトコンドリアの場合は『ミトコンドリアと生きる』という本を出しましたし、『BRAIN VALLEY』では『「神」に迫るサイエンス』という副読本を出しました。それから『八月の博物館』では、まだ本になっていないんですが、いまは亡き「feature」という雑誌で、海外のミュージアムをいろいろ探訪して学芸員に話を聞くという連載をしたわけです。

三つめですが、科学関係の仕事が来たらとにかく手を抜かないでやろう、と思ったんですね。ただ、これは少し失敗もありました。小説を角川書店でしか発表できない時期が長く続いて、しかも角川は長編書き下ろしを望んでいましたから、他社からやってくる仕事がノンフィクションやエッセイばかりになってしまったんです。その中には科学ものもかなり含まれていました。こういったノンフィクションの仕事に時間を取られてしまって、おかしな話ですが小説を書く時間がほとんどないという状況が続きました。小説を書くために作家になったはずなのに、なぜか作家になってから科学の仕事ばかりしているという状況になったわけですね。

もうひとつ、これは僕自身も忸怩たる思いですけれども、公務員をやりながら作家をやっていることを強く批判される方がごく一部いらっしゃいます。ですから大学にいるときは絶対に大学の仕事しかしない、うちに帰ってから作家の仕事をする、という区別を徹底させました。ただ、やはり精神的・肉体的負担が大きくて、いまは非常勤講師や兼任講師というかたちで大学の教育のほうには携わっております。

こうして、少しずつ身の回りの環境を整備してきました。そして最後に残った懸案事項が「ＳＦ」だということになります。

【スライド 10】お互いの違和感をぶつけあおう

さて、そういう防御手段を取りながら、ＳＦについてもいろいろと考えていったわけです。そこで思ったのは、どうもＳＦの内部と外部とのコミュニケーションがうまくいっていないのではないかということと、内部同士、外部同士のコミュニケーションもうまくいっていないのではないかということ。まあ、それで「瀬名秀明」というものを使って、コミュニケーションをうまくできないかと、そう思った次第なんです。

「SF Japan」という雑誌の 2001 年春季号に、「ＳＦ作家への長い道」という座談会が掲載されています（出席者：森下一仁、浅暮三文、北野勇作、鯨統一郎、森岡浩之の各氏）。この中で新進ＳＦ作家の方たちが、ＳＦの魅力はと問われて「ふところの深さ」「なんでもあり」と、ＳＦが自由であることを強調している。いったいどこの話なのだと僕は思いました。ＳＦの世界の住人になってしまえば、これほど自由な国はないのかもしれません。でも、僕にとってＳＦは本当に得体の知れない国で、常に僕の心を束縛する国なんです。いったん外に立ってしまったら、いくら勉強しても永遠に部外者扱いで、わかっていないといわれそうな気がします。このあたりは看護学によく似ています。看護婦（看護士）で臨床経験を持たない限り、外の人が何をいってもわかっていないと諫められてしまう。

【スライド 11】ファースト・コンタクト！

このスライドに示したのはＳＦ作家のロバート・Ｊ・ソウヤーさんですね。ＳＦマガジンから

無断で写真をコピーしてきました（笑）。僕もソウヤーさんの本は大好きで、翻訳された本はほとんど読んでいるんですが、実をいうとこの写真はすごく違和感があったんです。「CONTACT Japan」という合宿形式のコンベンションがあるんですね（http://www.ne.jp/asahi/contact/japan）。ＳＦ作家や評論家、ハードＳＦファンの方たちが集まって、地球人側と宇宙人側に分かれて、それぞれ本当に現実世界で異星人と地球人が出会ったときにどういうコミュニケーションをしていけばいいかということをシュミレートする、そういう集まりです。まあ学術的な集まりではあろうと思うんですけれども、この写真だけ見ると僕は非常に違和感があるんですね。この写真はソウヤーさんを先頭にして、ヒッストという異星人のふりをしながら、いままさに入場して来て地球人側とコンタクトをしようとしているシーンなんですけれども、これだけ取り出すとなんだかすごく違和感があるんです。この違和感は、実は僕が感じているＳＦへの違和感に近いところがあるのではないか。とにかく僕のような作家とＳＦファンの人と何かうまくコンタクトができるような方法を模索したいということなわけです。
（＊註：違和感については「２．講演スライド」のスライド 11 のメモに詳述、47 ページ。また「講演後の反響に対して」でも触れる）

【スライド 12】コンタクトへの準備

それで、「コンタクト」の準備としていろいろなことをやりました。

まずウェブの「ＳＦ系日記更新時刻」というサイト（http://www.fan.gr.jp/~hosoi/hina/sf.html）に載っている方の日記を、約１年間分ほとんど読ませていただきました。

それからＳＦ分野以外の方からの意見が必要だろうと思いました。よく「ＳＦが売れない」「ＳＦ冬の時代」といわれているんですが、どうもそういった議論がＳＦの内部だけで終始しているのではないか。出版社の知り合いがおりますので、あまりＳＦに携わっていない編集者の方々にもあえて「ＳＦってどうなの？」とお伺いして、それをまとめて発表しようかと思いました。

もうひとつはＳＦセミナーのホームページのほうで読者の方からウェブアンケート調査をさせていただきました。「あなたのＳＦ観からすると、瀬名秀明はどうなの？」ということを回答していただいたわけです。これは全部、今日こちらのスライドとそれらの結果を含めて、コピーをして、後で無料で希望者の方には差し上げようと思っております。いろんな方に読んでいただくことによって、ここだけの話ではなくて、普及効果、波及効果が生まれるのではないかと思うからです。

２）筑波大学ＳＦ調査

【スライド 13】筑波大学「どれだけＳＦを読んでいるか？」アンケート

こちらで集めたアンケートの結果をお見せする前に、まずそもそもＳＦってどのくらい読まれているのかについてお話しします。僕の知り合いで、星野力先生という方がいらっしゃいます。もう筑波を定年退職されてしまいましたが、人工知能やコンピュータの分野で優れた業績を残された研究者です。いま「月刊アスキー」でアラン・チューリングの伝記を書いていますね。その星野先生が、筑波大学で 1998 年度から 2000 年度まで「科学技術とＳＦ」という講義を担当されていました。僕も 2 回、その講義でしゃべったことがあります。この講義では、毎年最初に「どれだけＳＦを読んでいるのか？」というアンケート調査を受講者にしているんですね。アンケー

ト結果はそちらの URL に載っていまして、今日は星野先生の許可を得てご紹介するものです。
【＊註】星野力教授の講義「科学技術とＳＦ」の HP　http://darwin.esys.tsukuba.ac.jp/SF/
そこで使われたアンケートフォーム　http://darwin.esys.tsukuba.ac.jp/SF/ankeito.html
アンケート結果　1998 年度　http://darwin.esys.tsukuba.ac.jp/SF/98/Ankeito.html
アンケート結果　1999 年度　http://darwin.esys.tsukuba.ac.jp/SF/99/Ankeito.html
アンケート結果　2000 年度　http://darwin.esys.tsukuba.ac.jp/SF/Ankeito.html
許可を得て「参考資料」として再録してある。

【スライド 14】今まで読んだＳＦの冊数（2000 年度調べ）

まず、受講している学生ですが、毎年 180 人から 220 人くらい。1 年生が大半ですが、2 年生、3 年生もいます。総合科目なんですね。システム工学や自然科学系の学生もいるんですが、文科系も結構いまして、かなりバラバラですね。

それで、彼らがいままでに読んだ――去年 1 年間ではないですよ、これまでの人生の中で読んだ――ＳＦの冊数の結果ですが、ほとんどの人は 50 冊以下なんですね。よく読んでいる方が何人かいらっしゃいますけれども、ごく少数です。0 冊という人もいます。いちばんの人数のピークは 1～5 冊。生涯のうち、これまでたったの 1～5 冊しかＳＦを読んでいないということです。
【＊註】「科学技術とＳＦ」という講義を聴きに来る学生ですらこの程度なのだから、一般の大学生がいかにＳＦを読んでいないか察せられる。ただし、ＳＦだけを読んでいないというわけではなく、受験勉強に忙しくて小説全般を読む暇がなかったと答える学生も多かったようだ。

【スライド 15】以下のＳＦ小説を読んだことがありますか？（2000 年度調べ）

この表に挙げられているのは星野先生の講義の中に出てくるＳＦなんですが、海外ＳＦはほとんど読まれていないことがわかります。一方、マンガの『寄生獣』やダニエル・キイスの『アルジャーノンに花束を』は読まれている（＊註・前者が 109 人、後者が 67 人）。僕の小説は『パラサイト・イヴ』で 115 人、『BRAIN VALLEY』で 32 人の方が読んで下さっています。

そもそも高校生、中学生時代にどのぐらいの本を読むのかという資料も実はありまして、『小説と科学』という本を作ったときに調べたんですが、そのときの資料をどこかにやってしまったようで、ちょっと見つけられませんでした。すみません。

【スライド 16】以下のビデオや映画を見たことがありますか？（2000 年度調べ）

こちらの表は「以下のビデオや映画を見たことがありますか？」という質問項目の回答結果です。映画『パラサイト・イヴ』は 123 人に見ていただいているわけですが、もっと多いのは『ジュラシック・パーク』（172 人）とか『ガンダム』（166 人）、『鉄腕アトム』（136 人）あたり。他は『パトレイバー』（110 人）、『トータル・リコール』（88 人）、『攻殻機動隊』（71 人）という感じで、アニメやハリウッド映画が好まれています。『ガンダム』を「面白かった」と答えた人の数が『アトム』を「面白かった」と答えた人の約 2 倍だということで（＊註・前者が 60 人、後者が 27 人）、星野先生は「もう世代交代がおこなわれているんだ」とコメントしていますね。

【スライド 17】以下の作家を読み（見）ましたか？（1998 年度調べ）

それから「以下の作家を読み（見）ましたか？」という、作家にとっては厳しい質問があります。ここで△（三角）で示したのは“ちらっと見た”という回答。ちらっと見たというのが書店で本を見たのか、実際の作者を見たのか、ちょっとわからないですね（笑）。“読んだ”という答が○（丸印）、“面白かった”というのは◎（二重丸）で示してあります。赤字で書いたのは30 人以上に読まれている作家です。いちばん多く読まれているのはどなたかといいますと、星新一さんで、合計 99 人。二番目が筒井康隆さんの 58 人です。次が田中芳樹さん（49 人）、僕（瀬名秀明、48 人）、安部公房さん（47 人）となっています。小松左京さんは 27 人です。

△、○、◎の数をよく見ていくと面白いんですが、詳しくは説明しません。星野先生のコメントを読み上げます。

「なかなか面白い集計結果です。古典と現在に 2 極分化しています。安部公房や星新一や筒井康隆などは（特に星さんは国語の教科書に取り上げられているので）よく読まれていますが、その他の作家は忘れられています。そもそも『小松左京って誰？』という反応が多い世代なのです。中間の世代の作家はほとんど忘れられています。当然、最近の作家はよく読まれていますが、それでも拡散傾向が見られます」

小松さんは星さんや筒井さんと同世代だと思っていたんですが、違うんでしょうか？　ちょっとわからないのですが。ただ僕も子供の頃に筒井さんや星さんは読んでいたのですが、小松さんは「ものすごく読んでいたか？」というとそんなわけではなかったですね。編集者の方に聞いても、やはり星さんや筒井さんは自分も友達もたくさん読んでいたけれど、小松左京さんまで行くのには一本なにかハードルがあったというようなことをいう方が多いです。

３）ウェブアンケート調査

【スライド 18】アンケートを実施

それで今回アンケート調査をいたしました。これはＳＦセミナーのホームページのほうで告知していただいたものです。期間は 4 月７日から 23 日内で、有効投票数は 72 通でした。それ以外の方は送信ミスです。年齢としては 20 代～30 代がほとんどで、10 代以下の方は 2 人しかいませんでした。

【＊註】本資料「５．ウェブアンケート調査」（129 ページより）に詳細を掲載。なお、アンケート締切後に 1 名追加回答があったが、これは有効回答とは見なさず、回答のみを本資料に掲載した。

「あなたはＳＦファンですか？」という質問に「はい」と答えた方が 42 名、「いいえ」が７名、「わからない」が 23 名です。「はい」が多いのは、ＳＦセミナーのホームページで募集したから仕方がないのかなと思います。「いいえ」「わからない」がもっと増えるかなと僕は期待していたんですが。

ちなみに、このうちＳＦ関係のお仕事をされているプロの方は、「はい」で 5 名（この他、自己申告していないがお名前からプロだと思われる方がさらに 4 名）、「いいえ」で 2 名、「わからない」で 0 名となっています。当然、プロの方は読書量が多い傾向にあります。

【スライド 19】「ＳＦセミナー」をご存じですか

さて、ここからは「はい（ＳＦファンである）」「いいえ（ＳＦファンではない）」「わからな

い」に分けて集計してみました。

「ＳＦセミナーをご存知ですか？」という質問に対する答ですが、どのグループでも知らなかったという人はほとんどいませんでした。ですから回答者はすでにＳＦセミナーに興味があった人が大多数です。僕のホームページでも同時に告知したんですが、そちらから飛んで初めてＳＦセミナーを知ったという方はあまりいらっしゃらなかったのかもしれないですね。まあ、僕のページの閲覧頻度は一日あたりたったの数十人ですから、あまり宣伝にならなかったのでしょう。

【スライド 20】一カ月に何冊程度本を読みますか

これは多くても 31 冊〜50 冊まで。グラフでは「はい」の人を青色で、「いいえ」の人を赤色で、「わからない」の人を黄色で示しています。「わからない」の人はブロードな印象ですが、ＳＦファンじゃない人は少し読書家の方が多い傾向です。

【＊註】ここで、質問項目の表示に誤りがあったことを明示しておく。冊数の選択肢に「3〜5 冊」「5〜10 冊」とあり、5 冊が両方にダブってしまっている。ご容赦願いたい。

【スライド 21】そのうち「ＳＦ小説」はどれぐらいですか

当然、ＳＦファンの方がよく読まれているわけですけれども、「いいえ」が二極化しているのが僕は非常に面白いと思いました。ほとんどＳＦを読まない方と、一カ月に 3 冊から 5 冊も読むという方の二つに分かれているわけですね。つまり、「いいえ（ＳＦファンではない）」と答えているんだけれど、ＳＦはたくさん読んでいるグループがある。自覚的に、ポリシーとしてＳＦファンじゃないといっているんですね（笑）。この感覚はわかるような気がします。

「わからない」という人はあまり読まない方も多いんですが、やはり 5 冊〜10 冊くらい読まれる方もいました。一カ月に 5 冊もＳＦ小説読めば立派なＳＦファンだと僕は思うんですが、どんなものなんでしょう？

【スライド 22】そのうち「科学ノンフィクション」はどのくらいですか

あと、僕自身がサイエンスライティングに興味があることもあって、科学ノンフィクションの読書量について訊いてみました。たぶん一般的には、ＳＦファンの人は科学には強いというイメージがあると思いますね。

ＳＦファンの方は月に 1 冊から 2 冊というのがいちばん多いですね。僕はもっと多いのかなと予想していたのですが、ハードＳＦファンの方なんかはこの程度で大丈夫なのか、ちょっと疑問です。小説に対する科学的なツッコミは、月に 1 冊か 2 冊の科学ノンフィクションを読む程度で大丈夫なのか？　僕はちょっとわからないのですけれども、実際はこの程度です。

それから、「いいえ」と「わからない」は、ほとんど読まない方と意識的によく読まれる方に二極化している。

ただ、総じてＳＦ小説よりも圧倒的に読み込んでいる量が少ないわけで、ＳＦファンであっても科学ノンフィクションはあまり読まない。ましてやＳＦファンでない人はほとんど読まない。やはり科学ノンフィクションは非常にきびしい出版状況だということが読み取れる結果です。少し残念で、どうにかして変えていきたいとは思いますね。

【＊註】

この分析に対しては、セミナー終了後に反論があった。「ＳＦマガジン」などでＳＦ評論・科

学解説を書く野田令子氏（合宿企画「瀬名秀明先生のＳＦに対するアンビバレントな思いを聞いて」の司会を担当）は、自身のウェブ日記（2001 年 5 月 19 日付）で次のように書いている。

> **「ＳＦセミナーでの瀬名さんの公演で「ＳＦファン（を自認する人）は何故あまり専門書を読まないのか」という問いかけがありましたが、私（多分ハードＳＦ好き）の場合は生物系は論文を読むし、その他の分野なら信頼のおける web　site を読むので、どうしても遅れの出る（特に私は文庫待ちするし）本よりそっちを優先してしまう、というのが答えでしょうか」**（http://www.geocities.co.jp/Technopolis/1857/old0105b.html）

これについてコメントしておく。読み物としての「科学ノンフィクション」（book length の形態）と、生の情報としてのウェブ文書では性質が違うと思う。情報だけ手っ取り早く知りたいのなら、確かにウェブや論文は有効である。だが、自分の専門分野以外の論文を、本当に読みこなすことができるだろうか。同じ生物系といっても、進化学を専門とする研究者がいきなり脳科学の論文を理解するのは困難だろう。

著者の主張や思いが込められて構成にも気を配られた科学ノンフィクションには、別の楽しみもあるはずだ。野田氏は速報性と信頼性のみをここで重視しているが、書籍でしか知り得ない（あるいは理解し得ない）情報もまだまだ多い。そして、ここが重要なことなのだが、書籍はそもそも著者の考えに触れるために読まれるものである。ハードＳＦ的なツッコミとは、何も第一情報からのみおこなわれるのではないはずだ。

また、大学ではウェブ環境が整備されているが、一般家庭で利用する場合は依然として数多くの制約があることも忘れてはならない（ブロードバンド時代になっていくらか解消されつつあるが）。学会のウェブページに掲載されている論文の PDF ファイルは一般人にとって閲覧不可能であることも多い。研究者がウェブを優先するのはごく自然な行為だと思うが、それが一般ではないのである。

そして、もしウェブで充分だというなら、科学ノンフィクションの存在意義そのものが否定されることになる。野田氏は分子進化学の研究者でもあるが、科学者がこのような発言をするのを見るのは悲しい。まずは科学者自身が科学ノンフィクションを積極的に読み、そして書いてゆくことが重要だと思う。

【スライド 23】「ＳＦ小説」をこれまでどれくらい読んできましたか

「いいえ」「わからない」でも、一部には相当ＳＦを読み込んでいらっしゃる方がいますね。これを見ると「わからない」は 2 つのグループに大きく分かれそうです。本当にＳＦがわからず、興味もなくて読んでいないグループ。それから、ＳＦをよく読むけれど、おそらく他のジャンルもたくさん読んでいて、自分が特にＳＦファンなのかどうか判然としないグループ。

当然ＳＦファンは読んだ数が多いんですが、ＳＦファンじゃなくても 500 冊以上読んでいる方がいらっしゃいます（笑）。

【スライド 24】瀬名秀明の著作について、評価をお願いいたします

もっと批判的な意見が多く来るのではと思っていましたが、そんなことはありませんでしたね。少しほっとした感じです。

『パラサイト・イヴ』『BRAIN VALLEY』『八月の博物館』は長編小説、『小説と科学』『「神」に迫るサイエンス』『ミトコンドリアと生きる（＊註・太田成男と共著）』はノンフィクション、

それから「Gene」「ハル」は短編（＊註・アンソロジーに収載）ということで、本になっているものだけを選びました。

『パラサイト・イヴ』は回答してくださった方の 76%の方が読んでいる。読んで下さった方の数が興味深いんですが、『BRAIN VALLEY』はやっと 55%、『八月の博物館』が 30%、『小説と科学』は 22%と、やはり発行部数に対応した結果ですね。「ハル」は『2001』（早川書房）というＳＦアンソロジーの収載作品ですが、ＳＦファンは 8 人読んで下さっているのに対して、「いいえ」はゼロ、「わからない」で読んでいるのは 2 人だけです。ただし、ＳＦファンで読んでいる 8 人のうち 4 人はプロとしてＳＦに関わっている方なんですね。『2001』はやはり部数も少なくて、読まれていない感じです。「Gene」を収録している『ゆがんだ闇』（角川ホラー文庫）は、意外なことによく売れていて、だから今回のアンケートでも読んでくださっている方が多いですね。

「面白くなかった、つまらなかった」という方は、やはり少数ですがどのところにもいらっしゃいまして、非常に強い批判を出して下さっています。その文章を読みますと、非常に怒りに駆られている。むしろ単純で個人的な怒りというよりも、なにか義憤に駆られているというか、そういう感じもあります。

このアンケート回答は、おそらくＳＦファン同士で読み合うのがいちばん有効だと思います。ＳＦファンであっても、評価はひとつではない。たぶんＳＦファンはひとかたまりという印象を持たれやすいと思うんですが、ＳＦファン自身もその罠に陥ってしまう場合があるような気がします。「ＳＦ者」といういい方がそうですね。そういったおかしな状況やイメージを払拭するのに、今回のアンケートは役立つと思います。

アンケートのご回答の中から、印象深かったものを紹介しましょう。

まずは作家の山之口洋さん（Serial:5）。ファンタジーノベル大賞を獲られた方です。僕が科学を小説で扱っていることに対して、非常に本質を衝いたことを書かれています。

「「文学で科学する」（でしたっけ）という瀬名さんの方向性には、「なぜ小説でならないか」と言う問題が横たわっているように思います。たとえば『BRAIN VALLEY』で扱われた脳科学は､啓蒙的な科学書の面白さに対抗するのがとても難しい分野であると思うのです。たとえばデネットとか、もっと初心者向けなら立花隆とか…。たぶん、ＳＦ全般に内在する問題なのでしょうが、瀬名さんの場合、科学的に見てリアリティのない領域に逃げられる方ではないと思いますので、このことについてどんなお考えをお持ちなのか、興味をもちました」

こちらはＳＦファンの方ですが（Serial:22）、やはり同様のことをおっしゃっています。

「取材に基づいた事実とそこから飛躍される設定・展開の繋ぎに関しては、ここ最近の作家の中では一番手際が巧いと思う。ただ、どうしても事実の描写の方が迫真性があるだけに、もっと飛躍した物語を読んでみたいと思う」

科学を一所懸命書けば書くほどＳＦないしは物語的な飛躍から遠ざかっていってしまう、このジレンマをどうするのかという投げかけだと思いますね。これは僕も『BRAIN VALLEY』の頃からずっと考えていることなんですが、未だにこれだという回答が見つからない。それで新作ごとにいろいろチャレンジをしている段階で、まだ「こうした方がいい」という感覚には辿り着いていないんです。

この方は「手際が巧いと思う」と誉めてくださっていますが、もちろん全然逆のことをおっしゃる方も何人かいます。科学の部分とそうじゃない部分の乖離が激しいということですね。

実をいうと、昔はこの感覚がよくわからなかったんです。いや、そんなことはない、僕の心の中では全部シームレスになっているよ、と思っていたんですが、最近わかりました。『ミミック』という映画をご存知でしょうか？　ゴキブリのお化けが襲ってくるホラー映画です（笑）。ミミックというのは擬態するという意味で、ゴキブリがまるで人間のような姿になって襲ってくるわけですね。物語の途中までは、そのゴキブリのお化けが人間なのか何なのかよくわからないで、ずーっとサスペンスが盛り上がっていく。それでついに、地下鉄の構内で主人公の女の人がその相手と対峙するわけです。そこでゴキブリのお化けがバッと羽根を広げて飛んでくるわけですね。それでその主人公をかっさらって地下に連れていく。僕はアメリカの映画館で見たんですが、この場面で客席から失笑が起こったんですよ。それで僕はそのとき、「なるほど、これが前半と後半が乖離していることなのか」とわかった。「皆が思っていたのはこれなんだな」と（笑）。

ただ、『ミミック』という映画はいろいろ問題があるにせよ、僕の大好きな映画でして、ホラー映画としてはよく出来ていると思うんですね。あの失笑されるところすらも、何というか、ホラーなんですよね。だからＳＦとして『パラサイト・イヴ』を読まれた方は、そこの失笑感というのがあるんだと思うんですが、僕は『ミミック』をホラーとして見た場合、あの場面転換というか設定転換もホラーの一部だと思うので、そこはちょっと感覚が違うところかな？という気がしました。

【＊註】「シームレス」に関しては合宿企画でも話題になった。「講演後の反響に対して」参照。

それから、こちらは匿名（Serial:2）ですが、『パラサイト・イヴ』を読んだときに非常に怒りに駆られたという女性のＳＦファンの方です。これはちゃんと答えたほうがいいかな。読み上げます。

「私は『パラサイト・イヴ』しか読んでおりません。残念ですが、『パラサイト・イヴ』を読んだときと同じ思いをするかもしれないと思うと、以後の貴作品は読む気になれませんでした。もう随分前のことになりますし、現在手元に本がありませんので、あの時の気持ちを正確にお伝えできるかどうかわかりませんが、『パラサイト・イヴ』に関して少し書かせていただきます。

まず、小説自体としては、読んでまずまず面白い作品だと思いますし、腎臓移植に関する部分にはとても考えさせられました。ですが、私はあの作品はＳＦではないとはっきり思います。ＳＦの一要素として、たとえ見かけだけとしても、論理的整合性があるように話をつける、というのがあると思いますが、あの作品では最後にいくにつれ、整合性からはほど遠いものになっています（それが悪いとか良いとか言う問題ではありません）。単にホラーと思えばよいと思うのですが、ＳＦとして宣伝されれば、あれはＳＦではない、と騒ぎたくなるのも無理はないと思います。特に私はファンタジーが嫌いですし、ホラーにも興味はないので、「嫌いなものが好きなものの名をつけられて宣伝されている」感じがして、心穏やかではいられませんでした。

瀬名さんの著作とＳＦとの関係という点では、ログをお示しできないのが申し訳ないのですが、角川ＨＰでの議論があった頃に、菊池誠さんが発言しておられたことに心から共感し

ました。

『パラサイト・イヴ』に関してですが、利己的遺伝子仮説を、その仮説を知らない人がみれば全く誤解するような書き方で取り上げているのも、とても気になる点でした。瀬名さんから見ればそれは承知の上のことでしょうが、実際に誤解されることの多い仮説を、誤解を助長するような方向であのように小説に取り上げられた点に、当時激しい怒りを覚えました。特に「著者は現役科学者」と大々的に取り上げられていたことでもありますし（瀬名さんご自身に、取り上げられ方に責任があるとは思っていませんが）きつい言い方をすれば「詐欺的行為」のように感じたわけです。数年前のウェブでのやり取りを見るまで、利己的遺伝子仮説をあのように扱われた真意は全く不明でした。そして、今となっても、解説等でも何の説明もない、あのような取り上げ方は私はどうかと思います。私にとっては、そのことも、あの作品を「ＳＦ」と取り上げられることに「とんでもない！」と声高に反論したくなった一因となっています」

菊池誠さんというのは物理学の研究者で、同時にＳＦ評論家の方です。

そうですね、こういう思いはわかりますが、やはり最初の段階で何かディスコミュニケーションがあるような気がします。まず、『パラサイト・イヴ』は一度として版元も僕もＳＦとして売った記憶はありません。常にホラー小説、でなければモダンホラー小説だと僕らはいってきたわけで、帯にもホラー小説と謳っている。ＳＦとして宣伝したことは一度もないんです。「ＳＦとして宣伝されれば、あれはＳＦではない、と騒ぎたくなるのも無理はない」とおっしゃるのですが、どこか別のところでそういう評価を見たんでしょうね。「ＳＦマガジン」とか、そういうところで「これはＳＦである」と評価されたのをご覧になってのことなのかもしれません。この方は、怒りの矛先を決めかねているように思えます。『パラサイト・イヴ』をＳＦだと評価した人たちに向けて怒りたいのか、作者である僕に怒りたいのか、あるいは『パラサイト・イヴ』をＳＦだと思っているらしい世の中が無念で悔しいのか。たぶん、その全部がない交ぜになった感覚なんでしょう。ただ、作家や出版社側からすると、書評をコントロールすることはまず不可能です。そこまでこちらのほうでコントロールしなければいけないのだとしたら、正直いってしんどいなという気はします。

利己的遺伝子についてですが、『パラサイト・イヴ』は利己的遺伝子仮説をベースにした小説ではありません。最後のほうにちょこっと出てくるだけですよね。確かに当時の書評では、「利己的遺伝子をベースにした」とかなり書かれまして、そのイメージが残っていらっしゃるのかもしれません。「いまとなっても解説等で何の説明もないあのような取り上げ方はどうかと思います」とおっしゃっていますが、利己的遺伝子についてはインタビューで聞かれたときははっきりと説明していますし、それにミトコンドリア全般に関してはフォローとして『ミトコンドリアと生きる』という本も出しています。ただ、この方は『パラサイト・イヴ』で非常に失望感を得られたということで、次から僕の本は読んでいないわけです。読む気にもなれないんでしょうね。そのお気持ちはお察しします。けれども、うーん、なかなか僕の戦略は難しいものがあるなと考えさせられました。『パラサイト・イヴ』の後で『ミトコンドリアと生きる』というフォローの本を出しても、『パラサイト・イヴ』を誤解したまま怒っている方はそもそも手に取ることもない。だから誤解は解消されない。僕がやっていることはまったく無意味なのではないか……と、いろいろ考えさせられたご指摘ではありました。

本当に僕がディスコミュニケーションを解消したいのは、こういうＳＦファンの方なんです。

なんとかして話し合いができるところまで持っていきたい。それなのに、誰のせいでもない絶望的な理由で、もはや永遠に関係修復ができない。こればかりは本当にやり切れないです。

あと「なんで瀬名さんはＳＦ観について今回のようにこだわっているんでしょうか？」という質問がありました。「ＳＦを無視すれば楽なんじゃないの？」ということなんですが、これは先ほどいいましたように小学校、中学校、高校時代にやはりＳＦで楽しませてもらったというイメージがありまして、ですからやはり、うーん、何ていうんでしょうか、自分では書いているものをＳＦと思っていないんですが、ＳＦファンからの評価や反響はすごく気になるといいますか、すごく大事にしたいものなのですね。だからＳＦファンの読者を切り捨てていくのは、いまのところ僕にはできないんです。

ＳＦは売れていないという言説について。Serial:25 の方は、**「インターネットを始めて数年経ち、いくらかＳＦに関係するサイトを読むまで、「ＳＦが売れない」「冬の時代」と言われていること自体を知りませんでした」**と書かれています。僕自身もそうでした。むしろ、ＳＦはいつも本屋に専門の棚があって、ホラーファンからするとずいぶん羨ましいと感じたものです。

僕の科学ノンフィクションについて、評論家・翻訳家の大森望さん（Serial:43）から示唆的なご意見。**「啓蒙書としては読みやすく良質だと思うけど、瀬名秀明的な個性がちょっと見えにくい」**……鋭いです。ここは僕も何とかしなければと思っているところです。

僕の科学関係の執筆活動について、Serial:49 の方からのご指摘。**「『マッカンドルー航宙記』を思い出させる発言が多く、根っこのところでＳＦな方なのだと思います。共感できます」**……この本は読んだことがなかったのですが、さっそく読んでみようと思っています。

ＳＦをもっと活性化させ、売るためにはどうするか、という設問に対して、Serial:72 の方からのご意見。**「子ども向けのシリーズを復活させたい。図書館に昔の本はあるが、新しいもので読ませたい」**……賛成です。講談社の「痛快　世界の冒険文学」シリーズは画期的な出版だったと思います。昔のスタンダードをいまのエンターテインメント作家がリライトして子供に読ませる。眉村卓さんの『タイムマシン』は傑作でした。こういう企画なら僕もぜひ参加したいですし、ジュブナイルの新作シリーズなどがあったら参戦してみたい。

もうひとつ、ＳＦのイメージについて。評論家の牧眞司さん（Serial:24）は**「おもしろくて、知的で、provocative**（＊註：挑発的な、そそる、の意）**な物語」**とおっしゃっています。なるほど、これなら僕も読みたいです！

４）文芸編集者インタビュー調査

【スライド 25】文芸編集者にＳＦ観を取材

それから文芸の編集者の方にいろいろお話を聞いてきました。11 社 26 名です。直接インタビューするために僕が東京に出向いた場合もありますし、電話取材の場合もあります。非常にお忙

しいのでインタビューの時間が取れず、書面による回答をお寄せ下さった方もいらっしゃいます。
【＊註】集計後、さらに 2 社 5 名からご回答を頂いた。合計で 12 社 31 名。それぞれのご回答内容は、「４．文芸編集者への取材」（94 ページより）に収録。

【スライド 26】インタビューに応じていただいた方々

インタビュー取材に応じていただいた皆様はこちらです。角川書店からは、まず宍戸健司さん。角川ホラー文庫の編集長です。吉良浩一さんは僕の『八月の博物館』を担当されました。講談社の唐木厚さんは、篠田節子さんの『弥勒』や米田淳一さんの『プリンセス・プラスティック』を担当されています。祥伝社の加藤淳さんは祥伝社文庫の編集長で、400 円文庫の仕掛け人でもあります。保坂智宏さんはノン・ノベルの副編集長。タクト・プランニングの深澤真紀さんは、編集プロダクションの代表取締役です。森奈津子さんの『西城秀樹のおかげです』や、伏見憲明さんの『プライベート・ゲイ・ライフ』、『ＳＦバカ本』などを編集しています。それから、いまヤングアダルト（最近はライトノベルという呼び名が主流らしい）が勢力を伸ばしてきているわけなんですけれども、そちらの方面からもお話を伺いたいと思って、メディアワークスに行ってきました。あとは、出版社の名前を出さないでくれという方や、匿名希望の方が数人。電話取材の方が 2 人。

【スライド 27】書面回答に応じていただいた方々

書面回答では、幻冬舎、祥伝社（先ほどの加藤さん、保坂さんも含まれます）、徳間書店（こちらはデュアル文庫の編集をやってらっしゃる方もいらっしゃいます）、別冊文藝春秋の編集長。実は早川書房の塩澤快浩さん（ＳＦマガジン編集長）にもインタビューをお願いしたのですが、非常にお忙しい方で、この講演の一時間前にようやく書面回答をいただきました。ありがとうございます（笑）。

なお、今回公表するのはあくまでもその編集者個々人のご意見ですので、決して出版社や出版業界を代表するものではありません。その点をくれぐれもご注意下さい。
【＊註】さらに幻冬舎 4 名からもメールでご回答をいただいている。

いろいろとお話を伺って、いちばん興味深いと思ったのは、まずたいていの文芸編集者は日常の中でＳＦに思いを巡らす機会がほとんどないということなんですね。自分はノンジャンル指向で小説を編集している、ミステリー、ホラー、時代小説、面白い小説なら何でもやりますと主張する人も、ＳＦは無意識のうちに仕事の範囲内から排除している。ノンジャンルの中にＳＦ作家やＳＦ小説は入って来ないんです。またそれ以前に、ＳＦについて１時間話すということ自体、非常にきつい方もいらっしゃるという印象を受けました。ほとんど読んだこともないし、あまり考える機会もないから、話すことがない。特定のジャンルについて 1 時間も語ることができないというのは驚きでした。また一方では、あまりＳＦと関わりたくない、無用な緊張を避けたいということなのか、インタビューに非常に慎重な方もいらっしゃいました。

【ＳＦは本当に売れていないのか】

いくつか要点を絞ってお話しします。

まず、ＳＦが本当に売れてないかどうかということを、ちゃんとした数字で出してきた編集者

は一人としていらっしゃいませんでした。いろいろ聞き出してみると、角川ホラー文庫の最低ラインは 2 万部、徳間デュアル文庫の最低ラインも 2 万部、メディアワークスの電撃文庫の最低ラインは 3 万部ということで、ＳＦもホラーも最低部数は変わらないんです。それなのに、ほとんどの編集者はホラーのほうが売れているという印象を持っている。

これはなぜかというと、ホラーには突出して売れている本があるからということなんですね。ＳＦ小説には 10 万部、20 万部売れる本がいままでなかった。だから全体的に寂しげな雰囲気がする。しかもこれまでどこかで「ＳＦは売れない」という言説を見たり聞いたりしたことがある。だからあまり深く考えもせずに、なんとなく「ああ、そうなのか、ＳＦは売れないんだな……。じゃあ、やめておこう」という感じになっているわけです。ＳＦが売れないという雰囲気は、まったく根拠のないものなのです。それを編集者自身がわかっていないんですね。

今日、「アンソロジーの世紀」というパネルディスカッションの企画がありましたが、河出書房新社の編集者さんが出ていらっしゃいましたね。ああいったように、「何かやりたい」と思う編集者が出てくれば、いくらでも状況は変わるんじゃないかと思います。

【ヤングアダルト作家をいかに取り込むか】

それからライトノベル（ヤングアダルト小説）について。一般の文芸編集者は、あまりヤングアダルト小説を読んでいないようです。そもそも興味がないという方もいますが、出版社内でヤングアダルトのレーベルがあった場合でも、そちらから作家を引っ張ってくることが難しいと指摘する方もいました。編集部の間で若干の確執があって、ヤングアダルトから一般文芸に作家を引っ張ってくることができない。自分で一般文芸を書きたいという作家ならともかく、こっちで書きませんかと編集者が声をかけるのは憚られるというわけですね。

こういった現状については、「規制緩和すべきだ」と考える方（講談社・唐木さん）もいらっしゃる一方、辛辣な意見をおっしゃる方もいました。いまＳＦ系の文庫が採っている戦略は、例えば徳間デュアル文庫、ハルキ文庫ヌーベルＳＦ、「ＳＦマガジン」がそうですが、ヤングアダルト小説の書き手からＳＦ好きな作家を引っ張ってきて書かせるというものですね。イラストレーターの方もそうです。そういう戦略についてどう思うかと何人かに質問してみたところ、例えば角川書店の吉良浩一さんは、そういうやり方は嫌いだとおっしゃっています。岩井志麻子さんや山本文緒さんのように全然違う世界観で小説を書くのなら面白いと思うけれども、似たような作品でちょっと年齢層を上げただけのものなら興味がない。そういう作家は大化けしないんじゃないか。それに、作家が大人向けのＳＦを書いても、ちゃんと読者がついてきてくれるか疑問だ。読んでくれないのだとしたらいやだな、というわけです。

これは若干狭い意見のような気もしますが、現状に即しているのかもしれません。実際、ヤングアダルトでキャリアを積んできた作家が一般向けのレーベルでＳＦを書いたとき、やはり売上は落ちるのだそうです。作家にとっても経済的なメリットがない。あと、メディアワークスの方に「ハルキ文庫とかデュアル文庫などの戦略をどう思いますか？」と聞いてみたところ、「うーん」と悩んでからぼそりと、「自分たちの力で新人を発掘してほしい」といっておりました。まあ徳間ＳＦ新人賞や小松左京賞も創設されましたから、今後はそれぞれから新人が出てくるでしょう。あとはハヤカワが新人賞をつくることですね。

【アイドルとＳＦの関係】

講談社の唐木さんのいっていた話が非常に面白かったです。彼は大学時代、アイドル研究会に入っていたのだそうです。当時は「アイドル冬の時代」だったらしいんですが、研究会では話すことが山のようにあって困らなかった。つまりマニアはどんな時代でも喜べる。なぜなら、危機意識について語るのは楽しいからだというんですね。危機感を煽るのはエンターテインメントの王道で、だから冬の時代でもマニアは喜べる。それに、そもそもマニアじゃない人は冬の時代でも何も困ることがない。だから、そういうことで、アイドルファンとＳＦファンは似ているんじゃないかというわけです。

【ＳＦと「神話」】

それから取材を進めるうちに「神話」というキーワードが何度か出てきました。唐木さんからは「時代小説とＳＦ小説は非常に似ている」という話がありました。どちらも物語性を重視している（ここで唐木さんが挙げたＳＦ作家は、山田正紀、半村良、栗本薫）。一方、ミステリーはあまり物語性を問わない。島田荘司さんが売れるのは物語性が強いからではないか。ＳＦファンはひょっとすると時代小説でも満足できるのかもしれない。それは「神話」というものと関係があるのではないか、といいます。これはハードＳＦには当て嵌まらないかもしれませんが、もっと大きな括りのＳＦには当て嵌まる話かもしれません。確かに海外でも、ジョン・ジェイクスやロバート・シルヴァーバーグのように、ＳＦから時代小説に転身してベストセラー作家になった人がいますね。

祥伝社の加藤さんのお子さんは、『新世紀エヴァンゲリオン』を見て突然「日本書紀」や「古事記」を読みたいといい出したそうです。これを聞いて加藤さんは、いまの若い人たちは「神話」を求めているんじゃないかと思ったそうです。昔はいろんな事を考えていく時代で、哲学書も売れていたし皆読んでいた。それなのにいまの時代は哲学がない。だからそういう基盤が若い人たちにない。若者は何もないところからスタートしている。だからいま、彼らは自分たちの神話が欲しいのではないか。ＳＦというのはそういう「神話」になりうる可能性がある。自分はそういう彼らに新たな神話を創ってあげたい、とおっしゃっていました。

これに似たことは文春の津谷さんも指摘しています。昭和 50 年代までは「思索的」な時代だった。学生や一般市民がいまよりも「ものを考える」時代で、それがＳＦに対しても大きな追い風になっていた。ところがいまは、エンターテインメント小説市場でもストーリーの派手さばかりが好まれて、作品に込められた作家のメッセージを軽視するような傾向があるのではないか、というのです。

【小説の情緒性とＳＦ】

これは、小説の情緒的な読まれ方、ということにも少し関係しているような気がします。幻冬舎の方々のご回答が象徴的なのですが、ＳＦに対して「期待することは特にない」、「だれもＳＦと名付けられたものを読みたくない」、「いまの人たちは自分に近いものしか読みたくない」「共感できるＳＦが読みたい」と、かなり辛辣な意見ばかりです。これを見て思うのは、情緒的な読み方ができる小説がいま売れている、好まれている、ということです。しかし一方で、タクト・プランニングの深澤さんは、こういった情緒だけの小説の読み方を批判しています。物語をつくること、それをきちんと読み解くことがいかに大変なことか。深澤さんは『ＳＦバカ本』を編集していらっしゃいますが、ＳＦには難解な部分とばかばかしい部分の両方が必ず備わってい

なければならないといいます。いまは読者の理解力が低下してきて、ＳＦ映画でも難しいものがなくなってしまった。小説も情緒的な読み取りが幅を利かせている。でも本当のＳＦはテキストで読んだほうが面白いはずだ、というのです。僕はこの分析に共感を覚えます。この他、ふたりの女性編集者から「ＳＦというとどこか男の子っぽいイメージがある」との指摘がありましたが、これはかつてのＳＦが難解で硬派な部分を強調していたからかもしれません。

実は面白い現象があるのですが、『ＳＦが読みたい！　2001 年版』で僕が作家の野尻抱介さんや菅浩江さんと座談をしたとき、野尻さんから「瀬名さんはすごく情緒的な人なんじゃないか、すぐに登場人物が叫んだりする」と指摘されたことがあります。これ以降、ウェブでは「瀬名の作品は情緒的」という批判がぽつぽつと現れるようになりました。批判の理由として「情緒的」という言葉が使われるようになったのです。いままで僕の小説に対してこのような角度から批判を投げかける人は（編集者を含めて）いなかったので新鮮でした。ＳＦファンから見ると、僕の小説は情緒的なのでしょうか？　野尻さんの影響力の強さもあるのでしょうが、これは非常に興味深い問題で、ここに僕とＳＦファンのディスコミュニケーションの秘密が隠されているような気もします。

【ＳＦを如何に売るか】

今後どうやってＳＦを売っていけばいいか、ということについて、有益な意見をいろいろと伺うことができました。

角川の宍戸健司さんは、ちゃんと短篇をやれとおっしゃっていました。宍戸さんは角川ホラー文庫を立ち上げるとき、短編集を意識的に続けて出すことを実践しました。あまり知らないジャンルに手を出すとき、短編は取っかかりになりやすい、だからシャープな切り口の短編集を出すのがいいのではないか、というわけです。これは有効だと思います。

他のアイデアとしては、各社で一斉にＳＦを出して、売れているように店頭で見せかける、というもの。これはただし、各社の足並みが揃わないとうまくいきません。足並みを強制的に揃える努力が必要で、これについては後で述べます。

それから徳間書店の大野修一さんは、徳間デュアル文庫について次のように仰っています。

> **『“現実と折りあいの悪いティーンエイジの読者”もしくは現実と“折りあいの悪いティーン時代の問題点を、折りあいをつけたり切り捨てたり出来ないままに育ってしまった大人の読者”にとってこそ、ＳＦは必要とされるだろう。（中略）つまりまとめますと、『ＳＦならではのアイデアを、魅力的なキャラをつかって描いた、青春小説を、ビジュアルに気をつかって出す』ことが、有効ではないか」**

“現実と折りあいの悪いティーンエイジの読者”にデュアル文庫を向けていきたいという、このご発言は素晴らしくて、僕はすごく感動しました。

それからタクト・プランニングの深澤真紀さんは「21 世紀は変態とクィアの時代だ」と。森奈津子さんがすごいのは、あの変態性を容易に理解できないところだというわけですね。これはなるほどと思いました。ああいうのはミステリーでは駄目で、ＳＦでなければうまくいかないと。それからＳＦというのは、エンターテインメントのジャンルの中で一番最後に出てきたジャンルであって、人類が成熟してきたからこそ出てきたジャンルなんだという話が出ました。人類が成熟したからこそ生まれたジャンルで、ＳＦだから人類にいえることがある。来た道と行く道を考えさせてくれるけれども、前向きでも後ろ向きでもなくてもいい。そういうことをＳＦならでき

るんだとおっしゃっていました。
　この他、僕が注目したのは、ＳＦとアメリカの資本主義との関係を指摘した祥伝社の近藤誠さん。「伝奇」というのは祥伝社がつくった言葉で、当時は編集部で「ＳＦ」という言葉が禁句だったというご指摘。あと、深澤真紀さんが「いまのＳＦ作家はオーラがなさ過ぎる。大沢在昌さんや北方謙三さんのような作家も必要悪だ」とおっしゃっていたことも印象に残りました。

【スライド 28】いま編集者が注目する「ＳＦ」作家は
　「注目するＳＦ作家は誰ですか？」とお聞きしたときにはこういう答が返ってきました。カッコ内の数字は人数ですね。池上永一さん、恩田陸さんに並んで、山田正紀さんが上位に入っているのは非常に面白いと思います。ただ、全体を見ても、「ＳＦマガジン」で書いている人たちとはちょっとラインナップが違うんですね。僕が個人的にずっと注目しているのは川端裕人さんですね。たぶん、あと２～３年後にはブレイクすると僕は睨んでいます。
【＊註】集計後にいただいたご回答は、この中に含まれていない。

５）なぜＳＦとわかりあえないのか

　さて、こういう結果を踏まえて、ではどうしてＳＦが難しいと思われるのか、うまく内部と外部のコミュニケーションが取れないのか、ということを考えてみたいと思います。

【スライド 29】ＳＦの構造を考える
　なぜＳＦファンじゃない人とＳＦファンはコミュニケーションがうまく出来ないんだろうと考えてみました。ここで参考にさせていただいたのは、森下一仁さんの『思考する物語』（東京創元社）というＳＦ論の本です。僕にとっては非常にわかりやすくて面白い本でした。
　森下さんは、ＳＦの本質というのは「センス・オブ・ワンダー」（SOW）にあるとまず考えていて、ではこの SOW というのがどのように生まれるのか、いろいろな哲学書を繙いてわかりやすく説明して下さっています。ここでキーワードが二つありまして、それが「フレーム」と「スクリプト」なんですね。

【スライド 30】ＳＦのセンス・オブ・ワンダーと「フレーム」
　まずフレームから説明します。マーヴィン・ミンスキーがいっていることなんですが、簡単に言いますとフレームは「統合された知識」で、何かを「わかった」ときに成立する。「××は××である」という辞書的知識です。例えば「犬」というものをフレーム論理でいいますと、動物である、四本足である、大きさは……、といったような、犬を説明するいろいろなスロットがあって、そのネットワークが「犬」のフレームなんですね。頭の中に「犬」が浮かんだとき、そういうスロットがたくさんあらわれる。スロットのひとつひとつにまた枝分かれ構造があって、さらに詳しいスロットがぶら下がっている。そういう全体のフレーム構造がわかったときに、僕たちは「わかった」と思う、というのがフレーム理論ですね。
　森下さんの説によりますと、ファンタジーというのは、この「犬」のフレームにぶら下がっているスロットの一個が、なにか全然違うものに置き換えられた状態なんです。透明な犬だとか、全長 30 メートルの犬とか、そういう訳のわからないスロットが一個入る。それがファンタジー

だというわけです。

それに対してＳＦは、どこかのスロットが一個変わったとき、変化がそこだけで終わるのではなくて、変化が他のスロットにも影響を及ぼしてゆく。どんどんフレームの中で変換が起こっていって、最終的にはフレーム全体が再構築されてしまう。これが SOW で、ＳＦの本質だということなんです。普通の「驚き」とは違うんですね。非常に面白い解釈だと僕は思いました。森下さんは次のように書いています。

「ファンタジーはあるフレームのスロットに“間違い”を導入したものであるが、その“間違い”の影響は他のフレームに及ばない。（中略）ＳＦはひとつのフレームに逸脱が、他のフレームと関係している。影響が次々と広がり、もっとも大きなフレームである世界全体に及ぶ時、我々はセンス・オブ・ワンダーを感じる」

僕はＳＦファンの人がいう SOW の感覚がこれまでよくわからなかったんです。今回のウェブアンケートの中にも、ＳＦのイメージとして SOW を挙げる方がいらっしゃいました。その方は僕の『パラサイト・イヴ』には SOW を感じない、だから「ＳＦじゃない」とおっしゃる。では、どうして僕とその方は SOW を共有できないんでしょうか。ＳＦファンじゃない人がＳＦに取っつきにくいのは、この SOW がよくわからないのも大きな理由のひとつだと思うんです。

【スライド 31】「センス・オブ・ワンダー」？

そこで、なぜＳＦファンじゃない人とＳＦファンは SOW を共有できないのか、森下さんのフレーム論を軸にして考えてみました。

例えば、こういう状況を考えてみてください。あるＡという書物を読んで、SOW を感じて世界構造のフレームが変わった人物Ｂという人がいるとします。僕はその書物を読んでいません。あるいは読んだけど SOW を感じなかった。僕を人物Ｃとしましょう。そうしたときに、人物Ｂの中では全世界のフレームが変わっているわけですから、当然、僕についてのフレームも変わっているはずです。ところが、僕が人物Ｂを観察したとき、彼がなんとなく変わっているというのはわかるんですが（笑）、僕自身は変わっていない。つまり、彼の中で僕というフレームは変わっているのに、僕の中で僕のフレームは変わっていない。人物Ｃにとっては、自分が変化していないという確たる証拠によって、人物Ｂの SOW を否定せざるを得ないわけです。ここに齟齬がある。つまりＳＦの SOW は外部からの観察行為によって矮小化されてしまう。人物Ｂと人物Ｃは心象を共有できない。これが SOW を共有できないことの理由ではないか、と僕は思ったんです。だからこれはフレーム構造に原因がある。

【スライド 32】ＳＦの限界性？

喜怒哀楽であるとか、感動した、驚いたという原始的な感覚は、僕らはおおむね共感できるんです。「僕は感動していないけれども、ああ、この人は感動したんだね」ということは理解できるし、共感もできる。ところが、ある人物が心的にフレームを再構築したかどうか、どのように再構築したかは他人が直観的に理解しにくい。感覚の共有が難しいんです。これが無視。排除、否定につながる。フレーム構造の変化に原因があって、SOW は共感できない宿命にある。これが僕の仮説ですね。僕がコンタクト・ジャパンに違和感を感じるのは、このあたりに原因があるのかもしれません。

森下さんの『指向する物語』では、フェミニズムＳＦに対する論評の歯切れがいまひとつなん

ですが、これは示唆的だと思います。女性にとって勝手に自分を再構築されてしまった男性は、どうも居心地が悪くなる。女性にとっての SOW が、男性にとっての SOW につながらない。

【スライド 33】つまり……

まあここからは冗談ですが、つまり狭義の「ＳＦ」を楽しむためには、特殊な感覚と世界観が必要で、それを共有できるものだけが「ＳＦ」を語り合える。この共有感覚が遺伝要因と環境要因のどちらに起因するのか、ポスト・ゲノム時代のいまこそ SOW の遺伝子をつきとめよ！　ということですね（笑）。

【＊註】これについては多数の反論も出た。「講演後の反響に対して」で述べる。

【スライド 34】ＳＦのジャンルと「スクリプト」

もうひとつは「スクリプト」です。こちらはシャンクの説に出てくるもので、前もって一括された因果関係の系列、と説明されます。簡単にいえば、「××のときには××するものだ」というハウツー知識です。つまりですね、物語の中には因果関係の原理というのがある。その因果関係の中に非現実的なものが入って、スクリプトが大きく混乱するのがホラーやファンタジー、ＳＦなんだと森下さんは説明するわけです。ではＳＦは他のジャンルと何が違うのか。森下さんは次のようにいいます。

> **「ＳＦの場合（ミステリと違って）因果関係を構成する原理に非日常的なものが入りこんでいてもかまいはしない。（中略）問題は、そうした原理があたかも現実であるかのように尊重されているかどうか、という点である」**

ホラーやファンタジーでは因果関係の原理を最終的に説明する態度は見られない。ここがＳＦとホラーやファンタジーの分かれ目なんだというのです。

つまり『パラサイト・イヴ』でミトコンドリアがどうのといったとき、ＳＦファンが「あれはＳＦじゃないよ」というのは、この因果関係に即していないからと捉えられたからなんですね。では、どうしてホラー大賞受賞作がＳＦとして読まれて、最後に「これはＳＦじゃない」といわれてしまうんでしょうか。ＳＦファンの中で、この関係原理の混乱が起こっているのではないか、と僕は考えたんです。

【スライド 35】関係原理の混乱とＳＦ？

何かの本を読み始めたとき、大抵の読者はたぶん頭の中で、「この物語はこういう関係原理で成り立っているんだ」と見当をつけるんだと思うんですが、この初期設定が僕とＳＦファンではどうも違うらしい。僕は『パラサイト・イヴ』をホラーとして書いたわけで、ホラーとしての関係原理を構築したはずなんですが、たぶんＳＦファンの方は最初にＳＦだと思っちゃうんでしょうね。そこで関係原理の基準がここでも齟齬をきたす。それでおかしな事になるんじゃないか。

つまりこういうことです。私たちは、置かれている社会状況や環境、あるいはこれまでの経験によって、「因果関係の原理を説明しているかどうか」を判断する基準や、どの関係原理に重きを置いて、どれを軽視するかという判断基準が変化する。ただし僕から見るとＳＦファンはある程度一定の原理基準を共有しているように思える。

『パラサイト・イヴ』が顕著であったように、関係性の原理基準に抵触した場合、「ＳＦだと思ったらホラーだった」「これはＳＦではない」と感じて齟齬が生じる。これは読み始めの段階

で、読者が因果関係の原理基準を推測し間違えることが原因です。これはいわゆる「オレ的基準」であって、絶対的な評価ではない。あくまでも相対的なものなんです。ところがこういう言動は、端から見ると絶対的な評価をしていると思われがちなんですね。ＳＦファンじゃない人が、ＳＦファンの「これはＳＦではない」という発言を聞くとすごく怖く感じると思います。なにしろ言葉だけ聞くとこれは全否定表現ですから、相対性も何もあったものではない。日常生活で、これほど強い否定表現はなかなかお目にかかれません。これはディスコミュニケーションの大きな原因になります。

では、なぜ読書中に誤った推測をしてしまうのでしょうか。これはそれこそ経験の結果なんです。科学者が出てきたり、研究室が出てきたりするＳＦを読み慣れていたために、物語の原理基準をＳＦだと錯覚してしまう。つまり僕たちは、ある傾向の舞台設定や題材から特定の関係原理のパターンを想起してしまいやすい。ＳＦファンは展開がスクリプトから逸脱することを楽しみますが、その一方ではストリクトに関係原理をかなり早い段階で自らに規定してしまう。ＳＦという特定の関係原理が再現されていること、その安定感を無意識のうちに求めているのではないか。森下さんの説によれば、物語の展開がスクリプトから逸脱していることがＳＦやファンタジーの醍醐味でもあるんですが、ＳＦファンはそのスクリプトと物語の原理基準の混乱が起こっているのではないか。もちろん、関係原理の安定性に快感を覚えるのは、僕たち人間の普遍的な心理だと思います。ただ、ＳＦはスクリプトの逸脱性というわかりやすい特徴があるために、関係原理の安定性を自覚できないのではないか。

このボタンの掛け違いが、ＳＦを理解できない原因ではないか。コンタクト・ジャパンへの違和感もこのあたりに原因がありそうです。僕がＳＦを読んでいると、ちゃんと納得させてほしいところが書かれていなかったり、些細なことがなぜかこだわりを持って書かれていたりと、バランスの悪さに戸惑うことがあります。ＳＦファンは僕の小説に同じような戸惑いを感じるでしょう。どこを「スクリプトの逸脱」として許容するか、どこを「因果関係の原理」として重要視するか、その判断基準の違いなのです。これは先程もいったように、あくまで主観的な問題に起因するのですが、なぜかＳＦファンはこの基準をある程度共有しているように（外部から見ると）感じられる。だからＳＦでは主観的な評価が客観評価と同列になりやすい。ＳＦの評価が外部からわかりにくい原因だと思います。

６）ＳＦの未来に向けて

【スライド 36】ＳＦ書評に問題がある？

ＳＦが売れないと思われてしまうのはなぜか。僕は最初、ＳＦ書評に問題があるんじゃないかと思っていたんです。文芸一般の編集者はＳＦ書評をあまり読んでいないんじゃないか、だから面白いＳＦが出ても気づかないんじゃないか。

ところがインタビューしてみると、実は一般文芸編集者もＳＦ書評をたくさん読んでいるということがわかったんです。それなのに、このＳＦ作家に仕事を頼もうとは思わない。そこがなぜなのか、僕にはわかりませんでした。角川の宍戸健司さんがいったことでこれは非常に重要だと思った指摘があります。早川書房から最近は『ＳＦが読みたい！』という年間ＳＦ総括ガイドが出ています。ミステリーにおける『このミステリーがすごい！』に相当する本ですね。こちらにもＳＦ関係者が選んだ年間ベスト 10 が載ります。ところが、このベスト 10 は比較対照するもの

がないから、そのまま信じていいかわからないというわけです。なるほどと思いました。書評や評価に対する信用度が、ＳＦの圏外から推し量りにくい構造なのです。それではいくら絶賛書評が新聞や雑誌に載っても効果はありません。たぶんＳＦ業界以外の人がＳＦを書評するようにならないと駄目なのです。

【スライド 37】「なんでもＳＦという」戦略？

もうひとつ、以前から疑問に思っていたことがあります。いまは「なんでもＳＦという」のがＳＦの風潮ではないでしょうか。面白い作品があると「あれもＳＦだよ、これもＳＦだよ」といって、ＳＦとは呼ばれていないものでも積極的にＳＦに取り込んでいく。特にヤングアダルト・ライトノベル小説に対してこの傾向が顕著だと思います。

もちろんこの運動は、ＳＦファンの人にとっては読書の幅を広げることに役立ったと思うんです。ところがメディアワークスの人に聞いてみたところ、ヤングアダルト・ライトノベル読者の人たちは、「なるほど、おれたちの読んでいるのはＳＦなのか、じゃあＳＦも読もうか」とはならないということらしいんですね。電撃文庫の読者にアンケート調査をしたところ、電撃文庫はハヤカワ文庫ＳＦと読者層がほとんど重ならなくて、読者は他のライトノベルのレーベルを読んでいるという結果だったそうです。ですから、「なんでもＳＦという」戦略は、確かにＳＦファンの楽しみを増やすことには貢献したけれど、ＳＦファンじゃない人たちの楽しみを増やしているわけではないんじゃないか、と思ったんです。

【スライド 38】ＳＦファンは他ジャンルの本を読むか？

ＳＦファンはどのくらい他ジャンルの本を読むか。できれば作家で読んでほしい。作家ではなくジャンルで読む読者が増えてしまうと、作家側はやりづらいと思います。

【スライド 39】ＳＦの「再発見」！

僕は最近になって小松左京さんと山田正紀さんに興味が出てきたんですね。ＳＦの中でいろいろなことをやってきた、その仕事ぶりに惹かれるんです。僕は子供の頃、小松さんの小説ばかり読んで、ノンフィクションはほとんど読まなかったんですが、いま作家になって小松先生のノンフィクションを読むと、べらぼうに面白いんですね。このところ必死に古本屋で集めているところなんです。小松さんがノンフィクションでやっていた問題意識は小説のテーマと実に密接に関係している。小松さんの小説は、小説だけ書いていたのでは生まれてこなかったと思うんです。ノンフィクションの仕事をしたから小説が生まれ、小説を書いたから次の問題意識が生じて、それを紹介するためにノンフィクションを書いている。小説とノンフィクションが見事に呼応していて、作家の問題意識を如何に文章に落とし込むか、いい事例となっている。どうしていまのＳＦ作家はノンフィクションを書かないんだろう。僕はそれがすごく疑問です。僕がいま意識的にノンフィクションを書いているのも、このためなんですね。ＳＦ作家はもっとノンフィクションを書いてもいいんじゃないか。

また山田正紀さんは、いろいろなジャンルを横断しながら、ダイナミックに創作活動を続けて来られた方です。あまり自己のことはこれまで語られなかったんですが、山田さんの問題意識を追認するために、もう一度最初から、年代を追って読んでみたいと思っているところです。

【スライド 40】そして、ＳＦに問う

祥伝社の加藤さんにインタビューしたとき、非常に印象に残った話がありました。最近の編集者は、ノンジャンル・エンターテインメントを指向している人が多い。これはなぜなんだろうかと質問してみました。すると加藤さんは、『パラサイト・イヴ』がきっかけだったと指摘したのです。

僕はあまり自分の本を自慢したり、他人と比べてどうこう思ったりするタイプではありませんが、このご指摘には感激しました。僕の小説自体は大したことがなかったかもしれませんが、少しは小説全体を面白い方向に変えることができた。出版業界を意識変革することができた。『パラサイト・イヴ』を書いた甲斐があったというものです。

では､翻ってＳＦはどうか｡ＳＦはＳＦファン以外の人に何か与えてくれているだろうか？　何も与えてくれていないなら、こちらはＳＦと呼ばれることに寛容になれない。結局は、面白いかどうかということなんですよね。面白いという意識を他人に与えているか。ＳＦファンじゃない人たちにも面白いところを見せてほしい。

【＊註】これについては反論も多かった。「講演後の反響に対して」で述べる。

【スライド 41】「文句をいうなら提案せよ！」

僕が 3 年間務めた宮城大学の初代学長だった野田一夫氏は、「文句をいうなら提案せよ」と口癖のようによくいっていました。それに倣って、僕もＳＦへの提案をしてみたいと思います。どうやったらＳＦが売れるようになるか。

いま、出版社は出版社ごとに広告を出している。でも、それは古いんじゃないか。みんなが協力し合って、ＳＦを盛り立てるような宣伝ができないものか。例えば作家がグループを作って、共同で広告を出したらどうでしょう。新聞に大きく広告を出すんです。最初は各出版社や各作家の間で遠慮もあるでしょうし、責任をどこがどの程度負担するかで揉めるかもしれませんから、この新聞広告費用は僕が全額負担しましょう。全面広告だと難しいですが、全 5 段広告くらいなら出せます。僕のことが嫌いなＳＦファンも多いですから、僕は黒子に徹してもいい。僕が絡んでいることが広告からだけではわからないようにすることも可能です。そして、本当に面白い新作ＳＦ作品を 12 個集める。ここにはいろいろな種類のＳＦ作品が入るのがいい。小説をメインとしつつも、ノンフィクションや映画、アニメ、ゲームも入れるんです。そしてその作家・クリエイター12 人が一堂に会して、僕たちが本当に面白いＳＦをみんなに提供しますよ、という感じでドカンと新聞広告に登場する。ここで集まる作家は、既存のジャンル概念にとらわれたＳＦ作家ではいけません。あえてジャンル作家でない人も積極的に取り込んでゆく。あくまで面白さで選定します。それで、毎月その作品をひとつずつ出すわけです。統一マークや統一デザインをつくって、個々の作品が連動していることを消費者側に意識づけます。小説なら帯や装丁を統一してもいいかもしれません。それで帯の裏に、例えば「来月は〇〇さんの××刊行！」とか、そういうふうに書いて、次の作品への橋渡しをする。1 年間で 12 冊（12 個）のコア作品を、12 の出版社（媒体）から連動的にプロデュースしていく。出版社の枠を超えたプロモーション展開です。さらに、それらの作品からもっと広がりを持たせるために、「〇〇が面白かった人にはこれがおすすめ」といった特集を雑誌で仕掛けてゆく。Further reading のガイドを充実させることで、ＳＦ全体の底上げを図るんです。

これは、かなり真面目なアイデアです。もしこの企画に興味を持ってくださる出版社がいらっ

しゃれば、あるいは一緒にやりたいという作家の方は、ぜひ僕にご連絡下さい。出版社はタダで自社本の広告が打てるんですよ。一年で 12 冊出せば、なんとなく流れができるのではないかと思うんです。

【スライド 42】ＳＦへの提言

それでも、これだけでは足りない。ＳＦ自身も変わる必要がある。これは僕からのＳＦへの提言です。

まず、「これはＳＦじゃない」と今後５年間いわないこと。今日、この場で全員で申し合わせる（笑）。

「これはＳＦだ」といっても構わないが、これはホラーだよ、とかミステリーだよ、という他ジャンルの評価軸にも寛容になる。他ジャンルからの評価も並列的に受け入れること。

それから、ＳＦ作家が他ジャンルの小説を書いたときや、他のノンフィクションを書いたときにも、その活動を応援してほしい。

【スライド 43】ＳＦファンへの提言

ＳＦ読者への提言としては、まず編集者を教育せよということ。読者カードをたくさん出す。ちゃんと本を買って、売れることを数字で示してやれということですね。

いま大学生や高校生の人はぜひ編集者を目指してほしい。ＳＦファンの人が編集者になって、あと 10 人ＳＦ好きの編集者が出れば、おそらく日本の出版はＳＦだらけになると思います。絶対に日本の出版は変わります。

それから、とにかく買い支えよ。「出たら必ず買え」ということですね。僕自身、ホラーが冬の時代といわれていたときから、モダンホラー・セレクション、角川ホラー文庫、学研もハルキホラーも全部自分で買っている。いまでも自分で買っている。とにかくこういうことをやることは必要。せめてハヤカワ SF とハヤカワ JA 文庫、創元 SF 文庫くらい全部買ってください。ただ、本当のことをいえば、日本人作家を買い支えてほしい。だからハルキ文庫とデュアル文庫も全部買うこと。すでに持っている本でも再刊されたら買う。

そして最後に、今後ＳＦブームが再びやってきたら素直に喜べ！　これに尽きます（笑）。

【スライド 44】というわけで、これからやる（やりたい）ことは……

最後に、僕の今後の活動予定をお話ししておきます。

まずはノンフィクションと小説の両軸を目指すということ。今年はロボットものの連作をやろうと思っています。それから 7 月 20 日にノンフィクション『ロボット 21 世紀』を文春新書から出します。日本とアメリカぐらいの研究者 25 名ぐらいにインタビューして書いた本です。

それから、サイエンスノンフィクションの古典をシリーズで復刊させたいと密かに考えています。いま、出版社に掛け合っているところです。

あと、最近はミュージカルにハマっていまして、非常に面白い。『八月の博物館』をどこかでミュージカルにしてくれないでしょうか。

【スライド 45】ご意見・ご感想・資料請求は

今回の講演の資料が必要な方は、僕かセミナーのスタッフにお申し出下さい。学問の世界では、

自分の論文を請求してきた相手にリプリントを無料で送付する習慣があります。最近は PDF ファイルをウェブに置くようになってきましたが、ちょっと前までは郵送でやりとりしていたんですね。これはとてもいい習慣で、それを見習って僕も無料で配布したいと思います。

今日は長々と申し訳ありませんでした。あと 3 分くらいが質疑応答になっています。すみません。

７）質疑応答

（司会）

素晴らしいご講演をいただきまして、今日ここに参加された皆さんはもう二度と「これはＳＦではないといってはいけない」とわかりました。そして、ＳＦとのファーストコンタクトが無事に終了いたしましたので、これからは瀬名さんとの第二次、第三次のコンタクトを続けてください。時間がかなり押しておりますけれども、ここで質疑応答の時間に入らせていただきます。

（質問者１）

あ、どうもいつもご本をありがとうございます。えー、最後のご提案なんですけれども、私も「あれもこれもＳＦ」というのは大嫌いでして、その点では大森望さんのやり方は非常に反対なんですけれども。ただ、もうひとつ、本音はＳＦではないというよりも、非常に間違った物言いだと思って大嫌いなんですけれども、ただ、書評家としましては「このＳＦは駄目だ」ということを禁じられてしまうと、公正な書評にならないという気がしますので、そこだけは許していただきたいなと非常に思うんですけれども。

（瀬名）

このＳＦは駄目だというのは、ＳＦ小説として駄目だということになるんですか？

（質問者１）

僕、思うのはジャンル小説にはジャンル小説のルールがあって……。

（瀬名）

はい、そうですね。

（質問者１）

やはり、これはホラーとして傑作だとかですね、これはミステリーとして傑作だとかですね、これはＳＦとして傑作だとか、それぞれちゃんと枠が違う評価基準があってしかるべきだと思いますので、その反対として「これはＳＦとしては駄目でしょう」と。「これはミステリーとしては駄目でしょう」ということは、やはりきちんと書評家とか批評家の方にはいってもらいたいと思うわけです。その点はいかがでしょう。

（瀬名）

ええ、僕もそれはそのとおりだと思います。例えば「ＳＦオンライン」や「ＳＦマガジン」、

そういうＳＦと謳っている雑誌では、やはりＳＦの基準で評価するのが当然だと思うんです。ただ、そうではない媒体もありますよね。そちらのほうは、むしろもっと例えばミステリーとかサスペンスとかと並列的に評価していくことも、積極的にやってもいいかな、と思います。

（質問者１）
　一番、思うのは「これはＳＦではない」というのは、本当に皆、いっている人がいたら、ちょっと叱ってあげましょう。

（瀬名）
　ありがとうございます。ただ、読者の方も「ＳＦオンライン」とか「ＳＦマガジン」だけじゃなく、例えば「ミステリマガジン」とか「オール讀物」「週刊現代」とかの書評も同時に読んでほしいと僕は思いますけれどもね。ＳＦだけの書評だと、やはりそれが絶対的評価になってしまう可能性があるので、いろんな書評を僕は読んでほしいなと個人的には思います。

（質問者１）
　あと、僕は思うのはＳＦの書評も人によって、例えば大森望さんの好きなＳＦとか中村融さんの好きなＳＦとかそれぞれあるわけなので、それを読者もはかりに、この人はこういう傾向なんだというふうにやはりちょっと考えてほしいなと。誰かのいうことを盲目的に信じたりとか、そのＳＦファンが一体となって何かをひとつの基準で生きているふうには思ってほしくないなと思います。

（瀬名）
　それはＳＦファンの方がもっとたくさんいったほうがいいと思いますね。

（質問者１）
　そうですね。それはやはりＳＦファン側がもうちょっとするべきことだと思いますね。

（瀬名）
　そうですね、はい。

（質問者２）
　先ほどのことで、ひとつだけ指摘を。スニーカー文庫や電撃文庫などのヤングアダルト系の読者、デュアル文庫のような戦略なんかでも、プロパーＳＦを読むようになっているかというと、現状ではそうじゃないのではないかと。たったひとつの実例ですが、友人の夫婦の子供、ゲーム、そしてやはり「電撃」「スニーカー」系列だけを読む。中学３年生になったのかな？　　デュアル文庫の関係で親の方は両方とも昔からのＳＦファンなんですが、プロパーＳＦの作家のほうを読むようになっています。また別の形でいうならば、僕自身、上遠野浩平さんという作家の存在をはじめて知りました。やはりそれなりに、数的にはどうかともかく確実に、現実問題としてやはり広がりが見えているという事だけは指摘させていただきたいです。

（瀬名）
　うーん、はい。たぶんそういう一人、二人の事例の裏には、もっと隠れてたくさんの方がいらっしゃるんだと思います。だから編集者自身もご存知なくても、実はそういう読者の方々はたくさんいるんだろうとは思います。やはりそうふうになっていきたいなと思いますね。僕自身もホラーを読みながら、「奇妙な味の小説」を経由して、元ＳＦ作家の方の本とか読んでいましたから、そういう意味では越境はたくさんあるといいなと思います。（＊註：ただ、やはり編集者にそういうケースを少しでも知らせてゆくことは必要。出版現場を励ます意味にもなる）

（質問者３）
　あの、大変素晴らしい講演をありがとうございました。それで言葉の端々から「自分はホラー作家である」という認識をなさっていて、ホラーをあえて買い支えたりとか、ホラーに対するジャンルの帰属意識を感じるんですが、ＳＦ作家、ご自分としてはＳＦ作家だと思っていらっしゃいます？

（瀬名）
　僕はいまでも自分はホラー作家だと思っているんですよ。ＳＦ作家といわれて別に嫌ではないんですけれども、自分からＳＦ作家とはいえないというところはありますね。うーん。

（質問者３）
　あの、さっきのＳＦ冬の時代の問題からいけば、瀬名さんがＳＦ作家だと名乗れば一気にＳＦ。

（瀬名）
　うーん、でもね、例えば『パラサイト・イヴ』はホラー大賞を獲っているので、だから僕はホラーにも恩義があるんですよね。ですから、あれをＳＦと自分でいうことって出来ないですね。だから『BRAIN　VALLEY』はＳＦといってもいいかもしれませんね、あれはＳＦ大賞を頂いたので、あれは構わないです。実は、あれ最初、編集部ではホラー文庫に入れようという話だったんですけど、僕が「やめろ」といって、角川文庫にしてもらったんですね。「ＳＦ大賞を獲ったのにホラー文庫に入っているというのは、ＳＦファンの人に失礼だ」と。だから「角川文庫で出せ」というふうにあれは強硬に自分でいいました。でもね、うーん。いま僕のところに小説を書いて下さいという編集者の方で、ホラーを書いて下さいという編集者の方は一人としていないのです。えー、8 割くらいはたぶんＳＦを書いてくださいという依頼です。あとはまあ、瀬名さんに好きなのを書いて下さいということですけど、だから注文的にはＳＦが圧倒的に多いですね。

（質問者４）
　最近ＳＦとかホラーの関連小説に瀬名さんの解説をよく見かけるんですが、あれも一部の戦略でしょうか？

（瀬名）
　僕個人が文庫解説をものすごく好きなので、自分でもやりたいということなんです。だから、ご依頼があれば引き受けているのですが、読者からは賛否両論でして、非常に良いといって下さ

る方もいれば、全然駄目だという方もいて、正直、僕は続けたほうがいいのかどうかよくわからないです。前に村山由佳さんの恋愛小説の解説を書いた時には、『きみのためにできること』という集英社文庫の本なんですけれども、これはうちの大学の女の子が読んで、「せっかく村山さんの本で感動していたのに、後で小難しい解説が書いてあって感動が薄れた」といわれて、僕はそのとき「もう止めようかな？」と思いましたけれども。

（会場から）
　あの解説は良かった。

（瀬名）
　ありがとうございます。まあ解説が単純に好きなのでやってしまうのですが、ただ非常に時間を取られるので、解説ばっかり書いていると小説が書けないですね。

（質問者４）
　でも、できるだけ続けてくれるとちょっと嬉しいです。

（瀬名）
　ありがとうございます。

（司会）
　以上で、質問のほうはもうよろしいでしょうか？　では幕も降りてまいりましたので、大変長いようであっという間の時間でございましたけれど、瀬名秀明さんにもう一度大きな拍手を。

ＳＦセミナー2001

『ＳＦ』とのファースト・コンタクト

—瀬名秀明、 ＳＦに対するアンビバレントな思いを語る—

【スライド１】表紙
みなさま、初めまして。
今日は話すことがたくさんありますので、どんどん進めましょう……。

【＊註】文字を見やすくするために、講演のときよりもスライドの背景色を簡素なものに変更してある。

瀬名秀明は何者か
（1968年静岡県生まれ、33歳）

- **小学生時代**　藤子不二雄・手塚治虫のマンガ、ＴＶアニメ「宇宙戦艦ヤマト」「マジンガーＺ」、ホームズ、江戸川乱歩などの推理小説
- **中学生時代**　角川文庫、ハヤカワミステリ文庫、創元推理文庫（眉村卓、光瀬龍、クイーン）。自分はＳＦファンなのだと思いつつ、全身で好きになれない
- **高校生時代**　アニメに興味なくなる。海外モダンホラー、書評好き。あまり本を読まない時期
- **大学時代**　同人誌サークルに入るが、ＳＦにピンと来ない。新本格ミステリ、ホラー

【スライド２】瀬名秀明は何者か

今日は私の読者の方がどのくらいの割合でいらしているのかわかりませんが、とりあえず自己紹介から始めます。今日はＳＦの話ですので、いつも講演でお話しするような科学の話はありません。私の他の講演を聴いたことがある方がこの会場にいらっしゃったら、今日はびっくりされるかもしれません……。

まずは自己紹介を兼ねて、ＳＦ歴を話します。

【ミトコンドリア】 すべての真核細胞にあり，呼吸をいとなみ，生命活動に必要なエネルギー源であるATP（59ページ参照）を生産する。内外の二重膜（二重の生体膜）に包まれ，内側の膜（内膜）は内部に向かって突出し，**クリステ**を形成する。内膜に囲まれた部分には**マトリックス**がある。細胞内で分裂によってふえる。

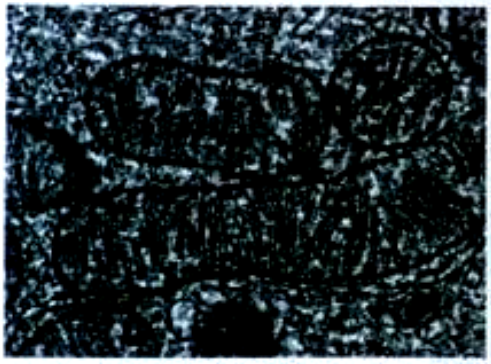


図11 ネズミ小腸上皮細胞のミトコンドリア（約23000倍）

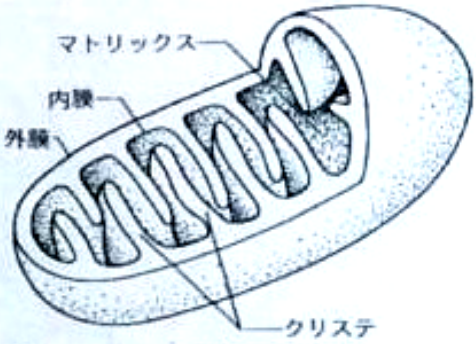


図12 ミトコンドリアの模式図

【スライド３】ミトコンドリアと『パラサイト・イヴ』

批判からＳＦとのコミュニケーションが始まった

- 『パラサイト・イヴ』への批判（1995年～）
  - これはＳＦではない
  - 誤った科学を広めて金儲けをしている
- 角川書店『BRAIN VALLEY』掲示板（1997～98年）
- 日本ＳＦ大賞・受賞の言葉
- 自分が好きだった「ＳＦ」はどこへ？
- 批判する読者を切り捨ててはいけない。アドバイスを次作に生かしたい。だが、どうもよくわからない
- いまの「ＳＦ」を理解したい！

【スライド４】批判からＳＦとのコミュニケーションが始まった

知らない人のために『パラサイト・イヴ』の話を。

高校教科書にあるミトコンドリアの図と、実際のミトコンドリアの顕微鏡写真はかなり雰囲気が違う。この違いがアイデアのもとになっている。

最後のあたりで「利己的遺伝子」の話が出てくる。これをモチーフとしたわけではないが、こちらがクローズアップされてしまった。また、参考図書欄に竹内久美子の本を入れたことが誤解を読んだ。

「ミトコンドリアが意志を持ち……」というフレーズが繰り返し書評欄やインタビュー記事の中で用いられた。瀬名自身が「ミトコンドリアが意志を持った物語である」「ドーキンスの利己的遺伝子説をモチーフにした」と発言したことはないが、慎重さを欠く紹介記事によってネガティヴなイメージが広まった。事の重大さに気づいて以来、気がついた部分にはすべて修正を願い出ているが、聞き入れられない場合もあるし、記事自体をゲラで見せてくれない媒体もある。また、新人の頃は、記者や出版社、編集者の意見に逆らえない（遠慮してしまう）。当時は角川書店がアレンジしたインタビュー依頼は（こちらの意志にかかわらず）すべて引き受けていた時代である。

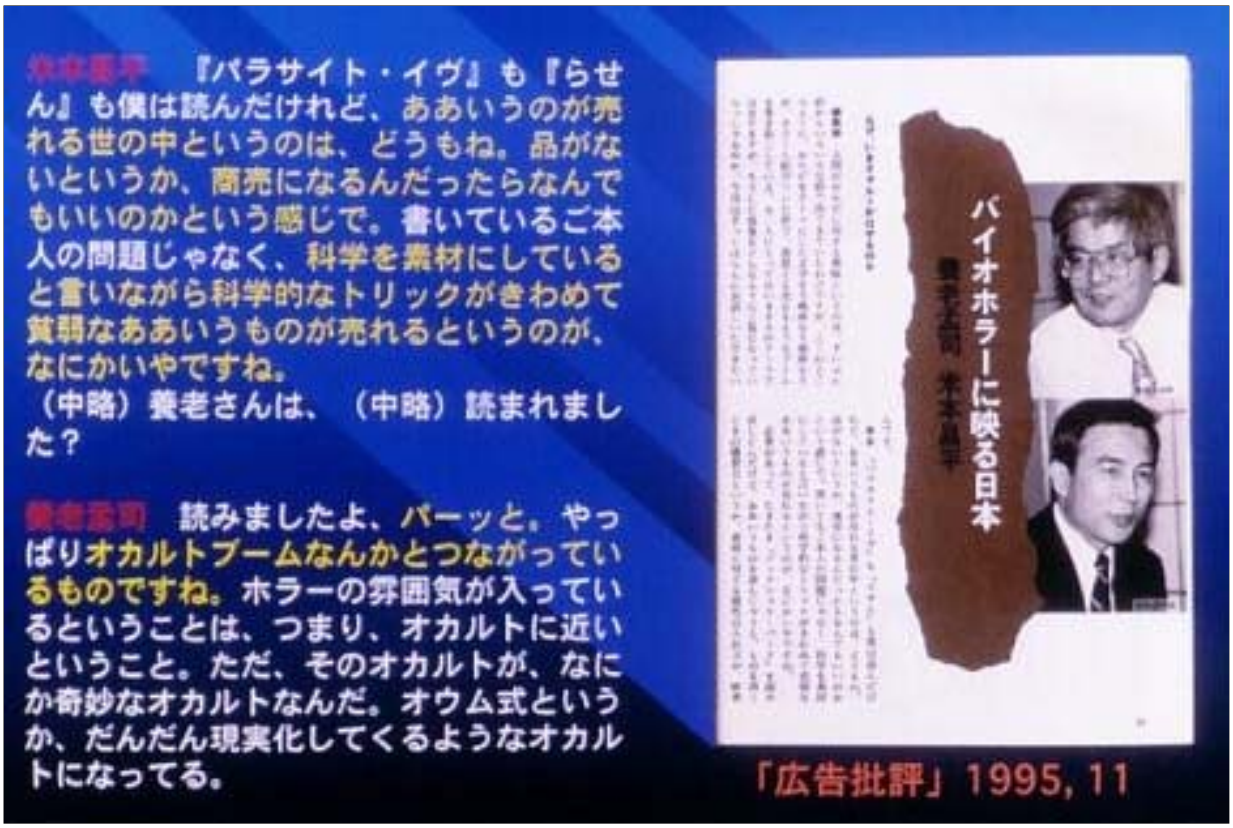
科学面で批判していた人は、ＳＦ関係者だけではない。→既存のスライドへ。

養老孟司・米本昌平の対談、村上龍『ヒュウガ・ウイルス』

【スライド５】ミトコンドリアは何色？

【スライド６】これがミトコンドリアだ

【スライド７】『パラサイト・イヴ』の波及効果



【スライド８】養老＆米本対談

作家側ができることは何か

- フィクションとノンフィクションを明確に分けて仕事をする
  - フィクションでは物語の面白さを優先する。だが作中で適切な配慮を心がける。研究従事者の心情を蔑ろにしない
  - フィクションからノンフィクションへ読者がスムーズに移行できる環境づくり（副読本・解説本のプロデュース）
  - 科学関連の仕事で手を抜かない　→小説を書く時が減少し、作家活動のバランスが崩れることへのジレンマ
- 隙をつくらない　公務員活動と作家活動のめりはり
  - 精神的・肉体的負担の増大　→大学職を断念。作家活動を通じて研究・教育活動を続けよう！　読者への隙は作品中に

【スライド９】作家側ができることは何か

そして、最後に残った懸案事項が「ＳＦ」である。

ＳＦ大会、ＳＦセミナーなどから何度もお誘いがあったが、正直なところ怖くて参加できなかった。だが最近、少しずつ「ＳＦマガジン」でも書くようになり、実際のＳＦ作家と話す機会も増えてきた。まだ違和感は残っているが、反射的な拒否反応は薄れている。

お互いの違和感をぶつけあおう

- ＳＦ内部と外部のコミュニケーションが必要
- ＳＦ内部同士のコミュニケーションも必要
- 「瀬名秀明」を使って、それを可能にできないか？
- 新しいエンターテインメントへのきっかけづくりにしたい

【スライド10】お互いの違和感をぶつけあおう

ウェブのアンケート調査では「なぜ瀬名さんこそＳＦ観にこだわるのか？」といった質問が寄せられた。

それは、ＳＦと科学には感謝しているから。

だが一方で、ＳＦと科学には裏切られ続けてきたという思いもある。冗談がまったく通じない世界でもある。「SF Japan」の新進作家座談会で、みんな「ＳＦは自由だ」と語っている。いったいどこの世界の話なのだと思う。パラレルワールドの話か、それともその世界の一員になってしまえば居心地良いのか？

勉強しても永遠に部外者。わかっていないといわれ続けそうな気がする。このあたり、看護学に似ている。

ロボット工学の研究者たちは、このままでいいのかという思いから学会でパネルディスカッションを重ねている。また一線の研究者が個々人で打開策を見つけ、実行に移している。その精神は素晴らしいので、自分もそうしたいとの思い。

ファースト・コンタクト！

- 「ファースト・コンタクト・ジャパン」　異星人とコンタクトする前に、ＳＦファンは私のような作家とコンタクトすることが重要では？

【スライド11】ファースト・コンタクト！

ファースト・コンタクトとは人間が他の知性体と初めてコミュニケーションを交わす状況のことで、ＳＦでよく書かれるが、実際の研究者たちもまじめに考えている。

地球人側と宇宙人側に分かれてコンタクト・シミュレーションをおこなう集まり。ＳＦ関係者の間では人気・評価が高く、現役ＳＦ作家も多数参加。合宿形式。昨年はカナダのＳＦ作家ロバート・Ｊ・ソウヤーが宇宙人側の設定を引き受けた。

この写真は「ＳＦマガジン」というＳＦ雑誌に掲載されたもの（無断転載）。地球人側と宇宙人側が初めて対面する場面。宇宙人ヒッストの格好で入場してくるソウヤーたち。

これを見て、どこか居心地の悪さ。違和感。

なりきっている姿が端から見て少し恥ずかしい感じがするが、まあ当人たちは楽しそうだからそれについてはとやかくいわない。

なぜ彼らはこれを許容できるのに、『パラサイト・イヴ』の怪物の描写には批判的なのだろう？　宇宙人を人間が演じているという段階で、すでに宇宙人を人間に引き寄せて考えている。それは彼らの嫌う「擬人化」と根本的に同じなのでは？　ロボット研究者も「人間は人間以外の知性を理解することは不可能。だがコミュニケーションはできる」といっていた。人間が宇宙人の知性を設定し、その通りに振る舞うこと自体が間違っているのでは？　なぜこれは許容できるのか？　私の感覚とどこか何かがずれているようだ。どこが？

「コンタクト」への準備

- ＳＦ以外の分野からの意見を聞く
  - 特にＳＦにこだわらない一般文芸編集者の意見を聞いて、今後のＳＦ出版へのヒントを探る
  - 「ＳＦは売れない」という言説が本当なのかどうか確かめ、今後の不毛な議論を避ける
- 読者からＳＦについての意見や瀬名作品の評価を募る
  - ウェブ「ＳＦ系日記更新時刻」に登録されているＳＦ系ウェブ日記を可能な限り読み（約1年）、理解の助けとする
- 講演後は内容を取りまとめて希望者や出版社に配布
  →そこから真のコンタクトが始まるのでは

【スライド12】　「コンタクト」への準備

「ＳＦは売れない」といわれる。ＳＦマガジンやウェブでさまざまな議論が繰り広げられている。だが一方で、そういう議論の存在すら他の読者は知らないのではないか？

ＳＦ内部だけで議論していることに問題があるのでは。もっと外部の意見、しかも文芸に携わっている人たちの意見を聞きたい。

筑波大学「どれだけＳＦを読んでいるか？」アンケート

- 星野力教授による講義「科学技術とＳＦ」
- 1998年～2000年の３回実施
- 詳細は下記URL参照
  - アンケートフォーム
    - http://darwin.esys.tsukuba.ac.jp/SF/ankeito.html
  - アンケート結果
    - 1998年度　http://darwin.esys.tsukuba.ac.jp/SF/98/Ankeito.html
    - 1999年度　http://darwin.esys.tsukuba.ac.jp/SF/99/Ankeito.html
    - 2000年度　http://darwin.esys.tsukuba.ac.jp/SF/Ankeito.html
  - 講義「科学技術とＳＦ」ＨＰ
    - http://darwin.esys.tsukuba.ac.jp/SF/

【スライド13】筑波大学「どれだけＳＦを読んでいるか？」アンケート

その結果を見せる前に、そもそもＳＦがどの程度読まれているのかを調べたい。すでにそういう調査がある。

総合教養科目。受講者の多くは一年生。

星野先生には転載・紹介許諾済み。

今までに読んだＳＦの冊数

0冊	1～5冊	6～10冊	11～20冊	21～30冊
36人	87人	36人	30人	13人
31～50冊	51～100冊	101～200冊	201～300冊	301～500冊
15人	6人	1人	1人	1人

- 合計：226人（2000年度調べ）

【スライド14】今までに読んだＳＦの冊数

「科学技術とＳＦ」という名の講義を受講する学生ですら、５０冊以上のＳＦを読んでいる人はまれ。ごくわずかに途轍もなく読んでいる人がいる。

星野力先生のコメント：「ＳＦを読まないというよりも、そもそも活字（本）を読んでいないと回答した学生も沢山いました」

この読書数は、後で紹介する今回のアンケート結果とかなりの隔たりがある。

以下のＳＦ小説を読んだことがありますか？ （2000年度調べ）

タイトル	ちらっと見た	読んだ	面白かった	合計
R.ハインライン「夏への扉」	3	7	10	20
A.クラーク 「２００１年宇宙の旅、その続編」	17	20	10	47
C.セーガン「コンタクト」	5	12	5	22
I.アシモフ「われはロボット」	6	4	6	16
I.アシモフ「ファウンデーション・シリーズ」	3	4	9	16
E. トムソン「バーチャル・ガール」	6	4	1	11
アンダースン＆ビースン「臨界のパラドックス」	0	0	0	0
R.ラッカー 「ソフトウェア」	0	0	0	0
R.ラッカー 「ホワイト・ライト」	0	0	1	1
S.バクスター「時間的無限大」	1	0	0	1
瀬名秀明「パラサイト・イヴ」	32	47	36	115
瀬名秀明「BRAIN VALLEY」	10	10	8	28
岩明均「寄生獣」	23	33	53	109
遠藤浩輝「EDEN」	9	13	10	32
S.レム「ソラリスの陽のもとに」	0	4	4	8
P.アンダーソン「タウゼロ」	1	0	0	1
D.キイス「アルジャーノンに花束を」	21	18	28	67
柳原望「まるいち的風景」	1	1	3	5

【スライド15】以下のＳＦ小説を読んだことがありますか？ （2000年度調べ）

講義で言及されるＳＦ小説について調査された。

海外ＳＦはほとんど読まれていないが、「アルジャーノン」は読まれている。

以下のビデオや映画を見たことがありますか？ （2000年度調べ）

タイトル	ちらっと見た	見た	面白かった	合計
「２００１年宇宙の旅、その続編」	15	25	7	47
「ディスクロージャー」	5	11	3	19
「トータルリコール」	6	59	23	88
「ジュラシック・パーク」	16	97	59	172
「攻殻機動隊」	26	25	20	71
「記憶屋ジョニー(JM)」	7	18	7	32
「パラサイト・イヴ」	27	70	26	123
「鉄腕アトム」	53	56	27	136
「ガンダム」	33	73	60	166
「パトレイバー」	31	41	38	110
「コンタクト」	14	22	18	44
「太陽を盗んだ男」	0	1	1	2
「チャイナシンドローム」	4	2	2	8

【スライド16】以下のビデオや映画を見たことがありますか？（2000年度調べ）

映画はよく観ている。

「アトム」より「ガンダム」のほうが親しみがあるようだ。

以下の作家を読み（見）ましたか？ （1998年度調べ）

作家	△	○	◎	合計	作家	△	○	◎	合計	作家	△	○	◎	合計
海野十三	0	2	0	2	荒巻義雄	1	6	0	7	野阿梓	1	1	0	2
香山滋	0	0	0	0	横田順彌	2	2	0	4	大原まり子	1	4	0	5
都筑道夫	0	6	0	6	高斎正	0	0	0	0	谷甲州	0	3	0	3
安部公房	0	43	4	47	今日泊亜蘭	0	1	0	1	田中芳樹	3	46	0	49
福島正実	0	3	0	3	田中光二	0	2	0	2	森岡浩之	0	2	1	3
星新一	2	86	11	99	山田正紀	0	7	0	7	山本弘	2	9	0	11
光瀬龍	2	5	0	7	かんべむさし	0	7	0	7	野尻抱介	0	1	1	2
眉村卓	1	6	1	8	川又千秋	1	5	0	6	牧野修	0	0	0	0
平井和正	1	6	0	7	鏡明	0	3	0	3	大槻ケンヂ	6	31	1	38
石川喜司	0	0	0	0	神林長平	0	1	1	2	吉岡平	0	21	1	22
小松左京	5	22	0	27	栗本薫	1	25	0	26	笹本裕一	0	3	1	4
矢野徹	0	1	0	1	新井素子	2	19	2	23	冴木忍	1	14	2	17
半村良	0	11	0	11	山尾悠子	1	0	0	1	神坂一	1	28	3	32
豊田有恒	0	0	0	0	高千穂遥	3	12	0	15	あかほりさとる	1	31	1	33
筒井康隆	5	50	3	58	水見稜	0	0	0	0	難波弘之	1	0	0	1
広瀬正	0	0	1	1	大友克洋	2	28	2	32	火浦功	0	8	2	10
山野浩一	0	0	0	0	堀晃	0	0	0	0	井上夢人	0	5	0	5
石原藤夫	0	0	0	0	野田昌宏	2	4	0	6	岡嶋二人	1	7	0	8
久野四郎	0	0	0	0	大伴昌司	1	0	0	1	瀬名秀明	0	43	5	48
河野典生	0	0	0	0	萩尾望都	1	12	2	15	鈴木光司	0	27	4	31

- ちらっと見た△。読んだ○。面白かった◎

【スライド17】以下の作家を読み（見）ましたか？ （1998年度調べ）

読んだ人が30人以上の人は赤で示した。ＳＦ作家30名中10名。

星野力先生のコメント：「なかなか面白い集計結果です。古典と現在に２極分化しています。安部公房や星新一や筒井康隆などは（とくに星さんは国語の教科書に取り上げられているので）よく読まれていますが、その他の作家は忘れられています。そもそも「小松左京って誰？」という反応が多い世代なのです。中間の世代の作家はほとんど忘れられています。当然、最近の作家はよく読まれていますが、それでも拡散傾向が見られます」

＃小松左京は星・筒井らと同じ世代の作家だと思うが、なぜか読まれていない。これは現役の文芸編集者にインタビューして読書遍歴を探ったときにも同じ傾向が見られた（中学・高校時代、星新一や筒井康隆はよく読んでいたが小松左京は読まなかったとの発言が目立った）。

＃1999年度、2000年度も同様の傾向が見られたようなので、星野先生はそちらを集計していない。

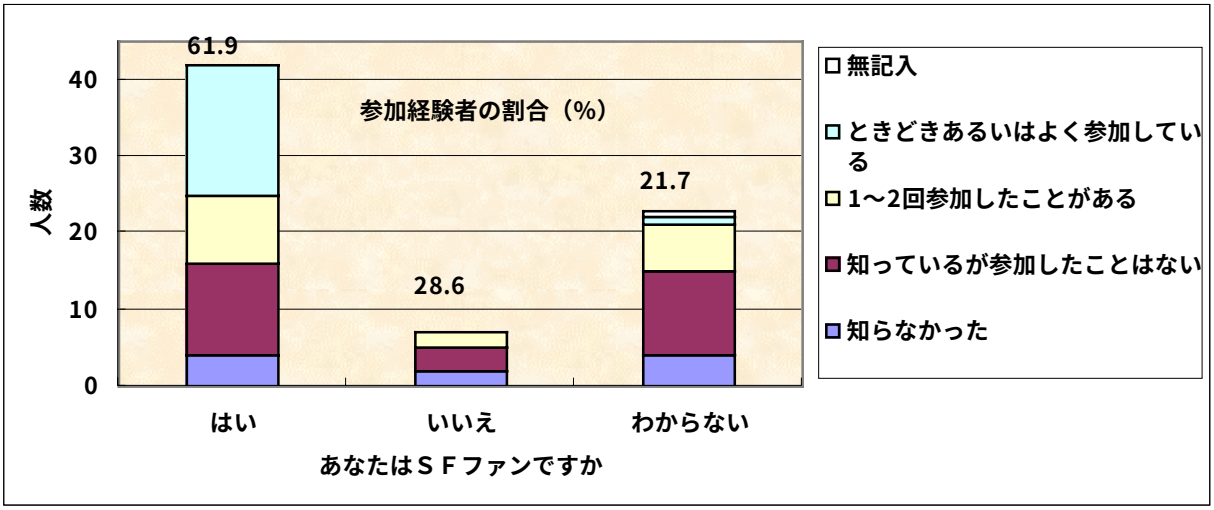
アンケートを実施

- 「ＳＦセミナー」ＨＰ、瀬名秀明ＨＰで告知
- 期間：2001年4月7日～4月23日
- 有効投票数：72名
- 性別：男性47名、女性23名、無記名2名
- 年齢：20～30代が全体の86％
- ＳＦファンですか：「はい」42名、「いいえ」7名、「わからない」23名

【スライド18】アンケートを実施

ちゃんと統計処理する時間が取れなかったが、全部の資料を置いてゆくので、今夜の合宿企画に参加される方はアンケートをご覧になって下さい。また、近日中にＨＰなどからダウンロードできるようにしたいと思います。

Q1）「ＳＦセミナー」をご存じですか

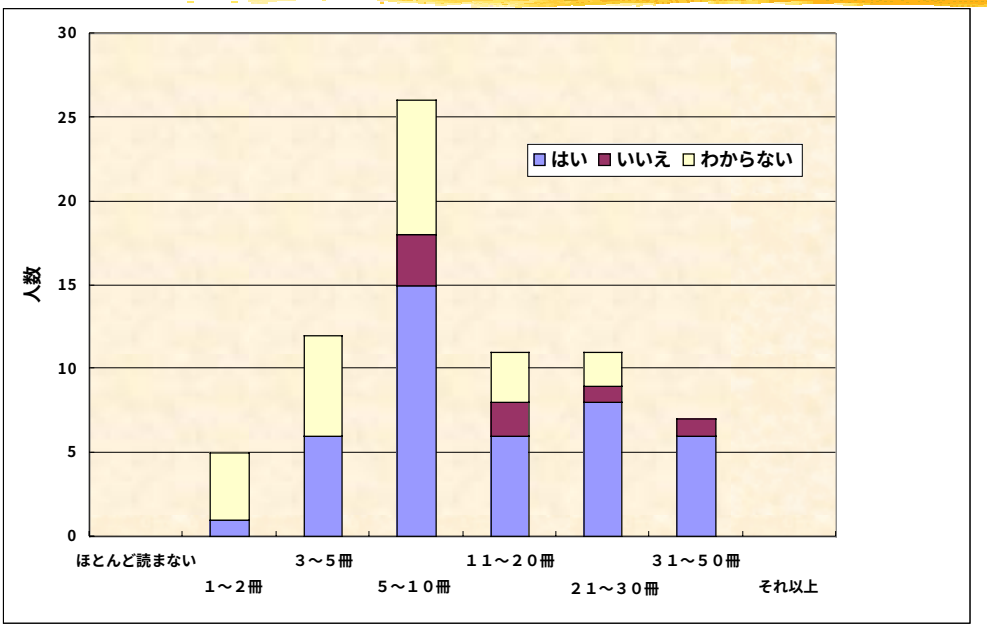


【スライド19】 「ＳＦセミナー」をご存じですか

「いいえ」「わからない」の人の中にも、ＳＦセミナーを知っている人が多勢を占めている。ＳＦについてある程度以上の知識とファン活動経験のある人と、ほとんど何も知らない人が混在している母集団であることがわかる（しかも知識のある人のほうが多い）。

ほとんどＳＦについて知識のない人たちからの意見もたくさん聞きたかったのだが、それは叶わなかった。ＨＰを見ていないのか、そもそもアンケートに回答できなかったかのどちらかだろう。

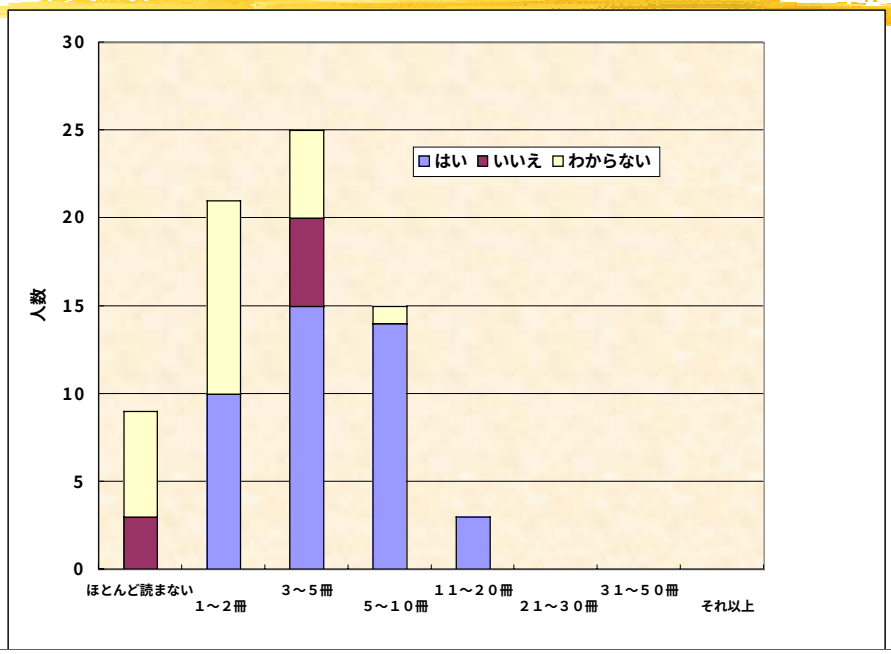
Q3）一カ月に何冊程度本を読みますか



【スライド20】一カ月に何冊程度本を読みますか

「５～１０冊」が、ＳＦファンであるか否かを問わず多い。「いいえ」は読書量が多い。

Q4）そのうち「ＳＦ小説」はどのくらいですか



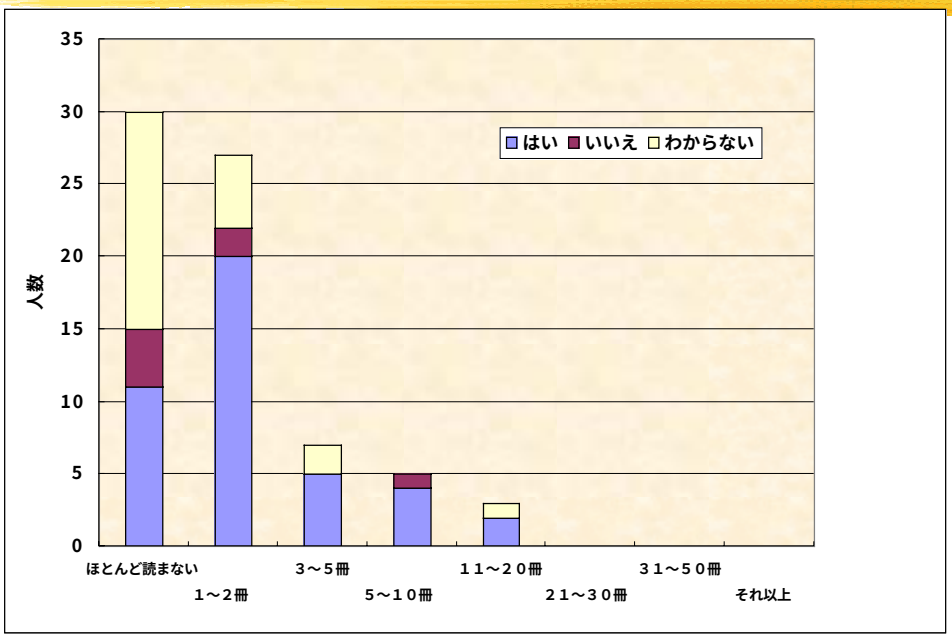
【スライド21】そのうち「ＳＦ小説」はどのくらいですか

「いいえ」が２極化しているのが興味深い。ＳＦをたくさん読んでいながら、意識的に「自分はＳＦファンではない」と考えているグループと、ほとんど読まないグループに分裂している。

「わからない」はブロードな広がり？　ただ、月に３～５冊も読んでいるのなら、立派なＳＦ読者だと思うが。

そもそもＳＦ小説は月に何冊くらい出ているのか？

Q5）そのうち「科学ノンフィクション」はどのくらいですか

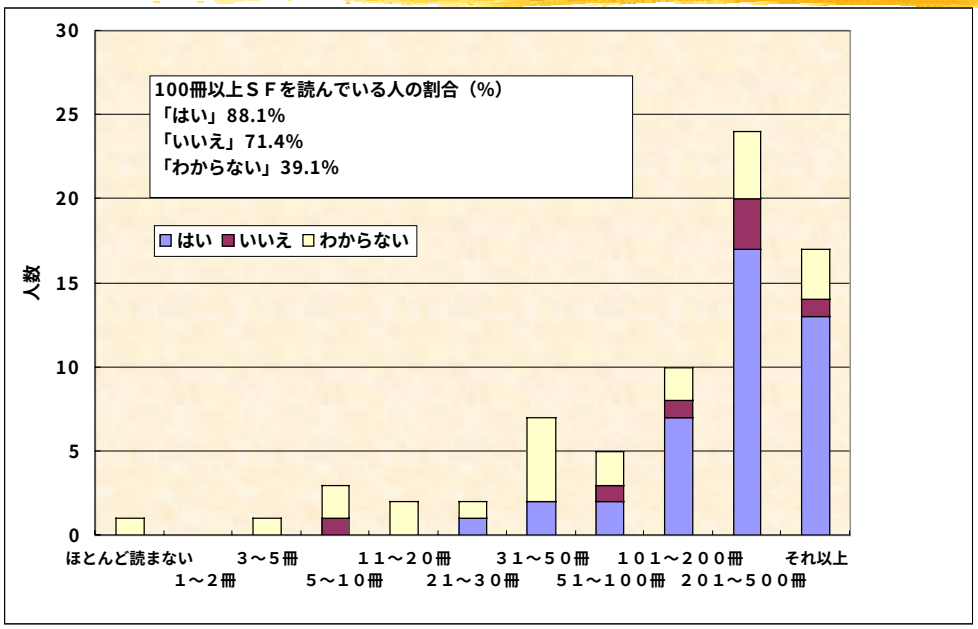


【スライド22】そのうち「科学ノンフィクション」はどのくらいですか

サイエンス・ライティングに興味があるので、それに関しての質問。

科学書が本当に読まれていないことを実感。意識的に読み込んでいる人以外は、ほとんど手に取っていないようだ。ＳＦファンはそれでも月に１～２冊程度読んでいる人も多いが、全体の読書量の中で占める比重は小さい。ＳＦ考証にこだわるＳＦファンは、この程度の読み込みでツッコミが可能なのだろうか？

Q6）「ＳＦ小説」をこれまでどのくらい読んできましたか



【スライド23】 「ＳＦ小説」をこれまでどのくらい読んできましたか

「いいえ」「わからない」でもかなりＳＦを読み込んでいる人がいる。

「ＳＦ小説好き」ではあるが「ＳＦファン」ではない、ということだろうか。これは私と近い感覚だ。

Q8）瀬名秀明の著作について、評価をお願いいたします

タイトル	ＳＦファンですか	とても面白かった	面白かった	ふつう	あまり面白くなかった	つまらなかった	読んでいない	無記入	読んだ人（%）	全体の読んだ人（%）
パラサイト・イヴ	はい	7	17	7	1	2	8	0	81	76.4
	いいえ	1	0	3	0	0	3	0	57.1	
	わからない	3	9	2	3	0	5	1	74	
BRAIN VALLEY	はい	7	11	4	0	2	18	0	57.1	55.6
	いいえ	0	2	1	0	1	3	0	57.1	
	わからない	3	6	0	3	0	10	1	52.2	
八月の博物館	はい	7	4	2	0	0	29	0	31	30.6
	いいえ	0	1	0	0	0	6	0	14.3	
	わからない	5	2	0	0	1	14	1	34.8	
小説と科学	はい	2	3	4	0	0	33	0	21.4	22.2
	いいえ	0	2	0	0	0	5	0	28.6	
	わからない	5	0	0	0	0	16	2	21.7	
「神」に迫るサイエンス	はい	1	4	3	2	1	31	0	26.2	22.2
	いいえ	0	0	1	0	0	6	0	14.3	
	わからない	2	1	1	0	0	18	1	17.4	
ミトコンドリアと生きる	はい	3	2	5	0	0	31	1	23.8	23.6
	いいえ	1	0	0	0	0	6	0	14.3	
	わからない	2	2	1	0	0	16	1	26.1	
Gene	はい	6	2	2	1	0	31	0	26.2	27.8
	いいえ	0	3	0	0	0	4	0	42.9	
	わからない	3	3	0	0	0	16	1	26.1	
ハル	はい	1	5	1	0	1	34	0	19	13.9
	いいえ	0	0	0	0	0	7	0	0	
	わからない	1	1	0	0	0	20	1	8.7	

【スライド24】瀬名秀明の著作について、評価をお願いいたします

ちゃんとした統計処理をしていないが、ＳＦファンか否か、ＳＦの読み込み度でそれほど評価が変わる印象はない。ただ、積極的に「つまらなかった」と評価する読者が確実に存在していることはわかった。彼らは不満というより強い怒り（ときには義憤）に駆られているようだ。このようなネガティヴな反応を強く引き起こすのが瀬名秀明の作家的特徴か。ただし誤読が怒りや拒否反応を誘発しているケースもあるようだ。

小説に比べてやはりノンフィクションは読まれていない（読んでいるのは友人・知人かプロの評論家）。たとえ瀬名秀明ファンでもノンフィクションには手を出していないことがわかる。小説とノンフィクションの両軸という戦略は実際的ではないのだろうか？

＃私も子供の頃は小松左京のノンフィクションに目もくれなかった。

「Gene」収載の『ゆがんだ闇』は大量の部数が出ているので読まれているが、対照的に少部数の『２００１』（「ハル」所収）はほとんど読まれていない。ＳＦファン以外で「ハル」を読んでいる人は知人のみ。

文芸編集者にＳＦ観を取材（１１社２６名）

- インタビュー取材
  - ６社１２名（匿名希望６名、実名公表可６名）
- 電話取材
  - ２社２名（匿名20代男性・文芸雑誌編集、匿名30代女性・小説誌編集）
- 書面による回答
  - ４社１４名（匿名希望２名、実名公表可１２名）

【スライド25】文芸編集者にＳＦ観を取材

ＳＦに直接関わりのない文芸編集者からもＳＦ観を聞き出したかった。

またヤングアダルト（最近はライトノベルという呼び名が主流になりつつある）の編集者からも話を伺った。

まずは面識のある文芸編集者に取材の依頼状とインタビュー内容の概要を送付。許諾のあった方に、直接伺うか電話による取材をおこなった。ご多忙の方は書面にてご回答をくださった。

ＳＦに直接関わっている編集者にもインタビューの依頼状を送付したが、ご多忙のため取材が叶わなかった。

２５名のうち２名（祥伝社）は書面とインタビュー両方で回答してくださった。

インタビュー取材に応じていただいた方々

- **角川書店**　宍戸健司（30代男性）角川ホラー文庫編集長、吉良浩一（30代男性）編集、匿名（30代男性）編集
- **講談社**　唐木厚（30代男性）第３出版部副部長、匿名（30代男性）文芸図書編集部、匿名（30代女性）文芸雑誌編集
- **祥伝社**　加藤淳（40代男性）文庫編集長、保坂智宏（40代男性）ノン・ノベル副編集長
- **タクト・プランニング**　深澤真紀（30代女性）代表取締役
- **メディアワークス**　匿名（40代男性）文芸編集、匿名（30代男性）文芸編集
- **（匿名）**　匿名（30代男性）書籍文芸編集

【スライド26】インタビュー取材に応じていただいた方々

匿名希望の方もいる。理由は様々で、

自分一人の意見を出版社全体の意見と勘違いして欲しくない

いまＳＦ出版に関わっているので、あまり読者から反感を買いたくない

ＳＦをあまり知らないので

など。

書面回答に応じていただいた方々

- **幻冬舎**　日野淳（20代男性）文芸編集、長谷川和人（30代男性）文芸編集、志儀保博（30代男性）文庫編集長、工藤早苗（20代女性）編集、木原いずみ（30代女性）編集
- **祥伝社**　近藤誠（40代男性）広告部広告企画課副課長、匿名（男性）編集、加藤淳（40代男性）文庫編集長、保坂智宏（40代男性）ノン・ノベル副編集長
- **徳間書店**　国田昌子（女性）文芸図書編集長、松尾賢次（30代男性）編集、大野修一（30代男性）文庫編集部・課長、匿名（30代男性）文庫編集
- **文藝春秋**　津谷洋（40代男性）「別冊文藝春秋」編集長

【スライド27】書面回答に応じていただいた方々

社内でアンケートを取りまとめてくださった方もいる。

全体を通しての感想、収穫

ＳＦは本当に売れていないのか？

まず、そもそもＳＦについて関心を払う編集者があまりいない。

「ＳＦが売れない」かどうか、発行部数のデータをちゃんと把握して語れる編集者はひとりもいなかった。それどころかどの本がどのくらい売れているのか、まるで知らない。

だが「ＳＦが売れない」という言説は多くの編集者が耳にしており、それを漫然と信じている。

角川ホラー文庫の最低ラインは２万部。徳間デュアル文庫は２～９万部。電撃文庫は３～２０万部。角川文庫（緑・総合）の最低ラインは３～４万部程度。最低ラインはホラーもＳＦもほぼ同じ。だがホラーには突出して売れる作家が一部存在するので、全体的に部数が底上げされている印象。ライトノベルのほうが最低ラインは高い。

いま注目する「ＳＦ作家」は

- 池上永一（３）、恩田陸（３）、山田正紀（３）、三雲岳斗（２）、貴志祐介（２）、藤崎慎吾、平谷美樹、宮部みゆき、篠田節子、梅原克文、草上仁、中井紀夫、村田基、上遠野浩平、菅浩江、京極夏彦、綾辻行人、北川歩実、高野史緒、西澤保彦、森奈津子、田中啓文、山之口洋、川端裕人、西垣通、日本ホラー小説大賞にこぼれたたくさんの作家たち、瀬名秀明（４）

【スライド28】いま注目する「ＳＦ作家」は

ヤングアダルト（ライトノベル）の作家を挙げる編集者がほとんどいなかったのが印象的。メディアワークスの編集者も池上永一などの名を挙げた。文芸編集者・ライトノベル編集者ともに、ライトノベルを狭義の「ＳＦ」と見なしていないことがわかる。

ＳＦマガジンで現在活躍している新進作家のラインナップとはかなり異なることに注目したい。

瀬名秀明が４票を集めたのは、瀬名自身がアンケート調査をおこなったためだろう。

川端裕人にＳＦ小説を期待したい。彼はあと数年で必ずブレイクすると思う。

ＳＦの構造を考える

- 森下一仁『思考する物語』（東京創元社）
- ＳＦの本質を「センス・オブ・ワンダー」に求める
- 「フレーム」と「スクリプト」

【スライド29】ＳＦの構造を考える

なぜＳＦとうまくコミュニケーションができないのかを考えた。

手がかりとしてＳＦ論を読む。もっとも平易だった『思考する物語』をここで紹介したい。

「フレーム」と「スクリプト」という言葉を使って森下さんはＳＦの本質を示そうとしている。

ＳＦのセンス・オブ・ワンダーと「フレーム」

- 統合された知識（ミンスキー）。何かを「わかった」ときに成立
- 「節点（ノード）と関係からなるネットワーク」
- フレームが表現する知識：「ＸＸはＸＸである」辞書的知識
- 「ファンタジーはあるフレームのスロットに”間違い”を導入したものであるが、その”間違い”の影響は他のフレームに及ばない。（中略）ＳＦはひとつのフレームの逸脱が、他のフレームと関係している。影響が次々と広がり、もっとも大きなフレームである世界全体に及ぶ時、我々はセンス・オブ・ワンダーを感じる」

【スライド30】ＳＦのセンス・オブ・ワンダーと「フレーム」

「センス・オブ・ワンダー」？

- 書物Ａを読み、心的にフレームを再構築する人物Ｂ。書物を読まない（あるいは読んでもフレーム再構築が生じない）人物Ｃ。
- Ｂの心象では、Ｃという存在のフレームも再構築されている。だがＣは自分が変化していないという自覚がある。ＢとＣの心象に齟齬が生じる。Ｂの内部で起こった世界全体のフレーム再構築は、Ｃから観察されることによって、世界全体を構成するフレームのわずかひとつのスロットが、自分には観測不可能な状態に変化したらしい、という印象を受けるに過ぎない。ＳＦのセンス・オブ・ワンダーは外部からの観察行為によって矮小化される。ＢとＣは心象を共有できない。

【スライド31】「センス・オブ・ワンダー」？

ＳＦの限界性？

- 喜怒哀楽、感動した、驚いた、などの原始的感情は、自分がそれを感じていなくても他者の感情を理解し、共感することができる。
- 一方、ある人物が心的にフレームを再構築したかどうか、どのように再構築したかは、他者が直観的に理解することが難しい。感覚を共有できない（無視・排除・否定につながる）。
- →センス・オブ・ワンダーは、同時にＳＦを狭めるフレームとなっている。

【スライド32】ＳＦの限界性？

ファースト・コンタクト・ジャパンへの違和感はこのあたりから？
フレームを再構築していない第三者が観察したとき、宇宙人になりきることや宇宙人の格好をすることが滑稽に見えてしまう。

森下一仁さんの『思考する物語』でも、フェミニズムＳＦの論評は歯切れが悪い。第三者によって勝手に自分を再構築されてしまった居心地の悪さ。それが自分のセンス・オブ・ワンダーにつながらない。

つまり……

- 狭義の「ＳＦ」を楽しむためには、特殊な感覚と世界観が必要である。それを共有できる者だけが「ＳＦ」を語り合える。
- この「感覚の共有」は、訓練して形成できるのか？　あるいはある程度まで生得的なものなのか？　遺伝要因と環境要因？？
- ポスト・ゲノム時代、「センス・オブ・ワンダー」の遺伝子をつきとめよ！（冗談）

【スライド33】つまり……

ＳＦのジャンルと「スクリプト」

- 「さまざまな場面における一般常識のこと」「前もって一括された因果連鎖の系列」（シャンク）
- スクリプトが表現する知識：「ＸＸのときはＸＸするものだ」ハウツー知識
- 「語るべき物語、読むべき物語は、スクリプトの混乱から出発する」「ＳＦ、ファンタジー、ホラーはスクリプトの混乱の規模がもっとも大きい」
- 「ＳＦの場合（ミステリと違って）因果関係を構成する原理に非現実的なものが入りこんでいてもかまいはしない。（中略）問題は、そうした原理があたかも現実であるかのように尊重されているかどうか、という点である」（ファンタジーやホラーでは因果関係の原理を最終的に説明する態度は見られない）

【スライド34】ＳＦのジャンルと「スクリプト」

関係原理の混乱とＳＦ？

- 社会状況や環境・経験によって、「因果関係の原理を説明しているかどうか」を判断する基準や、どの関係原理に重きを置いて、どれを軽視するかは変化する。だがＳＦファンはある程度一定の原理基準を共有しているようだ。
- 関係性の原理基準に抵触した場合、「ＳＦだと思ったらホラーだった」「これはＳＦではない」と感じることになる。
- 読み始めの段階で、読者が因果関係の原理基準を推測し間違えることが原因（つまり観察問題であり、絶対的な評価とは成り得ない）。
- なぜ誤った推測をするのか？　ある傾向の舞台設定や題材から特定の関係原理のパターンを想起しやすい。展開がスクリプトから逸脱することを楽しむが、一方では特定の関係原理が再現されている安定性を楽しむ？　スクリプトと物語の原理基準の混乱？

【スライド35】関係原理の混乱とＳＦ？

関係原理の安定性に快感を覚えるのは、ＳＦファンだけでなく他のジャンルファンも同じだろう。だがＳＦはスクリプトの逸脱性というわかりやすい特徴があるために、関係原理の安定性をファンが自覚できないのではないか？

また自分が好む関係原理の基準を絶対的なものと感じやすいのではないか。例えば野尻抱介『ロケットガール』シリーズは女子高校生が宇宙飛行士になる物語である。これはある人が見れば「女子高校生が宇宙飛行士になれるわけがない。物語の原理基準から逸脱している」と感じるかもしれない。だがＳＦファンはそれを「スクリプトの逸脱」として許容し、宇宙開発現場の技術的因果性を「原理」と考える。

ファースト・コンタクト・シミュレーションもＳＦファンでない第三者と原理基準を共有していない。宇宙人の知能を推察し、その行動を人間が演じることにＳＦファンは違和感を感じない。だが、異種生物の知能を設定したり、それを演じたりすることは宇宙人の「擬人化」ではないのか？　「宇宙人らしい知能」を考える時点で人間の知能を投影してしまっている。

ＳＦ書評に問題がある？

- ＳＦ書評枠は多い。読まれているが効果ない？
- ＳＦプロパー以外の人に書評してもらうシステム作りを！（ジャンル別書評の弊害）
- 編集者がＳＦ評論家・ＳＦ関連賞を軽視
  - 『八月の博物館』プルーフは『このミステリーがすごい！』投票者に熱心に配られたが、ＳＦ評論家には配られなかった
- 『ＳＦが読みたい！』信用できるのか？　比較対象できない
- ＳＦ総出版点数が少ないので、玉石混淆で取り上げざるを得ない？

【スライド36】ＳＦ書評に問題がある？

インタビュー取材する前は、ＳＦの書評に問題があるのではないかと思っていた。編集者はミステリー書評ばかり読み、ＳＦの書評やＳＦ評論家を軽視しているのではないか、と思ったのである。

だがその仮説は（部分的には）間違いだったようだ。少なくとも編集者たちはＳＦ書評を読んでいる。だが心に届いていない。

「なんでもＳＦという」戦略？

- ＳＦファンは読書を広げることに成功した（大森望氏によるヤングアダルト、新本格の取り込み）
- では、ＳＦファン以外の人にメリットはあったか？
  - 作家側へのデメリット　ＳＦの色がつくことで、他ジャンルの評論家に書評を書いてもらえなくなる？　シリアスな文学賞から敬遠される？　物語本来の面白さで評価してもらえなくなる？
  - 読者側へのデメリット　ＳＦファングループに取り込まれることへの忌避感？
  - 出版者側へのデメリット　読者が限定されてしまうので売り上げが落ちる？

【スライド37】　「なんでもＳＦという」戦略？

大森望氏は意識的にヤングアダルト作品をＳＦ枠に取り込んで評価している。これはヤングアダルト読者層と本格ＳＦの読者層をリンクさせようという戦略なのだろう。

確かに本格ＳＦの読者たちは読書の幅を広げたかもしれない。だがヤングアダルト読者層にはほとんど影響を与えていない？

ＳＦファンは他ジャンルの本を読むか？

- 小松左京のノンフィクション？
- 半村良の時代もの・人情もの？
- 山田正紀のミステリ？
- 谷甲州の山岳もの？
- 瀬名秀明の科学ノンフィクション？
- ＳＦに限らず、ミステリーファンやホラーファンでも同様か？　売り上げに差はあるのか？

【スライド38】ＳＦファンは他ジャンルの本を読むか？

作家ではなくジャンルで読む読者が増えてしまうと、作家側はやりづらいと思う。

角川・吉良氏の発言

ＳＦの「再発見」！

- いま、小松左京と山田正紀が気になる
- 昔のＳＦ作家は、「ＳＦも書ける総合作家」だった。いまのＳＦ作家はＳＦしか書けない？
- ＳＦ作家にノンフィクションをもっと書いてほしい
- 小説とノンフィクションの両立を目指す

【スライド39】ＳＦの「再発見」！

小松左京は膨大なノンフィクションを書いた。作家になってから読んでその面白さに驚く。小説とノンフィクションが見事に呼応している。作家の問題意識を如何に文章に落とし込むか、そのよい事例となる。

山田正紀はさまざまなジャンルを横断しながらダイナミックな創作活動を続けている。だがその精神性はあまり分析されていない。山田正紀の遍歴を最初から辿ってみたい。

そして、ＳＦに問う

- ＳＦはＳＦファン以外の人に、何を与えてくれるのか？
- 何も与えてくれない（むしろデメリットになる）のなら、ＳＦと呼ばれることに寛容になれない
- ＳＦは「面白さ」を私たちに与えているか？

【スライド40】そして、ＳＦに問う

「文句をいうなら提案せよ！」

- 出版社・ジャンル・小説とノンフィクションの垣根を超えた一大キャンペーンを
- 新聞全５段広告（瀬名が費用を全額出費！）
- 各出版社でオビを統一。「来月刊行は○○出版社の××！」など、次の書籍へのリンクを図り、毎月1冊ずつ本当に面白い本を刊行する（1年間で12冊）
- そこから読者の興味が広がるようにfurther readingを提示、誘導。各出版社・メディアにタイアップを働きかける

【スライド41】 「文句をいうなら提案せよ！」

元・宮城大学学長の野田一夫の口癖。

期待感を煽る新聞広告。作家たちが頼もしい表情で一堂に会している写真などを使用。出版社ではなく作家が自ら積極的にイメージを創り出し、広告を打ってゆく。日本の未来を創ってゆく先進的なイメージで。ＳＦや科学書が中心だが、従来ミステリー・ホラー・恋愛小説分野に含まれていた作家たちにも登場願う。ヤングアダルト作家、マンガ家、映画監督、現役科学者、サイエンスジャーナリストなども含める（ただし、コアなＳＦファンだけに人気のある作家はあえて含めない）。瀬名秀明の小説なんてつまらない、という人が多いのなら、瀬名はプロデューサー役に徹してもいい。

１年間で１２冊、本当に面白い本を毎月刊行する（出版社はまちまちでよいが、オビを統一する）。

ＳＦへの提言

- 「これはＳＦじゃない」と今後５年間いわない（作家・読者・評論家・編集者含めて全員で申し合わせる）
- 「これはＳＦだ」といっても構わないが、それ以外の評価基準にも寛容になる（他ジャンルからの評価も並列的に受け入れる）
- ＳＦ作家の他方面への活動を積極的に支持する

【スライド42】ＳＦへの提言

ＳＦ読者への提言

- 編集者を教育せよ！
- 編集者になれ！　あと10人ＳＦ好きの編集者が登場すれば、日本の文芸出版は確実に変わる
- とにかく買い支えよ！　せめてハヤカワＳＦ／ＪＡ文庫と創元ＳＦ文庫くらい、毎月新刊をすべて購入せよ（私はモダンホラー・セレクション、角川ホラー文庫、学研ホラー、ハルキホラーなど、ホラー系叢書はこれまで全点購入してきた）
- ＳＦブームが再びやってきたら、素直に喜べ！

【スライド43】ＳＦ読者への提言

というわけで、これからやる（やりたい）ことは……

- 小説とノンフィクションの両軸を目指す
- 小説の予定：ロボットものの連作（短篇・中篇）、アンソロジーに参加。長篇は2002年以降
- ロボット・ノンフィクション『ロボット新世紀』を文春新書より7 月 20日刊行
- 科学ノンフィクションの古典をシリーズ復刊させたい
- ミュージアムとサイエンス・ライティング
- ミュージカルが面白い！
- 研究者のためのファッション入門？

【スライド44】というわけで、これからやる（やりたい）ことは……

『パラサイト・イヴ』で儲けたことに批判的な読者もいるが、利益の一部は社会に還元しているつもりだ。大学などの公共教育研究機関へ寄附。ただし本が売れなくなったらやめる（金が続かないので……）。

読んで面白い科学本を復刊させたい。いま、出版社に企画をプッシュしているところ。もし可能ならウェブで復刊希望の本を募ってみたい。

最近、ミュージカルの面白さに目覚めた。『オペラ座の怪人』『レ・ミゼラブル』『美女と野獣』『ラグタイム』『レント』等、物語の力強さに改めて感服。『アイーダ』を見に行きたい。どこかで『八月の博物館』をミュージカルにしてくれないかな？

ご意見・ご感想・資料請求は

- 瀬名秀明事務所へ
  - 〒981-3133仙台市泉区泉中央4-19-1-902
- ＳＦセミナースタッフへ

- 講演内容のテープ起こし・アンケート結果・取材結果を取りまとめて無料配布（費用は瀬名の自己負担）ないしはウェブページ上からのダウンロードを検討（まだ未定です）

【スライド45】ご意見・ご感想・資料請求は

研究者は請求に応じて論文の別刷りを無料配布する習慣がある。このようなフォローアップが今回の講演ではもっとも重要なことだと考える。少しでもコミュニケーションギャップを埋めることに役立てればと思っている。

３．【講演後の反響に対して】

ＳＦセミナー本会企画の講演終了後には、さまざまな反響があった。大きく３つに分けることができる。

1）　同日夜の「ＳＦセミナー２００１合宿企画」において執りおこなわれた、「瀬名秀明先生のＳＦに対するアンビバレントな思いを聞いて」。作家・評論家・読者を交えた活発が論議がなされたようだ（残念ながら私は出席できなかったが、後日出席者から詳細を聞く機会を得た）。

2）　講演および合宿企画参加者によるウェブレポートないしはウェブ日記の記述。その一部は湯川光之氏の「ＳＦセミナー本会／合宿　関連日記リンク」（http://www.hi-ho.ne.jp/one7/semi2001.htm）から辿れる。

3）　プロ作家ないしはプロ評論家による、商業誌へのレポート。「ＳＦマガジン」2001 年 7 月号：柏崎玲央奈（タイトルなし）pp.4-5、風野春樹「「SF」とのファースト・コンタクト　―瀬名秀明、SF に対するアンビバレントな思いを語る―」pp.202-203 および「ＳＦオンライン」vol.51, 2001.5.28（http://www.so-net.ne.jp/SF-Online/no51_20010528/index.html）：トピックス「SF セミナー2001」（http://www.so-net.ne.jp/SF-Online/no51_20010528/special1.html）の野尻抱介「SF セミナー2001 レポート『瀬名秀明という探査機』」（http://www.so-net.ne.jp/SF-Online/no51_20010528/special1_7.html）、野尻抱介「SF セミナー2001　合宿レポート」（http://www.so-net.ne.jp/SF-Online/no51_20010528/special1_8.html）。

以下、これらの反響について簡単に紹介すると共に、私の感じたところを記す。

「ＳＦセミナー２００１合宿企画」は 5 月 3 日から翌 4 日にかけて「ふたき旅館」にて開催された。いくつかの企画がそれぞれの部屋に分かれて執りおこなわれたようである（当日のプログラムブックは「参考資料」に掲載した）。瀬名は出席できなかったが、本会企画に参加した観客・ゲストの多くがこちらの合宿にも参加した（正確な参加人数は不明）。

ここではＳＦセミナースタッフにより「瀬名秀明先生のＳＦに対するアンビバレントな思いを聞いて」という企画が立案され、開催された。司会はセミナースタッフの野田令子氏（ＳＦマガジンやＳＦオンラインで記事を発表している）、ゲストはＳＦ作家の野尻抱介氏（ＳＦマガジン掲載作「太陽の簒奪者」で星雲賞受賞）。

野尻氏の「ＳＦオンライン」レポートでは**「議題は網羅的に出た」**とあり、酒を呑みながらざっくばらんに進行したようだ。

ジャンル論全般に関して出た印象的な発言をいくつか挙げる。

- 司会・野田令子氏：瀬名作品は科学的な知識が入っている科学ホラーであって、（自分の判断基準による）ＳＦではない。瀬名作品は（自分の判断基準における）ＳＦではない作品の代表例として引用しやすい。「科学的なものが出てくればＳＦ」という一般のイメージに対し、（自分の判断基準では）ＳＦでないものとして、多くの人が知っていて説明しやすい作品ゆえに、批判対象として挙げてしまうことが多い。また科学的な解説の積み重ねからジャンプする方向性がＳＦとホラーでは違う。ＳＦ方向へジャンプしてくれるものと思い込んで読んでしまうので、長編の最後のほうでは本を投げつけたくなる。
- 作家・野尻抱介氏：（講演中のセンス・オブ・ワンダー論について）シャーロック・ホームズの推理

に似ている。聞いているうちは筋が通っているように思えるが、後で考えてみると「あれっ？」と感じる。

- 評論家・冬樹蛉氏：「これはＳＦではないと 5 年間いわない」よりも「センス・オブ・ワンダーと 5 年間いわない」のほうが効果的ではないか。
- 作家・倉阪鬼一郎氏：ＳＦ・ファンタジー・ホラー・ミステリーの４つのジャンルすべてに、それぞれ必ず「センス・オブ・ワンダー」がある。ただしそれはジャンルによって色分けが変わってくる。また、瀬名は科学的次元と物語的次元がシームレスという言葉を使ったが、シームレスという発想はＳＦとミステリーのものであって、ホラーとファンタジーではあり得ない。

また、瀬名個人の考え方、行動などについての意見で印象的だったものを挙げる。

- 司会・野田令子氏：ＳＦファンがちゃかして語っていることを大袈裟に捉えすぎでは。ＳＦファンが軽い気持ちで「これはオレのＳＦじゃない」というのを重要視しすぎている。
- 同じく野田令子氏：（いまのＳＦ作家はＳＦしか書いていないのでは、という指摘に対して）いまは普通の小説を書いている人がＳＦも書くことが多いのでは。その現状を自分から見ると、ＳＦを書く人が普通の小説を書いているような気がする。従って、瀬名の意見には賛同できない。
- 作家・野尻抱介氏：（瀬名が提案したＳＦの売り方について）ベストセラー作家の発想で、中央集権的だ。もっとさまざまな方向からムーブメントが出てくるのが大事。マーケティング論は基本的に悪いことをいっているわけではないと思うが、そこに至る根拠やＳＦに対する考え方がＳＦファンと一致していない。
- 同じく野尻抱介氏：瀬名秀明はこれまでＳＦファンの友達が少なかったから、いわゆる一般の人から見たおたくの集団がよくわからないという感覚なのでは。

【これはＳＦではない】

まず、野田氏の「ＳＦファンがちゃかして語っていることを大袈裟に捉えすぎ」という意見は非常に示唆的だと感じた。ウェブアンケート（Serial:36）でも同様に指摘されており、これについては講演中に言及しようと思っていたが、批判的な発言となるため遠慮してしまい、結局取り上げなかったのである。しかしこのために、「これはＳＦではないと 5 年間いわないように」という提言の真意をうまく観客に伝えられなかった。

ウェブアンケート（Serial:36）のコメント

Q12：ＳＦファンが（言い方は悪いですが）ふざけて語っている事を大げさに捉えすぎているのでは、と思いました。具体的に指摘できなくて申し訳ないのですが、例えばＳＦファンが「パラサイト・イヴはＳＦじゃない」と言うときには「（共通認識でみんなＳＦだと言っているが）自分的ＳＦじゃない」というニュアンスで言っているのに「ＳＦファンがＳＦと認めない」と受け取るような面があるように感じました。

この意見には、正直なところ、かなり驚かされた。と同時に、ようやくＳＦファンとそうでない人との

ズレの原因がわかったように思えたのである。
　セミナー終了後には、参加者のウェブ日記に以下のコメントを見つけた。

Arte 氏のコメント
（2001 年 5 月 3 日付）**「これはＳＦじゃない」というのは「これはＳＦとしては優れていない」というのとイコールだと私はずっと思っていたのだが、そうではないのか。毎回省略せずに言わねばならないのね。**
　よくわからないのだが、ＳＦファンが「これはＳＦじゃない」と５年間言わないと、ＳＦファンにとって何か素晴らしい利益があるのだろうか…。ううむ。
（http://www.geocities.co.jp/Technopolis-Mars/1951/seminar2001.htm）
（2001 年 5 月 8 日付）**まだ私はよくわかっていないのだが、もしかして『パラサイト・イヴ』はＳＦじゃない！とＳＦファンが瀬名さんを避難した、というのが一般的な見解なのだろうか。私は、パラ・イヴが優れたＳＦである、というようなことを当時言っていた人達に「パラ・イヴはＳＦとして優れているとは思えない」と抗議したくはあるが、そんなことを瀬名さんに向けて言うつもりなどないし、ＳＦファンがそんなつもりだったとも思っていないのだが。**
（http://www.geocities.co.jp/Technopolis-Mars/1951/015110.htm）

「３．講演録」でも書いたが、「これはＳＦではない」といういい方は、ＳＦファンでない者にとって、非常に強い否定の感情表現に聞こえるのではないかと思う。少なくともかつての私はそうだった。ＳＦファンがその作品や作家を全否定ないしは拒絶したと思えるのである。そしてその際、往々にして主語が隠されるので、「ＳＦファンの意見の総体としてこの作品を全否定ないしは拒絶する」というニュアンスに聞こえてしまう。そのため予備知識のないＳＦ業界の外部の人がこのようなコメントを予備知識なしに見た場合、大変驚くことになる。また、以上のような予備知識を備えた後でも、非常にきつい言葉に聞こえることに変わりはなく、瞬間的にぎょっとする場合も多いのではないか。
　このようないい回しはＳＦに特徴的なものだ（実は、これによく似た言葉がもうひとつだけある。「これは文学じゃない」である）。ウェブアンケートに以下の指摘がある。

ウェブアンケート（Serial:22）のコメント
Q15（ＳＦは売れないとの言説についてどう思うか）：**たとえばミステリーの場合、売れている（売れていない）作品に対して「これは本格ミステリではない」「これはハードボイルドではない」ということはあっても「ミステリー」という大きな枠から外そうとはしないのに、ＳＦの場合「これはＳＦではない」というように大きな枠から外そうとする傾向があるのではないだろうか。**

「これはＳＦではない」という発言は、ＳＦファン同士の価値観の相違を論じているだけの（内輪に向けた）物言いであるにもかかわらず、端から見た人にショックを与えやすいという不幸な特徴を持っている。ＳＦファンは「これはＳＦではない」という言葉が持つ破壊力をもっと自覚したほうがよい。ふざけたり、ちゃかしたりする意味合いで軽く使っているのだとしたら、なおさらである。このような発言を繰り返すことは、外部の読者を遠ざける結果になる。ＳＦであるか否かを判断できる「ＳＦ者」だけしかＳＦ読者たる資格を持ち得ない、と感じられてしまう。そんなに面倒なことを強要するのなら私はＳＦ作家・ＳＦ読者でなくてもよい、こちらはこちらで勝手にやるよ、ということになる。それはＳＦファンにもそうで

ない者にも損ではないか？

改めて指摘するまでもないことだが、ジャンル小説として優れているかどうかを判断する際には、読者個々人によるジャンル基準が入り込む。ある作品に対して、読者Aは「ジャンル小説として優れている」と思い、読者Bは「いや、優れていない」と思う場合はままある。その差異を論じてゆくのがジャンル論の醍醐味でもあろうが、少なくとも私から見た場合、一部のＳＦファンはその判断基準を「ＳＦマインド」といった精神論に安易に結びつけてしまうことが多いように思える。そのためＳＦは何かファンの総意によって決定された確たる基準を持ち合わせていると外部から見られがちなのである。

「これはＳＦではない」といいがちなＳＦファンは、一度冷静に考えてみてほしい。あなたが会話の相手や不特定の第三者に「これはＳＦではない」と発言することは、あなたにとって、あるいはそれを見聞きする者によって、どのようなメリットがあるだろうか。あなたのＳＦにおける価値基準を皆に知らしめたいのだということは理解できる。だが、その後、あなたはどのような議論を進めているだろうか。例えばＳＦをあまり知らない知人が、あなたと会話するために共通項を探そうとして、わざわざ「『パラサイト・イヴ』ってＳＦだよね？」と話題を振ったとする。あなたは自分の価値基準に照らし合わせて、「いや、あれはＳＦではない」と発言したとしよう。その後、あなたは知人とどのような会話が続けられるだろうか？　もし知人があなたのことをＳＦファンであると知って、ＳＦの話題を振ったのだとしたら、そこで会話は終了してしまう。知人は気まずい思いをしながら話題を引っ込めるしかないのだ。一方、「いや、あれはＳＦとしてあまり面白くなかった」という発言をしたならば、「へえ、そうなんだ。どのへんが面白くなかったの？」という具合に、それなりに会話が続いてゆくだろう。私にはデメリットしか思い浮かばないのである。

ＳＦファンが「これはＳＦではない」という発言を慎むだけで、外部からの印象が遙かによくなることは間違いない。また安易な物言いを避けることによってＳＦファン同士で議論を深め合うことができるというメリットもある。今後ＳＦファンは自分の価値観と違う作品に接したとき、「これはＳＦではない」といういい方を使わないでその作品を論評してみてほしい。おそらく非常にやりづらいと思う。だがそれをクリアしない限り、ＳＦファン以外の人を納得させる評論・感想・意見にはならないだろう。

【センス・オブ・ワンダー】

さて、評論家・冬樹蛉氏からは、「今後 5 年間これはＳＦではないといわない」ではなく「今後 5 年間センス・オブ・ワンダー（SOW）といわない」のほうがよい、との提案をいただいた。

合宿企画では「ＳＦの本質は SOW にある」という森下一仁氏の考えそのものに疑問が呈されていた。実はこのこと自体、私には意外だった。不勉強ながら、これまで森下氏の『思考する物語』に対して公の場で発表された明確な批判や反論を見たことがなかったので、ＳＦファンの大部分は森下理論に賛同していると思っていたのである。しかし、合宿企画参加者で『思考する物語』を読了されていた方は、残念ながら少なかったようで、これまでもあまり議論の対象にならなかったのかもしれない。

SOW とフレーム理論については、「日本人とアメリカ人は違うフレームを生きているのに、実際は言葉が通じ合っている。瀬名は森下理論を字義通りに受け取りすぎているのではないか」との批判もあった。ただし、これは私の仮説を否定することにはならない。言葉は通じていても、わかりあえないことがあるのは日常茶飯である。

もっとも、私自身、講演で話した仮説を心から信じているわけではない。議論のきっかけとして提出したに過ぎない。SOW という、ＳＦファン以外の者にとって鵺のような得体の知れない感覚を、少しでも

理解したいとの思いからである。私自身は、「ＳＦの本質は SOW にある」という森下氏の出発点そのものは非常によいと思う。そこからどのように理論を構築してゆくかが問われているのだ。

冬樹氏はこの件に関して、自身のウェブ日記（2001 年 5 月 3 日付）で非常に示唆に富んだ論を展開した（http://web.kyoto-inet.or.jp/people/ray_fyk/diary/dr0105_1.htm#010503）。私の仮説はなにもＳＦだけに成り立つわけではないので、ＳＦのわかり合えなさを規定するには不適当だというのである。冬樹論によれば、私たちはこれまでの経験や読書体験から、それぞれフレーム・オブ・リファレンス（FOR）を持っている。バリエーション豊かな認知のフレームを持ちうる読者は、第一に既成の FOR を豊かに持っていなければならない。FOR の持ち方次第で、小説の描写に対する反応度も違ってくる。ＳＦや純文学などが一般にわかりにくいといわれてしまうのは、認知のフレームの組み変わりという高度な現象以前に、各々の読者が FOR を共有していないところに起因するのではないか。これらのジャンルは読者に対して「基礎教養」を要求しがちなのである。

そして冬樹氏は、ＳＦの特殊性として、**「同一人物が当然併せ持っているとはあまり考えられないような FOR を、読者に平気で要求するところなのではないだろうか？」**と指摘している。興味深い意見だと思う。

ただし、それではなぜＳＦだけが（他のジャンルと違って）特徴的に読者に要求するのか、という疑問が残る。単に内輪受けだということではあるまい。ここでもやはり、ＳＦを理解する特殊な「能力」の存在が論の背後に見え隠れしてしまう。

なお、作家・倉阪鬼一郎氏の指摘は興味深かった。さまざまなジャンルから SOW についての意見を集めてみたい気もする。また個人的には、ハードＳＦファンと「普通のＳＦファン」（後述）が SOW をどのように捉えているのか知りたい。両者に明確な差があるのか、あるいはないのか。

【ノンフィクションを書け】

ＳＦ作家はもっとノンフィクションを書け、という提案については誤解もあったようだ。もちろんここで私がいっている「ノンフィクション」とは、科学ノンフィクションのことばかりではない。広い意味でエッセイやルポ・紀行文、対談集など、とにかく小説以外の出版活動を指す。作家の問題意識を小説の中に組み込んでゆくことはもちろんだが、そこからこぼれ落ちたものや、小説の体裁を取る以前のものも積極的に世に出してゆくべきだ、ということであり、また狭義のＳＦ以外の分野と積極的にコミットしてゆく姿勢の重要性を述べているのである。ＳＦには科学知識の共有が必須だなどと主張しているわけではない。

ＳＦ業界は当初からファンとプロの間の敷居が低く、それこそセミナーやＳＦ大会などのコンベンションで、両者が自由に議論する機会が多かったようだ。そういったライヴトークが一種のノンフィクションの役目を果たしてきたといえるのかもしれないが（近年ではウェブ掲示板での交流もこれに含まれるだろう）、所詮はクローズドサークルでの議論であり、一般性に乏しい。仲間内だけで議論することと、一般読者を対象にエッセイを書くことは違う。講演でも述べたように、ＳＦは小松左京のノンフィクションの仕事を再発見するべきだろう。

なお、野田令子氏による「いまは普通の小説を書いている人がＳＦも書くことが多いのでは。その現状を自分から見ると、ＳＦを書く人が普通の小説を書いているような気がする」との感覚はよくわからない。私がここでいっているのは、恩田陸や池上永一のような（一見ＳＦの外部に位置する）作家のことではない。そのような作家は、残念ながら一般にはＳＦ作家と認識されておらず、またＳＦを書いているとも思

われていないのではないだろうか。

【ＳＦは何を与えているか】

「ＳＦオンライン」に掲載された野尻抱介氏のレポートは、さまざまな点で考えさせられるものだった。印象的だったのは、野尻氏が私の意見や発言、行動内容に対して、特に異論や反論を積極的に示さないことである。次のような文面が象徴的だ。

> **「瀬名氏について多くが思うことは「なぜＳＦ（ＳＦ界の反応）にそんなにこだわるのか」だが、瀬名氏は「ＳＦにはずいぶん楽しませてもらってきたのでこだわりがある」と答えている。しかしこの経歴からすると、ずいぶんというほどでもない。そう義理立てしなくてもいいのでは、と思うのだが、これからわかるとおり瀬名氏はとてもまじめな人なのだ」**
>
> **「私にはとうてい真似できない行動力だが、瀬名氏は小説だけを書いているのでは気がすまない人なのだ。当人の気がすまないことに他人が口を挟んでも詮無いことである。こういう人なのだと思うしかない」**

私が示した「ＳＦへの提言」（スライド 42）に対しても野尻氏は建設的な意見を返さず、以下のように戸惑いを見せるだけである。

> **「……というわけだが、どう受けとめればいいのだろう。私に関しては現状のＳＦ界でちっとも困っていないので、よしやろうという気にはなれなかったのだが」**

正直なところ、このくだりはさすがに脱力してしまった。これはつまり、ＳＦ界はいまのままで充分で、外部からの変革提言・意見交換は特に必要ないということなのだろうか。そうだとしたらコンタクトも何も無意味で、ただ単にお互い宇宙空間の中で無視しながら平和に通り過ぎていったほうがいい。

2001 年 6 月、私は作家の川端裕人氏と対談する機会があった。川端氏は対談の準備のため、私（瀬名）に関する情報をウェブでサーチしたのだという。そこでＳＦセミナー講演に関する記事を多数見つけたようだ。川端氏はかつてＳＦをよく読んでおり、高校生の頃にはＳＦ大会にも参加したことがあるという。だが現在はＳＦと離れた位置で作家活動を続けている。

対談後、一緒に食事をしているとき、ＳＦの話になった。講演で紹介した徳間書店・大野修一氏の構想『“現実と折りあいの悪いティーンエイジの読者”もしくは、“現実と折りあいの悪いティーン時代の問題点を、折りあいをつけたり切り捨てたり出来ないままに育ってしまった大人の読者”にとってこそ、ＳＦは必要とされるだろう」について、川端氏が「僕はそれと違って、早く大人になりたかった」とコメントしたのが印象的だった。また、ウィリアム・ギブスンの『ニューロマンサー』が世界を変えたかどうかについて私が話を振ったところ、非常に興味深い意見が返ってきた。すなわち、サイバーパンクの「パンク」とは、俺は俺の考えを貫き通すのだ、他人がどうであろうと知ったことではない、という考え方だ。パンクは世界を変えたか？　フォークは世界を変えた。だがパンクは世界を変えていないじゃないか、と。

これには目を開かされた。また川端氏はさらに対談後の私信で、**「今、ＳＦ界は、ほかの世界観を持った人との接点を探す努力をしないことがあたりまえになっているような気がしてなりません」**と指摘している。もちろんこれは印象論でしかないわけだが、このような印象を持たれるという事実は重要視するべきだと思う。

編集者へのインタビューを総合してみると、どうやら読者がＳＦから離れていったのは 1980 年代で、ＳＦがわからなくなったと多くの人が感じ始めたきっかけのひとつはギブスンの『ニューロマンサー』だったようだ。このあたりからＳＦは、世界を変えてやろうという気概が薄くなり、自分たちだけで楽しめ

ばよいという風潮になっていったのではないか。リアルタイムで別の世界観と接触し、意見を述べ合い、接点を見出す努力を怠るようになってしまったのではないか。

もっとも、最近は「世界を変えよう」と思って変える時代ではなく、「世界」のことなど考えもしない人々が結果的に世界を変える時代だといえないことはないが、そうだとしても変えるだけの絶対数や個々の小さな行動力は必要だろう。いまのＳＦに絶対数や個々の行動力があるようには見えない。

「ＳＦはＳＦファン以外の人に何を与えているか」との問いかけに対し、ウェブで反論があがった。森下一仁氏がエスねこ氏（http://plaza11.mbn.or.jp/~scathome/）のメールを 2001 年 5 月 8 日付のウェブ日記で紹介している（http://plaza5.mbn.or.jp/~SF/K0105B.HTM）。エスねこ氏は、まず「世界の 9 割の人間は、ＳＦに興味がない」ことを認めたうえで、だからこそ彼らへのアドバンスなしにＳＦというジャンルは成り立たないと指摘し、そして次のように述べている。

「他の小説ジャンルと違って、ＳＦは大胆な突然変異を認めるジャンルです。それが、世界を本当に震撼させる。『宇宙戦争』が、２０世紀の一大宇宙ブームの引き金と、牽引役になった事を考えてみてください。『人間がいっぱい』が（『ソイレント・グリーン』を触媒として、おそらく）ローマクラブの石油枯渇予測をセンセーショナルに注目させて、オイルショックを引き起こした原因になった点も。『ニューロマンサー』が現代の（極端にビジュアル志向な）ＰＣに落とす影も、指摘できます。真の空想科学には世界の人々のビジョンを変えさせるだけの、ものすごい力がある。社会の中にじわじわと染み入ってきて、そのビジョンなしには成り立たなくなるような「モノの見方」を提供できるんです」

これはよく指摘されることであり、まあその通りだろうとは思う。エスねこ氏はさらに、その後ＳＦは「浸透と拡散」が起こり、初期のような「場外ホームラン」を目指すことをやめ、短期的な勝負だけをするようになってしまったと嘆く。そして 1950 年代のＳＦが社会に与えてきたアドバンスを次のように分析する。

「ＳＦに興味のない人々に、ＳＦ自身はどういうアドバンスを与えてきたか？　（中略）

『人間以上』や『イシャーの武器店』や『ファウンデーション』……５０年代の（ＳＦファンのメンタルな部分をつかんだ）典型的なＳＦは、「コミュニティ」の物語が多い。憑かれたように、弱者の集まる、不思議で居心地のいい小集団の物語を綴ります。（中略）ゲットーと言われた世界です。世界を震撼させるような知識を持ちながらも、世間からは疎まれて、身を寄せ合い、好戦的な主張には反対し、イデオロギー的な強い主張はせず、ただ毎日を幸せに生きていくことを旨とする……ＳＦはこうして、仲間内に向けた「居心地のいい異世界」を提供してきたわけですけれど、これは、９０年代を振り返ると、先進国の多くに広がったんじゃないでしょうか。　（中略）

５０年代ＳＦは、物質的にも、精神的にも十分に世界へ拡散したと思います。この景観が「世界の９割の人々」に対するアドバンスでなくて何なんでしょうか。世界規模でみんなが「世界全体を良くしたい」と思わせるようなビジョンを提供する、５０年代のＳＦが群れとなって普通の人々へ叫びながら行ってきたのは、そういう事なんじゃないでしょうか。

かなり大局的な例になってしまいましたが、私の考えを煎じ詰めると「ＳＦの存在は個人体験としてではなく、集団全体が体験する時に本当の価値を発揮する」という事なんです」

小集団（居心地のいい異世界）を描いてきたのはＳＦに限ったことではないので、これを（他のジャンルではなく）ＳＦのアドバンスだとするエスねこ氏の論にはやや無理があるように思う。同じく森下氏のウェブ日記（2001 年 5 月 13 日付）には、伊藤正一氏による次のような意見が紹介されている。

「そもそもＳＦが社会的にインパクトのある”モノの見方”を提供してきた、とは言えても、そうし

たヴィジョンがＳＦだけに特権的に付随するものなのかどうか。これはもう少し考えてみる必要があるのではないでしょうか？　人々の無意識を反映し、なおかつそれに働きかけてきたという点においては、ぼくはホラーやファンタジーも、ＳＦと同じような影響を社会に与えてきたと考えています。（中略）なぜＳＦだけが他の小説ジャンルと比べて特別であり、なおかつ”社会を震撼”させることにこだわらなければならないのか？　その答えがエスねこさんと違い、いまのぼくには見えないのです。

小説というものが、まず書き手に高尚なヴィジョンや知識がなければならず、それを大衆に伝えるべきものだとするなら、そこにはなにやら教条主義的な匂いを感じます」

（http://plaza5.mbn.or.jp/~SF/K0105C.HTM）

これに対してエスねこ氏は、森下氏のウェブ日記（2001 年 5 月 15 日付）で再度意見を述べている。

「（前略）世界の万人が共有できる知識の体系が「科学」と呼ばれているわけです。（中略）だから、私にとってはＳＦが集団体験であるというのは、とても自然に見えるんです。少なくとも「科学」の器の上に乗ることができる、全ての人間が読者となる物語です。（中略）私が先のメールで挙げた例は、あくまで、みんなが納得するＳＦの効用例を挙げようとしたら教条的にならざるを得ない、という事に過ぎないように思います」

（http://plaza5.mbn.or.jp/~SF/K0105C.HTM）

もちろん科学「だけ」が集団体験の基盤とはならないだろう。かつては科学の明るい未来が積極的に語られていたが、いまは日常を生きるうえで、人間が科学の恩恵に浴していると自覚している人は少ないと思う。ここにもやはり時代の影響はあるし、また森下氏が日記で指摘しているように、ＳＦの読み手と書き手では自ずと思い入れの仕方も違ってくるだろう（エスねこ氏は小説を書いている）。

森下氏はウェブ日記（2001 年 5 月 9 日付）で、「集団全体が体験するＳＦ」の例として「鉄腕アトム」を挙げている。アトムは日本人のロボット観に大きな影響を与えたとはよくいわれることだ。**「少なくとも、研究者の目標として「鉄腕アトムをつくる」ことがあり、それが今の日本のロボット開発の方向をかなり決めているのは事実だと思われます」**と森下氏は書き、さらに続けて、マイナスイメージを持つものの例としてジョージ・オーウェルの『1984 年』を引き、ＳＦが「集団の体験」として機能している側面も確かにあると認めている。

「しかし、セミナーでの瀬名さんの問いかけは、そうしたことを有効にアピールできないＳＦの現状に危機を感じているからであるように思えました。世間は、自分たちがＳＦを体験していることを認識していないのではないか？　だから対策として、たとえば「ＳＦ作家たちが出版社や著者に関係なく統一したオビを使用する」、「新聞で定期的に全面広告を打ってＳＦ作品をアピールする」といった提案してくださったのでしょう。また、きちんとＳＦの役割を理解している編集者が存在すれば危機は遠のくだろうから、若者はＳＦ編集者を目指せ、と呼びかけたりもしたのでしょう（セミナーでの講演はそういうものだったのです）。

瀬名さん自身は「ホラーに恩義を感じている」とおっしゃっていましたが、その際のホラーというのはキングやクーンツのものではないでしょうか。きわめてＳＦ色の強いホラー。そういう意味では、メリル編『宇宙の妖怪たち』やコンクリン編『宇宙恐怖物語』、それにディックの恐ろしい短篇群に魅せられた私も、初期はホラーに染まっていたといっていいのかもしれない。

それらをホラーと思わず、ＳＦだと信じて疑わなかったのは、貼られていたレッテルが「ＳＦ」であったからというだけのことかもしれません。あの時代、ＳＦが見せてくれるものは珍しく、魅惑的で、しかも恐かった。ただ、その「ホラー成分」の処理の仕方には、やはりＳＦ特有のものがあった

と思うのです。私にとっては、その処理の仕方が、特に興味深く、大事なものとなりました。そこで何が起っているのかを考察したのが『思考する物語』なのです」

（http://plaza5.mbn.or.jp/~SF/K0105B.HTM）

森下氏の解説に加えることがあるとすれば、「いま」のＳＦに対する苛立ちや危機感が、講演時の発言には含まれていた。そして「社会」に何を与えているかという漠然とした投げかけよりも先に、本にまつわる人たちにとってもっと切迫した、もっと身近なこととして、「小説そのもの」や「個々の読者」に何を与えているかを同時に問うたつもりであった。

エスねこ氏は 2001 年 5 月 15 日付の文面でＳＦがホラーやファンタジーに与えた影響について若干触れているが、社会という巨大なもの以前に、まずはそういった部分がいまは重要なのではないかという気がしている。だが残念なことに、これらの議論で登場するＳＦ作品は、せいぜい 1970 年代から 80 年代まで。「いま」のＳＦ小説はどうした！　と叫びたくなる。いま、この 21 世紀に作品を発表している作家たちの名前が、なぜ出てこないのか？

【ハードＳＦファンの気質】

講演時には端折ってしまったが、私のコンタクト・ジャパン（ＣＪ）やＳＦへの違和感は、なぜ『パラサイト・イヴ』の擬人化（？）は受け入れられないのに、ＣＪで宇宙人の振りをすることには寛容なのかという疑問とつながっていた（講演時に使ったメモを「２．講演スライド」のスライド 11 の下部、47 ページに示した）。

これに関して野尻抱介氏は、ＳＦオンラインの記事で「ハードＳＦファンの気質」という項目を立てて説明を試みている。まず野尻氏は次のように指摘する。

「普通のＳＦファンとハードＳＦファンは区別すべきだ。ともにＳＦファンでありながら、両者は性格がかなり違う。そしてハードＳＦファンは（声がでかいくせに）少数派だから、統計処理を読み誤るおそれがある。

ＣＪに参加していた「彼ら」は主にハードＳＦファンである。他のサブジャンルやアンリアル小説全般のファンを兼ねている人もいるが、ＣＪではまずハードＳＦファン的に行動している。

さて、異星人を人間が理解し構築し演じることの是非については、「異星人の思考は人間に理解できるか」という問題に置き換えてもいいだろう。

ＣＪ４のプログレス・レポートでも金子隆一氏が「異星人＝理解不可能な知性」という思い込みを排せよと述べているほどだから、これはハードＳＦファン、ひいては SETI をはじめとする異星人研究者にとって永遠の話題である。

例をあげるなら、レムの描くソラリスのような不可知の存在と、ニーヴンやソウヤーの描く理解可能だが突飛なエイリアンが対極に位置する。いずれにしても合理的に設定され、人類と異質な存在なら、ハードＳＦファンは喜んでそれを受け入れるのである」

そのうえで野尻氏は、ハードＳＦファンの目から『パラサイト・イヴ』がどのように映るかを解説する。『パラサイト・イヴ』のモンスターは、価値観やメンタリティが人間と大差ない。またミトコンドリアまわりの描写は精緻だが、生命・情報の総合システムとして多くの疑問が放置されており、設定の整合性の面でもよい点はつけられない（イヴは自在に変形合体したが、エネルギー収支や情報伝達のメカニズムはとくに説明されていない）。以上の点を踏まえて野尻氏は、**「イヴを異星人として見た場合、異質さ＆合理的なメカニズムという二大チェックポイントを外している」**と述べている。

だが、すでに講演のスライドで示したように、これは物語における因果関係の原理基準の問題なのである。ハードＳＦファンが求める原理基準は、必ずしも普遍性のあるものではないように思える。野尻氏のいう**「合理的に設定され**（た）**異質な存在」**というものが、私にはよくわからない。一部のハードＳＦファンが共通して面白がれる設定処理が守られているかどうかの違いだけではないのか。「異星人」という抽象的な存在ではなく、この地球上に棲む動物たち、例えばチンパンジーやイルカに敷衍してみた場合も、上記の論は有効なのか。やはり合理的に「知性」を「設定」すれば、人間が演じることに違和感を覚えないのだろうか。

残念ながら野尻氏は推奨するハードＳＦ作品を提示していないので、どのような設定が好ましいのか私にはわからない。野尻氏は**「ハードＳＦファンに好まれる作品を書くなら、そのツボ、彼らのこだわりを共有すべきだろう」**と述べているが、これはもとより一般論になりえない。ここにディスコミュニケーションの本質が隠されているような気がする。だが続けて野尻氏はいう。

「私から瀬名氏への提言は、次二点である。

（1）相手が普通のＳＦファンかハードＳＦファンかを見極めよ。

（2）ハードＳＦファンは概して声が大きいが、少数の例外と思ってかかれ。彼らはＳＦファンの代表ではない」

実際のところ、非常に漠として、しかも難しい注文である。どうやって見極めればよいのか。宇宙ＳＦが好きな人をハードＳＦファンだと思えばよいのか。また、なぜハードＳＦファンの声が大きいのかも疑問である。「普通のＳＦファン」は「ハードＳＦファン」のことをどのように見ているのだろうか。両者はあまりコミュニケーションがないのだろうか。

なお、ウェブアンケート（Serial:49）で指摘されたチャールズ・シェフィールド『マッカンドルー航宙記』（創元ＳＦ文庫）に、ハードＳＦに対する作家側および評論家側からの意見が掲載されている。（さらに同書には、「今日の（中略）理論に基づくちゃんとした科学と、（中略）物語のためにでっちあげた“科学”とを区別して書いてある」と断り書きをして、科学解説の「付録」が著者自身の手によって書かれ掲載されている）。橋元淳一郎氏の「解説」には、「科学性」と「ハード性」を区別する考え方なども紹介されている。ここまでくると私にはもう理解しにくい領域で、あまり意味ある議論とも思えず、深く考える気にはなれない。ただ、作者や橋元氏が作品中に描かれる科学を手際よく解説しているのを見ると、ＳＦでこのような物理・数学方面の解説者の人材が豊富なことが羨ましく思った。バイオサイエンスをきちんと、しかもわかりやすく解説できる人材が、いまのＳＦ界には不足しているように思う。前述した野田令子氏がほとんど唯一だろうが、博士号を取得したての若い研究者であり、全体を見通しつつバランスよく解説する能力はまだまだ発展途上のようだ（それに、いまはご自身の専門分野に近い分子進化学・遺伝学しか解説できないようである）。今後の活躍に期待したい。

いまのところ、ハードＳＦといえば物理・数学分野に限られてしまうイメージが強い。さまざまな分野の研究経験者がＳＦに参入してきて、試行錯誤を繰り返しつつ日本ＳＦがもっとバラエティに富むようになれば、状況も変わってくるだろう。

【プロモーション】

これまでのＳＦが抱えていたネガティヴイメージを払拭するためには、荒療治が必要と考える。そこで講演スライド 41 に示したように、各社・各作家が手を繋いでムーヴメントを起こすことを提案した。出版業界の慣習や思い込みを取り払い、新しい方向性を模索するのならば、やはりミステリーやホラーでは

なくＳＦでおこなうが望ましいと思う。

だが、新しいムーヴメントを起こすにしても、取りまとめ役とそれなりの資金が必要である。両者は卵とニワトリの関係で、資金がなければ取りまとめもできず、とりまとめができなければ資金も集まらない。そこで私が提案したいのは、少なくとも最初のまとまった資金だけは私（瀬名秀明）が提供しようというものである。幸いにしてこれまでの印税は貯蓄してある。朝日新聞に全 5 段広告を出すには 1500 万円ほどが必要だと聞く。それなら瀬名が 1500 万円を提供しようというのである。これに続く宣伝展開は、各社が受け持ってほしい。だが最初に打ち出す広告、つまり出版社を超えたムーヴメントであることを読者に認識させる広告は、個人の寄付により提供しようというものだ。これなら出版社間のしがらみもなく、またリスクも少ないだろう。瀬名の寄付金は『パラサイト・イヴ』『BRAIN VALLEY』の印税から賄う。いずれも一部のＳＦファンや科学者の心を深く傷つけ、ＳＦファンとそうでない者のディスコミュニケーションを促してしまった不幸な小説である。『パラサイト・イヴ』『BRAIN VALLEY』で瀬名が儲けたことに対して強い批判もあった。今回瀬名が寄附を出すことで、少しでも傷ついた人々に面白いＳＦを還元したいという心からの願いが込められている。そして、瀬名のイメージがプロモーションに染みつくことを嫌うＳＦファンが多いのなら、瀬名自身は完全な黒子に徹してもよいのである。

ただし、このようなプロモーション展開のアイデアには、合宿企画で批判が多かった。「ＳＦはもともとはみ出し者のはずだったのに、なぜそんなことをしなければならないのか」といった発言や、あるいは野尻氏のように、「中央集権的である」との考えがあったようだ。また先に記したように、野尻氏は**「現状のＳＦ界でちっとも困っていないので、よしやろうという気にはなれなかった」**と述べている。

ＳＦ界が、いまのままでよいというのであれば、もはや私の感知するところではない。今後、敬して遠ざけたいと思うだけだ。どうにかしたいと思うのなら、積極的にアイデアを出し合い、実行に移してゆくべきだろう。ウェブアンケートからは、残念ながらあまり有効なアイデアを得ることができなかった。やはりアイデアを立てて実行してゆくのは、出版者側の人々なのである。

【総括】

- 瀬名秀明の小説に対する評価は、ＳＦファンの間でも一様ではなく、ポジティヴな評価とネガティヴな評価が混在していたが、概ねポジティヴ評価のほうが多かった。「ＳＦファンの総意」などといったものはないという当たり前の事実が、改めて示された。

- しかし、野尻抱介氏によれば、一部の「ハードＳＦファン」の声が大きく、それが全体のバランスを崩しているようだ。なぜ「ハードＳＦファン」の声が大きいのか、ＳＦファンはそのような状況をなぜ良しとしているのか、という疑問は残る。だが、声が大きい以上、マジョリティの発言だと外部から勘違いされやすいことは自覚してほしい。また、一部のＳＦファンには、いまだに「これはＳＦじゃない」という物言いをする人がいる。デメリットしか生じないので、一刻も早く止めるべきだ。総じていえば、いまのＳＦファンはＳＦ内部に対して積極的に（しかも内部でしか通用しにくい言葉で）話しがちだが、そういった言葉が外部に伝わり、外部を困惑させていることに無自覚な感じがする。コミュニケーションのあり方に気をつけるべきだ。

- 編集者はＳＦに限らずさまざまなジャンルの小説にもっと親しむべきだ。「ＳＦ冬の時代」「ＳＦが売れない」という言説が一人歩きして、実際にほとんど出版されなくなったのは、編集者の勉強不

足が原因だと断言できる。さまざまなジャンル小説が豊かに発展することは、とりもなおさず文芸全体の発展に繋がるのである。いまの高校生・大学生の本好きは、ぜひ編集者を目指してほしい。そして編集業界を変えていってほしい。

- 瀬名秀明はさらに仕事の質を向上させるよう努力してゆかなければならない。ＳＦからの反応だけにこだわる必要はなく、またＳＦ読者だけを気にする必要もないと思うが、ＳＦを蔑ろにしたり無視したりしてはならない。ただ、瀬名が何をしてもＳＦ（狭義のＳＦ）は結局変わらないのではないかという絶望的な予感がすることも確かであり、今後どのように接するべきか、まだ気持ちの整理がつきかねている。ともあれ、面白い本をこれからも書いてゆくこと、そして面白い本が世の中に出る状況を作り上げてゆくことに、これからも全力を注ぎたい。

最後に、評論家・精神科医の風野春樹氏のウェブ日記（2001 年 5 月 16 日付）を紹介したい。非常にバランスの取れた指摘だと感じた。そしてこれを読んで、このような真っ当な意見とこれまで出合う機会がほとんどなかったことに、改めて気づかされたのである。

「ジャンルにこだわる」というのは確かに弊害も多いのだけど、一方では読書の参考として（あくまで参考として）有効なこともあると思います。たとえば、佐藤正午の『Y』が SF として評価されている書評を見なかったら、おそらく私のアンテナには引っかからず、手に取ることはなかっただろうし。

だから、ジャンル分けに問題があるのではなく、あくまで「○○というジャンルは嫌いだから読みません」とか「これは○○じゃない」とかいう偏狭な態度（どっちも偏狭さにおいては似たり寄ったりだと思う）に問題があるのではないか、と。「日本人は嫌いだからあなたとは話しません」とか「お前は非国民だ」とか言われたらイヤでしょ。「SF は難しくてつまらない」のではなく、単に「難しくてつまらない SF がある」というだけでしょう。まあ、「SF は嫌いだから読まない」という人がいても、私はただ「偏狭だなあ」と思うだけで、無理に SF を布教しようなんて思いませんが（それが恋人とかなら、自分の好きなものをなんとかしてわかってもらいたいと思うだろうけど）。

（http://member.nifty.ne.jp/windyfield/diary0105b.html#16）

ＳＦとのファースト・コンタクトは、少なくとも私にとって、非常に有益だった。これからＳＦに対してどのように行動すべきか、どのようにＳＦとコンタクトを続けてゆくべきか、という点については、まだ確たる答が出ない。しかしエンターテインメント小説に対してどのように関わってゆくか、ということについては、少しヒントが得られたような気がする。少しずつ考えをまとめながら、今後も進んでゆきたいと思う。

４．資料【文芸編集者への取材】

まず、95～97 ページの書面を懇意の編集者に送付し、インタビュー取材を申し込んだ。なるべくこちらが出向いて直接お話を伺うようにしたが、ゴールデンウィーク進行の最中ということもあり、皆様たいへんにご多忙で、電話取材や書面でご回答いただく場合や、またどうしても取材が叶わない場合もあった。一方では、社内でアンケートを取りまとめて下さったり、ＳＦに詳しい編集者をご紹介下さった方もいる。

示唆的なご発言ばかりで、私も勉強になりました。有意義な取材になりましたこと、ご協力いただきました皆様に心より感謝いたします。ありがとうございました。

お寄せいただいた回答をここに掲載する（98～128 ページ）。
【書面による回答】　5 社 19 名　（98～115 ページ）
【インタビュー取材】　6 社 12 名　（116～126 ページ）
【電話取材】　2 社 2 名　（127～128 ページ）
あわせて 12 社 31 名

瀬名が重要だと感じたご発言には★印や下線を、また瀬名個人のコメントには＃印を、それぞれ付けました。
なお、匿名希望の方はその旨を記し、個人が特定できてしまいそうなご発言はなるべく省くよう配慮いたしました。

【編集者へお送りした依頼状】

謹啓

早春の候　ますますご健勝のこととお慶び申し上げます。

いつもお世話になっております。瀬名秀明です。

突然で誠に恐縮ですが、ぜひお力添えをいただきたいと思い、ご連絡を差し上げました。

来る５月３日に「ＳＦセミナー」というコンヴェンションが開催されるのですが、そこで私が講演者のひとりとして壇上に立つことになりました。「ＳＦセミナー」とは毎年ゴールデン・ウィーク期間に開催される講演会・親睦会で、ＳＦファン有志のボランティアによって運営されています（開始は 1980 年）。内外のＳＦ作家や評論家、翻訳家などによるトークセッションが主体ですが、篠田節子、綾辻行人、宮部みゆき各氏など、「ＳＦっぽい」小説を書く作家もしばしば登場するようです。私は今年初めてこのセミナーに参加することになりました（ＳＦセミナーについての詳細は、ホームページ http://www.sfseminar.org/をご参照下さい。そのトップページをコピー・同封しておきました）。

このセミナーで、私は「『ＳＦ』とのファースト・コンタクト　―瀬名秀明、ＳＦに対するアンビバレントな思いを語る―」と題して講演をおこなうつもりです。私はＳＦに詳しいわけではなく、またＳＦを書いているつもりもありませんが、これまでＳＦ読者の方からさまざまな反応をいただいており、ＳＦ小説について考えさせられてきました。今回の講演では、私が以前からＳＦに対して疑問に思っていたことを語り、また同時にＳＦ側からの異論・反論を受けることによって、ＳＦ小説の現状と未来について考えてみたいと思っています。

この講演に際し、事前にいくつかの聞き取り調査をおこない、問題提起の資料としたいと考えています。そこで、お忙しいところ誠に恐縮ですが、ぜひＳＦについてのお考えを伺いたく、ご連絡を差し上げました次第です。

いま、「ＳＦ小説は売れない」といわれています。しかしそれが本当なのか、本当だとしたらなぜなのか、こういった疑問に明確に答えられるＳＦ関係者がいないように感じられます。またこの問題は、これまでＳＦ関係者だけの間で議論されていましたが、外部の視点が完全に欠如していました。さらに、出版

に直接関わる編集者の思いがなかなか一般読者に伝わっていないことも、事態を混乱させる原因になっていたように思います。

一線でご活躍されている文芸編集者にＳＦ観を伺うことにより、何か新しいものが見えてくるのではないか、と思いました。これまでＳＦ小説を一度も編集したことがない、とおっしゃる方にも、ぜひお話を伺いたいのです。「では、なぜＳＦを編集しないのですか」と。

別紙のような質問内容を考えております。ご都合のよろしいときに、私のほうから編集部に出向くか、あるいはお電話を差し上げて、お話を伺わせていただければ幸甚です。ご多忙のところ誠に恐縮ですが、ご協力いただけないでしょうか。

ただ、セミナーの性格上、せっかくお伺いしたご意見も、会場から不評を買う可能性が充分に考えられます（観客の多くは濃いＳＦファンです）。あくまで個人の意見であること、会社を代表する意見ではないこと、を明言して紹介しますが、それでも誤解する人がいないとは限りません。ウェブ（インターネット）上でいろいろと言及される可能性もあります（セミナー終了後は、「レポート」と称した一般参加者の報告文がウェブ上に十数個掲載されるのが普通です。とうぜん、思い違いの混じったレポートも出てくるでしょう）。こんなインタビューは迷惑だ、という場合は、同封の葉書でご遠慮なくその旨お返事いただければ幸いです。また、ご協力いただけた場合でも、ごく薄謝しか差し上げることが出来ませんことをどうかお許し下さい。私自身、このセミナーの講演料はわずかで、今回の企画は完全に持ち出しです。

緊張感の大きい企画であることは充分に承知していますが、文芸出版の今後にとって有益なものになるよう、最大限努力いたします。ぜひご協力いただきたく、伏してお願いいたします所存です。

どうかご検討の上、インタビュー取材の諾否や、ご都合のよろしい日時などを、同封の葉書などでご連絡いただければ幸いです。よろしくお願い申し上げます。

謹白

平成 13 年 3 月 20 日

瀬名秀明

（署名）

ご質問したい主な内容

１）お名前　年齢　匿名希望か否か
２）会社名　役職　主な仕事内容　担当作家のジャンル傾向
３）一カ月に何冊程度本を読むか（自分の担当する本を含む）
４）そのうち小説とノンフィクションの割合は
５）そのうち「ＳＦ小説」の割合と、「科学系ノンフィクション」の割合は
６）「ＳＦ小説」をこれまでどのくらい読んできたか（ご自身の「ＳＦ歴」）
７）自分は「ＳＦファン」であると思うか
８）ご自身の仕事と「ＳＦ小説」との関係は（これまでＳＦ小説の編集をしたことがあるか）
９）「ＳＦ小説は売れない」という言説について、どう思うか（差し支えない範囲で、ご自身の経験や会社の実績と絡めてお話しいただければ幸甚です）
１０）　「SF小説は売れない」のが事実だとすれば、なぜ売れないのだと思うか。もし「売れている」のだとすれば、なぜこのような言説が蔓延しているのか
１１）　今後 会社から「ＳＦ小説をやれ」との命を受けた場合、どのような展開を考えるか。あるいは、いま現在ＳＦ出版に関わっている場合、どのような戦略を考えているか
１２）　いま注目している「ＳＦ作家」は
１３）　「ＳＦ小説」に今後期待することは何か。「ＳＦ小説」は今度どうなってゆくと思うか
１４）　その他、いまの「ＳＦ」に対してご意見があればお聞かせ下さい

【書面による回答】5 社 19 名
（ご回答のハードコピーをこちらでスキャニングし、体裁を統一いたしました）

Ｑ１）徳間書店　国田昌子　文芸書籍編集長
Ｑ２）小説単行本、ジャンルは多岐
Ｑ３）１０冊程度
Ｑ４）９：１
Ｑ５）9.8：0.2
Ｑ６）厳密にＳＦというジャンルは少ない
Ｑ７）限定したファンではない
Ｑ８）ＳＦアドベンチャー編集部に５年在籍
Ｑ１０）ＳＦプロパーの作家たちが、思いこんだ時期があるのでは。現実にはＳＦマインド溢れる小説が売れる
Ｑ１１）あえてＳＦと銘打つかどうかを考えます。良い小説か、面白くないか、読者の嗅覚は鋭いものです
Ｑ１３）狭いジャンルＳＦということに捉われない。あらゆる試みを可能にする小説という意味で期待のジャンル。刺激的な作品を出してきてほしい

Ｑ１、２）徳間書店　松尾賢次　32 歳　編集
Ｑ３）５～６冊
Ｑ４）８：２
Ｑ５）１割、５分。
Ｑ６）秘密
Ｑ７）ファンである
Ｑ８）ある
Ｑ９）そんなことはない
Ｑ１０）売れているＳＦはＳＦと呼ばれないから
Ｑ１１）総合ＳＦ誌（月刊）
Ｑ１２）藤崎慎吾
Ｑ１３）常に新たな視点（人に根ざしながら人を超える）を提示してくれること
Ｑ１４）＃回答なし

Ｑ１）徳間書店　匿名（30 歳男性）
Ｑ２）担当させていただいている作家さんの傾向としては、ＳＦ、ミステリー、ホラーなど、が多いです。
Ｑ３）10〜15 冊程度。ばらつきはありますが。
Ｑ４）ほとんど全て小説です。
Ｑ５）「ＳＦ小説」の割合は、場合によります。「科学系ノンフィクション」はほとんど読んでいません。
Ｑ６）小学校高学年くらいのとき、星新一氏や平井和正氏の作品にはまり、以後、小松左京氏・筒井康隆氏・半村良氏・山田正紀氏などなどなど、国内ＳＦを中心に濫読を続けてきました。海外物は、実はあまり読んでいません。一般読者時代はどちらかといえば、「マガジン」派ではなく、国内のエンターテインメントＳＦが主体の「アドベンチャー」派でした。
Ｑ７）「ＳＦファン」だと思います。ただし、読者時代には「ＳＦファン」や「ＳＦ大会」なるものが何となく嫌いで、いわゆる「ファン活動」は行っていませんでした。
Ｑ８）あります。
Ｑ９）「ＳＦ」と銘打たれているものが売れないという時期は、確かに「あった」（と過去形で言いたいです）と思います。そうでなければ、専門誌が一誌だけの状態がここ 7〜8 年続いていたことの説明になりません。
　より正確にいうならば、「ＳＦ」と銘打たれて出版される作品が少なくなったから、なのかも知れません。さらに言うと、ここ十数年ほど、ＳＦの多様化がすすみ、一作家一ジャンルといった傾向が強くなり、売れる作家・作品なら、帯に「ＳＦ」とは書かず、その時点でよりリアルな惹句が選ばれたのかもしれません。
　「スーパー伝奇ロマン」とか「ヒロイック・ファンタジー」とか「スペース・オペラ」とか「戦記シミュレーション」とか。栗本薫氏・田中芳樹氏・菊地秀行氏・夢枕獏氏・荒巻義雄氏などなどの作品群は、この間も「売れて」いたわけですし。
Ｑ１０）＃以降の回答はありません

Ｑ１）　大野修一　　37 歳　　匿名ではありません
Ｑ２）　徳間書店　　徳間文庫編集部・課長
Ｑ３）　最近めっきり減っています。仕事関連のもの以外は、なかなか手に取る時間がありません。雑誌やマンガは入れたいところですね。でもまあ、１０冊くらいでしょうか。
Ｑ４）　５割がノンフィクションでしょうか。
Ｑ５）　大体、小説の１／３が「ＳＦ」で、ノンフィクションの１／５がサイエンス系
Ｑ６）　小学校四年のとき、ジュブナイル「宇宙怪獣ラモックス」を読んでから、現在にいたる。（小説と限定しなければ、漫画・アニメ・特撮によって、とうにインプリンティングされています）
Ｑ７）　でしょう。ただ読書暦としては、抜けている年代・作品はけっこうあります
Ｑ８）　社歴が 14 年。最初の 6 年はマニア系の少年漫画、次の６年がマニア系の少女漫画――それぞれ、すこしＳＦ入ってます。で、文芸の部署に移ってきて２年――上記「徳間デュアル文庫」「SF Japan」をたちあげました。
Ｑ９）　ＳＦが、誰もが喜んで読むジャンルではないのはたしかでしょう。ＳＦを構成する要素には“売れない”“一部の人間が喜ぶ”ものが含まれてはいます。

しかしＳＦ的発想は、すでにポピュラーなものであり小説に限っても、ホラー・ミステリに逆流しています。小説に限らなければ、上記の漫画・アニメ・特撮だけでなくゲームから、日常の端々にまでＳＦ的なものは拡がっています。

そうなってくると、その状況下であえて「ＳＦ」と名付けられ、イメージされるのは、必然的により濃いものとなります。そうすると、その「ＳＦ」の“売れない”要素の比率はあがる。

ですから区切り／線引きの問題だとおもいます。

たとえば、キリスト教徒というのは世界中にたくさんいます。教会で働くものから、石につまずいて「ジーザス！」と口にするものまで。ただそのときに、「毎週教会にも通わないのはキリスト教徒ではない」という人や認識が一般化すれば、ぐっと減るでしょう。プロテスタントにカソリック、喜捨の多寡、聖書の暗記量などなど、構成要件を増やしていけば、キリスト教徒はローマ法王だけになってしまうかもしれません。（迷える子羊が無条件に多すぎても、まずいんじゃないのという気もするんですけど。バレンタインやクリスマスが行事化したいま、私たち日本人のほとんどをキリスト教徒とすることも、構成要件を逆に減らせば、出来てしまうでしょうし）

ＳＦの中心にいると自認する層が、どう限定するかによって、ＳＦ作品・ＳＦ読者の色分けがかわってしまう（コアな層だからこそ、それについて強く発言するというのは、どのジャンルでも同じです）わけで、過去からの連綿たる経緯が、いまの「ＳＦ」というタームのイメージをつくってしまっているのでしょう。

それで、売れる売れないになりますが、「ＳＦ」というのは損をしないようにつくることは出来るジャンルなのではないかとは思っています。コア層というのは、確実性のある購買層になります。実際、早川書房の「ＳＦマガジン」や小社の「SF　Japan」よりも、部数が少ない一般小説誌も多いですし、一冊出したときの損益においてはほとんどの小説誌のほうがつらい状況なのではないでしょうか。

正直に言えば、「ＳＦ小説が売れない」という一文のそのすぐ外には、「小説が売れない」という現状があります。その中でＳＦが目立つのは、ＳＦが好きで好きでしょうがない、声の大きな一団（ＳＦ大会があったり、今回のＳＦセミナーのようなイベントがあったりする）がいるのに、さほど売れているわけではない――というギャップのせいでしょう。

Ｑ１０）　９）と重複しますが、なにをＳＦ小説とするかが問題でしょう。コアファンの声が大きく、一般性よりも、ＳＦがＳＦたる所以の部分を重視した作品のみを「ＳＦ」とした場合、売れない可能性は高まるのは仕方ないのかもしれません。

しかしそれは線引きの問題であり、もっとシンプルに言えば、出版社のラベルの付け方でしょう。

早川書房やかつての小社のように、ＳＦを敢えて銘打っているところからは、“濃縮ＳＦ作品”がそのラベルのもとに出る機会が多いでしょうし、その逆にとくに専門誌をかかえているわけでもない出版社は、ＳＦ的要素を孕みつつもポピュラリティのある作品にあえて「ＳＦ」の名称を冠させる必然性を感じないことでしょう。

かくして「ＳＦ」の名のもとに出版されるものが、どんどんと難しい＆売れにくいものになっていく。

しかし、その逆に「ＳＦ」とのラベルが付かない、「ＳＦ」としか言えないものの量はどんどん増えていくことになる。ジュニア小説もコミックもホラーもポリティカルフィクションも、ＳＦの一部をどんどん吸収消化して、市場に横溢しています。

コアファンの持つ偏狭さと、出版社の効率が、それぞれの理由でそれを「ＳＦ」と言わないのです。

どこかの時点で、「ＳＦ」と「ＳＦ的なもの／ＳＦもどき」という歪な仕分けではなく、「本格ＳＦ」と「ＳＦ」という分け方を健全におこなっていれば、“ＳＦは売れない”という言説は出来なかったのではないかと思います。

Ｑ１１）　読者――というか敢えて言葉を選ぶと――お客／購買層というのは、自分にとって「必要」なものにしかお金をださない人たちのことです。というか、人がお金を使うのは、理由はどうあれそのこと・ものが必要だからです。

さて、では「必要なＳＦ」とは何でしょう。

サイエンスの面白さや実際を伝えるもの、もしくは疑似科学としてのＳＦ（ガーンズバックにはじまって、アシモフやクラーク、ベンフォード、イーガンなどなど。ガモフの啓蒙書もありますね）。これは当然あるでしょう。ただ今の日本で、この種のＳＦ――正統な“サイエンス”フィクションが売れに売れるというのは、かなり難しい気がします。一般の人々の科学に対する興味は、どちらかというと衰えているようですから。ただ、絶対にダメというわけじゃあない。なによりもまず、ここを狙うということはしませんが、捨てもしません。とりあえず、戦略的には保留です。

ならば、何を「売り」にすればよいか。

★わたしは、ＳＦの構造の根底には現実逃避の強い欲求がある、と認識しています。

わたしが現在、ＳＦ関連の企画を自らたちあげ、編集にたずさわっているのは、“ＳＦには恩義がある”と思っているからです。それは、その「現実逃避」がわたしが今あることに関わっているからです。

思春期のころ、「現実」を一番嫌っていたころ。ＳＦを読み、そこで描かれる「別の論理を基調にした現実／物語」を楽しむことで、しばらく立ち止まっていられたことは、わたしにとっては有効でした。その猶予期間があったからこそ、先に進めたのです。これは別にＳＦに限らず、人によっては漱石だったり遠藤周作だったり吉本ばななだったりするのかもしれませんが、わたしにとっては「別の論理」という一点から発生する「世界認識の相対化」こそが、「現実嫌悪」を和らげるなによりもの処方箋だったのです。

ＳＦの黄金時代とは、絶対的な年代のことではなく、読者が 14 歳のころのことだ――という説（だったと思うのですが）があります。

それはつまり、ＳＦにとって「思春期」と「現実逃避」は、拭い去れないものであると言うことでしょう。

また日本のような情緒的なエンタテインメントが受ける国では、「思春期小説（青春小説）」としてのＳＦ（ブラッドベリ、スタージョン、ヴォネガット、ダニエル・キイス、スコット・カードなどなど）のほうが、受け入れられる可能性は高い（「アルジャーノンに花束を」なんて受け入れられすぎて、いまやＳＦではなくなってしまった）。

★つまり、“現実と折りあいの悪いティーンエイジの読者”もしくは、“現実と折りあいの悪いティーン時代の問題点を、折りあいをつけたり切り捨てたり出来ないままに育ってしまった大人の読者”にとってこそ、ＳＦは必要とされるだろう。

だったら、そこをより先鋭化できないか。

わたしのイメージでは、「ライ麦畑でつかまえて」と「人間以上」と「エヴァンゲリオン」と「バトルロワイヤル」は、同じ種類の「必要」を孕んだ物語です（もっとありますけど）。

個人的には、ねらうポイントはここかな、と思っています。

次にキャラクターの問題。

新本格が売りの講談社ノベルズが、購買層としてキャラ読みをする読者を無視できなくなったよ

うに、今の若い読者の本の読み方は、よりキャラクター中心になってきています。
　つまりそれはマンガ的になっているということです。小池一夫が劇画村塾で「マンガは一にも二にもキャラクターだ」と教えていました。マンガのキャラクターと小説の登場人物の違い――これは、小説にのみ興味のある人にはビビッドに分かってもらえませんが、本来は全然別物です。
　マンガにおける重要度の順は、①「キャラクター」②「ストーリー」③「設定」④「テーマ」となります（無論①～④すべての基盤に「絵」というものがあります。ちなみにそれは下手・上手いとは関係ありません。①～④にリアリティを与えられる絵柄なら、大友克洋でも青木雄二でもいいのです）。この順番は、ほぼ不動でしょう。（いまはマンガというジャンルにとっては幸か不幸か、①「キャラクター」のみでも、“ 萌え ”という一点で商品になりますが）
　小説の場合は、①～④の順は不動どころか、浮動です。①「ストーリー」②「テーマ」③「設定」④「キャラクター」というものもあれば、①「テーマ」②「設定」③「ストーリー」④「キャラクター」というのもありです。その分良くも悪くもマンガよりも、複雑でもあるし、わかりにくくもなりやすい。
　現実的には、いまはマンガの重要度順を遵守したほうが、需要度は高くなるでしょう。　あとは、売り方としては「パッケージング」は重要です。
　ＳＦの要素の流失先には、マンガ・アニメ・ゲームがあります（日本には手塚治虫という人がいるので、流失という表現は正確ではないのですが）。
　そこではビジュアル＝商品性です。読者を購買層と捕らえた場合、小説本だけが、それに無頓着でいられるはずがありません。上記のものに負けないだけのセンス／かっこよさが、本という商品にも必要だとおもいます。輸入ＣＤをジャケット買いするように、本を買う人間もいる（Ｊ文学は常磐響の写真＆装幀なしではこれほど認知されなかったでしょうから）のですから。
　つまりまとめますと、『ＳＦならではのアイデアを、魅力的なキャラをつかって描いた、青春小説を、ビジュアルに気をつかって出す』ことが、有効ではないか。
　それだけが全てだとは思っていませんが、ここが中心点であるのではないでしょうか。あとは枝化した戦略パターンはいくつかありますが、それを記していくと終わらなくなってしまうので、とりあえずここまでにいたします。
Ｑ１２）　たくさんいらっしゃいますが、あえて選ぶとすると山田正紀・上遠野浩平の両氏でしょうか。
Ｑ１３）　「徳間デュアル文庫」「SF Japan」をやっておりますので、期待することはより売れることです。
ＳＦ小説がどうなっていくか――それについてはあまり意見はありません。前述しましたが、つまりＳＦというラベルがどうなっていくかに過ぎないでしょうから。
Ｑ１４）　特になし、としておいて下さい。

Ｑ１）加藤　淳　46 歳　否
Ｑ２）祥伝社文庫編集長。ミステリー、時代小説を中心に全ジャンル。
Ｑ３）7、8 冊程度か?　なかなか読む時間がない。
Ｑ４）７：３の割合で小説が多い。ノンフィクションは小説のネタ探しのため、人間・歴史係が自ずと多くなる。風俗・民俗・民族・人類学などは個人的に好きである。
Ｑ５）ほとんど皆無に近い。
Ｑ６）ＳＦとして意識して読んだことは皆無。アーサー・C・クラーク『幼年期の終わり』フィリップ・K・ディック『ヴァリス』を学生時代に読んだ程度か？　ジュール・ヴェルヌ『地底旅行』は素晴らしかった。『ガリバー旅行記』『ジキル博士とハイド氏』なども 30 を過ぎてから読んでいたく感動した。P・K・ディック『模造記憶』スティーヴン・キング『神々のワード・プロセッサ』ケン・グリムウッド『リプレイ』もＳＦに含んでよいのだろうか？
Ｑ７）ファンではない。
Ｑ８）文庫化では半村良『石の血脈』『妖星伝』他。荒巻義雄作品、眉村卓『出張の帰途』など。
　高橋克彦『竜の柩』『霊の柩』など、祥伝社では「伝奇」としているものは結構ある。純然にＳＦと銘打ったものは山之口洋『０番目の男』ぐらいである。
Ｑ９）ノン・ノベル草創期はＳＦ作家が大半を占めていた。平井和正、半村良、河野典生、田中光二、川又千秋、荒巻義雄等々。だが、社は純然たるＳＦを避け「伝奇」というジャンルを開発していった。その後、夢枕獏、菊地秀行などを売り出すことができた。
　その根本には「ＳＦは売れない」だから別の小説形態で、という思いがあった。社内では「ＳＦ」という言葉が禁句だった時期があった。おそらく堂々とＳＦと銘打った作品は『０番目の男』くらいではなかろうか?　ストーリーや想像力を飛躍的に「ぶっとばす」ためには、ＳＦというよりもＳＦ的発想がこれからはもっと要求される、と考えている。
Ｑ１０）ＳＦ=Science Fiction のサイエンスが重たい、馴染みづらいと思う。ＳＦは Super Fiction になるべきだと思う。ＳＦは未来ではなく現在なのだから。さらにその未来は？
Ｑ１１）ＳＦの面白さは、夢である。もし超能力を持っていれば、もしタイムマシンがあれば、時空、透明人間、時間を止める能力…。そのような単純な欲求とそれゆえの孤独などは、いつの時代でも受けると思う。サイエンスを扱っても、いかにテーマを「人間（純愛）」に持っていくかだ。「時間を止める」などはぜひやってみたい。
Ｑ１２）これまで語ってきたことと矛盾するが、ＳＦのうちＳを徹底的に追及しようとする瀬名秀明は、とても貴重な存在である。しかも彼は「人間」を追究している。
Ｑ１３）ＳＦは「人間」を追究することができる、貴重なジャンルだと思う。とてもリリカル（最近の小説に欠けている）で哲学的（同様）で、人間の本質や絶望や希望や神も追究できるはず。素晴らしいジャンルになって欲しい。
Ｑ１４）★ＳＦをなぞるＳＦはご免こうむりたい。古代の神話・伝記に匹敵する新たな神話の創造を期待する。すべては「人間」という愚かで愛しいものに集約される。

Ｑ１）保坂智宏　41 歳　氏名公開可
Ｑ２）(株)祥伝社　文芸出版部　「ノン・ノベル」副編集長
Ｑ３）一カ月に 10〜15 冊
Ｑ４）98%が小説
Ｑ５）この 10 年でＳＦは 20 冊以内
Ｑ６）読書歴 30 年強のうちきわめて初期からＳＦに触れているはず。
　初期はバローズ、スミスなど。一番愛着があったのは光瀬龍氏。
　総作品数はもはや計数不能。
Ｑ７）本籍はミステリファン。過去は「ＳＦファン」でもあったが、編集部への異動以来十年、業務の必要でミステリばかり読まざるを得ず、「ファン」の資格は失効していると思う。
Ｑ８）自身の仕事として、ＳＦがメインの売りになる作品はないが、アイデアや設定、テイストにＳＦを使ったものはある（半村良、高橋克彦、山田正紀、大石英司、横溝美晶、西澤保彦各氏。そういえば西村京太郎氏にも超能力を扱った作品があった。）
Ｑ９）「ＳＦ小説は売れない」という精密な統計があるのかどうか知らないが、これだけ言われるのだから、各社の刊行編成責任者には、売れなかった経験が多少ともあるのだろう。弊社ノン・ノベル自体は初期から、半村良、山田正紀、田中光二、平井和正、夢枕摸、菊地秀行氏らのジャンルを超えた作品で成果を挙げているが、読者は幅広いし、おそらく純粋なＳＦとして楽しんでいたわけではないと思う。自分自身で、「ＳＦ的だから売れなかった」ということはないが、確かに社内で企画が通らなかったことはある。
Ｑ１０）「ＳＦ小説は売れない」理由として、ＳＦを第一義的な売りどころとした作品が、限られた読者のための作品に見えることも一因ではないか。
　ただし、ＳＦの要素をうまく使ったベストセラーは、宮部みゆき、北村薫両氏などいくつかあるし、瀬名秀明氏の成果は「ホラー」というククリ以上に、ＳＦを知らなくても楽しめるキャパシティを持つ作品だったからではないか。
Ｑ１１）「ＳＦ小説をやれ」という、そのままの社命はあり得ないと思うが、ＳＦでバカ売れしている作家=瀬名さんのような小説家がいて、その人に当たれという命令はある。それはジャンルに関係がない。
　それとは別に、ＳＦのアイデアや成果は娯楽小説一般に垣根なく取り入れるべきだと思う。
Ｑ１２）恩田陸と菅浩江（いずれも担当としてミステリを手がけたのですが）。京極夏彦氏にも期待しているし、綾辻行人、貴志祐介、北川歩実各氏のＳＦも面白そうだが、あんまり戦線を広げられると、お仕事としても読者としても困る。あとは高野史緒氏はもっと語り部として評価されるべきだと思う。
Ｑ１３）今後、「ＳＦ小説」というジャンルが永遠に残るかどうかは疑問。どっちが偉いとかじゃなくて、「ＳＦ」は文芸のジャンルではなく、人類の思考様式にすぎない、というのが最近の持論。あまねくエンターテインメントに導入が可能だし、これからは導入が必須となる。
Ｑ１４）21 世紀になって、もうすぐアトムも生まれることだし、ＳＦはフツーのことなんだって、内側の人も外側の人も気付かなきゃ。

Ｑ１、２）近藤誠　45 歳　昨年 11 月まで(株)祥伝社　文芸編集部「祥伝社文庫」副編集長として小説の編集全般に携わり、現在は同社広告部　広告企画課　副課長。
Ｑ３）15 冊くらい。
Ｑ４）６：４くらい。
Ｑ５）ＳＦ小説、科学系ノンフィクションとも 1 冊も読まない月もありますが、平均すれば、どちらも月に 1 冊弱というところです。
Ｑ６）中学生になった頃、E・E・スミスのレンズマン・シリーズから始めて、早川書房のＳＦマガジンを購読し、近所の書店にある創元推理文庫のＳＦマークとハヤカワＳＦシリーズをすべて読み……という展開で、70 年代中頃までは国産・翻訳を問わず、ＳＦと名のつく本のほとんどに手を出し、高校卒業のあたりからハードボイルドものを中心とする翻訳ミステリに移行しました。
Ｑ７）ＳＦファン“であった”と思います。
Ｑ８）６）で述べたような過去をもつ者として、ＳＦ小説“も”出したいという思いはつねにありました。実際に自分で編集を担当した作品は、カバーなどにＳＦとは謳いませんでしたが釣巻礼公氏の『制御不能』『滅びの種子』、山之口洋氏の『0 番目の男』（こちらははっきりとＳＦとしました）くらいです。
Ｑ９）事実だと思いますが、そもそも「本は売れない」し、「小説は売れない」という状況も長いこと続いています。「ほかの小説は売れるのに、ＳＦ小説のみが特異的に売れない」というわけではないと思います。
Ｑ１０）僕は９）のように考えているので、この質問にはお答えできないのですが、出版社（あるいは編集者）がＳＦと銘打って小説を出版することを避ける傾向は確かにあると思います。その主たる理由は、ＳＦとしてしまうと“なんとなく”難解、理屈っぽい、小難しい、つまりはメンドくさいと思われると関係者が考えるからでしょう。巷間言われる「理科系離れ」が読者にも蔓延しているという認識があるのだと思います。
Ｑ１１）あえて括弧つきの「ＳＦ」にこだわってやるならば、ありきたりですが、映像メディアとの連携を探ることになるでしょう。また戦略ではありませんが、アイディアや描写の明噺さ（結局はリーダビリティ）を書き手の方にお願いしていくことになると思います。
Ｑ１２）ずるい答えで恐縮ですが、『刺客（テロリスト）の青い花』を書かれた西垣通氏。
Ｑ１３、１４）★私見としては、狭義の「ＳＦ」は科学の特定の発展段階（いわゆる一般人にとって科学がほとんど理解不能に入った段階）とアメリカの資本主義社会の特定の発展段階がクロスするところに生じた歴史的現象であり、その成立要件の多くはすでに変化してしまっていると思います。
　したがって、今後生み出される科学を主題とする小説が「ＳＦ」でなくても、また「ＳＦ」と呼ばれなくてもかまわないのではないか、と考えます。
　個人的な楽しみとしては、素人にはにわかに理解しにくい現在の科学理論によって導かれる、自分では創造してみたこともない宇宙観をイメージさせてくれるような作品が読みたいです。

Ｑ１）祥伝社　匿名　編集
Ｑ３）７～８冊
Ｑ４）ほとんど小説
Ｑ５）０
Ｑ６）１０冊弱
Ｑ７）思わない
Ｑ８）ハードとしての仕事はないが、ソフトは関係している
Ｑ９）プロパーものは売れないと思うが、ＳＦ的手法を取り入れたものがベストセラーになることが多い
Ｑ１０）人間の感情（煩悩）をテーマにしていないからでは？（人間が主役ではない）
Ｑ１１）生命科学もの。人間が本来動物として持っていた五感能力。深海を含む地球物理。
Ｑ１３）ジャンル・ミックスがより進むのでは？
Ｑ１４）人間の物理面を中心とした夢、未知なるものに対する好奇心を作品化してきたと思うが、それがなくなっているのでは？

＃小説の情緒的な部分に価値を見出し、その不足をＳＦに指摘する声が多いが、ＳＦを読み慣れた編集者はむしろ情緒的な読み方を否定する。この対立構造は興味深い。

Ｑ１）津谷洋　ツヤヒロシ　四十五歳　実名で結構です。
Ｑ２）文藝春秋　「別冊文藝春秋」編集長
仕事内容→エンターテイメント系小説の編集
担当作家のジャンル傾向→自分では特にジャンルは意識していませんが、推理小説系統の人が多いかもしれません。
Ｑ３）二十冊ぐらいです。
Ｑ４）ほとんど小説です。
Ｑ５）多分、十分の一にみたないのではないでしょうか。
Ｑ６）昭和五十年代までは、結構読んでいたと思います。当時、海外ＳＦの歴代ベスト・テンのような企画が、ＳＦ雑誌でよく組まれていました。その上位に来るようなものは、あらかた目を通していたと記憶します。「結晶世界」とか「地球の一番長い午後」とかいったあたりですね。ただ、今にして思えば、ブラッドベリを筆頭にソフトなＳＦが好きだったかも知れません。クラークやハインライン、アシモフなども、代表作はとても面白く読みましたけれど、その作家の作品をほとんど全て読破するほどの熱心な読者ではありませんでした。
ＳＦ小説が全盛だったころには、今ならファンタジーやホラー・純文学のジャンルに入れられる小説にも、ＳＦという呼称が付けられていたように記憶します。確かに、「指輪物語」や「ナルニア国物語」、「ゲド戦記」、「ローズマリーの赤ちゃん」、キングの「ファイアー・スターター」、倉橋由美子さんの「夢の浮橋」以前の小説群……などなど、みんなＳＦテイストを感じさせました。
Ｑ７）昔はＳＦファンでした。今はそうではないでしょうね。
Ｑ８）小説の編集作業に携わって、それほど長くない（五年ぐらいです）こともあるのでしょうが、これまでに、いわゆるＳＦ小説の編集をしたことはありません。
Ｑ９）宣伝文句としてＳＦという言葉を付けたから、何でも売れるという時代ではないでしょう。しかし、もちろん、鈴木光司さんのように売れている作家もいらっしゃいます。一慨に売れないとは言えないと思います。
文藝春秋という会社は、もともとＳＦが得意な会社ではありません。しかし、「ＳＦだから売れない」という理曲で、出版の可能性を排除するようなことも全くありません（ただＳＦに限らず全てのジャンルについて、「売りにくいから出版できない」という事態は、商業出版社である以上、あり得ます)。
最近の小社出版物で、ＳＦジャンルのものとしては、池上永一さんの「レキオス」、夢枕漠さんの「陰陽師」シリーズが、すぐに思いつくところです。
Ｑ１０）前述したように、「ＳＦ小説は売れない」のではなく、「ＳＦ小説だから売れるという時代ではない」と考えています。設問から少し外れるかも知れませんが、そのことについては、二つばかり考えるところがあります。
❶楽観的な科学信奉がなくなったこと。「鉄腕アトム」や「鉄人 28 号」の時代にいた大勢の明るいＳＦファンは望むべくもないでしょう。
②昭和五十年代までは、「思索的」な時代だったのではないでしょうか。学生や一般市民が今より「物を考える」時代だったということが、メッセージ性を内包するＳＦ小説に大きな追い風になっていたように思います。
★①については、大した問題ではないでしょう。昔から科学技術や人間の進歩に対して懐疑的なＳＦは沢山あったのですから。②は少し深刻な問題かもしれません。どうも最近のエンターテイメント小説市場は、ストーリーの派手さばかりを要求し過ぎて、作品に込められた作家のメッセージを

軽視するようなところがあるのではないか、と危倶しています。
Ｑ１１）「ＳＦ小説誌をやれ」と言われたら、①先端技術の話題を盛り込んだ情報小説的なＳＦ小説を書いてもらう②科学の話題から何らかの「哲学的」なメッセージを引き出すような小説にトライしていただく、といったぐらいしか思いつきません。雑誌全体に関する明確な戦略は、実際にやってみないとちょっと分かりません。別に専門誌でなく、文芸誌としてＳＦ小説を取り扱うのはどうか？　という問いでしたら、これは作家の方のご希望を伺いつつ、今後どんどんやってみるつもりです。
Ｑ１２）瀬名秀明さん、宮部みゆきさん、篠田節子さん、貴志祐介さん、池上永一さん、恩田陸さん、山之口洋さん、川端裕人さん……
Ｑ１３）自由主義の時代には自由主義の、全体主義の時代には全体主義の、それぞれ時代が要請するストーリーというものが、歴史を振り返って見ると存在したように思います。逆に言えば、世の中を規定するようなお話が、いつの時代にもあったのかもしれません。今という時代を決めるようなドラマがあれば、それは小説のジャンルにかかわらず広範な読者の支持を集めるのではないでしょうか。願わくば、それが小説というメディアに出てきて欲しい、と考えています。
　「ＳＦ小説」というジャンルには、その可能性があると思います。

幻冬舎の皆様です。一括してメールで送って下さいました。

Ｑ１）日野淳　24 歳
Ｑ２）幻冬舎　編集者歴３年　純文学と新進ミステリ小説の編集
Ｑ３）10 冊
Ｑ４）小説８割。残りがノンフィクション。
Ｑ５）ほぼ０に近い
Ｑ６）大学時代に『火星年代記』などの名作は意識して読んだ記憶があるが、ここ数年はほとんど触れていない。
Ｑ７）思わない
Ｑ８）その通りだと思う。ＳＦと帯にあって売れたものはここ数年見たことがない。会社全体を見渡しても、ＳＦと呼べるものを出版することがあっても、ＳＦという言葉は一切使わないという傾向がある。
Ｑ１０）売れないと思う。個々が思う「今の自分」と遠いところにあると感じられるから。読者は読書に非日常性を求めていないから（厳密に言うならば、非日常に遊ぶ楽しさを経験していない）。
また作品の方から見ると、現実の事件に作家の想像力が負けてしまうように見える、つまり現実の方が謎めいていて、スリリングに見える。
Ｑ１１）ＳＦという言い方は絶対にしない。
Ｑ１２）ＳＦも書ける方なら多くいらっしゃるが、ＳＦ作家というくくりでは特にいない。
Ｑ１３）「現代」と密接にリンクしたＳＦ小説であることが、必要絶対条件になるのではないかと考える。しかしその場合でもＳＦという言葉は使わないと思う。
Ｑ１４）ＳＦに限らず、小説における全てのジャンルが消滅しているので、特にＳＦが危ないとは思わない。しかし、非日常に遊ぶ楽しさを提示できるような小説を作らなければ、小説自体が危ないとは考える。

……

Ｑ１）長谷川和人　38 歳
Ｑ２）幻冬舎　編集者歴史５年　時代小説担当
Ｑ３）10 冊くらい
Ｑ４）ノンフィクション７割　残りが小説
Ｑ５）0
Ｑ６）正統的ＳＦと呼べるような作品はほとんど読んだことがない。
Ｑ７）思わない
Ｑ８）菊地秀行さんの担当をしていたので、彼の作品は何冊も作ったが、特にＳＦと意識してはいなかった。
Ｑ９）特に感想はない。
Ｑ１０）現実と関係がないから売れないのだと思う。
Ｑ１１）ＳＦと言わない。
Ｑ１２）田中啓文さん
Ｑ１３）期待することは特にない。ＳＦ的要素は他ジャンルに取り込まれていく（いっている）と考える。

……

Ｑ１）志儀保博　36 歳
Ｑ２）幻冬舎　文庫編集長　新本格ものが多い（好き）
Ｑ３）25 冊
Ｑ４）半々
Ｑ５）ＳＦ小説は１冊あるかないか。科学ノンフィクションは４、５冊程度
Ｑ６）ＳＦ小説はあまり読んだ記憶はないが、ＳＦ映画やＳＦ漫画は沢山読んだ。
Ｑ７）ＳＦ小説ファンではないが、ＳＦファンではある。
Ｑ８）森博嗣さんのＳＦ的な小説は何冊か編集した。
Ｑ９）正しいと思う。
Ｑ１０）だれもＳＦ小説と名付けられたものを読みたくないから。
Ｑ１１）みんなでいっせいにＳＦ小説を出して、書店店頭でブームのように見せる。
Ｑ１２）三雲岳斗さん
Ｑ１３）ＳＦとは言わないこと
Ｑ１４）ＳＦはＳＦと言い過ぎだと思う。ジャンル意識を捨て、「面白い」小説がうまれることを期待したい。

……

Ｑ１）工藤早春　29 歳
Ｑ２）幻冬舎　小説編集者歴２年　時代小説、女性向けエッセイなど
Ｑ３）15 冊
Ｑ４）９割小説
Ｑ５）ほとんどない
Ｑ６）『時をかける少女』などは読みましたが……。
Ｑ７）いいえ
Ｑ８）ない
Ｑ９）そんなことはない、というか小説自体が売れなくなってきている。
Ｑ１０）今の人たちは自分に近いものしか読みたくないから。
Ｑ１１）導入や骨格となる設定にリアリティーを持たせることが必要では。
Ｑ１２）いない
Ｑ１３）ＳＦ独特の「奇想天外」以外にも小説として楽しい要素を盛り込んでいけばいいと思う。
Ｑ１４）　１３）と同じです。

……

Ｑ１）木原いづみ　34 歳
Ｑ２）幻冬舎　小説編集者歴１年　女性向けエッセイ、実用書などが中心
Ｑ３）12、3 冊
Ｑ４）ノンフィクション６割、ビジネス書４割
Ｑ５）あわせて 1 割

Ｑ６）読んでいない
Ｑ７）思わない
Ｑ８）ない
Ｑ９）わからない
Ｑ１０）ＳＦ小説は、「本読み」のための小説という印象がある。今は「本読み」自体の数が減少しているのでは。
Ｑ１１）女ものめり込めるＳＦ
Ｑ１２）特にいない
Ｑ１３）共感できるＳＦが読みたい
Ｑ１４）事実の方がフィクションじみている昨今、ＳＦ小説がＳＦ小説である意味自体を問う必要があると思う。

＃以下はＳＦセミナー終了後にいただいたご回答です。
……
Ｑ１）小島寛郎　２４歳
Ｑ２）幻冬舎　　編集者歴１年　小説、ノンフィクション半々
Ｑ３）１０冊くらい
Ｑ４）小説６　ノンフィクション４
Ｑ５）ほとんどない
Ｑ６）ほとんど読んでいないと思う
Ｑ７）思わない
Ｑ８）全くかかわったことがない。
Ｑ９）「売れない」とよく聞くが、それを実感した経験はない。
Ｑ１０）自分も、ＳＦと聞いただけで、なんとなく手に取りにくい感じはする。名のある人のＳＦの名作だったら読んでみようかとも思うかもしれないが、新人のＳＦ作家の本はほとんど買わないと思う。
Ｑ１１）ＳＦ的な雰囲気を隠した方が得なのではないか。
Ｑ１２）いません。
Ｑ１３）「ＳＦ小説」に期待することは特にありませんが、小説自体がもっと元気になってほしいと思う。
Ｑ１４）特にありません。

……
Ｑ１）菊地朱雅子　34 歳
Ｑ２）幻冬舎　第１編集グループ編集長　星星峡編集長　純文系がやや多いが乃南アサさんなどミステリも担当している。
Ｑ３）１５冊
Ｑ４）小説６　ノンフィクション４（エッセイも含む）
Ｑ５）ほとんどゼロ
Ｑ６）カートボネガット、星新一は全部読んだ記憶があるが、特に SF 小説と意識はしなかった。

Ｑ７）思わない
Ｑ８）仕事として関わったことはない。
Ｑ９）定説として「売れない」ということは聞いている。また事実そうだとも思う。
Ｑ１０）分からない
Ｑ１１）ＳＦ作家以外の人にＳＦ的テーマをぶつけてみれば、広がりが出てくるのではないか。
Ｑ１２）特にいない
Ｑ１３）特にない
Ｑ１４）

……

Ｑ１）永島賞二　３５歳
Ｑ２）幻冬舎　第２編集グループ編集長　　ミステリー、アウトローもの中心
Ｑ３）１０冊程度
Ｑ４）小説８　ノンフィクション２
Ｑ５）１割あるかないか
Ｑ６）特にＳＦ小説というジャンヌで小説を選んだことはない
Ｑ７）思わない
Ｑ８）向山貴彦さんの『童話物語』という本を編集した。かなりＳＦ的要素の強い作品だったが、思った以上に世の中に受け入れられた。
Ｑ９）「売れない」のだと思うが、全て駄目だとは思わない。面白ければなんとかなる、と考えたい。
Ｑ１０）読者の現在とかけ離れているように思えるから、でしょうか。
Ｑ１１）今、を意識したテーマ、シチュエーション作りを心がける。
Ｑ１２）「ＳＦ作家」というくくりでは、特にいない。
Ｑ１３）物語的な面白さを追求することと、受け入れられるための工夫をすること。時にはあざといまでに。
Ｑ１４）全ての小説の枠組みが崩壊しつつあると思うので、ＳＦ小説の現状にのみ悲観的になる必要はないと思う。

……

Ｑ１）茅原秀行　２８歳
Ｑ２）幻冬舎　ミステリー、タレント関係、テレビなどいろんなジャンルの本を作っている
Ｑ３）１０冊程度
Ｑ４）小説８　ノンフィクション２
Ｑ５）ほとんどない
Ｑ６）ほとんど読んでいないと思う
Ｑ７）思わない
Ｑ８）菊地秀行さんの担当をしています。
Ｑ９）「売れない」という言説は正しいと思う。
Ｑ１０）ＳＦだから売れないというよりは、小説、本自体の問題だと思う。
Ｑ１１）ＳＦ的要素を上手く取り入れた小説を書いていただき、ＳＦとは謳わずに出版する。

Ｑ１２）三雲岳斗さんは面白いと思った。瀬名さんもＳＦ大賞をお取りになっていらっしゃるので、ここに上げてもいいのでしょうか……。
Ｑ１３）「売れない」という現状はあまり考えず、面白いものを書くこと。
Ｑ１４）ＳＦ的な要素を持った作品は沢山あるのですが、それらをＳＦと呼ばない理由を考えることが必要かもしれない。

Ｑ１）塩澤快浩　33 歳
Ｑ２）早川書房　ＳＦマガジン編集長（会社組織としての肩書きは、編集部書籍課兼雑誌課・副主任)。仕事内容は、ＳＦマガジンの編集および一昨年よりＳＦ関連書籍の編集も担当
Ｑ３）ＳＦマガジンも含めて 6-7 冊でしょうか
Ｑ４）ほとんどすべて小説です
Ｑ５）ＳＦ小説の割合は、8-9 割程度
Ｑ６）ＳＦを読み始めたのは早川書房に入社した 1991 年、以来 10 年間で 500 冊程度（ＳＦマガジンをのぞく）
Ｑ７）早川書房入社以前はミステリ・ファンであり、ＳＦはまったく読んでいなかったため、当初は仕事における必要からＳＦを読み始めました。その結果、ＳＦも好きになったわけですが、仕事とＳＦがあまりに密接に関わりすぎており、純粋な「ＳＦファン」という立場になったこともないため、まちがいなく「ＳＦ小説ファン」ではあるものの、「ＳＦファン」かと言われると即答しかねる部分があります。かなり特殊な動機からＳＦを読み始めたという事情が関係していると思います。
Ｑ８）編集を担当したＳＦマガジンは、1991 年 6 月号から 2001 年 6 月号まで（そのうち編集長として携わったのは、1996 年 11 月号より）臨時増刊号は、1999 年 9 月の「星ぼしのフロンティアへ」、および 2000 年 4 月の「ＳＦが読みたい！ 2000 年版」
担当書籍は以下のとおり。
○『グッドラック　戦闘妖精・雪風』神林長平（単行本・1999 年 5 月）
○『魂の駆動体』神林長平（文庫・2000 年 3 月）
○『永遠の森　博物館惑星』菅浩江（単行本・2000 年 7 月）
○『銀河がこのようにあるために』清水義範（単行本・2000 年 12 月）
○『銀河帝国の弘法も筆の誤り』田中啓文（文庫・2001 年 2 月）
○『ＳＦが読みたい！ 2001 年版』ＳＦマガジン編集部編（2001 年 2 月）
○『新・ＳＦハンドブック』早川書房編集部編（文庫・2001 年 4 月）
Ｑ８）結局、どこに基準を置くのか、という問題だと思います。たしかに、日本ミステリにおける京極夏彦氏、宮部みゆき氏、あるいはホラーというジャンルで売り出された瀬名氏や鈴木光司氏などの数十万部、数百万部といった大ベストセラーは近年ありませんが、早川書房におけるミステリ作品（翻訳がほとんどですが）とくらべて、ＳＦのほうが売れないという事実はありません。逆に、森岡浩之氏の『星界の紋章・戦旗』や、D・ファインタック《銀河の荒鷲シーフォート》シリーズなどは、ミステリ以上の売れ筋の作品となっています。ただ、同じ森岡氏でも短篇集の『夢の樹が接げたなら』、あるいは G・イーガン『祈りの海』などは、内容の評価のわりには売れ行きがそれほどでもないという状況に、歯がゆい思いがすることも確かです。
Ｑ１０）私が早川書房に入社した（つまりＳＦを読み始めた）当時から、すでに巷では「ＳＦ冬の時代」と言われており、ＳＦが爆発的に売れたとされる時代を私個人は知りません。しかし推測するに、そうした時代に売れていた作品もやはり、キャラクターが優先されたり、アニメーションなどとのメディアミックス的なものだったと思うのです。もともと純粋にＳＦ小説を好む読者は少なかったのではないでしょうか。読者が少ない分、トータルしてみた場合にミステリとくらべてＳＦのほうが売れない、というのは当たり前の事実だと思います（個々の作品の部数という問題ではなく)。ＳＦを読み始める前の私のイメージでは、ＳＦは難解であり（科学的な部分や、特殊なガジェットなども含めて)、一部のマニアが読むもの、という意識が確かにありました。それは一般的

なイメージでもあると思います。しかし、いざ読んでみれば、同じ小説としてミステリやホラーなどと区別しなければならない理由は、まったくないことがわかったのです。繰り返しになりますが、私の場合は仕事上の必要が読み始めるきっかけになったわけですが、普通の読者が確実にもっているであろうＳＦの敷居の高さという幻想を、いかにして解消していくかがポイントだと思います。たしかに、ＳＦはミステリにくらべて、エンターテインメント性はじゃっかん低いと思います（キャラクター優先の作品は別として）。しかしたとえば、ダン・シモンズの『ハイペリオン』のように、ＳＦ以外の何物でもなく、エンターテインメントとしても文句のつけようのないタイプの作品が、日本人作家の手によって書かれ、それがベストセラーになれば（当然なると思いますが）、状況は大きく変わると思います。

Ｑ１１）もともとミステリ・ファンであったことから、ＳＦというものを客観的に見ることができているという自負が実はあったのですが、最近になって冷静に考えてみると、いつのまにかコアのＳＦファン向けの雑誌編集、書籍編集をしている自分に気が付いたのです。編集者としての出発点からして、つねにＳＦについての知識を吸収しつづけなくてはならない立場にあったため、編集者としての 10 年が経過した現在、不遜な言い方をすれば、私よりＳＦのことを知らない若い読者が存在するという事実にきちんと目を向けていなかったということです。やや日和見主義的な誌面刷新を繰り返した挙句に、ＳＦマガジンという媒体は、やはりコアな読者向けの小説・記事を充実させるべきだという結論に達し、より広い読者向けに『ＳＦが読みたい!』というムックを刊行しました。しかし、このガイドブックに対しても、何人かの読者からマニア向けの内容だという指摘を受けたことはかなりショックでした。一人の編集者が、初心者向けのものからコアな読者向けのものまで、さまざまなタイプの企画を手がけることは不可能なのでしょうか？　そうした意味では、以前瀬名さんがおっしゃったように、さまざまな嗜好をもつ多くの編集者が必要なのかもしれません。そのためには当然、ＳＦがジャンルとして拡大・成熟する必要があるのでしょうが。難しいところです。現在のＳＦ出版のイメージについては、ぜひ外部の編集者、読者の率直な意見をもっと聞きたいところです。具体的な企画としては、新世代の日本人作家によるＳＦ叢書を進めています。優れた作品であっても単発で刊行されたのでは、今の出版状況ではどうしても埋もれてしまいがちです。さまざまなタイプの作品を揃えたＳＦ叢書を大々的に立ち上げることで、ＳＦというジャンル自体を再度売り出していきたいと思います。この叢書のなかから前述した『ハイペリオン』のような作品が出てくることを期待しています。また翻訳作品については、肝心な作品の供給が不十分であるせいで、コアな読者が少しずつ減っているという事実は否めないと思います。そうした読者に向けて、現在ミステリのジャンルでもおこなわれているような、いまだ未訳の過去の名作の掘り起こしを積極的に進めていきたいと思います。

Ｑ１２）いまだ作品を依頼したことがない作家の方から 3 人挙げれば……

○石黒達昌氏（狭義の意味での理系小説の書き手として）

○上遠野浩平氏（その斬新な感覚を、ヤング・アダルトの枠を越えたところで発揮してもらいたいと思います）

○古橋秀之氏（そのイメージと描写力で骨太な物語を構築してもらえば、最強だと思います）

Ｑ１３）ＳＦやミステリ、ホラーを超えた、エンターテインメントのクロスジャンル化がさらに進んでいくと思いますが、やはりＳＦ出版に関わる者としては、そうした作品がやはりＳＦという冠のもとでベストセラーになることを望んでいます、というか、そうなるように努力していくつもりです（読者にはあまり関係のない、編集者としてのエゴだとは思いますが）。

＃ＳＦセミナー当日にいただきました。お忙しいところありがとうございました。

【インタビュー取材】6 社 12 名
（筆記は瀬名によるもの）

Ｑ１）角川書店　宍戸健司（30 代男性）
Ｑ２）角川ホラー文庫編集長　冒険ミステリー、ハードボイルド
Ｑ３～５）10 冊、ほとんど小説。1～2 割はＳＦ？ホラー？　科学系は棚を見て面白そうだったら。
Ｑ６）小松左京、筒井康隆、横田順彌、平井和正、山田正紀、谷甲州、光瀬龍、山田風太郎、菊地秀行、大藪春彦、西村寿行、火浦功（軽いライン）
Ｑ７）ＳＦファンかどうかという意識がない。面白い小説が好き。
Ｑ８）『凄ノ王伝説』、草上仁、ホラー文庫で小松左京・筒井康隆・中井紀夫・村田基
Ｑ９）ジャンルがリミックス化され、形ありきのものにこだわっているのは意味がない時代。小説として面白いかどうか。ＳＦだけでなく、ホラーもミステリーももともとの核になる小説は売れていない（ブラックウッド、クイーン）。
（なぜ売れないというイメージがついたのか？）小松左京や星新一などの大御所がＳＦをカテゴライズしようとした？　その頃からおかしな感じがした。
＃未確認情報。
Ｑ１０）ＳＦは、高度な知識・格式・理論的に明快、というイメージ。ハードな雰囲気がある。筒井・星はハードルが低い。
　ＳＦの人がベストテンなど選んでも、本当に面白いのか比較対照ができない。
　ミステリーやホラーは名前自体漠然としている　→読者を限定しない
　ＳＦ、純文学　→限定する。カテゴリーの枠が小さいイメージ
Ｑ１１）読者層を広げたいと思った場合、読者を限定したくない。ＳＦという言葉を使いづらい。
★とっかかりになりやすいのは短篇。ちゃんと短篇をやったほうがいい。シャープな切り口の短編集を出す。（角川ホラー文庫で実践）
Ｑ１２）草上仁・中井紀夫・村田基
Ｑ１３、１４）ＳＦを好きだという気持ちは多くの読者にあるはず。いろいろな方向のうち、一本だけをＳＦと読んでしまうからだめなのでは。

＃角川ホラー文庫の最低部数は２万部から。これは徳間デュアル文庫の最低ラインと同じ。電撃文庫、あるいは角川文庫の最低ラインより下回る。従って「ＳＦが売れない」というイメージは、上を見たときに突出した高部数の本がないことが原因か。作家・読者・編集者の努力次第。

Ｑ１）角川書店　吉良浩一（30 代男性）　文芸編集
Ｑ２）ホラー、時代、純文学、ノンジャンル
Ｑ３～５）10～15 冊、仕事では小説、個人的にはノンフィクション 3～4 冊。科学系は立花隆くらい。
Ｑ６～８）村上春樹、池澤夏樹（『夏の朝の成層圏』が好き。娘がアニメ声優であることは知らなかった)。ＳＦとの関係はない。
Ｑ９）そういうものかと思っていた。１０万部を超えるベストセラーになったものを聞いたことがない。
Ｑ１１）ＳＦという言い方をしない。凄い新人が現れるのを待って、その周辺をつくってゆく。徳間ＳＦ新人賞からスターは現れないような気がする。まだファンタジーノベル大賞のほうが可能性がある。普通のエンターテインメント系新人賞から、そういう圧倒的な新人が登場するのではないか。
Ｑ１２）池上永一

（ヤングアダルトについて問う）
　１冊も読んだことがない。岩井志麻子・山本文緒は違う世界観で大人向けに書いている。（徳間デュアル文庫やハルキ文庫ヌーヴェルＳＦのように）似たもので高年齢向けを書く作家には興味がない。そういう作家は大化けしないだろう。それに、大人向けのＳＦを書いても、ＳＦファンがずっとついてきてくれるか疑問。またＳＦではないものをその作家が書いても読んでくれるか？　　そうじゃないといやだな。
＃違うものを書いたから「化けた」のだから、前半の論調はやや本末転倒か。また、化けて「こちら」の世界観にやってこない限り評価できない限界も？
＃ホラーを求めて『パラサイト・イヴ』を読んだ人が、『八月の博物館』も読むかどうか疑問。ＳＦに限った話ではない？

　自分はおたくに対する偏見があるのかもしれないが、発言力のあるおたくがいない。ＳＦには子供の大衆文化の陰が常に見える。いつまでも大人になりたくないおたくの感じがする。
　ＳＦは自分の人生に関係ない。絵空事。それならノンフィクションで読んだ方がいい。まだファンタジーやホラーのほうが現実感がある。
＃だがホラーに現実感が伴うようになったのは、『リング』『らせん』あたりからではないか？　　ベストセラーが出れば現実感の評価も変わるのでは。

　角川書店には、やりたければ何でもやろうという雰囲気がある。ＳＦに熱意のある編集者がいれば必ず出版できる。だがまだやろうという人がいない。

Ｑ１）角川書店　匿名（30 代男性）　編集
Ｑ３～５）20 冊、５：５。いまはＳＦ小説をほとんど読まない。科学系ノンフィクションは２～３冊
Ｑ６）高校始めまではよく読んでいた。生物学者になりたかった。バラード、ディック、ハインライン。
Ｑ７）当時は好きだったがいまはＳＦファンではない。
Ｑ９）ＳＦというカテゴライズが無効になってしまった。かつてはＳＦと呼ばれていたものがミステリーやホラーになっている。
80 年代半ば～後半にかけて、ＳＦ・伝奇・ファンタジーブーム。その波が去った後（バブル終わる時期)、ホラーの流行へ。ミステリーは別の流れ。
70 年代は科学がロマンティックなものであり、ＳＦも並行して読まれていた（大阪万博)。科学がリアルなものに変わっていった頃にＳＦが色褪せていった。
Ｑ１１）ＳＦ以外の言葉を創る。いっそ「空想科学小説」では。ＳＦを書いたことのない人に頼みたい（宮部みゆき・京極夏彦・島田雅彦)。ＳＦの枠組みを変える。
ジャンル作家は成立するのか？　ＳＦばかりではいけない。その作家が面白いかどうか。面白い人にＳＦを頼む。
コアなファンはどんなジャンルでも３万人。この中でビジネスをやる方法もある。ただ、読者を広げてゆこうとすると、コアなファンは面白くないだろう。
Ｑ１４）最近は科学ノンフィクションが読まれている。「特報リサーチ２００Ｘ」など、科学に焦点を当てて面白がる人は増えている。科学に一番関心が低かった時期はもう過ぎ去った。脳科学・ゲノム科学が元気。従ってＳＦも盛り返してくるだろう。だが昔といまではＳＦも違うはずだ、科学の状況が違うのだから。
（日本ではいい研究者がいい書き手とは限らない。数人に仕事依頼が集中してしまう）

ウィリアム・ギブスンは単行本で 1 万～1 万 5 千部。だが文庫本にすると売れない。読者層が広がらない。『ディファレンス・エンジン』は読者層が違っていた（歴史ものの読者に読まれた？）

Ｑ１）講談社　唐木厚（30 代男性）　第３出版部副部長
Ｑ２～５）20 冊、７：３。科学系ノンフィクションは読まないが、宗教・民族抗争・国際紛争などの本を読む。
Ｑ６）星新一、筒井康隆。海外はアシモフ、ハインラインを読んだが、大学に入ってから読まなくなった。海外翻訳物はオリジナルテキストではないという疑念もありあまり読まない。
　中学・高校時代、クラスの 8 割は星新一を、5 割は筒井康隆を読んでいた。
Ｑ７、８）ＳＦファンであるかどうか、考えることがない。好きなのは作家の、しかもその作品であって、特定のジャンルだから読むのではない。ＳＦという考えでは編集していない。ノベルス読者が楽しめるかどうか。
Ｑ９）★大学時代、アイドル研究会に入っていた。当時は「アイドル冬の時代」と呼ばれていたが、マニアはどんな時代でも喜べる。なぜなら、危機意識について語るのは楽しいからだ。危機感を煽るのはエンターテインメントの王道。冬の時代は、送り手側は困るかもしれない。だが、マニアは楽しめるし、そもそもマニアじゃない人は冬の時代でも困らない。
Ｑ１１）会社の命令でＳＦを出せといわれることはないだろう。講談社ノベルス読者にアピールする方法を考える。
Ｑ１２）部署ごとの規制緩和をするべきだ。（ヤングアダルト←→一般文芸）
Ｑ１４）ジャンル名という看板の有効性を放棄するのはもったいない。
★ＳＦと時代小説の読者層は似ているのではないか？　どちらも物語性を重視している（ＳＦなら山田正紀、半村良、栗本薫）。一方、ミステリーは物語性を問わない（島田荘司が売れるのは物語性が強いから）。ＳＦファンは時代小説でも満足できるのではないか？　これは「神話」と関係があるかも。
＃確かに、ＳＦから時代小説に転身した作家は少なくない。ジョン・ジェイクス、ロバート・シルヴァーバーグ、宮本昌孝など。
＃現代ＳＦが物語性を重視しているかどうかは疑問。
＃さまざまなジャンルを書く作家は、ジャンルによって売れ行きが違うのか？　棚の問題？
★かつて読んだ『百億の昼と千億の夜』『弥勒戦争』のような作品をもう一度世に出したいという夢はある。それに関われるのは嬉しい。だが作家との打ち合わせでそういう話にならない。
＃「瀬名さん、そういう小説を書いてください」といわれ、「いや、いまは取材なんで、とりあえずそれは措いて……」と答えると、「措いておかれちゃうんじゃ悲しいです」と寂しげな表情をされた。

Ｑ１）講談社　匿名（30 代男性）　文芸図書編集部
Ｑ２）広義のエンターテインメント、特に傾向なし。
Ｑ３～５）20～30 冊、ほとんど小説。科学ノンフィクションは立花隆くらい？
Ｑ６）ハインライン『夏への扉』は読んだ。古典を幾つか読んでみたが、ＳＦという意識はなかった。
Ｑ７）そもそもＳＦの定義がわからないので、自分がＳＦファンかどうかわからない。
　時代小説は定義がはっきりしている（「これは時代小説ではない」とはいえない）ので、衰退の原因についても何か語れるかもしれない。だがＳＦは定義がわからないので語りにくいし、意識していない。
Ｑ９）データを見たことはないが、その言説は何となく耳にしている。「そういえばＳＦ読んでいないなあ、ＳＦと謳っている本を見かけないし」と感じる。ＳＦだから回避するつもりはない。いろいろな選択肢の中でＳＦが最善と思えばそれで行くかも。
Ｑ１１）ＳＦではないといわれるような作家に頼む。山田詠美・安部公房（故人）・花村萬月らの小説に、ＳＦ的設定のものがある。それらをＳＦとして読んだことはないが、そういう小説を書いてもらう。
Ｑ１２）わからない。ＳＦの新人賞受賞作は読まない（ミステリーの新人賞は必ず読む）。ヤングアダルト、官能、スポーツノンフィクションなど異分野から「違うことをやってみませんか？」と人材を呼ぶ場合はある。
Ｑ１４）なぜＳＦの新人賞を総合出版社がやらないのか？　わからない。だが時代小説の新人賞さえなかった（つぶれた）。
　桐野夏生・高村薫など、「ストレート小説」の力作が増え、ミステリーらしいミステリーが減っている。だが、どこかで面白い小説が生まれていれば、ミステリーがなくなってもかまわないのではないか？

Ｑ１）講談社　匿名（30 代女性）　文芸誌編集
Ｑ３～５）10 冊、６：４。ＳＦはほとんど読まない。科学系は好きだがいまはあまり読まない。以前は科学誌の編集部にいた。
Ｑ６）嫌いではないが、ＳＦだから読んだわけではない。中学や高校でファンタジーを読み、その流れでル・グィン。『闇の左手』『ゲド戦記』。長い小説が好きなので、ロシア文学など好んで読んだ。大学ではミラン・クンデラなど。いまも原書で海外文学を読む。イアン・バンクス『蜂工場』好き。
Ｑ７）ＳＦファンかどうか考える機会がない。映画では息抜きとして観たくなるが……。ＳＦがジャンルとして存在感があったのは２０年前くらい？　自分も 10～15 年前くらいから意識していない。
Ｑ９、１０）売れないと思う。売れていると聞いたことがない。編集部内で話題になることもない。ミステリー、ホラーのほうが売れている印象がある。ＳＦ的なものが身近になり、想像力を働かせる余地がなくなった？
Ｑ１１、１２）ＳＦを書いている人に頼まなくてもいいのでは。小野不由美『屍鬼』は幻想的だが生々しい。純文学でも阿部和重のような映画好きの人はどうか。
　理論社は純文学作家にヤングアダルトを書かせていて、この方向はいいかもしれない。どうすればいいか具体的にはわからないが……。

★ＳＦは男の人っぽいイメージ、硬派な「おたく」。いま出ているＳＦ小説のイメージが湧きにくい。ハヤカワの古き良き時代のＳＦならイメージしやすい。だがミステリーやホラーは古典から抜け出して新しいものを書いている。そちらはイメージしやすい。
＃女性編集者が「ＳＦは男の人っぽい」イメージを持っているのは興味深い。

　日本にはル・グィンやバンクスのような作家がいない。
　最近読んだ本で面白かったのがスコットランドの作家、ミッシェル・フェイバーの『Under the Skin』（未訳）。ＳＦ的要素が入っているが、文学としかいえない。人間でないものが手術を受けて人間として生きており、殺人を繰り返す。
　『パラサイト・イヴ』はタイトルでＳＦのイメージがした。

祥伝社　加藤淳（40 代男性）　文庫編集長
　同　　保坂智宏（40 代男性）　ノン・ノベル副編集長
書面回答以外のご意見をまとめました。

祥伝社の創設は 1970 年。ノンノベル創刊は 1973 年。半村良『黄金伝説』がＳＦ的な小説の最初だが、このときは「長篇伝奇」と銘打っていた。ＳＦという言葉を使ったのは、ごく初期の田中光二『大滅亡（ダイオフ）』くらい。山之口洋『０番目の男』で本当に久しぶりにＳＦとつけた。祥伝社が「伝奇」という言葉をつくった自負もあり、ＳＦというキャッチフレーズはあえて使わず「伝奇」でやった。

（加藤）
物語を復権させたい。４００円文庫で中篇を。短い中でいかに面白くするか。ＳＦは長篇になりがち。設定を細かく書くことが読者を縁遠くさせているのでは？　ウェルズ「タイムマシン」は中篇で、しかも心を動かす純愛がある。
編集者も周りを見て「ＳＦは売れない」と思いこんでいる。マーケティングしていない。
今後はノンジャンルを求めたい。「〇〇小説」と銘打てば売れる時代は終わった。編集者が騙されてはいけないが、まだ騙されている。
＃いつからノンジャンルが求められるようになったのか？
★ホラー小説が出てきたことが大きい。ホラーはミックス小説であり、人間の心に入ってくる。ミステリーでも人の心を追いかける。このあたりからジャンルで銘打つことが難しくなってきた。ホラーが売れたとき、「もう次からは、ジャンルでは爆発的な売れ行きを出すのは来ないだろう。これからは人で読む時代だ」と感じた。
★日本は哲学が途絶えている。現代は哲学がない。いまの若者は何もないところからスタートしている。いま、彼らは自分たちの神話がほしいのではないか？　彼らに新たな神話を創ってあげたい。子供が『エヴァンゲリオン』からの興味で古事記や聖書を読んでみたいという。

Ｑ１）タクト・プランニング　深澤真紀（30 代女性）　代表取締役
Ｑ２）森奈津子、川端裕人、『プライベート・ゲイ・ライフ』『ＳＦバカ本』など
Ｑ３～５）７：３。ＳＦ小説は一割以下。科学系ノンフィクションも一割。岩波の科学系、ファインマンなど。最先端の科学技術ものは読まない。トンデモ本に対する忌避感。昔の本のほうがその点で安心できる。
Ｑ６）小中高とＳＦばかり読んでいた。筒井・小松・星・大原・新井。新潮文庫、コバルト文庫、ソノラマ文庫で読んだ。青背（註・ハヤカワ文庫海外ＳＦのこと）も一通り読んだ。ＳＦマンガも。手塚治虫と星新一にＳＦの教養を叩き込まれた。ＳＦがなければいまの自分はない。自分をつくったのはミステリーではなくＳＦ。
Ｑ７、８）昔は間違いなくＳＦファンだった。『ＳＦバカ本』をつくった時点でファンではなく当事者になった。
Ｑ９）売れないが、その状況は間違っていると思う。ＳＦがつまらなくなったわけではないが、読者から素養・教養としてのサイエンスが消えて、理解力が劣っている。小説でＳＦを楽しめなくなっている。
Ｑ１０）★ミステリーには大沢在昌、北方謙三のような作家がいる。彼らのような人材は必要悪で、ＳＦにも必要だろう。いまのＳＦ作家たちはオーラがなさ過ぎる。貧乏くさいし、憧れられる存在であることを降りてしまっている。ジャンルにこだわる一方でジャンルを書かない。態度を決定していないように見える。
　男性作家は小説を書くようになると途端に小説を読まなくなる（馳星周がよい例）。ファン心がなくなり、ジャンル論を始めて、ジャンル的な責任感を持つようになる。女性作家と違う。
　かつてはＳＦの基礎知識（タイムマシンやワープなど）を間違いなくみんなで共有していた。いまはジュブナイルが弱くなり、共有できる教養がなくなっている。
Ｑ１１）21 世紀はヘンタイ・クィアの時代。森奈津子のヘンタイ性は簡単に理由を許さないところが凄い。ジェンダーをミステリーでやろうとしてもうまくいかないが、ＳＦならできる。
　『ＳＦバカ本』はコアなＳＦファンが怒ってくれればいいと思った。『ＶＯＷ！』の読者をターゲットに。始めの本では編者から「たわしとは何事だ！」と言い寄られたがあの装丁で押し通した。
Ｑ１２）ホラー大賞にこぼれたたくさんの作家たち。ホラーを書きたかったのか、それとも実はＳＦを書きたかったのか？　売れないのもよくわかるので頑張ってほしいともいいづらいが、書きたいものはとりあえず書いた方がいい。
Ｑ１３、１４）★ＳＦはエンターテインメントジャンルの中で一番最後に生まれ、もっとも人間に重要なもの。人類が成熟したからこそ生まれたジャンル。ＳＦだからこそ人類にいえることがある。来た道と行く道を考えさせてくれるが、前向きでも後ろ向きでもなくていい。
　最近は各局テレビでゴールデンタイムにトンデモ話を放映している。視聴者は本気でそれらを見ているはずだ。科学的素養が薄くなり、自分で判断ができなくなっている。これまで日本は科学を冒涜する風潮にあったが、ＳＦ的なものが共有できないと危ない。
　物語を作ること、それをきちんと読み解くことは一番大変。ＳＦは難解な部分とばかばかしさの両方が必ず残っていなければならない。どちらかだけではだめ。読者の読解力が下がってきている。ＳＦ映画も難しいものはなくなってしまい、情緒的な読み取りが幅を利かせている。だが本当のＳＦはテキストで読んだほうが面白いはずだ。
　ＳＦには成功する書き手・社会に影響を与える書き手が必要。すべてのエンターテインメントはＳＦマインドがないと成り立たない。

Ｑ１）メディアワークス　匿名（20 代男性）　編集
Ｑ３～５）7～10 冊。５：１。ＳＦは最近読まない。科学系はそのとき疑問に感じたことを調べるために読む。
Ｑ６）中学生で「キマイラ」「Ｄ」シリーズ。ファンタジーの延長線上で「ロードス島戦記」シリーズ。ミステリーやホラーも好き。高校で小松左京、筒井康隆。筒井康隆を読むことは最先端、というイメージ。大学ではミステリー全般。
Ｑ７）いいえ
Ｑ９、１０）ミステリーやホラーは動きのあるイメージ。ＳＦはどこを切ってもＳＦで曖昧さが少ない。いまのＳＦは読者を限定して高価格・少部数。売れるとＳＦ原理主義者が「これはＳＦじゃない」といいはじめる。
　ＳＦファンの眼目に適うこと自体がこちらを怯ませる。
Ｑ１２）いない
Ｑ１３、１４）「ＳＦ」という言葉は消してしまいたい。ノンジャンル指向。

Ｑ１）メディアワークス　匿名（40 代）　編集
Ｑ３～５）10～15 冊。ＳＦは 7～8 冊、日本作家。科学系、昔はブルーバックスなど読んだがいまはほとんど読まない。
Ｑ６）小学生ではリライトされた『宇宙船ビーグル号の冒険』。そこからステップアップするものがなく、いきなりハヤカワや創元の海外ＳＦへ。いきなり小学生でクラーク、ハインライン。中学生でバラード。中学・高校時代はＳＦファンを自称し、ソノラマ文庫には見向きもしなかった。大学ではＳＦ研究会に入る。出版社に入ってから一時期ＳＦから離れた。
Ｑ７）もともとはＳＦファン。昔はＳＦの閉鎖的な中に嵌っており、そのときはよかったが、一回離れてしまうといまは閉鎖性に疑問を持つ。いまは温かい目で見ているが、当時を振り返ると「信仰」に近いものがあった……。
Ｑ９）売れるかもしれないが、本格ＳＦとは謳いたくない。ＳＦと謳うことによって読者が限定されてしまう。それは避けたい。ＳＦは敷居の高さを感じさせるので、イラストや装幀でそれを感じさせないようにしたい。
Ｑ１２）池上永一（将来アプローチしてみたい）
Ｑ１４）「ＳＦ」を排除する必要はないが、ライトノベルもＳＦの一ジャンルだと思って見てほしい。
　ＳＦをもっと広くとらえてみようよ。あら探しばかりではなく、もっと誉めなさい。

（デュアル文庫やハルキ文庫がライトノベルの作家・イラストレーターを起用していることについて）自分たちで作家の発掘作業をすべきだ。
＃「ＳＦマガジン」もウェブの話題の後追い企画が多すぎる。自分から流行を作り上げてゆくくらいのことをしないとだめなのではないか。
　理系大学出身の作家でも、「ＳＦファンから何をいわれるかわからない、ＳＦと銘打って出す自信がない。だからいまはＳＦを書けない」と漏らす人がいる。
　ＳＦの人たちはどこか「認めてやろう」という感覚があるようだ。科学的なことばかり注目し、あまりストーリーの面白さやキャラクターのよさに目を向けてくれない印象。
　ライトノベルは学校やウェブでの口コミ効果が大きい。読者の 4 割はネット環境を持つ。ハヤカ

ワ文庫ＳＦの読者とはあまり交わらない（他のライトノベルレーベルを読んでいる）。
　現実を舞台＋αの要素が受けている。スペースオペラには固定読者がいる。剣と魔法ものは最近あまり売れていない。
★一般文芸の編集者があえてライトノベルを読む必要はないだろう。ＳＦの編集者は読んでほしいが。
＃解離していても構わない？

＃ＳＦを売ろうという意識ではなく、あくまでライトノベルとして面白いものを売っていこうという感覚のようだ。
＃大森望氏は戦略的にライトノベルをＳＦの範疇で評論している。おそらく本格ＳＦへの架け橋になるようにとの考えだろう。だが、本当にライトノベル読者はそこから本格ＳＦへ移行しているのか？　大森望氏の戦略は、ＳＦファンの読書の幅を広げることには成功したが、ライトノベル読者の読書経験を広げる手助けになっていないのでは？

Ｑ１）（匿名出版社）　匿名（30 代男性）　書籍文芸編集
Ｑ３）20～30 冊。科学系ノンフィクションは１～２冊。
Ｑ６）たくさん。日本ＳＦはだいたい読んでいる。海外ＳＦも有名どころは読んだ。
Ｑ７）いまでもＳＦファンだと思っている。ＳＦ好きだが、人と集まってＳＦの話をするのは好きではない。
Ｑ９）全般的に小説が売れていない。ミステリーやホラーも売れている人は一部。
Ｑ１１）ちょっと前までは昔のＳＦが読めなかった（絶版のため）。いま新人賞で出てきている人は昔のＳＦに近い。そこから読者を広げていきたい。
Ｑ１２）瀬名秀明、平谷美樹、山田正紀、梅原克文
Ｑ１４）映画『さよならジュピター』のあたりから、新人が出てこなくなった。高額のＳＦ新人賞もなかった。バブル時期はスポンサーが新人賞についていたが、このときＳＦは映画化しづらいという理由があったのでは？　ミステリーならドラマや映画にしやすい。

＃匿名希望のため、出版社が特定できるご発言をここで公表できません。

【電話取材】2 社 2 名
（筆記は瀬名によるもの）

Ｑ１）（匿名出版社）　匿名（20 代男性）　小説誌編集
Ｑ６）中学・高校時代は田中芳樹、筒井康隆、小松左京。海外物はヴォネガット、アシモフ。ハマるところまで行き切れない。いまはＳＦを読まない
Ｑ７）いいえ
Ｑ９）厳しい数字だと思う。いまはホラーの時代。営業側が部数を減らせということはあるだろう。本の売れ行きにかかわるような文学賞にＳＦは対象となりにくい。出版後の部数上乗せ効果を考えると、ホラー、ミステリーのほうがいい。（ただし最近は文学賞や「このミス」の訴求力もなくなってきつつある）
Ｑ１０）編集者の中に、ＳＦはだめという人も多い。
　ムーブメントになるような力のある作品がない。ＳＦ大賞も、ここ数年は面白い作品が増えているが、牽引する作品がない。
Ｑ１１）アレンジ。そのままのＳＦではなく、ＳＦ本格ミステリなどの設定で、他ジャンルと融合させる。単体では出しづらい。
　ベストテン以外の流れ（ネットなどのメディア）を効果的に使いたい。ヤングアダルトをどう一般に取り込んでゆくか（ネットでの口コミが大きい）。
Ｑ１２）恩田陸、西澤保彦、三雲岳斗、森奈津子
Ｑ１３、１４）筒井康隆、小松左京のような人が若い世代から出てきてほしい。紀伊國屋書店の新刊平台コーナーで、他のミステリーやホラーの新刊と一緒に並び、それらではなくこの作品を買いたいと思わせるようなものがない。

＃匿名希望のため、出版社が特定できるご発言をここで公表できません。

Ｑ１）（匿名出版社）　匿名（30 代女性）　小説誌編集
Ｑ３）50 冊。７：３。ＳＦは読まない。科学ものはスピリチュアル・ヒーリング系。
Ｑ６）ほとんど読まない。男の子っぽいものがあまり好きではない（＃ＳＦは男の子っぽいというイメージがある）。映画ではＳＦ的要素のある作品を観ることはあるが、エンターテインメントだから。
Ｑ７）いいえ
Ｑ８）ほとんどない。
Ｑ９）小説を読む価値観が、ＳＦファンと自分は異なるのだと思う。自分は人間の情や心の動きを読む。作家や作品の内容で読むのであって、ジャンルにこだわって読むのではない。ＳＦはあくまでエンターテインメントの一要素。
　最近はホラーや幻想に注目が。ただ、ＳＦ的モチーフを取り込んだ作品（作家）は増えている。21 世紀になったし、アトムの生まれる日も近い。ＳＦ的なものへの関心は高まるかも。
Ｑ１１）ゲーム、アニメなどのメディアミックス。
　コアな本好きは 2 万人しかいない。コギャルがＳＦだと言い出すようになったら売れる。普段読まない人が読むとき、ジャンルで読んでいるわけではない。ノンフィクションも含めた話題性のある企画が大事。
Ｑ１２）小説として面白いもの、新しい展開があるもの。山田正紀、瀬名秀明。篠田節子。
Ｑ１４）ＳＦ的な小説も温かい目で見てもらいたい。
★ヤングアダルトはあまり読まない。

＃匿名希望のため、出版社が特定できるご発言をここで公表できません。

５．資料【ウェブアンケート調査】

ＳＦセミナーアンケートは、2001 年 4 月 7 日から 23 日までＳＦセミナーウェブページにて実施した。アンケートフォーム（130～134 ページ参照）の掲載場所は以下の通り。瀬名秀明のＨＰでも告知し、リンクを張った。それ以外に瀬名から積極的な告知は避けた（偏重した意見が大勢を占めないようにするため）。

http://www.sfseminar.org/sp/s-enq-form.html

すべての投稿は、瀬名秀明とＳＦセミナースタッフに自動転送された。
転送フォームは以下の通り。

@@begin　（註・次ページ以降のコピーでは削除）
@@serial: 通し番号（自動的にカウントする）。
@@name: 名前　（註・次ページ以降のコピーでは削除、ただしプロだと自己申告されている方は残した）
@@age: 年齢　10 代未満（UNDER）、10 代　（1x）20 代（2x）……60 代（6x）、それ以上（OVER）
@@sex: 性別　男（m）、女（f）
@@Q1:　知らなかった（a）知っているが参加したことはない（b）、１～２回参加したことがある（c）、ときどきあるいはよく参加している（d）　選択肢（ラジオボタン）の値は全て左から　a～。以下同じ。
@@Q2_1: Ｑ２の最初のボックス
@@Q2_2: 同じく２つめのボックス
@@Q2_3: 同じく３つめのボックス
@@Q3: ほとんど読まない（a）、１～２冊（b）、３～５冊（c）、５～１０冊（d）、１１～２０冊（e）、２１～３０冊（f）、３１～５０冊（g）、それ以上（h）
@@Q4: Ｑ３に同じ
@@Q5: Ｑ３に同じ
@@Q6: ほとんど読まない（a）、１～２冊（b）、３～５冊（c）、５～１０冊（d）、１１～２０冊（e）、２１～３０冊（f）、３１～５０冊（g）、５１～１００冊（h）、１０１～２００冊（i）、２０１～５００冊（j）、それ以上（k）
@@Q7_1: はい（a）、いいえ（b）、わからない（c）
@@Q7_2: チェックボックスをチェックすると値は　on
@@Q8_1: 「パラサイト・イヴ」　とても面白かった（a）、面白かった（b）、ふつう（c）、あまり面白くなかった（d）、つまらなかった（e）、読んでいない（f）
@@Q8_2:　「BRAIN　VALLEY　Ｑ８＿１に同じ
@@Q8_3: 「八月の博物館」　Ｑ８＿１に同じ
@@Q8_4: 「小説と科学」　Ｑ８＿１に同じ
@@Q8_5:　「神」に迫るサイエンス」　Ｑ８＿１に同じ
@@Q8_6: 「ミトコンドリアと生きる」　Ｑ８＿１に同じ
@@Q8_7:　「Gene」Ｑ８＿１に同じ
@@Q8_8: 「ハル」　Ｑ８＿１に同じ
@@Q9: 自由記述は、改行もそのまま記述された通りに表示。
@@Q10:
@@Q11:
@@Q12:
@@Q13:
@@Q14:
@@Q15:
@@Q16:
@@Q17_1: Ｑ１７の最初のボックス
@@Q17_2: 同じく２つめのボックス
@@Q17_3: 同じく３つめのボックス
@@Q18:
@@access_info:　IPアドレスやブラウザの情報　（註・次ページ以降のコピーでは削除）
@@end　（註・次ページ以降のコピーでは削除）

有効回答数は 72。アンケート集計後にひとつ回答があったが、それは集計に含めていない。
135 ページより、有効回答のすべてとアンケート集計後に得られた回答１つを示す。

4月23日を持ちまして、アンケートは締切りました。多数のご協力ありがとうございました。
5月3日のＳＦセミナー2001をどうぞお楽しみに。当ウェブでも何らかの形でご報告する予定です。

「ＳＦセミナー」アンケート調査ご協力のお願い

瀬名秀明

【ＳＦセミナーご参加予定のみなさま、ＳＦファンのみなさま、ならびに、ＳＦはあまり知らないけれど本を読むのは好き……というみなさまへ、文芸出版活性化のためのお願い】

突然のお願いで失礼いたします。私は作家の瀬名秀明（せな・ひであき）と申します。今回、ＳＦセミナー実行委員会からの依頼を受け、来る5月3日に開催されるＳＦセミナーにて講演をおこなうことになりました。

私はこれまで3冊の長編小説と幾つかの短編、さらに科学ノンフィクションや文庫解説などを書いてきました。科学と物語の両方を仕事としていることもあり、ＳＦファンの皆様からの反響も戴いております。しかしもちろん、読者からの評価はさまざまで、一部のＳＦファンからは強いご批判も戴いて参りました。

ＳＦ映画はいまでもハリウッド産のものを中心に隆盛を極めているのに、なぜかＳＦ小説は「マニア向けの閉鎖的なジャンル」というイメージがつきまとってしまっています。私自身は10代の頃、日本のＳＦ作家の本を楽しんで読んでいましたが、一方ではどうしても海外ＳＦに馴染むことができず、苦手意識がついてしまい、ミステリーやホラーに流れて行ってしまった経緯があります。「センス・オブ・ワンダー」「こんなものはＳＦじゃない」といったＳＦ特有の発言にも違和感がありました。作家になってからも、なぜ自分はＳＦが苦手なのだろう、と考えさせられる機会が多かったのです。

そこで、今回の講演では「『ＳＦとのファースト・コンタクト　―瀬名秀明、ＳＦに対するアンビバレントな思いを語る―』」と題して、これまで私がＳＦに対して考えてきたことや疑問に思ってきたことを語り、また同時に読者からの異論・反論を受けることによって、ＳＦ小説の現状と未来について考えてみたいと思っています。

皆様にお願いがございます。ＳＦの観点から瀬名秀明という作家あるいはその作品を見て、何が問題なのか、何が評価できるのか、何をどのように改善すべきなのか、をぜひ教えていただきたいのです。また、ＳＦ小説全般についても、今後の活性化のためによいアイデアがございましたらぜひこの機会にご提案下さい。私はＳＦ作家であるつもりはありませんし、ＳＦファンの方々だけに小説やノンフィクションを書いているつもりもありませんが、これからもＳＦとは長く付き合ってゆかなければならない立ち位置にあります。ＳＦ側からは、私に対して不満に思うことがおそらくたく さんあるでしょう。またＳＦに特に思い入れ

のない方は、私がこういった違和感を覚えていること自体に驚かれるかもしれません。今回の講演では皆様からいただいたご意見をもとに、私なりの考えを公表します。どうかご意見をお寄せいただけないでしょうか。ＳＦセミナーにご出席いただける方はもちろんですが、ＳＦなんてほとんど読んだことがないという方からのご意見も歓迎いたします。

以下にアンケートフォームをまとめました。皆様からいただいたご意見は、どんなに辛辣なものでも大切に扱います。また今回得られた結果は講演終了後に懇意の文芸編集者などにも伝え、ＳＦを活性化させるための資料として役立てたいと思います。文芸出版の今度にとって有意義な講演となるよう、最大限度力いたしますので、ぜひご協力いただければ幸いです。　どうぞよろしくお願い申し上げます。

付記：現在、このアンケートと並行して、懇意の編集者の皆様にＳＦ出版の現状について聞き取り調査をおこなっています。講演ではこの結果も併せて御報告いたします。

誠に勝手ながら、集計作業の都合上、アンケートの締切を4月23日とさせていただきます。ご了承下さい。また、以下のアンケートにおいて、「ＳＦ」の定義は皆様ご自身でお決めいただいてかまいません。

4月23日を持ちまして、アンケートは締切りました。

■質問は Q1～Q18 まであります。記入が終わりましたら，最後に送信ボタン 送信 を押してください。

・お名前（ペンネーム、匿名希望などでも可）

・年齢 選んでください ・性別 ○ 男 ○ 女

Q1) 「ＳＦセミナー」をご存じですか

○ 知らなかった ○ 知っているが参加したことはない ○ １～２回参加したことがある ○ ときどきあるいはよく参加している

Q2) 普段よく読む小説ジャンルを3つまでお書き下さい

-
-
-

Q3) 一カ月に何冊程度本を読みますか

○ ほとんど読まない ○ １～２冊 ○ ３～５冊 ○ ５～１０冊 ○ １１～２０冊 ○ ２１～３０冊
○ ３１～５０冊 ○ それ以上

Q4) そのうち「ＳＦ小説」はどのくらいですか

○ ほとんど読まない ○ １～２冊 ○ ３～５冊 ○ ５～１０冊 ○ １１～２０冊 ○ ２１～３０冊
○ ３１～５０冊 ○ それ以上

Q5) そのうち「科学ノンフィクション」はどのくらいですか

○ ほとんど読まない ○ １～２冊 ○ ３～５冊 ○ ５～１０冊 ○ １１～２０冊 ○ ２１～３０冊
○ ３１～５０冊 ○ それ以上

Q6) 「ＳＦ小説」をこれまでどのくらい読んできましたか

○ ほとんど読まない ○ １～２冊 ○ ３～５冊 ○ ５～１０冊 ○ １１～２０冊 ○ ２１～３０冊
○ ３１～５０冊 ○ ５１～１００冊 ○ １０１冊～２００冊 ○ ２０１～５００冊 ○ それ以上

Q7) あなたは「ＳＦファン」ですか

○ はい ○ いいえ ○ わからない

☐ あなたが作家・文芸評論家・ＳＦアニメ製作スタッフなど、「ＳＦ」に関係したお仕事をなさっている場合は、左のボックスをチェックしてください

Q8) 瀬名秀明の著作について、評価をお願いいたします

パラサイト・イヴ	○ とても面白かった ○ 面白かった ○ ふつう ○ あまり面白くなかった ○ つまらなかった ○ 読んでいない
BRAIN VALLEY	○ とても面白かった ○ 面白かった ○ ふつう ○ あまり面白くなかった ○ つまらなかった ○ 読んでいない
八月の博物館	○ とても面白かった ○ 面白かった ○ ふつう ○ あまり面白くなかった ○ つまらなかった ○ 読んでいない
小説と科学	○ とても面白かった ○ 面白かった ○ ふつう ○ あまり面白くなかった ○ つまらなかった ○ 読んでいない
「神」に迫るサイエンス	○ とても面白かった ○ 面白かった ○ ふつう ○ あまり面白くなかった ○ つまらなかった ○ 読んでいない
ミトコンドリアと生きる	○ とても面白かった ○ 面白かった ○ ふつう ○ あまり面白くなかった ○ つまらなかった ○ 読んでいない
Gene（アンソロジー『ゆがんだ闇』所収の中篇）	○ とても面白かった ○ 面白かった ○ ふつう ○ あまり面白くなかった ○ つまらなかった ○ 読んでいない
ハル（アンソロジー『２００１』所収の中篇）	○ とても面白かった ○ 面白かった ○ ふつう ○ あまり面白くなかった ○ つまらなかった ○ 読んでいない

Q9) 瀬名秀明の小説についてのご意見・ご感想を、できればあなたのＳＦ観と絡めてお書き下さい

Q10) 瀬名秀明の科学ノンフィクション、あるいは科学関係の講演・対談・エッセイ執筆活動についてのご意見・ご感想を、できればあなたのＳＦ観と絡めてお書き下さい

Q11) 瀬名秀明の文芸評論活動についてのご意見・ご感想を、できればあなたのＳＦ観と絡めてお書き下さい

Q12) 瀬名秀明がこれまで雑誌等で公表してきたＳＦに対する意見や考えについて、思うところがあればお聞かせ下さい

Q13) この他、瀬名秀明に対してご意見があれば、ご自由にお書き下さい

以下はＳＦ小説全般についての質問です。

Q14) あなたの「ＳＦ小説」のイメージをお聞かせ下さい

Q15) 「ＳＦ小説は売れない」という言説について、どう思われますか。「売れない」とお考えの場合、なぜ「売れない」のだと思いますか。あるいは「売れている」とお考えの場合、なぜこのような言説が蔓延しているのだと思われますか

Q16) 「ＳＦ小説」をいまよりもっと活性化させ、売るためには、どうすればよいと思いますか

Q17) あなたのお好きなＳＦ作家を3人までお書き下さい

-
-
-

Q18) この他、いまの「ＳＦ」に対してご意見があればお聞かせ下さい

送信 ありがとうございました。

4月23日を持ちまして、アンケートは締切りました。

【全有効回答】

@@serial:　1
@@name:（削除）
@@age:　4X
@@sex:　male
@@Q1:　d
@@Q2_1:　ＳＦ
@@Q2_2: ミステリ
@@Q2_3:
@@Q3:　d
@@Q4:　d
@@Q5:　b
@@Q6:　k
@@Q7_1:　a
@@Q7_2:
@@Q8_1:　f
@@Q8_2:　b
@@Q8_3:　f
@@Q8_4:　b
@@Q8_5:　f
@@Q8_6:　f
@@Q8_7:　f
@@Q8_8:　f
@@Q9: 面白い部分もたくさんあるが、面白いだけ余計にＳＦとしての
物足りなさを感じる気もする。でも無理してＳＦファンに迎合する必要はないと思う。
@@Q10: ＳＦ観とは関係ないけどどんどん進めてくだされば よいと
思う。
@@Q11: すみません、この分野の活動については知りません。
@@Q12: すみません、読んでいません。
@@Q13: あまりＳＦファンのいうことを気にする必要はないと思います。
@@Q14: ぶっ飛んだ感じ。幻惑された感じ。
あるいは、現代の諸問題をちょっと違った立場から考えるもの。
@@Q15: うれないとおもう。というか、ＳＦについてはよくない作品
は売れないと思う。
@@Q16: つまらない作品は売れなくてもいい。
@@Q17_1: Ｕ・Ｋ・ル・グィン
@@Q17_2: Ｌ・Ｍ・ビジョルド
@@Q17_3: グレッグ・イーガン
@@Q18: 実は売れ初めている気がする。

@@serial: 2
@@name: （削除）
@@age: 2X
@@sex: female
@@Q1: d
@@Q2_1: ＳＦ
@@Q2_2: ミステリ
@@Q2_3: 文学
@@Q3: d
@@Q4: c
@@Q5: a
@@Q6: j
@@Q7_1: a
@@Q7_2:
@@Q8_1: c
@@Q8_2: f
@@Q8_3: f
@@Q8_4: f
@@Q8_5: f
@@Q8_6: f
@@Q8_7: f
@@Q8_8: f
@@Q9: 私は『パラサイト・イヴ』しか読んでおりません。残念ですが、『パラサイト・イヴ』を読んだときと同じ思いをするかもしれないと思うと、以後の貴作品は読む気になれませんでした。もう随分前のことになりますし、現在手元に本がありませんので、あの時の気持ちを正確にお伝えできるかどうかわかりませんが、『パラサイト・イヴ』に関して少し書かせていただきます。
まず、小説自体としては、読んでまずまず面白い作品だと思いますし、腎臓移植に関する部分にはとても考えさせられました。ですが、私はあの作品はＳＦではないとはっきり思います。ＳＦの一要素として、たとえ見かけだけとしても、論理的整合性があるように話をつける、というのがあると思いますが、あの作品では最後にいくにつれ、整合性からはほど遠いものになっています（それが悪いとか良いとか言う問題ではありません）。単にホラーと思えばよいと思うのですが、ＳＦとして宣伝されれば、あれはＳＦではない、と騒ぎたくなるのも無理はないと思います。特に私はファンタジーが嫌いですし、ホラーにも興味はないので、「嫌いなものが好きなものの名をつけられて宣伝されている」感じがして、心穏やかではいられませんでした。
瀬名さんの著作とＳＦとの関係という点では、ログをお示しできないのが申し訳ないのですが、角川ＨＰでの議論があった頃に、菊池誠さんが発言しておられたことに心から共感しました。
『パラサイト・イヴ』に関してですが、利己的遺伝子仮説を、その仮説を知らない人がみれば全く誤解するような書き方で取り上げているのも、とても気になる点でした。瀬名さんから見ればそれは承知の上のことでしょうが、実際に誤解されることの多い仮説を、誤解を助長するような方向であのように小説に取り上げられた点に、当時激しい怒りを覚えました。特に「著者は現役科学者」と大々的に取り上げられていたことでもありますし（瀬名さんご自身に、取り上げられ方に責任があるとは思っていませんが）きつい言い方をすれば「詐欺的行為」のように感じたわけです。数年前のウェブでのやり取りを見るまで、利己的遺伝子仮説をあのように扱われた真意は全く不明でした。そして、今となっても、解説等でも何の説明もない、あのような取り上げ方は私はどうかと思います。私にとっては、そのことも、あの作品を「ＳＦ」と取り上げられることに「とんでもない！」と声高に反論したくなった一因となっています。
@@Q10:
@@Q11:
@@Q12: 年下の私がこのようなことを申し上げるのは失礼だとは思いますが、ウェブページや雑誌等で、瀬名さんの発言を目にするたびに、本当に真面目な良い方なんだなあ、と思っております。
「ＳＦ」を書かれるつもりのない瀬名さんが、なぜそこまでこだわりを持たれるのか不思議ですが（瀬名さんはＳＦを書いているつもりはない、ＳＦファンは瀬名さんの作品をＳＦではないと言う。瀬名さんの作品をＳＦと関連づけなければ平和なのでは？と傍から見ていると思ってしまいます）このことによって色々な人のＳＦに対する考え方、感じ方が議論されるのは、とても楽しいことだと思います。セミナーでの講演もとても楽しみにしています。
@@Q13:
@@Q14: 読んでいて「これがＳＦ」（つまり、「センス・オブ・ワンダー」です…）と感じられるもの、そしてそこまでいかないが、道具立てや感じが、それらと共通しているものの総体。
他のイメージとしては、人前では口に出せない、とか、青い、とか。
@@Q15: 売れないのだと思います。売れないのは、読む読者が少ないからだと思います。
@@Q16: 面白い（質の高い／面白いと認める人が多い）ＳＦを書く作家が増えれば、私の考える「活性化」になると思います。売れないので書かせてもらえない、という点ですが…どうも私は本当に素晴らしい作品ならＳＦでも何でも世に出るのではないか…と楽観的に考えています。
今よりもっと「売る」という方法ですが、商業的戦略としてどうすればよいのかはわかりません。最近徳間デュアル文庫や角川でＳＦが売られるようになり、嬉しく思っていますが、私にできることはなるべくその企画がぽしゃらないように、出たらきちんと買うことぐらいです。
@@Q17_1: ジョン・ヴァーリー
@@Q17_2: コニー・ウィリス
@@Q17_3: ロバート・Ａ・ハインライン
@@Q18: 特に不満はありません。

@@serial: 3
@@name: 堺三保
@@age: 3X
@@sex: male
@@Q1: d
@@Q2_1: 幻想小説全般（ＳＦ含む）
@@Q2_2: ミステリ全般
@@Q2_3: 時代小説
@@Q3: g
@@Q4: d
@@Q5: d
@@Q6: k
@@Q7_1: a
@@Q7_2: on
@@Q8_1: d
@@Q8_2: b
@@Q8_3: c
@@Q8_4: c
@@Q8_5: c
@@Q8_6: c
@@Q8_7: a
@@Q8_8: c
@@Q9: 真摯に書いているのはわかるのですが、その分、ホラーやＳＦ的なウソの部分と事実の部分の記述の差を感じるときがあります。
もっと厚顔にウソとほんとを混ぜ合わせても良いのではないでしょうか。
「Ｇｅｎｅ」のような短篇を「ＳＦオンライン」でもぜひ一度お願いします。
@@Q10: 啓蒙活動として期待しております。
「ＳＦオンライン」でもぜひ一度お願いします。
専業になられたということで、虎視眈々と機会をうかがっております。

@@Q11: わたしは批評家の数だけ「オレＳＦ」があってよい派なので、瀬名さんのように外部からＳＦについて意見を述べるというスタンスの方がいるのも良いことだと思います。
ただ、これは釈迦に説教かもしれませんが、作家があまり批評などを書くと自分の発言に縛られて自作の執筆に影響が出ることもあるので、瀬名さんには批評よりも創作に専念していただければとも思います。
@@Q12: たぶん瀬名さんにはＳＦファンが言うところの「ＳＦ」に対する違和感があるのだと思うのですが、同じように、ＳＦファンの私にとっては瀬名さんの発言に違和感があります。問題は「なんか違うなあ」とお互いに思っていることではないでしょうか。
ただし、この差をきちんと言語化できる自信はないのでした。

@@Q13: 今後も旺盛な執筆活動を期待しております。
「ＳＦオンライン」でもぜひ一度……（しつこい＞自分）

@@Q14: 科学についての小説、科学による社会の変化についての小説、科学と個人の関わり合いについての小説。それらすべて、いわゆる近代合理主義が生み出した「科学」にまつわるあらゆる物語。

@@Q15: とりあえず自分はＳＦの看板を背負うことで、仕事に不自由したこともなく、低収入ながらそこそこ普通に生活しているので、問題を感じたことがありません。だから、この言説については実感がないのでよくわかりません。

@@Q16: 要は「ＳＦを書きたい」と思っている作家がＳＦを書き、それに読者がつけばいいだけのことで、そういう意味では一去年あたりから活性化してきているのではないでしょうか。
基本は「ＳＦ作家でありたい」と思う新しい作家がＳＦを書いて次々にデビューすることが、ＳＦというジャンルが活性化していると世間にアピールするために大事なことだと思います。
ミステリの分野における「新本格」ブームが良い先例だと思います。

@@Q17_1: アーサー・Ｃ・クラーク
@@Q17_2: ブルース・スターリング
@@Q17_3: ジャック・ヴァンス
@@Q18: ミステリが「本格」「ハードボイルド」「サイコスリラー」などと実は細分化されそれぞれに違う読者層がいるように、ＳＦもまたいろいろなサブジャンルの集合であり、それぞれに違う読者がいるのだということをもっとアピールしていけば、コアなファン以外の人も気楽になるのかなあと思っています。どうも人もジャンルも外からは一枚岩みたいに見られがちなのが逆に良くないのかも。いや、仲がいいのはいいことなのですが。

@@serial: 4
@@name: 匿名希望
@@age: 3X
@@sex: male
@@Q1: a
@@Q2_1: ヤングアダルト
@@Q2_2: 翻訳ＳＦ
@@Q2_3: ポルノ小説
@@Q3: d
@@Q4: c
@@Q5: a
@@Q6: j
@@Q7_1: b
@@Q7_2: on
@@Q8_1: c
@@Q8_2: e
@@Q8_3: f
@@Q8_4: f
@@Q8_5: f
@@Q8_6: f
@@Q8_7: f
@@Q8_8: f
@@Q9: 瀬名秀明は、エンターテイナーではない。
アイデアには鮮烈なものがあるのだが、それを話に組みこんで使ってゆく段階で、大事なことをおざなりにしてしまっている気がする。
ＳＦの持つセンスオブワンダーという味で読者を楽しませる趣向なのか、それとももっと純粋にアイデア勝負で楽しませる姿勢なのか、単に自分の書きたい物を書きつらねているだけなのか、どの路線なのか、どうもはっきりしない。アイデアを得た時点で有頂天になってしまっているようにも見える。
ちなみに既読作品のチェック項目で、「BRAIN　VALLEY」以降がすべて「読んでいない」になっているのは、「BRAIN　VALLEY」があまりにつまらなくて完読できなかったため。
@@Q10: 未読。ただし今後読んでみたいと思っている。
@@Q11: 未読。
@@Q12: 未読。
@@Q13: Ｑ９にかえさせていただきます。
@@Q14: 翻訳ＳＦでは、アイデアが楽しい。センスオブワンダーの新しい領域を開いてくれるものが多い。若干の欠点があっても気にならない。
日本ＳＦでは、アイデアが貧困。アイデアなしでも読める小説になっていればよいのだが、話自体がつまらないものが多すぎ。
人間がかけてない。アクションシーンのひとつもかけない。ＳＦである以前に必要な、小説の基本であるエンターテイナーの仕事をさぼっているものが多すぎ。
@@Q15: つまらないから、売れない。単純な理屈。

言いかえるなら、特定の人にしか「おもしろい」ように書いていない。しかも作家の側にまるで自覚がないか、自覚があってもあえて甘んじているかの、どちらか。
つまりはじめから「売る気」がない。売れなくてあたりまえ。
@@Q16: 極論でかまわないのなら……。

ＳＦ文壇系の団体の解体。（例「日本ＳＦ作家クラブ」）
ＳＦ紙の廃刊。ＳＦ文庫の廃止。囲い込んだごく少数のマニアに向けて発信するのではなく、ＳＦファンでもなんでもない一般大衆に向けて作品を発表しざるを得ない体制を作りだす。
正常な淘汰圧をかけることで、ＳＦである以前にまず「おもしろい小説」を書けない作家は、自然淘汰にかかって消滅するようにする。

そうすれば、この現状をどうにかできるだろうか……。
@@Q17_1: 野尻抱介
@@Q17_2: アーサー・Ｃ・クラーク
@@Q17_3: チャールズ・シェフィールド
@@Q18: 「ＳＦ」と、「ＳＦっぽいもの」を混同している者が多すぎ。
いわゆるＳＦ作家ならば「ＳＦ」がわかっているわけだが、その種の人々はエンターテイナーにはなろとしない。
アニメ、ゲーム、そのほかの畑の人々はＳＦのなんたるかをわかっていなくて「ＳＦっぽいもの」を出して平気でいるが、だがしかしエンターテイナーには徹している。（「ＳＦっぽいもの」の例：独自進化したはずの二宇宙種族間で、男女が恋に落ちて子供まで作る）
ＳＦをわかっていて、エンターテイナーに徹している人間は、限りなく少ない。

@@serial: 5
@@name: 山之口　洋
@@age: 4X
@@sex: male
@@Q1: b
@@Q2_1: 純文学
@@Q2_2: 歴史小説
@@Q2_3: ＳＦ
@@Q3: d
@@Q4: a
@@Q5: b
@@Q6: k
@@Q7_1: b
@@Q7_2: on
@@Q8_1: a
@@Q8_2: c
@@Q8_3: f
@@Q8_4: f
@@Q8_5: f
@@Q8_6: f
@@Q8_7: b
@@Q8_8: f
@@Q9: 小説は究極的には人間の感情を書くものと思います。ＳＦ的設定は、人間感情の新たな面を描く、またはより深く描くためのものではないでしょうか。その意味で、『パラサイト・イヴ』は小説の新たな可能性を拓いたものであり、大変興味深く読みました。
ただ、「文学で科学する」（でしたっけ）という瀬名さんの方向性には、「なぜ、小説でなければならないか」と言う問題が横たわっているように思います。
たとえば、『BRAIN　VALLEY』で扱われた脳科学は、啓蒙的な科学書の面白さに対抗するのがとても難しい分野であると思うのです。たとえばデネットとか、もっと初心者向けなら立花隆とか...
たぶん、ＳＦ全般に内在する問題なのでしょうが、瀬名さんの場合、科学的に見てリアリティのない領域に逃げられる方ではないと思いますので、このことについてどんなお考えをお持ちなのか、興味をもちました。

@@Q10:
@@Q11: ｂｋ１のコラム、楽しく拝読しています。
ぼくも文芸欄でやっていますので、えらそうなことは言えないのですが、実作者は、できれば他人の本の評論をするよりは、自分の作品を書くべきであるというのが、ぼくの意見です。
@@Q12:
@@Q13: このアンケートの存在自体、驚きました。
創作についてとても真摯に考えておられるのですね。

@@Q14: 科学的な設定を取り入れることで、今までの小説における人間描写の枠を広げた小説。
@@Q15: コアなＳＦについて言えば、初心者がいきなり読んだ場合の「こりゃなんじゃ！」と言うダメージが、他のジャンルに比べて大きい。
ＳＦ全般に関して言うと、そのジャンルに属する小説は売れていないが、他のジャンルの小説に与えた影響分を考慮すれば、衰退しているとは言えないと思う。
@@Q16: すみません、その目的意識には、共感できません。
@@Q17_1: イタロ・カルヴィーノ
@@Q17_2: 安部公房
@@Q17_3: ドナルド・バーセルミ
@@Q18: もっと、門戸を開いて、裾野を広くすべきだと思う。
ミステリの場合、テレビの「○曜サスペンス」なんてものまでが裾野としてあり、本なんか読まない一般のヒトを本のほうに引き寄せるしかけができているような気がする。コアなファンも、初心者を馬鹿にはしない。
ＳＦの場合には、裾野がない。７０年代、８０年代のアニメが裾野だと言うかもしれないが、現実には、ＳＦ者が思うほどには見られていない。
かつ、ＳＦの内側にいる人たちの、「こんなものはＳＦじゃない」と言う峻別がきびしすぎ、かつ、「ＳＦ者」としての通過儀礼もきつすぎると思う。

@@serial: 6
@@name: （削除）
@@age: 2X
@@sex: female
@@Q1: a
@@Q2_1: 純文学
@@Q2_2:
@@Q2_3:
@@Q3: b
@@Q4: a
@@Q5: a
@@Q6: a
@@Q7_1: c
@@Q7_2:
@@Q8_1: b
@@Q8_2: f
@@Q8_3: b
@@Q8_4: a
@@Q8_5: f
@@Q8_6: c
@@Q8_7: b
@@Q8_8: b
@@Q9: 定義があいまいなので、どこまでがＳＦなのかわからない。
瀬名さんは難しい分野でも読者にわかりやすく書いてくれるので有り難い。
その分野に詳しくなくても興味が持てそうな気になる。
@@Q10: 講演などがどこであるのかよくわからない。
またどうしたら参加できるのかわからない。
@@Q11: 特になし。
@@Q12: 特になし。
@@Q13: 頑張ってください。
@@Q14: 硬い。
よくわからない。
難しそう。
@@Q15: 取っつきにくいイメージがあるからだと思う。
@@Q16: 広告、インターネットなどの媒体を大いに活用する。
@@Q17_1:
@@Q17_2:
@@Q17_3:
@@Q18: 特にない。

@@serial: 7
@@name: (削除)
@@age: 3X
@@sex: male
@@Q1: c
@@Q2_1: SF
@@Q2_2: 時代小説
@@Q2_3: 推理小説
@@Q3: d
@@Q4: b
@@Q5: a
@@Q6: k
@@Q7_1: c
@@Q7_2:
@@Q8_1: d
@@Q8_2: d
@@Q8_3: f
@@Q8_4: a
@@Q8_5: f
@@Q8_6: f
@@Q8_7: f
@@Q8_8: f
@@Q9:
@@Q10:
@@Q11:
@@Q12: SFファンと呼ばれる人々に対する評価は
正しいと思う。
@@Q13: あまりファンと呼ばれる人と交流することなく
作品に注力してください。
@@Q14:
@@Q15: 正確な数字を知ってるわけではないので本当に売れていないか
否かはよくわからないが、売れてないように見える。
ともあれ、世の中には SF と同じ程度に面白い小説は
ごろごろしているのだから SF だけがどかどか売れるわけは
ないと思う。
@@Q16: なんでも SF という。
@@Q17_1: 鈴木いづみ
@@Q17_2: ウィリアム・ギブスン
@@Q17_3: マイク・レズニック
@@Q18:

@@serial: 8
@@name: (削除)
@@age: 2X
@@sex: male
@@Q1: c
@@Q2_1: SF
@@Q2_2: 科学
@@Q2_3: 教養(歴史、雑学など)
@@Q3: d
@@Q4: c
@@Q5: b
@@Q6: j
@@Q7_1: c
@@Q7_2:
@@Q8_1: c
@@Q8_2: b
@@Q8_3: f
@@Q8_4: f
@@Q8_5: f
@@Q8_6: f
@@Q8_7: f
@@Q8_8: f
@@Q9: まぁ瀬名さんの思い通りにやって欲しいと思います。
@@Q10: フィクションだろうが、ノンフィクションだろうが、言葉に過ぎないと思うことがあります。そこでは事実かどうかというより、「説得力」しか問題でないと思っています。

どんどん活動していただければ面白いと思います。
@@Q11: 瀬名さんは最先端のナレッジに関わりつつ、小説に反映できる立場におられるようで、そこが魅力に見えます。

それは高校生以下でファンジンにも必ずしも関係のない、ちょっと SF が好きな若い人に、力強くアピールすると思うのです。

我ながら面白味のない回答ですが、私が小さかったころには、真面目な科学啓蒙書と想像力豊かな SF をものすることができる人に憧れたものです。
@@Q12: 基本的には支持します。
@@Q13:
@@Q14: 科学。技術。未来予測。変化。ホラ話。夢。説得力。

未来世界だとか宇宙だとかを舞台にした、冒険だとか恋愛だとか成長物語だとかでも構いません。
@@Q15: 売上を知っているのは出版社や書店の方々だけだと思うので、なんと言うか、私は SF のような感覚で楽しんでいます。

どんな話題であれ、何らかのコミュニティに属した瞬間に、◎◎は売れないだのつまらんだのと、聞かされるようになる気がします。SF もあまり例外ではないのだと思います。

本当に売れていないのなら、それは様々な原因が複合的に組み合わさった結果なのだろうとしか考えられません。
@@Q16: 費用が見合うかどうかわかりませんが、やはり宣伝しかないと思います。なくても困らないものなので。

ところで私が欲しいサービスは、少々単価が高くても、今までに出版された本が同じ内容とデザインで欲しいときに必ず手に入ることです。

後ろ向きな意見なのですが、欲しいものが欲しいときに必ず手に入るように準備できないと、ますます売れなくなってゆくと思います。時間は有限で、目の前にあるもので楽しみますから。
@@Q17_1:
@@Q17_2:
@@Q17_3:
@@Q18:

@@serial: 9
@@name: 柏崎玲央奈
@@age: 3X
@@sex: female
@@Q1: d
@@Q2_1: ＳＦ
@@Q2_2: やおい
@@Q2_3: ミステリ
@@Q3: f
@@Q4: d
@@Q5: c
@@Q6: j
@@Q7_1: a
@@Q7_2: on
@@Q8_1: b
@@Q8_2: b
@@Q8_3: b
@@Q8_4: c
@@Q8_5: a
@@Q8_6: f
@@Q8_7: b
@@Q8_8: b
@@Q9: 『パラサイト・イヴ』の小説については、もっとフェミニズムＳＦとしてな評論ができるのではないかと思っています。ミトコンドリア・イヴの問題がありますし、発現したのが女性からということ、また破壊に走る女性を描いているなど、語るべき点がたくさんあり、大変興味深いです。

@@Q10: 大変精力的に行われていて、ＳＦファンとしてまた理科教員としてうれしく思います。
ゆとりの教育の弊害で学力が低下しており、基本的な科学用語などが十分に浸透していない現在、ＳＦファンといえども理科離れが進んでいるのではないかという危惧があります。
@@Q11: すみませんが、あまり存じ上げておりません。
@@Q12: すみませんが、あまり存じ上げておりません。

@@Q13: ＳＦファンとの対立だけでは、とてももったいないと思います。できれば発展的な関係になれるといいのですが……。
@@Q14: 想像の世界を描くことによって、それが実際に書かれている時代や世界をうつす鏡。
@@Q15: 売れないと思います。
ＳＦの拡散と浸透によりＳＦという言葉自体が知られていない（事実女子中学生高校生は知らないのです）。
科学離れ、科学への不信。
@@Q16: 科学という学問についての正しい知識と認識の普及。
ＳＦという用語を広める。
@@Q17_1: ジョン・ヴァーリィ
@@Q17_2: フレドリック・ブラウン
@@Q17_3: 鈴木いづみ
@@Q18: 「戦闘美少女」を書く男性、読む男性に興味があります。

@@serial: 10
@@name: 米田淳一
@@age: 2X
@@sex: male
@@Q1: c
@@Q2_1: SF
@@Q2_2: ヤングアダルト
@@Q2_3: 戦史・架空戦記
@@Q3: f
@@Q4: c
@@Q5: e
@@Q6: g
@@Q7_1: a
@@Q7_2: on
@@Q8_1: b
@@Q8_2: f
@@Q8_3: f
@@Q8_4: f
@@Q8_5: f
@@Q8_6: f
@@Q8_7: f
@@Q8_8: f
@@Q9: ■長くなったのでテキストエディタで書き直して（流用ではないのですが）あります。暇なときにお読みくだされれば幸いです。

『パラサイト・イブ』で確か臓器移植の対象者がいましたが、その対象者の描写は独特の淡さがあって瀬名さんらしいなと思いました。でもあそこで移植された臓器と身体の違和反応が彼女の意識にどのように影響するか、その意識の描写は『BRAIN BALLEY』で解決したのでしょうか。八月の博物館とともに bk1 で購入し、お会いする前に検討しておきます。いつもこの点が気にかかっていたのですが、買うきっかけがなく、未読で申し訳ありません。今注文しましたので明後日までには検討できると思います。

私は SF と言いつつもちょっとココロ系の疾患を抱えているだけに、ココロの設計について自分自身を異常に神経質だなと思うのですが、この点で瀬名さまのその後の歩みに興味を持っています。
私は、SF を描く上で、一番外側の仕掛けとして、ココロの宇宙、内的宇宙と外的宇宙が対応していると思っています。ユング派とか、ライアル・ワトソンとか、そこらへんから自分の体験を元にそう思っています。
つまりココロで思い描く世界はすでに量子論多世界解釈世界の中に存在していて、我々の脳は、SDR とか ASIMO みたいなちょっとした力学計算のほかは、そういう世界の受容体として機能していると思っています。（ほとんどデンパで動いているという感じです）
つまり世界はすでに我々のココロの中にある。世界のすべての現象はココロの反応であり（ここらへんちょっと養老孟司唯脳論）、いかに世界が理解不能の現象を起こし、奇怪な答えが量子論や遺伝子論から出てきても、『神様は我々の行く手に闇を置いてはいない』と思っています。
神様というと語弊がありますね。宇宙が分岐する中で闇に入ってしまう宇宙は崩壊し、合理的なつじつまが合いパラドックスが起きない宇宙だけが生存するという、エヴァレット解釈にドーキンス利己的遺伝子論を組み合わせて考えています。これを使えばタイムトラベルをやっても問題は起きません。問題が起きた世界は消滅し、起きなかった世界だけが生存してさまざまな世界のバリエーションを作るのです（これは後述の『リサイクルビン』で使用）。そこで神様というのは私にとってはこの世界を『無』から『始めよう』と思った『世界そのもの』なんですが。

長くなって大変すすす、すまんでし（by チュチュ様）ではありますが、そこで SF というのはそこまでの広がりを物語に持たせることのできる一番大きなジャンルの気がします。ミステリにはフェアプレイだの何だのと面倒なカセがあります（いやそれを逆用すればテコにできるようですが）。
SF も細分化していけば『難しい』という印象になってしまう気がします。
そこで、難しい数式や論理を物語に組み直し描写することで、世の中に娯楽として広め、我々が『空がいつ墜ちてくるか』と不安がらず、もっとだいじなものを考える余裕を生み出す社会的な意義、それが私が SF を描く理由のヘリクツです。
娯楽も、そこに何らかの意味があればますます味わいは深まると思います。『所詮娯楽』と醒めてしまっては娯楽に安心して酔うことができないと思います。その点で SF は娯楽であるところを重視し、できるだけ科学的・論理的な破綻なく娯楽として楽しめる着地をするというお約束は大事だと思います。

私自身のことで大変申し訳ないのですが、私の父は海上自衛官の幹部で、過去に海上自衛隊の航空部隊でパイロットと対潜戦をやって、その教官をやった上でコンピュータをやって、同じ P-3C をもつ米海軍もカナダ海軍も作れずにほしがっているものの武器輸出禁止の関連で売れない対潜戦シミュレーターを作ったりしていた関係で科学、特に海中音響とかに興味がありました。このシミュレーターは P-3C のメインコンピューター上で動くエミュレーターであるようで、米海軍は実走標的、カナダ海軍は別建てのコンピュータを使っているようです。
その父が現在自衛隊市ヶ谷指揮所の設計にも関わっているだけあって、軍事知識、とくになぜ日本はここまで北朝鮮によって政権を転覆させられていないのかとかを軍事的な知識で解き明かし、逆に日本がこれから巻き込まれたり引き起こしたりしそうな事態についてみなさんに考えてほしいと思っています。私一人ではできないことも、人々が考えてそれぞれの持ち場で行動すれば、地味であっても効果はあると信じています。

そこから小説描きとして、自衛隊の前史として太平洋戦争を『遅れてきた防空巡洋艦・綾瀬』で描き（今、その原稿描き作業中）、それ以前の戦前史を検討、そして逆に日本と世界が 1999 年で終わらずもっと未来にも生きてがんばっていけるのだ、ということで 2142 年を舞台にした『プリンセス・プラスティック』講談社ノベルズ（1997 年刊・絶版）を描きました。
そして現代でもココロある人々は沈黙しながらがんばっていますよ、その人たちが望んでいる理想とはこういう物語世界ですよ、というのをミステリの形式を借りた『リサイクルビン』講談社ノベルズ（2000 年刊）でやって、さらに『プリンセス・プラスティック』で小説技術・物語技術や科学知識の誤りを訂正した『プリンセス・エスコート』（これは現在企画進行中につき出版社などはまだ軍事機密）をやっています。まだまだ出版経歴は浅くて恥ずかしいです。まだ若造でありながら吹いてしまって申し訳ないです。

これは所詮ヘリクツであって、実際は単にいろいろな概念と事物と人物を作って動かすのが面白い私の個人的な箱庭療法にすぎないでしょう。どうやっても私が私以外になることはできないのですから。そう思える日はただベッドに寝そべってただふるえています。

それでも物語という世界は奥が深いのか、私自身『おいおい』と液晶画面（私の愛機はノートパソコンなのです）にツッコミを入れたくなるようなキャラクターが、描いている中で生まれてくるのが大変面白く、そこで前に戻りますが内的宇宙と外的宇宙の微妙な関係を考えたりします。
たとえばチュチュ様（クドルチュデス）というキャラクターなどは『プリンセス・プラスティック』の中で、いささかねじけた情報の自由を実現しようとする悪役として、情報空間の中で、情報のみの実体を持たない存在であるために、その情報世界の中に入って仮身（アバター）を投入した人間から、脳の中に納められている国家機密を奪い読みとるために意識へ攻撃するのですが、その攻撃というのが、いわゆる性的なことで（チュチュ様は女性的存在）、そこで奪われる側の男の子（日本の国家主権を代行している官僚）が性的貞淑と本当に好きな人（『プリンセス・プラスティック』の主人公シファ）への思いを守るために、
『きみはこんなことしかできないんだね。ココロとココロのむすびつきはこんなことよりももっと深層にある。ココロとココロの間にあるものは、言葉にしたら陳腐だけど、それでも存在するものなんだ』
と抗弁するのですが、やっぱり性衝動は神経系の反応でもあるわけで、
『うふっ、そんなことを言っても下腹部は反応してしまうのでしね。視床下部は正直なのでし～』
とチュチュ様が台詞を返します。この視床下部というアイディアは私も予想が付かず、キーボードから打ち込んだ後で驚いて、脳科学の本を読んで確認してしまいました。ここでは情報世界なので脊髄の反応よりも先に情報の I/O を司る SQUID から視床下部が反応します。こういう発見や出会いがあると、小説描きをやる最大の喜びを感じます。

前に戻りますが、瀬名さまもそういう『物語の力』を感じ、SF 描きとしての良心、無用な科学への不安を破ることについては同志なのではないかと遠くから拝見しておりました。おまえなんかと同志になると売れない仲間になる、とお思いかも知れませんが。すすす、すまんでし～。

長々と私事を失礼しました。でも、これだけ私は SF についてアツく思っていながら、SF で繰り広げられるほとんどのギロンに懐疑を持っているのです。ギロンするよりも描いて世の中に問うほうが先ではないかと思うのです。今は出版社もたくさんあり、出版形態の格好良さを考えなければ機会はあるし、言葉に言葉をぶつけるよりは一冊の本として着地しているほうが説得力も感覚も確定的だと思うのです。

アイディアはアイディアで、それが世界の中でどう位置するか、それが据えられなければ物語にならないし、物語でなければ物語の力（フォース、かな？）は出ず、娯楽として読まれることもなく埋没して行くのみだと思っています。『物語』はウェルズやヴェルヌが今でも読まれるように、『永遠の生命』であると思っています。

なんだかんだギロンするよりも実際に思ったモノを描いちゃったほうが確定性が出るわけだし、市場の動向をうかがったってそれを小説で反映させるには数ヶ月かかるし（私は連載小説はちょっと別扱いと考えている）、結局は自分の信じるものをしっかりと書く以外に小説描きは等しく無力なんじゃないでしょうか。
指示語ばっかりで実際のテクストを描く中で概念を咀嚼せずに言葉を戦わせても評価は他人の勝手なものでいかんともしがたいし、それよりも世の中にはまだまだわからないことがたくさんある気がします。だいたい私なんかは自分の夢の内容だって理解できないし。
それが私の考えで、とりあえずまた SF を描きますので（プリンセス・プラスティック復活版『プリンセス・エスコート』）、しっかり SF しようと SF を勉強中です。刊行が決まったらよろしくお願いします。
すっかりマスコット化した情報生命の『論理の海の巡洋戦艦、無敵の紅紫の女王のチュチュ様（クドルチュデス）も、よろしくでし～♪』
では。

遅れましたが、こんな私・米田淳一の自己紹介と日々の運転状況（毎日更新の Web 日記です）は、
http://www4.justnet.ne.jp/~jyl/index.htm
にあります。
メアドは jyl@ma4.justnet.ne.jp です。おまえ間違ってる！　とか、ウザイ！とか、まさかとはおもいますが、おまえここらへんどうよ、などとご意見があれば、いつでもお待ちしております。

@@Q10:
@@Q11:
@@Q12:
@@Q13:

@@Q14：
@@Q15：
@@Q16：
@@Q17_1：小川一水
@@Q17_2：高瀬彼方
@@Q17_3：三雲岳斗
@@Q18：

＃米田さま、アンケートご協力ありがとうございました。ウェブ日記のほう、ときどき拝見しております。どうぞ今後ともよろしく……。

@@serial: 11
@@name: （削除）
@@age: 3X
@@sex: female
@@Q1: a
@@Q2_1:
@@Q2_2:
@@Q2_3:
@@Q3: f
@@Q4: a
@@Q5: b
@@Q6: d
@@Q7_1: b
@@Q7_2:
@@Q8_1: f
@@Q8_2: b
@@Q8_3: f
@@Q8_4: b
@@Q8_5: f
@@Q8_6: f
@@Q8_7: f
@@Q8_8: f
@@Q9:
@@Q10:
@@Q11:
@@Q12:
@@Q13:
@@Q14: ファンが偉そう。
@@Q15: 「売れない」が何を基準にしているのかわからないのでなんともいえません。
また、「ＳＦ小説は」の「は」に含意されたもの（たくさん
ありそうだという感じだけは伝わってくる）についても
まったく見当がつかない門外漢なので。
@@Q16:
@@Q17_1:
@@Q17_2:
@@Q17_3:
@@Q18:

@@serial: 12
@@name: （削除）
@@age: 3X
@@sex: male
@@Q1: b
@@Q2_1: 小林信彦
@@Q2_2: 筒井康隆
@@Q2_3: 海外SF
@@Q3: c
@@Q4: c
@@Q5: a
@@Q6: j
@@Q7_1: a
@@Q7_2:
@@Q8_1: f
@@Q8_2: f
@@Q8_3: f
@@Q8_4: f
@@Q8_5: f
@@Q8_6: f
@@Q8_7: f
@@Q8_8: f
@@Q9:
@@Q10:
@@Q11:
@@Q12:
@@Q13:
@@Q14: ・(書かれた時点より）未来を想定し、科学技術の在り方・使い方が進行に大きく影響する物語
@@Q15: 売れているのか売れていないのかはよく分かりません。しかし、SF な本の扱いは大抵の書店では小さく、話題の（新聞に大きく広告が打たれているような）海外SF か、映画の原作またはノベライズくらいという所が殆どです。
SF 小説が売れないとして私が考えられる理由は、1.集中力が必要な事、2.読むのに時間がかかる事、3.普段慣れ親しんだ物語世界でない事、などです。1・2 は、ハード SF などと呼ばれるものは特にそうで、集中して考えながら読む必要があり、これが楽しい人は SF を読んでも、そうでない人の方が多いように思います。3.は SF の否定かもしれませんが、私が今まで読んだ事のないジャンルに手を延ばす気にならない最大の理由は多分コレです。
@@Q16: 私は SF というジャンルを意識するようになったのはつい最近、この 1～2 年の事です。小学校の頃から自然に本を読んでいましたがジャンルを意識する事はなく、強いて言うならホームズ、ルパン、江戸川乱歩などというのがジャンルでした。振り返って考えてみると随分SF 小説も読んでいて、これが今の私がSF に（ジャンルを意識しないほどに）親しんでいる基盤のような気がします。
私の体験をなぞるなら、小学校・中学校の図書館に SF 小説をたくさん置くのが良いと思います。学校の図書館が流行を追いかけてもしょうがないので、古典とか基本的な名作とかを、出来れば系統立てて読めるように置く。読書体験の始めに適性（耐性？）をつけておけば、後は自然とSF にも親しむようになるのではないかと思います。
@@Q17_1: 筒井康隆
@@Q17_2: グレッグ・イーガン
@@Q17_3: ダン・シモンズ
@@Q18:

@@serial: 15
@@name: （削除）
@@age: 6X
@@sex: female
@@Q1: a
@@Q2_1: 児童文学
@@Q2_2: 紀行文
@@Q2_3: ホラー
@@Q3: c
@@Q4: a
@@Q5: a
@@Q6: c
@@Q7_1: c
@@Q7_2:
@@Q8_1: a
@@Q8_2: a
@@Q8_3: a
@@Q8_4: a
@@Q8_5: a
@@Q8_6: f
@@Q8_7: a
@@Q8_8: a
@@Q9: SFとは何をさすのか良くわからないが、生粋のＳＦファンは瀬名作品をＳＦと言わないかもしれない。なんとか星雲で生活している人類が活躍する話がきっとＳＦなのだろう。読まず嫌いなのかもしれないがこの分野は苦手である。広義での科学にまつわるはなしなら好みであるが。宇宙に関係の無いＳＦがあって良いのでは。そう言う意味では「Brain Valley」がＳＦとして評価されたことに安堵感を覚えた。
@@Q10: もっと、この分野での活躍を期待します。それが使命かもしれませんね。
@@Q11: まじめに取り組む態度が評価できます。良く勉強もしていますね。
@@Q12: ＳＦの分野を広げることに貢献していると思います。
@@Q13: 読者におもねた作品にならないことを望みます。従来の誠実な姿勢を崩さないでください。
@@Q14: なぜか宇宙もののイメージがつきまといますね。
@@Q15: ＳＦに対する考えが狭いからではないですか。身内だけで楽しんでいるような。だから売れていないと思います。
@@Q16: １５に同じ。
@@Q17_1: ロバート　ソーヤ
@@Q17_2: 瀬名秀明
@@Q17_3: 眉村卓（ＳＦですか？）
@@Q18: イメージが一般向けでないような気がしますね。

@@serial: 16
@@name: （削除）
@@age: 4X
@@sex: male
@@Q1: b
@@Q2_1: SF
@@Q2_2: ミステリ
@@Q2_3: 冒険小説
@@Q3: d
@@Q4: b
@@Q5: b
@@Q6: k
@@Q7_1: a
@@Q7_2:
@@Q8_1: b
@@Q8_2: f
@@Q8_3: f
@@Q8_4: f
@@Q8_5: f
@@Q8_6: f
@@Q8_7: f
@@Q8_8: f
@@Q9: 申し訳ありません上記のとおり１冊しか読んでおらず
「瀬名秀明の小説」と題して意見するにはサンプル数が
少なすぎるため、コメントを控えさせていただきます。
@@Q10: サンプル数が０であるため、
コメントを控えさせていただきます。
@@Q11: サンプル数が０であるため、
コメントを控えさせていただきます。
@@Q12: サンプル数が０であるため、
コメントを控えさせていただきます。
@@Q13: 経済的事情から文庫に落ちてからしか購読対象と
していないため上記結果となりました。
恐縮です。
@@Q14: なんらかの科学的あるいは非科学的なアイデアを基点として
論理的な一貫性を持ち、かつ意外性の在る（できれば魅力的
な）ストーリーで読者を楽しませ、驚かせ、考えさせて
くれる小説。
@@Q15: 「売れない」か「売れる」かについて、何時を基準として
どのくらい「売れない」状態になっているかについてここ
50 年くらいの状況を統計とって論じた言説にお目にかかった
ことがありません。
20 年前なら確実に SF と銘打たれたであろう作品が平積みで
並んでいる現状を見る限り「売れていない」と主張したい
方は何か目的があるのではないかと思ってしまいます。
@@Q16: 面白い作品が刊行されること、につきると思います。

@@Q17_1: ロバート・Ｊ・ソウヤー
@@Q17_2: アイザック・アシモフ
@@Q17_3: 草上仁
@@Q18: ぶんがくやらむーぶめんとにこだわらずに
もっとたんじゅんにたのしくてわくわくする
SF がもっとよみたいです。

@@serial: 17
@@name: （削除）
@@age: 2X
@@sex: male
@@Q1: c
@@Q2_1: ライトノベル
@@Q2_2:
@@Q2_3:
@@Q3: e
@@Q4: d
@@Q5: a
@@Q6: i
@@Q7_1: a
@@Q7_2:
@@Q8_1: c
@@Q8_2: f
@@Q8_3: f
@@Q8_4: f
@@Q8_5: f
@@Q8_6: f
@@Q8_7: f
@@Q8_8: f
@@Q9: 読んだのは「パラサイト・イヴ」のみ。
それなりに科学知識が身に付いた気がしたが、任侠映画を見て肩をいからせて映画館をでたりするのと同じ程度の効用。３日で忘れた。
覚えているのは「ミトコンドリアは昔、違う生き物さんでした。」
ジャンル意識が明確に芽生える前に読んだのでＳＦ勧どうこうは言えず。
@@Q10: 読んだこと無し。
そのような活動をしていることすら知らなかった。
@@Q11: 『祈りの海』の解説は面白かった。
内容はなにひとつ覚えていないが、確実な知識のもと己の書く文章の及ぼす影響にしっかりとした自覚と責任とを持って書かれてあるという印象をうけ、非常に好感をもった記憶だけがある。
@@Q12: ＳＦに対する意見や考えを目にしたことがない。

@@Q13:
@@Q14: 用意周到かつ間の抜けた大嘘話。

@@Q15: 関わり合いになりたくない。
こちとら買うだけだし。本屋でもない。
@@Q16: 表紙を人気漫画家・イラストレーターのイラストに。
同様に挿絵も。
できればゲーム化。
@@Q17_1: カート・ヴォネガット
@@Q17_2: ウィリアム・ギブスン
@@Q17_3: 小松左京
@@Q18:

@@serial: 18
@@name: （削除）
@@age: 3X
@@sex: male
@@Q1: b
@@Q2_1: 冒険小説
@@Q2_2: 歴史小説
@@Q2_3: ＳＦ
@@Q3: c
@@Q4: b
@@Q5: b
@@Q6: j
@@Q7_1: a
@@Q7_2:
@@Q8_1: f
@@Q8_2: f
@@Q8_3: a
@@Q8_4: f
@@Q8_5: f
@@Q8_6: f
@@Q8_7: f
@@Q8_8: f
@@Q9: 八月の博物館しか読んだことがないのでその範囲内で。
　私の趣味のベクトルは歴史と生き物関連（生物学と言うほど造詣はないので）で、typical なＳＦ者ではない。ＳＦといえば、物理公式を知らなければ読めない、宇宙・ロボット・遺伝子を弄った生物を出さなければＳＦではない。例えそれがイーガンの『順列都市』のように話としては駄作であってもアイデアだけで評価される、というのを不審に思っている。ＳＦはＳＦである前に、まず小説でなければならないはずなのだ。
　さて、貴作品を拝読し思うよう、プロがこんな創作の葛藤をそのまんま小説に載せていいのか、後書きにほのめかすくらいがプロではないか、と首をひねった。また、理系コンプレックスの文系というのは文転した元理系くらいしか文系の私には思い当たらない。文系は理系に『（頭が悪くて）数学ができなかったから文系』というのが常だが、本気でそう思っている者はほとんどいない。しかし、大学に入ってからは自分達よりもずっとまじめに勉強しているのを知っているので、こういう社交辞令がすっと出る。それに対して理系が字面通り受け取って専門性をひけらかすと（大抵はお前らに言ってもどうせわからんから説明する気も起きない、という）、その通りと認めるか、文系にも専門があるのを説明してもわからないんだろう、と考えるかのどちらか－私の出身が理系もある文系大学ということもあるが－しか周囲にはいなかった。プロはこういう論文のレフェリーを気取る者を相手にしなければならないから大変である、と思った次第。

　閑話休題。展示・提示の仕方についてずいぶん比重を置いた結果、八月の博物館は、ＳＦでありながらひどく私小説に近いものになっている、と私は感じている。私が本作を非常に興味深く思ったのはこの点なのだ。ヴァーチャル空間があたかもタイム・ワープトンネルとなって過去を引き寄せる、というプロットはもちろん秀逸である。歴史の強い理系、というのは物理に強い文系と同じくらいありそうにない人材であり、私の趣味のベクトルに合致している。本作が多く評価されるのもこの点であろう。ＳＦの sence of wonderは、未来技術の運用にあるのであって、技術の発明にあるのではない。この点において本作は正統なＳＦである。
　しかし作者の創作姿勢にかなりのページ数を割いた結果、本作は私小説ライクなＳＦ、という他に類を見ない特異なものになった。それに対する私の印象は戸惑いである。私は、nifty-serve の FSF でたまに自作小説を UP しているのだが、そのような場所で本作を読めば間違いなく共感したはずである。だが、商業ベースのプロの手になる作品ともなると違和感を感じざるをえない。作品と人格は別物であり、子供が産まれるたびに孤児院に送り付けた J.J ルソーの社会契約論は、作者の人格がそうだからといっていささかも価値を減じるものではない。裏返しにいえば、作者の人格は不必要とまでは言わないまでも物語にとっては些細な事柄にすぎないのだ。
　だがしかし。素人の自己満足にすぎないとはいえ、自作小説を書いている私には、動機がよくわかるような気がする。小説家が小説を書くのは自己主張ゆえからであり、小説をどのように読者に提示するか、という思いが小説の形に昇華した本作からそれを消してしまうことは、いかに商業的要請があったとしても受け入れがたいものであったと想像する。
　一読者としては、書き下ろしではなく、寝かせられればまた別の方向があったかもしれず、その方がよかったかも知れないとも思う一方、ハシクレのモノカキとしては、自己主張を殺してまでの小説と迎合主義の書き飛ばし小説の距離を考える。このために私は戸惑う。そして、腰巻のコピー『最高の到達点』ではなく、大変興味深い出発点と捉える。私小説ライクなＳＦがこれからどんなベクトルをとるのか、そのために私は本作を大変興味深い（very interesting）と表現した。
@@Q10:
@@Q11:
@@Q12:
@@Q13: 私が bk1 で購入したハードカヴァーには、199/200 のサインカードが入っているのだが、願わくばこんなカードではなく、表見返しにサインして欲しい。カードというやつはサインする方は簡単でいいのかもしれないが、本の所有者にとっては栞代わりには大きすぎ、かといって見返しに挟むと本を開くたびにいちいち落っこちるし、かといって装丁を無視したデザインなので見返しに張り付けるわけにもいかずなんとも中途半端で邪魔である。かといって、捨てるのももったいない。

@@Q14: 「ｉｆ」を科学的に展開するストーリー。
展開する基はブラックボックスでも非科学的（例えばマックスウェルの悪魔、パーンの竜騎士のような魔法にドラゴン）でもよい。

入り口がアジモフだったせいで、イデオロギーやら宗教は信じなくても科学は信じているのだが、最近のＳＦはそうではないらしいので多少辟易している。
@@Q15: 何と比較して売れないと言っているのか、その根拠を聞いたことがない。私は、ギャビン・ライアルのような冒険小説を好んで読むが、なかなか翻訳されないし、すぐ廃刊になる。
　他の分野に比較して、技術革新で昔のヒット作が陳腐化して売り物にならなくなってしまい、定番本が数少ないのでコンスタントに売れる本が少ない、というのならまだわかるが。
他の分野に比較しての評価なのか、以前に比較しての評価なのか、
そのあたりをはっきりさせた方がよい。本が売れない、雑誌すら売れなくなってきた、というのはどの分野でも同じはずである。
@@Q16: 玄人好みのＳＦはそれはそれでよい。しかし、裾野を広げなければ先細り、というのは趣味事一般に通じる事柄でＳＦに限ったことではないはず。ＳＦに限らず、入り口と通好みの真ん中がすっぽり抜けているような気がする。
@@Q17_1: ジェイムズ.P.ホーガン
@@Q17_2: デイビッド・ブリン
@@Q17_3: アイザック・アジモフ
@@Q18:

＃瀬名より返答
ｂｋ１のサインカードプレゼントは私の発案によるもの。本に直接サインすると「汚れ」扱いになるので、ｂｋ１で取り扱うことができません。そこで苦肉の策として事前にカードを手配し、それにサインしてｂｋ１に送り、これを本に挟み込んでもらうようにしました（こういうサインカードを欧米では signed　plateといい、付属していると古書価にやや影響があります）。ただ、ｂｋ１のみで販促用のカードをつけるということは、他の書店との差別化を図っているわけであり、出版社がこれを積極的に推進することは道義上できません。従ってｂｋ１でプレゼントしたカードの制作費は、瀬名が個人的に出費しています（だからいらないといわれるとちょっと悲しい）。あまり高価な紙質でないのはそのためです、すみません。その後、津原泰水さんが新刊『ペニス』に美しいサインカードをつけましたが、あれはやはり津原さんが出費したのでしょうか？

@@serial: 19
@@name: （削除）
@@age: 1X
@@sex: male
@@Q1: b
@@Q2_1: SF
@@Q2_2: サイコ
@@Q2_3: 物語
@@Q3: b
@@Q4: b
@@Q5: a
@@Q6: g
@@Q7_1: c
@@Q7_2:
@@Q8_1: a
@@Q8_2: f
@@Q8_3: f
@@Q8_4:
@@Q8_5: f
@@Q8_6: f
@@Q8_7: b
@@Q8_8: f
@@Q9: 臨場感という点では、SF に限ったことではなく、必要量を大幅に越えていて良い。
@@Q10:
@@Q11:
@@Q12:
@@Q13:
@@Q14: 筒井康隆
@@Q15: SF というものが一過性ではなく漸進的な流行になりつつあり、それに影響されている大衆がそれを SF だと自覚していないため、SF というものの意義が狭められてしまっている。だから、このような状況においてこれが SF だと言い切ることができるビジョンを持つ作家が求められているのではないだろうか。
@@Q16:
@@Q17_1: 筒井康隆
@@Q17_2: 瀬名秀明
@@Q17_3: 星新一
@@Q18:

@@serial: 20
@@name: (削除)
@@age: 4X
@@sex: male
@@Q1: a
@@Q2_1: 純文学
@@Q2_2: ミステリー
@@Q2_3: ホラー
@@Q3: g
@@Q4: b
@@Q5: b
@@Q6: j
@@Q7_1: a
@@Q7_2:
@@Q8_1: a
@@Q8_2: a
@@Q8_3: f
@@Q8_4: f
@@Q8_5: d
@@Q8_6: f
@@Q8_7: f
@@Q8_8: f
@@Q9: 始まりと後半で主題が変わっているような気がします。
SF としてのセンスオブワンダーと小説としての人物描きこみが両立しているのが SF 読みには物足りなく感じさせる要因になっているのでは愚考いたします。
SF ファンはセンスオブワンダーのみを求めているのでは？ 。
@@Q10:
@@Q11: 力が削がれるのがもったいないです。
研究・執筆活動に専念していい作品を作ってください。
@@Q12:
@@Q13:
@@Q14:
@@Q15: 大衆に迎合して売る必要自体ががありません。
SF として高水準なものの生産が第一ですね。
@@Q16: ジャブナイル SF は繁盛しているのですから。
@@Q17_1: グレッグ・イーガン
@@Q17_2: アーシュラ・K・ル・グイン
@@Q17_3: ブルース・スターリング
@@Q18: 英語のペーパーバック SF がもっと早く手に入るように。
３年遅れの翻訳でなく同時代的に読みたいですよね。

@@serial: 21
@@name: （削除）
@@age: 3X
@@sex: male
@@Q1: d
@@Q2_1: SF
@@Q2_2: ファンタジー
@@Q2_3: ホラー
@@Q3: d
@@Q4: c
@@Q5: b
@@Q6: j
@@Q7_1: a
@@Q7_2:
@@Q8_1: b
@@Q8_2: f
@@Q8_3: f
@@Q8_4: f
@@Q8_5: f
@@Q8_6: f
@@Q8_7: f
@@Q8_8: f
@@Q9: パラサイト・イヴについて。
前半と後半の間に違和感を感じました。

前半の部分はとても面白く感じました。
大きな設定と論理的な展開。
ＳＦらしいＳＦだと思います。
『神狩り』とも通じるところを感じました。

後半は単なるアクションものの様に
なってしまった感じがあります。
これはこれで面白いのですが、
前半とは雰囲気が変わってしまったような気がします。

もしかしたら、後半の部分は小説以外のメディアへの
展開を考えてこのような形にしたのかなとも思いましたが
もしそうだとしたら、それもどうかとも思います。

『果てしなき流れの果てに』や『百億の昼と千億の夜』の
様な形へ持っていってもらえれば更に楽しめたような気がします。

@@Q10: すいません。読んでいません。
@@Q11: すいません。読んでいません。
@@Q12: すいません。読んでいません。
@@Q13: すいません。読んでいません。
@@Q14: 明るい未来、希望に満ちた宇宙、
これらを切り開くための科学
@@Q15: 売れないと思います。

理由：科学が人類に幸福をもたらすとは思えなくなってきたから。
@@Q16: 未来に希望が持てる世の中にする。

@@Q17_1: ヴァン・ボークト
@@Q17_2: アーサー・Ｃ・クラーク
@@Q17_3: 大原まり子
@@Q18: がんばってほしい。

@@serial: 22
@@name: （削除）
@@age: 2X
@@sex: male
@@Q1: b
@@Q2_1: 本格ミステリ
@@Q2_2: 宇宙SF
@@Q2_3:
@@Q3: d
@@Q4: b
@@Q5: c
@@Q6: i
@@Q7_1: a
@@Q7_2:
@@Q8_1: a
@@Q8_2: b
@@Q8_3: b
@@Q8_4: a
@@Q8_5: c
@@Q8_6: c
@@Q8_7: c
@@Q8_8: f
@@Q9: 取材に基づいた事実とそこから飛躍される設定・展開の繋ぎに関しては、ここ最近の作家のなかで一番手際が巧いと思う。ただ、どうしても事実の描写の方が迫真性があるだけに、もっと飛躍した物語を読んでみたいと思う。

@@Q10: 上記の内容のとおり、取材やそれに基づくノンフィクションはとても誠実で好感が持てる。
@@Q11: よくわかりません。
@@Q12: 瀬名さんのSF観を読んだことがないのでよくわかりません。
@@Q13: ロボット連作楽しみにしております。
@@Q14: 日常とは違う世界を見せてくれるもの。もしくは日常の考えをコペルニクス的転回でものの見方を変えてくれるもの。
@@Q15: たとえばミステリーの場合、売れている（売れていない）作品に対して「これは本格ミステリではない」「これはハードボイルドではない」ということはあっても「ミステリー」という大きな枠から外そうとはしないのに、ＳＦの場合「これはＳＦではない」というように大きな枠から外そうとする傾向があるのではないだろうか。
例）「『アルジャーノンに花束を』はＳＦではない」
よって売れる（売れている）小説は「ＳＦではない」という言説が広まるのだと思う。
@@Q16: 売れる（売れている）ＳＦ小説を「これはＳＦだ！」と言ってしまう。
@@Q17_1: 小松左京
@@Q17_2: アーサー・Ｃ・クラーク
@@Q17_3: アイザック・アシモフ
@@Q18: 特にありません。

@@serial: 24
@@name: 牧 眞司
@@age: 4X
@@sex: male
@@Q1: d
@@Q2_1: ＳＦ
@@Q2_2: 幻想小説
@@Q2_3: 海外文学
@@Q3: f
@@Q4: e
@@Q5: a
@@Q6: k
@@Q7_1: a
@@Q7_2: on
@@Q8_1: a
@@Q8_2: a
@@Q8_3: b
@@Q8_4: f
@@Q8_5: b
@@Q8_6: b
@@Q8_7: a
@@Q8_8: a
@@Q9: 『パラサイト・イヴ』は、主人公への感情移入とおなじくらい、ミトコンドリアへ感情移入しながら、昂奮して読み進み、途中でハタと「これはイケナイのでは」という思いが湧いてきました。異質な存在であるミトコンドリアの企みや動機について、“感情移入”というレベルで理解してしまうのは、本来のスペキュレイティヴな面白みを損なってしまうと考えたからです。といいながらも、ついつい「ミトコンドリアがんばれ！」と、手に汗握ってしまったワタシです。
『BRAIN VALLEY』は、長尺にも関わらず、巻を置く能わずの勢いで読みました。おもしろかった。作中に挿入された（ちりばめられたなんてものではないですよ、あれは）科学的蘊蓄は、ぼくにとっては、リアリティを保証するものというよりも、物語に慣性をつける文学的ギミックとして受け取れました。作風はぜんぜんちがいますが、スタニスワフ・レム『ソラリスの陽の下に』を思いだしました。（あの作品のなかにもソラリス学という、かなりかさばる蘊蓄が放りこまれているのです）
『八月の博物館』も、おもしろく読みましたが、作品の雰囲気が、ちょっとぼくのテイストにあわない。ぼくはひねくれものなので、さわやか系の物語、甘やかなノスタルジーというのは、どうも一歩引いてしまうのです。でも、読みやすく、ワクワクする、いい作品だと思います。
@@Q10: この分野についてはよい読者ではないので、あいまいな印象しか言えないのですが……。いたずらにジャーナリズムに走らないところが、すばらしいと思います。サイエンス・ライターのなかには、対象に対する入れ込みのあまり、表現が空回りしている人もいますが、瀬名さんの文章はそうしたものではなく、ほんとうに端正です。
@@Q11: ソウヤーの『ターミナル・エクスペリメント』の解説を読んで以来、ＳＦ評論家としての瀬名さんには注目してきました。
なかでも『祈りの海』の解説には感服しました。ぼく自身がＳＦの本に解説を書いている人間として、つねづね「小説家の書く解説は、なんでぬるいもの、ゆるいものが多いのだろう」と思っていたのですが、瀬名さんの解説はきわめて緊密、シャープなもので、「脱帽！」というのが実感です。資料的な裏づけを含め、実証的で怜悧な論旨の展開、そしてなんといっても、イーガンという作家の核心（長篇よりも短篇に真価を発揮していること）を、しっかり捉えている点は、さすがです。ちかごろ、読んでこれほど共感した解説はありません。

@@Q12: 瀬名さんはベアの『ブラッド・ミュージック』に触れ、「前半はおもしろいけれど、後半は大風呂敷を広げすぎてつまらなかった。しかし、ＳＦの人はそこがおもしろいようだ」とおっしゃってますね。ぼくは、大風呂敷を広げたところがおもしろいという意見ですが、それは“ＳＦの人”だからではなく、個人的な好みだと思っています。きっと、瀬名さんとおなじ意見の“ＳＦの人”もいるでしょう。ＳＦファンにも、いろいろな好み、いろいろな考えの人がいるので、いちがいには言えないと思います。逆に言えば、『ブラッド・ミュージック』の前半がおもしろいと思った瀬名さんも、ひとりのＳＦファンということです。『ブラッド・ミュージック』と『パラサイト・イヴ』と、どっちがよりＳＦ的かなんて議論はどうでもいいことで、いろいろなタイプのＳＦがあるということです。
もっとも、瀬名さんがＳＦをストリクトに捉えているのは、議論の出発点として意味のあることだと思います。ぼくはかねがね、「ＳＦマインド」というような精神論が大嫌いで（最近では「ＳＦ者」という表現が嫌い）、そうことが「ＳＦの閉鎖性」を助長していると思ってきました。

@@Q13: 瀬名さんは、いわゆるＳＦマニアに対する警戒感があるようですが、不見識の批判に対しては、「おまえらに何がわかる！ オレの方がＳＦはよく知っている」って言えばいいのです。きっと、賛同する人の方が多い（ＳＦマニアのなかにだって）と思いますよ。ＳＦを数多く読んでいるとか、ファンとしてのキャリアなんてのは、なんの裏づけにもなりません。
@@Q14: おもしろくて、知的で、provocative な物語
@@Q15: 「ＳＦだから売れない」ということはないでしょう。個々の作品や、出版社の売り方によって、事情は変わってくるはずで、それをおしなべて「売れない」というのは、あまりに乱暴だと思います。「ＳＦ小説が売れない」という言説は、一時期のＳＦブーム（スター・ウォーズ前後）からの揺りもどしと、一部の、出版業界関係者の、無責任・無権識な偏見（悪意以前の）によって構成されているように思えます。

@@Q16: すごく権威のある知識人・学識経験者などが、「ＳＦなんてくだらない、百害あって一利なし」というようなことを、本気で、大声でわめき散らしてくれたら、効果があると思います。権力や弾圧に対する反発こそ、大きなエネルギーを生むのですから。

@@Q17_1: Ｒ・Ａ・ラファティ
@@Q17_2: フィリップ・Ｋ・ディック
@@Q17_3: 篠田節子
@@Q18:

@@serial: 25
@@name: (削除)
@@age: 3X
@@sex: female
@@Q1: b
@@Q2_1: SF
@@Q2_2: ミステリ
@@Q2_3: 時代物
@@Q3: d
@@Q4: b
@@Q5: d
@@Q6: j
@@Q7_1: a
@@Q7_2:
@@Q8_1: c
@@Q8_2: f
@@Q8_3: f
@@Q8_4: f
@@Q8_5: f
@@Q8_6: a
@@Q8_7: b
@@Q8_8: f
@@Q9: 「パラサイト・イヴ」は単行本が出た当時に拝読しました。
結末付近で「あれっ？」「そうか、SF じゃなくてホラーなのか」
とがっかりしたのは事実ですが、どこに線引きがあるのか、当時
自分でもはっきりしませんでした。
曖昧な感想ですみません。

しかし次作は読みたいと思っており、「BRAIN VALLEY」と
「八月の博物館」は積読中です。これは読んでいないのは
敬遠しているわけではなく、本全般について「そのジャンル
を読みたいと感じた時だけ、読みたい分だけ読む」生活
だからです。
@@Q10: 「ミトコンドリアと生きる」を拝読しました。SF と関連づけた
感想は特に抱きませんでした。

もともとノンフィクションばかり読む方なので、小説内の
学術的（？）解説部分を読むことに抵抗はありません。
また、全然理解できない内容についても雰囲気で読み進め
てしまう方です。

@@Q11: 残念ながら拝見しておりません。
@@Q12: 残念ながら拝見しておりません。
@@Q13:
@@Q14: 自分とは違う価値観や背景を持つ世界での「当たり前」を
体験するもの。それがキーとなり物語が展開するもの。
そのズレを感じる瞬間に惹かれます。
ここまででは時代小説や魔法世界のファンタジーも同じなので、
さらにつけ加えるとすれば「そのズレが私の大好きな科学的
思考によって解き明かされるもの」でしょうか。
@@Q15: インターネットを始めて数年経ち、いくらか SF に関係する
サイトを読むまで、「SF が売れない」「冬の時代」と言われて
いること自体を知りませんでした。

身近に SF を読んでいる人間がまったくおらず、小学校の
図書館や書店の店頭でたまたま見つけたものを読むうちに
「SF」というジャンルがあると知り、そこを好きになった
私の立場では、SF が「売れていた」時代を知らず、また
「売れなくなった」ことの実感もありません。
とりあえず、書店に行けば自分が読みたい程度の冊数は
あるので満足しています。

@@Q16: 前記のとおりで何が嫌がられているのかが今ひとつわかり

ませんので……

「活性化」ではありませんが、たぶん、数が少なくとも
一般人が宇宙に出る時代になれば、「過去に存在した」と
いう点でとっつきやすい時代物と同様に、１つの「想像し
得るリアリティのある世界を舞台にした小説」ということで
ファンではない人にも売れるのではないかな、と思っています。
個人的には、そういう「裏打ち」は全然求めないのですが。

SF というのは、極端に客観的な立場や考え方が表れやすい
ジャンルである気がします。ある価値観は、所詮その他の
数多の価値観の１つでしかない、というか。内容そのもの
よりも、そのスタンスが嫌がられるのかもな、と、少し
思います。
科学者の単なる「事実の評価」についての言動が非人道的と
受け取られる場合があるのと同様に。
そういう意味で、上記のような時代になれば、「日常とは
別の場所を舞台とした、日常的な人間ドラマ」のような小説
が増えそうに思います。
@@Q17_1: ティプトリーJr.
@@Q17_2: コードウェイナー・スミス
@@Q17_3: シマック
@@Q18: 以上、潮流を知らないので個人的な感想や見方を書かせて
いただきました。お役に立てば幸いです。１回送信ミスを
しており（ボタンのチェックの部分で return を押したら
送信されてしまいました）おわびいたします。

#serial: 32でさらに回答をお寄せいただきました。追加コメントは以下の通りです。
@@Q15: そういえば両親は SF については「文学じゃない」「嘘っぽい
から読む気にならない」と言っていました。
よく見ていたロボットアニメからの連想だと思いますが、
実際私自身は目からビームが出たり秘密兵器が密かに
開発されてたり超能力が目に見えてぶつかったりする
ような話もいまだに好きです。

@@serial: 26
@@name: （削除）
@@age: 3X
@@sex: male
@@Q1: b
@@Q2_1: 戦記もの
@@Q2_2:
@@Q2_3:
@@Q3: e
@@Q4: a
@@Q5: c
@@Q6: i
@@Q7_1: c
@@Q7_2:
@@Q8_1: f
@@Q8_2: f
@@Q8_3: f
@@Q8_4: f
@@Q8_5: f
@@Q8_6: f
@@Q8_7: f
@@Q8_8: f
@@Q9: 申し訳有りませんが、上記のように瀬名氏の作品を読んだことがありませんのでお答えできません。
@@Q10: 申し訳有りませんが、上記のように瀬名氏の作品を読んだことがありませんのでお答えできません。
@@Q11: 申し訳有りませんが、上記のように瀬名氏の作品を読んだことがありませんのでお答えできません。
@@Q12: 申し訳有りませんが、上記のように瀬名氏の作品を読んだことがありませんのでお答えできません。
@@Q13: 特にありません。
@@Q14: あり得たかもしれない世界、あるいは、あり得るかもしれない世界を、論理的整合性をもって描いた小説。
@@Q15: 個々の作品ではなく、ＳＦ小説全体でみれば、過去よりは売れていないのではないかと思います。
理由は
１　かってはＳＦとして扱われていただろう作品が、別ジャンルにされる関係で、ＳＦの範囲そのものが狭くなっているため。（例えば、小松左京氏の「保護鳥」「くだんの母」等は今ならば「ホラー」に分類される）
２　「推理小説」が「ミステリー」、「怪奇小説」が「ホラー」とネーミングを変えたにも関わらず、「ＳＦ」のみが旧態依然たる「ＳＦ」のネーミングのままであるため、新規の読者への訴求効果が相対的に低下したため。
　等が考えられます。
@@Q16: ＳＦファンの方々には抵抗があるとは思いますが、新規読者の獲得という点に限って言えば、梅原氏の主張するような、ネーミングの変更もそれなりに効果があるかと思われます。
@@Q17_1: 小松左京
@@Q17_2: 星新一
@@Q17_3: フレドリック・ブラウン
@@Q18: 色々と書きましたが、かってはＳＦの読者であった者からの戯れ言とお聞き流しいただければ幸いです。

@@serial: 27
@@name: （削除）
@@age: 2X
@@sex: male
@@Q1: a
@@Q2_1: あまり現実から離れすぎないSF
@@Q2_2:
@@Q2_3:
@@Q3: d
@@Q4: d
@@Q5: b
@@Q6: i
@@Q7_1: a
@@Q7_2:
@@Q8_1: c
@@Q8_2: e
@@Q8_3: f
@@Q8_4: f
@@Q8_5: e
@@Q8_6: c
@@Q8_7: f
@@Q8_8: f
@@Q9: 神秘主義は好きでは在りません。現実の積み重ねを大事にする方です。
@@Q10: 意見はありません。がんばってください。
@@Q11: 意見はありません。好きにやってください。
@@Q12: ブレイン～の後半の光り輝く場面で何を表現しているのかが理解できませんでした。あれはエンターテインメントなのでしょうか？
@@Q13: 意見はありません。
@@Q14: 人間の冒険心や探究心を非常にうまく表現している（モノもある）ので好きです。比較的楽観的な立場で書かれた作品が多いですね。
あとはスケールが大きいというものでしょうか。個人間の日常的な対立をひたすら描写するものは読んでいて退屈ですね。ＳＦでも。
@@Q15: ＳＦをＳＦとして売っている時点でもうだめだと思います。ジャンルというのは非常に小事です。
下の質問にもぶつかりますが、ファン活動と称して狭い世界を共有しあって喜んでいる人たちをマーケットの中心に置いている限り市場規模は拡大しないでしょうね。これは自明です。
それが良いとか悪いというのではなくて、単にマーケティングの問題だと思います。
@@Q16: 研究者や技術者を主人公にするのを止めてみたらどうでしょう。
いや冗談ですが。
繰り返しになりますけど、ＳＦというジャンルに拘る（拘っているのはファンだけです）のを止め無い限りマーケットの規模は漸減するだけでしょう。ファンの集いなんて止めて科学的考証がどうのこうのという口うるさいＳＦファンを勘定からはずせば、マーケットは広がりますね。
それがいいことだとか悪いことだという話ではありません。売るというのはそういうことだと思います。

@@Q17_1: ホーガン
@@Q17_2: シェフィールド
@@Q17_3: ニーヴン
@@Q18: 意見はありません。

@@serial:　28
@@name:　(削除)
@@age:　3X
@@sex:　male
@@Q1:　c
@@Q2_1:　ＳＦ
@@Q2_2: ミステリ
@@Q2_3: 歴史小説
@@Q3:　b
@@Q4:　b
@@Q5:　a
@@Q6:　k
@@Q7_1:　c
@@Q7_2:
@@Q8_1:　b
@@Q8_2:　b
@@Q8_3:　f
@@Q8_4:　f
@@Q8_5:　f
@@Q8_6:　f
@@Q8_7:　f
@@Q8_8:　f
@@Q9: 理学系出身で，今は情報系の仕事をやっているので，
Brain　Valleyは興味深く読みました．最新の科学系の話題を
フォローしている(しようとしている？)ところを評価
しています．
@@Q10: すいません．読んでいません．
@@Q11: すいません．読んでいません．
@@Q12: すいません．読んでいません．
@@Q13: 瀬名さん，女性に対してなにかトラウマがありませんか？
パラサイト・イブを読んでそう思いました．

@@Q14: 科学が題材の小説であればなんでもＳＦだと思って
読んでいる．(つまり，なんでもありの広い定義)
理系の好奇心をくすぐられる小説．
@@Q15: ＳＦ小説を厳密に定義してないのでなんとも言えない．
広い意味での(なんでもありの，かつＳＦと冠していない)
ＳＦは売れていると思う．
今，「売れる」ためには軽さが必要なんじゃ？と思うけど，
普通のＳＦには軽さがたりないし，軽いＳＦにはＳＦという
レッテルが重過ぎるから売れないんだと思う．
@@Q16: ＳＦという名前をやめるべし．(暴論)

@@Q17_1:　谷甲州
@@Q17_2: 神林長平
@@Q17_3:　栗本薫
@@Q18: あまり読んでなくてごめんなさい．忙しいんです…

@@serial: 29
@@name: （削除）
@@age: 3X
@@sex: female
@@Q1: c
@@Q2_1: 海外ミステリ
@@Q2_2: 海外ファンタジィー
@@Q2_3: ＳＦ
@@Q3: e
@@Q4: c
@@Q5: a
@@Q6: i
@@Q7_1: b
@@Q7_2:
@@Q8_1: c
@@Q8_2: f
@@Q8_3: f
@@Q8_4: f
@@Q8_5: f
@@Q8_6: f
@@Q8_7: b
@@Q8_8: f
@@Q9: あまり読んでいないのでなんとも言えないのですが発想の面白さがあると思います。
もう少し人物像が複雑だと小説としての深みが出るのではと…。

@@Q10: すいません読んでいません
@@Q11: 作品解説はとても好きです。
的確かつわかりやすい解説を書く名手だと思っています。
誉めすぎというぐらい愛情があるのがまた良いです。
@@Q12: 読んだことがないのでコメント不可
@@Q13: あまりよけいな事を考えず、自分の好きな小説を書いていってください。読者の思惑をあまり気にするととは無いと思います。
@@Q14: 宇宙、未来、異生物、科学
@@Q15: 「ＳＦ小説が売れないというのではなく本自体が売れてない」
あえて言うなら、ハードＳＦは理解するのが難しい。
科学考証さえよければ小説として面白くなくてもいいのか？と思うようなものもある。
@@Q16: あまり厳密にＳＦというジャンルの幅を狭めないほうがいいのでは？ミステリが活性化したのはボーダーレスになったためと思う。
@@Q17_1: アーシュラ・ル・グィン
@@Q17_2: アシモフ
@@Q17_3: ソウヤー
@@Q18:

@@serial:　30
@@name:　（削除）
@@age:　3X
@@sex:　male
@@Q1:　c
@@Q2_1:　ＳＦ
@@Q2_2: 冒険小説
@@Q2_3: 歴史小説
@@Q3:　g
@@Q4:　c
@@Q5:　e
@@Q6:　k
@@Q7_1:　a
@@Q7_2:
@@Q8_1:　b
@@Q8_2:　b
@@Q8_3:　c
@@Q8_4:　c
@@Q8_5:　c
@@Q8_6:　b
@@Q8_7:　f
@@Q8_8:　f
@@Q9: 面白いと思います。私は立派なＳＦ作品と思っております。
私のＳＦ観とは非常に簡単で発想に大きな飛躍があるものというものですのです。
@@Q10: 日本にはあまりポピュラーサイエンスという分野がなじんでないと思っております。もっと書き手が、もっと作家が科学を語ってもいいと思っておりますので、瀬名さんの活躍を応援しております。

@@Q11:
@@Q12: ＳＦ観の相違は人それぞれなるほどと思って読まして頂いております。
@@Q13:
@@Q14: 発想に大きな飛躍があるもの。
それくらいの単純なことでしか、ＳＦを括れないと思っております。
@@Q15: ＳＦ的な感性をプロパーＳＦの特権と考えるからではないではしょうか。
ＳＦ的感性は多岐な分野に広がっているので、特にＳＦが売れていないとは思っておりません。
@@Q16: そもそも出版自体が落ち込んでます。
もしかしたら、本の供給の仕方を変える必要があるのでは？
ただ、物語としてのＳＦの需要が無くなるとは思えませんので、書き手の踏ん張りを期待しております。
@@Q17_1: ヴァン・ヴォークト
@@Q17_2: ハインライン
@@Q17_3: マイク・レズニック
@@Q18: 色々ありすぎますので、これにて失礼いたします。

@@serial:　31
@@name:　(削除)
@@age:　1X
@@sex:　female
@@Q1:　b
@@Q2_1: ソフトＳＦ
@@Q2_2: 歴史小説
@@Q2_3:
@@Q3:　c
@@Q4:　b
@@Q5:　a
@@Q6:　e
@@Q7_1:　c
@@Q7_2:
@@Q8_1:　b
@@Q8_2:　a
@@Q8_3:　f
@@Q8_4:　f
@@Q8_5:　f
@@Q8_6:　f
@@Q8_7:　b
@@Q8_8:　f
@@Q9: ＳＦ観という訳ではないのですが、
西洋のものを扱っているようでいて、日本的あるいは多神教的だと
思います。BRAIN　VALLEYはどことなく、一神教世界に対するアニミズムの勝利、という感覚を覚えました。詳しく説明は出来ないのですが。
@@Q10:
@@Q11:
@@Q12:
@@Q13:
@@Q14: 科学と、それが発達した未来に関する小説。
@@Q15: 敷居が高いように感じられるのでは。
@@Q16: ＳＦという枠を取り払い、寧ろ「宇宙小説」「未来小説」などと称してみるのはどうでしょうか。
@@Q17_1: レイ・ブラッドベリ
@@Q17_2:　光瀬龍
@@Q17_3: ジュール・ヴェルヌ
@@Q18:　SFの多くは未来のことを書いていますが、例えフィクションであったとしても、「未来」であるかぎりそれはやはり我々の「未来」のことですので、書くには責任が伴うと思うのです。

@@serial: 34
@@name: （削除）
@@age: 3X
@@sex: male
@@Q1: b
@@Q2_1: 軽いSF
@@Q2_2: 歴史・伝奇
@@Q2_3: ファンタジー
@@Q3: e
@@Q4: c
@@Q5: d
@@Q6: j
@@Q7_1: b
@@Q7_2:
@@Q8_1: f
@@Q8_2: f
@@Q8_3: f
@@Q8_4: f
@@Q8_5: f
@@Q8_6: a
@@Q8_7: f
@@Q8_8: f
@@Q9: 小説はいくつかは買っていますが、まだ読んでませんのでかけません。
@@Q10: 今世代においてもっともエキサイティングな/となりうる科学の分野の専門教育を受け、さらにそれを小説まで高められるほどに一般の人に伝えることのできる人はそうそうおりません。科学ジャーナリストとして金子隆一氏なども優れた方だとは思いますが、洋泉社の新書「ゲノム解読がもたらす未来」などを読むと、さすがに専門的な部分の解説にはミスや不満が残ります。その点、現場の研究者が直に話せるというのはすばらしいと思います。SF観とは絡んでいませんが。
@@Q11: 文芸評論については読んでいないのでかけません。
@@Q12: 読んでないので思うところはありません。だったらここに書き込むなって？ごもっとも。
@@Q13: 科学はもっと現場の人が、一般に言葉を発していかねばならないのではないかと思います。現代では生物学は大きな可能性を持つだけに、本来大きな責任を持っているはずです。どこかで一般向けに活動していることを批判されたようなことをかかれていたと思いますが、その方が心得違いではないかと感じました。今後ともご活躍されることを期待しております。
また、読んでいない身（パラサイト・イヴ、BRAIN VALLEY、同序説とも買ってはいるのですが）としてこのようなことを言うのは何ですが、「プロの目からみて楽しめる」生物系のSFを期待しております。
@@Q14: 科学的な一つ、ないしはいくつかの if をアイデアの核（の一部）としてかかれた小説。歴史的な if が勝ると伝奇小説の方に広がる。
軽い SF と言った場合、科学的な設定に基づくものや既存の SF とされるものに使用されたものを小道具や背景など、最低限雰囲気作りとして使用しているだけのような物も含む。
@@Q15: 多くのジャンルの作品にＳＦが混ざっており、いろんなジャンルと混じった作品の方が、いろんなジャンルの人が手を出すのだから、そりゃ売れる。
あと、ちゃんとした SF は、最初の数ページをクリアするまでが結構しんどい。作品ごとに背景世界が異なるから、それになじむまでの敷居が高い。なじんでしまえば一気に進み、むしろその世界から離れがたくすらなるような作品でも、そこまでは大変だったりする。また、SF を続けて読んでいるときは比較的閾が低くても、しばらく他のジャンルばかり読んでいると、なんだかおっくうで手がでなくなる。「バーチャル・ガール」ですら、なんだか初め数ページで止まってしまった経験あり。このあたり、違うとっかかりのあるコアじゃない SF だと、そこを手がかりにまず入っていけるから「売れ」ても、コアな作品は読み続けている人以外はなかなか手が出しにくかったりするんではないでしょか。
@@Q16: 理科をよくわからないもの、自分と関係ない物としてとらえるような国民の雰囲気がある限りだめなのでは。
きちんとした科学的考証に基づいた、それでいてエンターテインメントとして優れたような作品が多くできれば、と思ったけど、それなりに多く存在しているんですよね。
@@Q17_1: レム
@@Q17_2: クラーク
@@Q17_3: ハインライン
@@Q18: そういう意味で、今のコアな SF は知りません。でもセンスオブワンダーは SF だけの物でもないと思う。伝奇小説でも味わえます。
でもそういう一方で、生物系の教育を受けてきた身として、その手の設定でくすぐってくれる「SF」に非常に魅力も感じます。
仕事の逃避で書いてたんでまとまりがありませんが(^^;

@@serial:　35
@@name:　(削除)
@@age:　2X
@@sex:　male
@@Q1:　b
@@Q2_1: ミステリ
@@Q2_2:　ホラー
@@Q2_3:　ＳＦ
@@Q3:　e
@@Q4:　b
@@Q5:　a
@@Q6:　f
@@Q7_1:　c
@@Q7_2:
@@Q8_1:　d
@@Q8_2:　f
@@Q8_3:　f
@@Q8_4:　f
@@Q8_5:　f
@@Q8_6:　f
@@Q8_7:　f
@@Q8_8:　f
@@Q9: パラサイト・イブしか読んでいませんが、
クーンツが目の前にちらつき、
どうものめり込むことができませんでした。
@@Q10:
@@Q11:
@@Q12:
@@Q13:
@@Q14: すこし不思議。
@@Q15: 日本のＳＦ作家の作品が面白くないから。
@@Q16: マスメディアを活用。
ＳＦは敷居が高いというイメージがあるので、
それを払拭させる。
@@Q17_1:　広瀬正
@@Q17_2: フレドリック・ブラウン
@@Q17_3:　沼正三
@@Q18:

@@serial: 36
@@name: （削除）
@@age: 2X
@@sex: female
@@Q1: d
@@Q2_1: SF
@@Q2_2: ミステリー
@@Q2_3: ファンタジー
@@Q3: g
@@Q4: d
@@Q5: d
@@Q6: j
@@Q7_1: a
@@Q7_2:
@@Q8_1: e
@@Q8_2: e
@@Q8_3: f
@@Q8_4: f
@@Q8_5: f
@@Q8_6: f
@@Q8_7: a
@@Q8_8: e
@@Q9: 前半は私が読みたいモノにもの凄く近いが、ラストは私が行って欲しい方向と全く異なるオチを付ける印象があります。「Gene」はもの凄く面白かったのですが、初期長編二本がいずれもラストで「はぐらかされた」という感触でした。おそらくは前半がしっかりしている分、後半への期待が高まり過ぎている嫌いがあると思う。
私自身かなり偏狭な趣味の持ち主なので、相容れないのは仕方がないと思いつつ、例えば「パラサイト・イヴ」でイヴがもっと異質でヒト的でない――より言うなれば既存の地球生命体的でない知性を持っていれば、と思わずにはいられないので点が辛くなってしまうのだと思います。
@@Q10:
@@Q11: 殆ど読んでいないのですが、書評などを読む限りでは非常に真摯な書き方をされる、という印象があります。
@@Q12: SF ファンが（言い方は悪いですが）ふざけて語っている事を大げさに捉えてすぎているのでは、と思いました。具体的に指摘できなくて申し訳ないのですが、例えば SF ファンが「パラサイト・イヴは SF じゃない」と言うときには「（共通認識でみんな SF だと言っているが）自分的 SF じゃない」というニュアンスで言っているのに「SF ファンが SF と認めない」と受け取るような面があるように感じました。
@@Q13:
@@Q14: 現実を壊す小説。視点が変わってぐらりとする感覚を味わえる小説。ここではないどこか、いまではないいつか、わたしでないだれかの小説。世界を変える小説。
新しいものの見方を掲示する小説。
もしくは遙か彼方を見せてくれる小説。

@@Q15: 小説全体が売れてない（ごく一部の突出したベストセラーを除く）印象があるので、SF 小説も売れていないと思います。何故売れないのかといえば単に他の娯楽（TV、ゲームなど）競合したせいではないかと。勝手な印象ですが。
SF だけが取り沙汰されるのは不思議です。SF ファンという集団だけがあたかも一つの意志を持つ特異な集団であるかのように他の人に見られている（web での論争を読んでいるとそう感じることがしばしばある）ことと関係するのでは、と思っていますが謎です。

@@Q16: ハルキ文庫のような文庫がもう１レーベル出来て、そこが海外 SF 翻訳も扱ってくれればかなり活性化すると思います。
@@Q17_1: ロバート・J・ソウヤー
@@Q17_2: ジェイムズ・P・ホーガン
@@Q17_3: 野尻抱介
@@Q18:

＃Q7_2 が on になっていませんが、プロの方だと思います。
＃「講演後の反響に対して」でコメントをしています。

@@serial: 37
@@name: （削除）
@@age: 3X
@@sex: male
@@Q1: c
@@Q2_1: ｓｆ
@@Q2_2: ミステリー
@@Q2_3: 架空戦記
@@Q3: c
@@Q4: c
@@Q5: b
@@Q6: j
@@Q7_1: a
@@Q7_2:
@@Q8_1: f
@@Q8_2: f
@@Q8_3: f
@@Q8_4: f
@@Q8_5: f
@@Q8_6: f
@@Q8_7: f
@@Q8_8: f
@@Q9: 読んでいないのでわからないのですがｓｆとして以前に小説として面白いのであれば読む価値はあると思う
@@Q10: 読んでないので良くわかりません
@@Q11:
@@Q12:
@@Q13:
@@Q14: 科学的な(それが擬似的科学であったとしても）手法で舞台設定や問題解決を行う小説
@@Q15: ＳＦが売れていないのではなくＳＦというジャンルで売っていないだけ　売れている小説の中に結構ＳＦ的な小説は多いと思う
@@Q16: ＳＦは絵だと言う野田元帥の言葉どおりだと思う。星界の紋章やスカーレットウイザードがその良い例だと思うし徳間デュエル文庫が良い例

@@Q17_1: 堀晃
@@Q17_2: クラーク
@@Q17_3: ニーヴン
@@Q18:

@@serial: 38
@@name: （削除）
@@age: 2X
@@sex: male
@@Q1: b
@@Q2_1: ファンタジー
@@Q2_2: sf
@@Q2_3:
@@Q3:
@@Q4:
@@Q5:
@@Q6:
@@Q7_1:
@@Q7_2:
@@Q8_1:
@@Q8_2:
@@Q8_3:
@@Q8_4:
@@Q8_5:
@@Q8_6:
@@Q8_7:
@@Q8_8:
@@Q9:
@@Q10:
@@Q11:
@@Q12:
@@Q13:
@@Q14:
@@Q15:
@@Q16:
@@Q17_1:
@@Q17_2:
@@Q17_3:
@@Q18:

＃無効回答とさせていただきました。

@@serial: 39
@@name: （削除）
@@age: 2X
@@sex: female
@@Q1:
@@Q2_1: ＳＦ
@@Q2_2: ノンフィクション
@@Q2_3:
@@Q3: b
@@Q4: b
@@Q5: a
@@Q6: d
@@Q7_1: c
@@Q7_2:
@@Q8_1: b
@@Q8_2: a
@@Q8_3: a
@@Q8_4: f
@@Q8_5: f
@@Q8_6:
@@Q8_7: f
@@Q8_8: f
@@Q9: 私の考えるＳＦは近未来なのに対し
先生のＳＦは身近に有るＳＦだと思います
その為空想に浸れる部分が少なく
ホラーの要素が多いと思います

@@Q10: あまり読まないので分かりません
すみません

@@Q11: あまり読まないので分かりません
すみません

良く調べてあると思います
只、文献を読む時間が少ないと嘆いておられたので
その点が少し気になります
@@Q12:
@@Q13: どんどんジャンルを越えていって欲しい
八月の博物館はファンタジックで
とても面白かったです
先生の文章は優しい
の鋭い語り口調が少なくて好きです

@@Q14: 未来であり空想、現実離れしている科学

@@Q15: 全てにおいて活字離れが進んでおり
本事体にも”売れない”という言説が有ります

空想する事、考える事、人々の探求心が劣ったせいだと
思います、現代人は本に癒しや救いを求めているのも
原因だと思います
ＳＦが荷うべき世界が近づきはじめている為、夢を持てなく
なってきているのではないのでしょうか？
@@Q16: 活字離れが激しく、想像力が乏しい為
映画化とかが一番受け入れられやすいのでは
無いでしょうか？
（原作本として生きるようにするという作戦）

サイエンス・ホラー、サイエンス・ミステリー
としてのジャンルを確立する

@@Q17_1: 瀬名秀明先生
@@Q17_2: ダニエル・キイス

@@Q17_3:
@@Q18: ＳＦホラーがなんとなく多いような気がします
ＳＦファンタジーな作品がもっと多くても良いのでは
無いでしょうか？
夢がもてて良いと思うのですが

@@serial: 40
@@name: （削除）
@@age: 3X
@@sex: male
@@Q1: c
@@Q2_1: SF
@@Q2_2: ホラー
@@Q2_3: ミステリ
@@Q3: d
@@Q4: c
@@Q5: a
@@Q6: g
@@Q7_1: c
@@Q7_2:
@@Q8_1: d
@@Q8_2: d
@@Q8_3: f
@@Q8_4: f
@@Q8_5: c
@@Q8_6: f
@@Q8_7: f
@@Q8_8: f
@@Q9: 読んでないのでわからない。
@@Q10: 上に同じ
@@Q11: 上に同じ
@@Q12:
@@Q13: 瀬名氏は、
ＳＦファンは、科学知識をみにつけねばならないと思っていますか？
@@Q14: 刺激、普段考えない事を考えさせられる事。
@@Q15: 自分達のガス抜き。
ネガティヴワード＋ちら（相手をみる）は、どのジャンルでもしている。
人のやる気をそいで恥じぬ態度は反吐がでる。
@@Q16: ーＳＦファンとしては、薄かろうが臆せずにいろんな経験や、集まりに参加し、脳味噌で咀嚼し暑く語れたらいいと思う。「熱いハート」がなくて何になろう。
@@Q17_1: 平井　和正
@@Q17_2: 田中　啓文
@@Q17_3: 牧野　修
@@Q18: ジャンル意識はもたない。売れないとか厭味を垂れ流すのを拝聴するために読んでいるわけじゃない。

@@serial: 42
@@name: （削除）
@@age: 2X
@@sex: male
@@Q1: a
@@Q2_1: SF
@@Q2_2: FANTASY
@@Q2_3: WAR
@@Q3: c
@@Q4: c
@@Q5: b
@@Q6: g
@@Q7_1: a
@@Q7_2:
@@Q8_1: e
@@Q8_2: f
@@Q8_3: f
@@Q8_4: f
@@Q8_5: f
@@Q8_6: f
@@Q8_7: f
@@Q8_8: f
@@Q9: もうちょい考えよう。
で、どうやってミトコンドリアは情報の相互伝達を行っていたんでしょうか？
途中で読むの止めたんで知らないんすよ。
あと、宿主を殺す寄生体は、あんまり優秀じゃない気がします。
@@Q10: ＳＦ大会でやるような物と、何か違うんでしょうか？
ＳＦは人間の再定義だと考えています。好奇心をそそられなければ人は何もしないでしょうから、そそる大風呂敷をしっかり広げてしっかり畳んで下さい。
@@Q11: ごめんなさい。あまり知りません。
@@Q12: どうじょう。いろんな意味で。
@@Q13:
@@Q14: 上記の通り。人間性・社会・自然の再定義。
「何か」があるだけではただの妄想。その「何か」がそこある人、社会に何を齎すのかが問題。
@@Q15: 日本の作家が育たないから。
国産の牽引車が無いのは問題。
@@Q16: 過去の名作の再販を行う。
@@Q17_1: ロバート・Ｊ・ソウヤ-
@@Q17_2: ラリー・ニーブン
@@Q17_3: オースン・スコット・カード
@@Q18: とにかく日本の作家は勉強不足だ。
最新の情報を巧みに使いこなせないのは何故？

@@serial:　43
@@name:　大森　望
@@age:　4X
@@sex:　male
@@Q1:　d
@@Q2_1:　ＳＦ
@@Q2_2: ミステリ
@@Q2_3:　ホラー
@@Q3:　g
@@Q4:　e
@@Q5:　b
@@Q6:　k
@@Q7_1:　a
@@Q7_2:　on
@@Q8_1:　b
@@Q8_2:　a
@@Q8_3:　a
@@Q8_4:　c
@@Q8_5:　b
@@Q8_6:　c
@@Q8_7:　a
@@Q8_8:　b
@@Q9:　論理的に考えて世界の変貌にたどりつくはずなのに、そこを書かないところがちょっと物足りない。まあそういうＳＦはもう流行らない（ウィリアム・ギブスン）という考えもありますが。
　アイデアは本格ＳＦの王道なのに、処理の仕方がちょっと違う感触。

@@Q10:　啓蒙書としては読みやすく良質だと思うけど、瀬名秀明的な個性がちょっと見えにくい。
@@Q11:　科学者作家のイメージと裏腹に、エモーショナルな要素に強く反応するような印象がありますがどうなんでしょうか。ジャンルＳＦに関するスタンスは見えにくい。
@@Q12:　やや一面的というか、狭くとらえすぎている気が。現実との科学との関係性で語るべきＳＦは、ＳＦの中ではごく一部だと思う。科学的論理ってとこまで広げちゃえば、まあたいていのＳＦが該当しますが。
@@Q13:
@@Q14: ・宇宙船とかロボットとか人工生命とかタイムマシンとかが出てくる、ある程度まで非日常的な小説。
・論理的に導き出される認識的異化作用を持ち、なおかつ現実には起きえないようなことが作中で起きる小説。

@@Q15: 現在では、他ジャンル（ミステリ、ホラー、時代小説）と比べてとくに売れないとは思えない。四六判１万部程度の初版の小説に関して、ＳＦというレッテルがマイナスになる事実はほぼない。
「売れない」と言われるのは、10 万部超のベストセラーが出にくい（出た場合にはＳＦと呼ばれず、ホラー、ミステリに分類される）ため。
「売れない」イメージが定着したのは、70 年代～80 年代はじめまでのＳＦ出版ブームの反動。

@@Q16: 作者・読者・出版社がＳＦだと認める作品から 30 万部以上のベストセラーを出す。
@@Q17_1: ルーディ・ラッカー
@@Q17_2: グレッグ・イーガン
@@Q17_3: Ｒ・Ａ・ラファティ
@@Q18:

@@serial: 44
@@name: （削除）
@@age: 3X
@@sex: female
@@Q1: b
@@Q2_1: ＳＦ
@@Q2_2: ミステリー
@@Q2_3: 児童文学
@@Q3: d
@@Q4: b
@@Q5: b
@@Q6: h
@@Q7_1: a
@@Q7_2:
@@Q8_1: b
@@Q8_2: a
@@Q8_3: b
@@Q8_4: f
@@Q8_5: f
@@Q8_6: f
@@Q8_7: f
@@Q8_8: f
@@Q9: 八月の博物館、読みました。単純に「面白い」「面白くない」と言ってしまえないような、問題作だと思いました。
作中の「わたし」イコール作者である瀬名さん、であるとは思いませんが、「わたし」が物語の意義を問いつづける姿勢に共感を持ちました。
入れ子構造になっているこの作品は、パラサイトイブとも、ブレインヴァレーとも、異質なものだし、ＳＦと呼んでしまっていいのか悩むところもあるので、先の二つの作品についてのみ絡めてＳＦについて思うところを言ってみようと思います。

このアンケートがきっかけでいろいろ考えてみました。
ＳＦ的な設定が正確であるかどうかとは何を意味しているのでしょうか。科学を物語に取り入れ、その専門性とリアルさを追求することの意味、です。
思うに、読書を演劇鑑賞に例えるならば、演じられる物語を楽しむために、豪華で緻密ですばらしい舞台や衣装を必要とする舞台、というものがあると思います。もちろん、簡素でシンプルな舞台でこそ映える作品と、どちらがいいかは単に好みの問題でしかありません。
とにかく、豪華絢爛でリアルな衣装と、テープなんかじゃない生演奏と、細部までリアルに作りこまれた舞台が作り出す世界に酔う。そういう演劇もあると思います。そのとき、女優の衣装がぺらぺらの化繊であることが見え見えだったり、舞台の石垣が発泡スチロールだったりするのがもろ分かりだったら、とたんに冷めてしまって酔うどころではないでしょう。
せっかく脚本がいいのに、舞台がね…、という具合です。
ところで小説家は、脚本から音楽から大道具から衣装まで全部個人作業です。(同じくほぼ個人作業のマンガの場合、絵がいいのにストーリーが…とかあるいはその逆とかありませんか？)
科学的な設定を取り入れている小説で、まるきりだまされてしまうくらいリアルな科学描写だったら、まず舞台装置は大成功…と言っていいのではないでしょうか。
そして、脚本、つまり物語的なものそのものについては別の話になります。ですが、物語に引き込むための舞台に過ぎないから、大道具も衣装も「付け足し」に過ぎないとは思いません。演劇の舞台は役者、脚本、舞台すべてあいまって、出来上がるものでしょうから。小説の場合も同じくです。
瀬名さんが、科学の知識がおありになることで、設定を緻密にリアルに描写出来るのならば、読者は、喜んで騙されたいと思うのではないかと思います。化繊の衣装と絹の衣装と区別がつかない読者がいるとしてもです。そのへんの最低ラインをどこにおくか、は、その作家の個性でもあるし、作風でもあるでしょう。
ちなみに、わたしが、瀬名さんの作品に惹かれたのは、舞台の緻密さ以上に、物語的なところで感動させられたからです。瀬名さんにとっては、心外かもしれませんが。

さて、ここまでの話はあくまで、「ＳＦ的な設定」について、であって、「ＳＦそのものとは？」とか「ＳＦたましい」とか、いうものについては、わたしもよく分かりません。
わたし自身が知りたいと思います。
ＳＦセミナーでの公演がいずれ文書になって読めることを願っています。
@@Q10:
@@Q11:
@@Q12:
@@Q13:
@@Q14:
@@Q15:
@@Q16: わたしも、それが知りたいです。
@@Q17_1: 小松左京
@@Q17_2: ＡＫル・グイン

@@Q17_3:
@@Q18:

#Q7_2 が on になっていませんが、プロの方だと思います。
#「最低ライン」をどこに置くか、という問題ももちろんありますが、それ以前に小説を読む人が必ずしも皆「騙されたい」と思っているわけではないらしいこと（小説の中にウソがあると怒る人もいる）、またラインの基準が人によって違うことが、いろいろと難しい問題を生みだしているように思います。このあたりのことは「２．講演録」でも述べました。

@@serial:　45
@@name:　（削除）
@@age:　3X
@@sex:　female
@@Q1:　b
@@Q2_1: ミステリー
@@Q2_2: ファンタジー
@@Q2_3:
@@Q3:　f
@@Q4:　c
@@Q5:　a
@@Q6:　j
@@Q7_1:　c
@@Q7_2:
@@Q8_1:　c
@@Q8_2:　d
@@Q8_3:　e
@@Q8_4:　f
@@Q8_5:　b
@@Q8_6:　b
@@Q8_7:　f
@@Q8_8:　f
@@Q9: 部分部分がうまくつながらない感じがします。
「小説」としての部分と、科学うんちくの部分が上手く
まざっていないというか。

私の中では瀬名さんの小説はＳＦカテゴリに入っていません。
読んでないものもあるので、気に障ったらすみません。
@@Q10: すみませんが、よく知りません。
@@Q11: すみませんが、よく知りません。
@@Q12: すみませんが、よく知りません。
@@Q13: 一度ＳＦ小説を書いてみたらどうでしょう。
@@Q14: ・ひとつの世界を作り上げていること。

@@Q15: 硬いイメージがあるから？
「ＳＦ小説」と名のついていないＳＦ小説は売れている
と思います。
厳密に言えばＳＦ風味でしかないのかもしれませんが。

ＳＦの人は自虐におちいってるところがなきにしもあらず
だと思っていますが、ミステリにもそんな所がありますし、
コアなファンっていうものはどこでもそうなんじゃないですか？

@@Q16:　・10代向けを意識したＳＦレーベルを出す。
・ＳＦを書く人を増やす。
@@Q17_1: 大原まり子
@@Q17_2: アイザック・アシモフ
@@Q17_3: コードウェイナー・スミス
@@Q18: 「ＳＦ小説」以外の分野に関してはＳＦは元気だと思います。
特に不満や要望もありません。
面白ければなんでも読むというのが私のスタンスですが
ＳＦは私にとって今も面白いもののひとつです。

@@serial: 46
@@name: （削除）
@@age: 2X
@@sex: male
@@Q1: b
@@Q2_1: SF
@@Q2_2: 古典
@@Q2_3: 歴史物
@@Q3: d
@@Q4: b
@@Q5: b
@@Q6: i
@@Q7_1: c
@@Q7_2:
@@Q8_1: f
@@Q8_2: f
@@Q8_3: f
@@Q8_4: f
@@Q8_5: f
@@Q8_6: f
@@Q8_7: f
@@Q8_8: f
@@Q9:
@@Q10:
@@Q11:
@@Q12:
@@Q13:
@@Q14: 人には不可知な存在へ「科学的」な仕掛けによって迫ろう
という試み。
@@Q15: 「売れている」という人は「自分のＳＦ」が売れているからそういうのであり、「売れない」という人は（以下略）。

@@Q16: 「ＳＦ小説」の定義を拡張する。
@@Q17_1: 神林長平
@@Q17_2: カート・ヴォネガット
@@Q17_3:
@@Q18: 常に「ＳＦ」はあるので大丈夫。

@@serial: 47
@@name: (削除)
@@age: -
@@sex: male
@@Q1: b
@@Q2_1: メタフィクション、マジックリアリズムなどのポストモダン小説
@@Q2_2: 新本格以後のミステリ
@@Q2_3: 純文学
@@Q3: g
@@Q4: c
@@Q5: a
@@Q6: j
@@Q7_1: b
@@Q7_2:
@@Q8_1: c
@@Q8_2: b
@@Q8_3: f
@@Q8_4: b
@@Q8_5: c
@@Q8_6: f
@@Q8_7: b
@@Q8_8: f
@@Q9: 良質のSFだと思います。なにか批判されているのですか?
いわゆる「コアな」SF ファンのかたがたがどういうことをおっしゃっているのか、じつはよく知らないのですが、読むときに過剰にジャンルにこだわっている人の言うことはあまり気にしてもしょうがないので。
『BRAIN VALLEY』よかったと思います。
@@Q10:
@@Q11:
@@Q12:
@@Q13:
@@Q14: 特定の出版社の特定の叢書・文庫から出ている「コアな」ジャンルプロパー小説と、絵入駄菓子系文庫。どちらのファンも怖い。
個人的には、その両方に当てはまらない 17-18 世紀のユートピア小説とか、ナボコフの『アーダ』(←これはいちおう早川だけど)『ベンドシニスター』(むかしサンリオいまみすず)とかも SF だと思うし、じつはそういう「ジャンル」的商売にそれほどしがらみのない作家や作品のほうが好きです。
「XX のようでなければ SF でない」って言う人は、既知の、かつて自分が愉しんだのと同じものばかり読みたい人ですね。安心したいのでしょう、きっと。
@@Q15: 売れている。純文学やポストモダン小説に比べれば売れている。それにヤングアダルト系「ライトノベル」(いやな言葉)だって部外者から見ればSF だ。
@@Q16: 早川や徳間以外の出版社から、大人向けのものがもっと出ればいいのに…って、これは「そうなるためにはどうしたらいいか」という質問ですよね。…うーむ。もうじゅうぶん売れていると思うが。
@@Q17_1: 筒井康隆
@@Q17_2: バラード
@@Q17_3: ウィリアム・バロウズ
@@Q18: もっと勉強しますので、もう少し待っててください。滅びないで。もっと好きになれると思う。

@@serial: 48
@@name: (削除)
@@age: 3X
@@sex: male
@@Q1: b
@@Q2_1: ファンタジー
@@Q2_2: SF
@@Q2_3: ハードボイルド
@@Q3: d
@@Q4: b
@@Q5: c
@@Q6: h
@@Q7_1: a
@@Q7_2:
@@Q8_1: a
@@Q8_2: a
@@Q8_3: f
@@Q8_4: f
@@Q8_5: f
@@Q8_6: f
@@Q8_7: f
@@Q8_8: f
@@Q9: 以前とある掲示板に投稿した『BRAIN VALLEY』
の感想文を書いておきます。瀬名氏には少々
失礼な感想文でありますが、そのままにしていま
す。非礼をお詫びしておきます。

『BRAIN VALLEY』
瀬名秀明 角川書店

chinobox 氏が彼の書評のサイトに、ピリッとしまった感想を書いていたので、興味を持ち移動時の暇つぶしと思って読んでみました。

とても良くできていて、比較的短時間に上下巻読み通しました。瀬名氏はエンターティメントの定石をよく知ってます。お色気、アクション、SFX ばりばりって感じです。

『パラサイト・イブ』よりも分量が多く、盛りだくさんでより楽しめます。この本での最も読み応えのある部分は、脳科学の最新知識と、オカルト・UFO の話、それと神学を混ぜ込んだ蘊蓄にあります。この蘊蓄の展開こそが骨組みで、お色気、アクション、お涙頂戴などの一般的エンターティメント部分は、その装飾といって良いほどです。

この作者のすぐれているところは、全体の構成も、そしてその中心の蘊蓄も、中心となる流れが実にシンプルで単純な点にあります。ほとんど当然とでも言えるほどに陳腐な中心に、実に多彩な盛りつけがなされている。これほどの素材を、これほどチープに盛りつけられる才能、かなり希有だと思う。

比較的長いプロローグの後、ある著名な脳科学者が、日本の山奥に建設された大規模な研究施設に迎えられる所から物語が始まります。いま理研に脳科学の研究機関ができていますが、あれを山奥に持って行ったようなものです。

研究施設では、脳科学、霊長類を使った認知科学、人工生命、それと臨死体験を科学的に調査する研究グループがあります。謝辞の中に電中研の人の名前もあったけど、心理学関係で協力した人がいるのだろうか。

お光さま、とかいう超生命体？を信仰する、近隣の村人たち、巫女、あやしげな研究所長と秘書、など、ありとあらゆるお定まりの怪しげな
者が総登場します。

誰かがマイケル・クライトンと比較する感想を述べていましたが、位置的にけっこう似てます。ただどうしても中心が脆弱で、下世話な感じが否めないのが、瀬名氏の場合に残念です。マイケル・クライトンの場合はやることは単純で、あざといで

すが、けっこう骨太な安心感があるのが強みです。もちろん作者それぞれに持ち味があるのですから、一概に良い悪いとは言えませんが。

またマイケル・クライトンの場合は、読者に分からせてあげようというような啓蒙意識が見えますが、瀬名氏は一種の装飾として科学知識を平気で使えるあたり、作者の個性の違いを感じます。啓蒙は時にうっとおしい。難しいものです。

ただ、ここまで誉めてきて言うのはなんですが、私が求めている読み物とは違いますね。移動時の暇つぶしなどに読むには持ってこいですが。エンターティメントの捉え方が、どうしても古典的に過ぎます。読者と共に創ってゆく、という姿勢ではない。たぶんそんな半端なことは彼の性格が許さないのでしょう。

@@Q10：残念ながら読んでいません。
@@Q11：残念ながら読んでいません。
@@Q12：残念ながら読んでいません。
@@Q13：これからも定期的に小説を発表して、
楽しませて下さい。期待しています。
@@Q14：常識や日常的経験、科学的知識によって縛られている、私の世界認識に対して、何らかの理屈と小説の効果によって、揺らぎを与えてくれる小説群、というイメージを持っています。その理屈の部分に科学技術が道具として使われていると、よりＳＦという感じがします。それからちょっと怖い小説、というイメージもあります。子供の頃に見たＳＦ映画（アンドロメダ病原菌、猿の惑星、オメガマン、ウェストワールドなど）や読んだ小説（謎の転校生、地球最後の日、緑魔の街など）に怖いものが多かったせいでしょうか。
@@Q15：　本屋でのＳＦ小説の棚が極めて小さいことから、「売れていないのだろうな」と感じています。私が好きな別のジャンルとしてミステリ、時代小説がありますが、これらはどの本屋に行っても確実に置いてあります。（瀬名氏の小説はどの本屋に行っても確実にありますが。）売れない理由は「根暗」な感じがするからだと思います。「お洒落じゃない」というのも理由の一つかも。
@@Q16：昔みたいにＳＦを読んでいるのが「格好いい」って感じになればいいのかも。無理のようにも思う。でも映画・ゲーム・マンガの分野ではＳＦは大きな集客力を持っているわけだから、小説の分野でもできないことはないのかも。
@@Q17_1：いとうせいこう
@@Q17_2：　J.Gバラード
@@Q17_3：　P.Kディック
@@Q18：先端技術的ガジェットに頼らずに小説としての面白さを考え直すべきだ。ガジェットはハードボイルド小説でのピストル程度の意味でしかない。

@@serial: 49
@@name: (削除)
@@age: 2X
@@sex: male
@@Q1: c
@@Q2_1: ＳＦ
@@Q2_2: ヤングアダルト
@@Q2_3: ミステリ
@@Q3: d
@@Q4: c
@@Q5: a
@@Q6: j
@@Q7_1: a
@@Q7_2:
@@Q8_1: b
@@Q8_2: a
@@Q8_3: f
@@Q8_4: f
@@Q8_5: b
@@Q8_6: f
@@Q8_7: d
@@Q8_8: f
@@Q9: 科学的整合性とその作品がＳＦであるかどうかは関係のないことと考えております。瀬名先生の作品の場合は科学や科学者に関する描写（ディティール）がうまいため、作品に説得力がまし、面白い効果がでていますが、これとＳＦであるかどうかもやはり直接の関係はないと思われます。
例えば、藤子先生や竹本泉先生のマンガは明らかにＳＦなのですが、科学に関する描写はいい加減です。
結局、ＳＦかどうかというのは話が広がるか収束するかというネタの発想の方向性の違いにあるのだと思います。前々回のセミナーでの『アスファルト』事件などはその端的な例なのではないでしょうか。
『ＢＶ』での作者の発想はまさしくＳＦ的な外向けの発想です。
あの無茶な発想はＳＦ以外のなにものでもないでしょう。
非常に見事な大ネタでした。

上記のような理由から、どれもかなりうまいＳＦとして楽しませていただきました。
しかし、傷もないわけではなく、特にその文章、描写には疑問に思う点も多く見られました。

@@Q10: 『マッカンドルー航宙記』を思い出させる発言が多く、根っこのところでＳＦな方なのだと思います。共感できます。
（『八月の博物館』での考えが作者本人のものだとしたらこわいのですが）
@@Q11: 特にありません
@@Q12: 特にありません
@@Q13: 次回作を楽しみにしています。
冗談なのでしょうけど、本当にヤングアダルトを書かれるのでしたら是非読みたいと思います。
@@Q14: ハヤカワ、創元、電撃などのレーベルから出ている小説というイメージがあります。軍事シミュレーションものや菊池先生の魔界都市シリーズなどもＳＦだと思っていますが、まず、思い浮かべるのはこういった出版社のＳＦレーベルです。
特にハヤカワ、創元です。
@@Q15: ミステリに比べ、書店での占有面積が狭いことや、ＳＦが売れないという発言をする作家や編集者が多いことからすると、やはり売れていなかったのでしょう。

売れないと言われるのは一時期売れすぎた反動でそう見えることと、ＳＦそのものが大人向けと思われていないため実際に売れていないといった両方の面があるのだと思います。
（もうひとつ、宮部みゆき、北村薫の作品のようにＳＦであってもＳＦだと思われていない、というケースも考えられますがここでは割愛いたします）
しかし、ＳＦ「小説」が売れないのには、もうひとつ、ゲーム、アニメ、映画、漫画など他のメディアでかなりの代用が効くという面もあるのではないでしょうか。
とくに最近のＳＦ漫画は出来が良すぎますし、最近はＳＦ小説で育った作家が描いているのでネタ的にも小説に遜色ありません。
逆に、ミステリ、歴史物では漫画、ゲームなどがあまり充実していないので、小説ばかり売れるのではないでしょうか。

ただし、逆に今ほど「自分にとってのＳＦ」が充実している時代もなく、小説に限ってみても読み切れないほどの「実はＳＦ」作品が多いので、今の日本のＳＦファンは環境としては恵まれていると思います。

@@Q16: アイドルに宣伝させ、「ＳＦ小説」にある「子供っぽい」「おたくっぽい」といったイメージを払拭することが出来れば、売れるようになるのではないでしょうか。

・・・・でも、嬉しくはありません。

現実にはインターネットのお陰で、良作のＳＦに当たる可能性が高まったため、出版点数が減ってもあまり困りませんでした。
@@Q17_1: 秋山瑞人
@@Q17_2: グラント・キャリン
@@Q17_3:　山本弘
@@Q18:　良い「ＳＦ」が多く、また良い「ＳＦ」を見つけやすく、入手しやすいイイ時代になりました。
個々の作家に言いたいことはありますが、ＳＦに対しては、特に意見はありません。

@@serial:　50
@@name:　（削除）
@@age:　-
@@sex:
@@Q1:　d
@@Q2_1:　ＳＦ
@@Q2_2:　ファンタジイ
@@Q2_3:　ホラー
@@Q3:　f
@@Q4:　c
@@Q5:　a
@@Q6:　k
@@Q7_1:　a
@@Q7_2:
@@Q8_1:　f
@@Q8_2:　f
@@Q8_3:　f
@@Q8_4:　f
@@Q8_5:　f
@@Q8_6:　f
@@Q8_7:　f
@@Q8_8:　f
@@Q9:
@@Q10:
@@Q11:
@@Q12:
@@Q13:
@@Q14:　この世にないものを用いて世界を語るもの。
@@Q15:　21世紀が近づき、21 世紀になってしまったから。つまり、未来の喪失で、それは同時に現実の喪失。
一方で、90 年代はＳＦ界自体も、「一般」に向けて売る努力を怠っていたような気がする。
@@Q16:　ひとまず、ＳＦファン以外の一般読者に向けた、分かり易い「いかにもＳＦ」とでもいったような作品を売り込む。
また、中高校生のような本来のＳＦファンの供給元をターゲットにした販売戦略を考える。
@@Q17_1:　アシモフ
@@Q17_2:　クラーク
@@Q17_3:　ハインライン
@@Q18:　一言で言うなら初心に帰れというところ。
付加価値ではなく、ＳＦ本来の価値を重視すべきではないか。

@@serial: 51
@@name: （削除）
@@age: 4X
@@sex: female
@@Q1: a
@@Q2_1: ＳＦ
@@Q2_2: ファンタジー
@@Q2_3: 歴史小説
@@Q3: f
@@Q4: c
@@Q5: b
@@Q6: k
@@Q7_1: a
@@Q7_2:
@@Q8_1: f
@@Q8_2: f
@@Q8_3: f
@@Q8_4: f
@@Q8_5: f
@@Q8_6: f
@@Q8_7: f
@@Q8_8: f
@@Q9:
@@Q10:
@@Q11:
@@Q12:
@@Q13:
@@Q14: 一番最初に読み始めたジャンルの１つ
@@Q15: 売り方が悪い
@@Q16: ファンを増やせ
@@Q17_1: アシモフ
@@Q17_2: ハインライン
@@Q17_3: マキャフリイ
@@Q18: ハードＳＦに走りすぎるとマニアックにすぎるようになる。
物語は楽しめるのが一番

@@serial:　52
@@name:　(削除)
@@age:　3X
@@sex:　male
@@Q1:　d
@@Q2_1:　冒険
@@Q2_2:　ＳＦ
@@Q2_3:　政治
@@Q3:　e
@@Q4:　d
@@Q5:　b
@@Q6:　j
@@Q7_1:　a
@@Q7_2:
@@Q8_1:　a
@@Q8_2:　c
@@Q8_3:　f
@@Q8_4:　f
@@Q8_5:　f
@@Q8_6:　a
@@Q8_7:　f
@@Q8_8:　f
@@Q9: 楽しく読ませていただいております。
@@Q10:
@@Q11:
@@Q12:
@@Q13: 難しいことをまるでやさしいことのようにかける瀬名さんのことを東大の師匠を軸にする私たちの寄り合いでは尊敬しております。ＳＦ作家として次回作も楽しみなのですが、科学読本とか書いてくれたらなあとか思いつつ、出していただいている本をすべて読んでません。すみません。これから読みます。がんばってください。
@@Q14: 不思議なことにこっそり読んでいる人が多いというかんじ
@@Q15: ジャンルが細かく切り分けされた結果ＳＦといわれるジャンルが非常に狭くなって、売れなくなったように見えるからかなあ。
@@Q16: 誰か教えてください
@@Q17_1: 高千穂遥
@@Q17_2:　谷甲州
@@Q17_3: 佐藤大輔
@@Q18:

@@serial: 53
@@name: （削除）
@@age: 2X
@@sex: male
@@Q1: c
@@Q2_1: SF
@@Q2_2: 純文学
@@Q2_3: 日本古典
@@Q3: d
@@Q4: c
@@Q5: a
@@Q6: h
@@Q7_1: b
@@Q7_2:
@@Q8_1: f
@@Q8_2: f
@@Q8_3: b
@@Q8_4: f
@@Q8_5: f
@@Q8_6: f
@@Q8_7: f
@@Q8_8: f
@@Q9: 「SF」であることが評価の対象になるのではなく、リアルで共感できる小説がわたしにとって良い小説なので、そのような点では『八月の博物館』は児童文学に顕著な「はじめて接する感動」が美しく描かれていてすばらしいと思われます。

@@Q10:
@@Q11:
@@Q12:
@@Q13:
@@Q14: 「SF小説」=スペオペ
@@Q15: 広い意味で小説を読む人たちにとって存在自体が知られていないことがある。文系と呼ばれる人の読まず嫌い。「小説としては劣っていてもSFとして優れているから良い」というひいき目はやめてほしい。
@@Q16: 現代の新しい作家も大事だが、以前の名作を普及させることも必要。SFというレッテルにこだわることをやめる。
@@Q17_1: 北野勇作
@@Q17_2: マイクル・コニイ
@@Q17_3: コードウェイナー・スミス
@@Q18: SFには期待をしていません。小説には期待しています。

@@serial: 54
@@name: (削除)
@@age: 3X
@@sex: female
@@Q1: b
@@Q2_1: ＳＦ
@@Q2_2: ミステリ
@@Q2_3: ファンタジー
@@Q3: f
@@Q4: d
@@Q5: b
@@Q6: j
@@Q7_1: a
@@Q7_2:
@@Q8_1: c
@@Q8_2: b
@@Q8_3: f
@@Q8_4: f
@@Q8_5: f
@@Q8_6: f
@@Q8_7: f
@@Q8_8: f
@@Q9: 2作読んだだけですが、瀬名さんってロマンチストなんだなあ、とか思います。これがＳＦかどうかってところはしかし、あまり考えてません。そうですね……あんまりＳＦとは思ってないのかも。パラサイト・イヴはロマンチック・ホラーで、BRAIN VALLEY は科学小説、かなあ。あんまり「空想科学小説」って感じはしないです。多分、現実に近すぎるんじゃないかな。オチはともかく。異質なものが感じられないのでＳＦとは感じられないのかも知れません。
あくまでも私にとって、ですが。何を異質と感じるかは読者によりますので。
@@Q10: 特にそれらの活動について内容を伺ったことがないので何とも言えないんですが、別に活動してるのは全然悪いことじゃないと思います。別にＳＦ観とは関係ないです。
@@Q11: ＳＦ観と絡める必要があるんですか？ 別に関係ないと思いますけど。文芸評論ですよねえ。そんなん、評論してる本人のＳＦ観がＳＦを評論する時に関係あるかも知れませんが、評論を読んでいる読者なんか関係ないでしょう。評論ってのは評論者本人の価値観に基づいてするものです。
@@Q12: あまり読んだことはないですが。ただ、ＳＦは難しいと思っていた、なんて意見を先ほど読みましたが、だったらそういうＳＦは向いてないだけなんじゃないのかな、とか思います。別に本なんて向いてないものをムリヤリ読む必要もないし。ＳＦとはこうあるべきだ、なんてのは本人の中にしかないんだから、気にすることはないと思いますけど。確かにＳＦと呼ばれているものをどの程度の量読んでるか、によってＳＦに対する考え方って違ってくるみたいですけど。まあ、統計的に有意な結果が出てるかどうかは判らない意見ですが。
向いてないものをわざわざ読むことはないです。私は恋愛小説は向いてないので読みませんし。
@@Q13: 真面目なことはいいことですが、疲れないようにしてくださいね。あまり色々と気にしすぎると疲れちゃいますよ。
@@Q14: Sense of Wonder。使い古されてますね。異質なもの、不思議なものを感じられればそれがＳＦだと思います。ただ、何を異質と思うか、不思議と思うかは、その人の知識（読書量含む）や教養、人生経験などで全然違いますから。当然、ＳＦの範囲も人によって違いますね。ただ、ものすごくコアなところは誰しもがＳＦと呼ぶものはあるかも知れません。境界条件がとても広いんですよ、きっと。
@@Q15: さて？ ＳＦの範囲の取り方でしょう。宇宙が出てくればＳＦなら売れてるでしょうし、ファンタジーももともとＳＦの一種って考えれば売れてるでしょう。ただ、「コアな人が好きなＳＦ」が売れてるかどうかは、データがないので判りません。何部売れれば売れてることになるんでしょうね？ 「アルジャーノンに花束を」は名作ＳＦ短編と言われてましたけれども、いつだったかバカ売れしたように思いました。が、どの程度売れたかは知りません。結局、売れたも売れないもＳＦの範囲の取り方によると思いますので、特に「ＳＦ小説は売れない」という言説には何とも思いません。
@@Q16: ……活性化ですか。どういうＳＦを活性化したいかによると思います。私の好きなタイプの作品がそんなにたくさんの人に好かれるとは思ってませんし。で、好きなタイプの作品が普通に読めればそれでいいですから。別にベストセラーにならなくてもいいです。普通に出版されてればそれで。何で売れなきゃいけないのかは判りませんが、出版状況が悪くなるんだ、とか宇宙人が出てくるものは書くなとか言われるんだ、ということでしたら何か考えないといけないんでしょうねえ……。というか、この「売れる」前提条件というのは、もしかして「今現在、ＳＦは採算がとれてない」なんでしょうか？ ならばせめて採算がとれるようにはしないといけないと思いますが。
@@Q17_1: 神林長平
@@Q17_2: サミュエル・Ｒ・ディレイニー
@@Q17_3:
@@Q18: 特にないですね。好きなタイプの作品が読めれば本当にそれでいいので。ＳＦってついてなくても好みのタイプの作品には目が留まるものですし。口コミという強い味方もいますし。ただ、早川ＳＦ文庫の殆どが品切れまたは絶版中というのは痛いですけども。

@@serial: 55
@@name: （削除）
@@age: UNDER
@@sex:
@@Q1: a
@@Q2_1: ミステリ
@@Q2_2: ホラー
@@Q2_3: 本格ミステリ
@@Q3: c
@@Q4: a
@@Q5: a
@@Q6: g
@@Q7_1: c
@@Q7_2:
@@Q8_1: f
@@Q8_2: f
@@Q8_3: f
@@Q8_4: f
@@Q8_5: f
@@Q8_6: f
@@Q8_7: f
@@Q8_8: f
@@Q9: 読んでいなくてごめんなさい。
ただ、パラサイト・イヴの映画が面白くなかったので……。
それで、原作のほうも未読のままです。
@@Q10:
@@Q11:
@@Q12:
@@Q13:
@@Q14: 読みたい気持ちはあるが、つまんないものが多い気がする。
@@Q15: 売れない最大の理由は、たぶん、人物描写やアクションなどの欠如が原因のように思います。ハリウッド映画なら、SF でも見に行くのだから、そんな気がしませんか？
それに周囲にも小説読む人があまりいません。
@@Q16: アイデアやプロットは勿論重要ですが、やはりキャラクター、それも漫画みたいなのではなくて。キャラは薄味だけど、マイケル・クライトンなど、やっぱりうまいし、話もわかりやすい。ハリウッド型の書き方が生き残る道ではないか、と思います。
@@Q17_1: リチャード・マシスン
@@Q17_2: スティーヴン・キングの SF
@@Q17_3: マイクル・クライトン
@@Q18: 小説の宣伝にお金をかけて！
断片的に、映像化して CF 流すのもいいと思います。そうすれば、みんな、もっと小説読むかも。ＳＦに限らない意見です。

@@serial: 56
@@name: (削除)
@@age: 2X
@@sex: male
@@Q1: d
@@Q2_1: ＳＦ
@@Q2_2: ノンフィクション
@@Q2_3:
@@Q3: c
@@Q4: c
@@Q5: b
@@Q6: j
@@Q7_1: a
@@Q7_2:
@@Q8_1: b
@@Q8_2: b
@@Q8_3: f
@@Q8_4: f
@@Q8_5: f
@@Q8_6: f
@@Q8_7: f
@@Q8_8: b
@@Q9: 評判から後追いの形で手にしたのですが、楽しめました。
その評判というのも、個人的な印象では「こんなのＳＦ
じゃない」式のものよりも、ＳＦと銘打っていないけれど
新しい作品が登場した、という論調のものが多数だった
ような気がします。
実際の印象では、ホラーよりもＳＦに近い感触を抱きました。

@@Q10:
@@Q11: 文庫解説というものを作家の方が書かれると、思い出話の
エッセイや雑感といった、「解説」として密度の薄いもの
が多いように感じられます。作者との交友を綴ったものなら
ともかく、海外作家の翻訳本では特に物足りなさを感じる
場合があります。しかし瀬名秀明という作家だけは例外で、
調査と考察の練られた高いレベルの解説をものすことの出来る
人材として、最も信頼をしています。

@@Q12:
@@Q13: 今回のアンケートにしても、解説やノンフィクションの仕事
にしても、まずデータを収集・分析を行うところに、「理系」
の資質を強く持つ作家さんだとあらためて感じます。
ある意味、少ないタイプの書き手でもありますので、その特長
と感性を発揮して、より一層のご活躍をお願い致します。
@@Q14:
@@Q15: 「売れない」というのが事実としても、ＳＦだけが売れない
のではない気がする。このような言説が流布しているのは、
それが真実な一面も確かにあると思うが、ダメなんだ、だから
やってみない。という思い込みの部分もあるように感じられる。
ハルキ文庫は当初の予想よりセールスが良かったため、継続
して日本ＳＦを出版するようになっていると聞くし、噂がひとり
歩きしているような気もする。
「ＳＦ」だからどうの、と言うよりは、やはり個々の作品の
力になるのではないでしょうか。
@@Q16: 新たな書き手、新人が登場することが活性化になります。
現在はいくつかの新人賞も出来、その土台作りが成されている
最中だと考えます。

@@Q17_1:
@@Q17_2:
@@Q17_3:
@@Q18:

@@serial:　57
@@name:　（削除）
@@age:　3X
@@sex:　male
@@Q1:　d
@@Q2_1:　ＳＦ
@@Q2_2: ファンタジー
@@Q2_3:
@@Q3:　f
@@Q4:　d
@@Q5:　b
@@Q6:　k
@@Q7_1:　a
@@Q7_2:
@@Q8_1:　b
@@Q8_2:　b
@@Q8_3:　f
@@Q8_4:　f
@@Q8_5:　f
@@Q8_6:　f
@@Q8_7:　f
@@Q8_8:　f
@@Q9:
@@Q10:
@@Q11:
@@Q12:
@@Q13:
@@Q14: センス・オブ・ワンダー
@@Q15:
@@Q16:
@@Q17_1: ロバート・Ｊ・ソウヤー
@@Q17_2: 梶尾真治
@@Q17_3: コードウェイナー・スミス
@@Q18:

@@serial: 58
@@name: (削除)
@@age: 2X
@@sex: male
@@Q1: d
@@Q2_1: ＳＦ
@@Q2_2:
@@Q2_3:
@@Q3: c
@@Q4: b
@@Q5: b
@@Q6: j
@@Q7_1: a
@@Q7_2:
@@Q8_1: b
@@Q8_2: f
@@Q8_3: f
@@Q8_4: f
@@Q8_5: f
@@Q8_6: f
@@Q8_7: f
@@Q8_8: f
@@Q9: 「パラサイト・イヴ」に関して批判が多かったようですが、ホラーとして楽しめました。ホラー小説の前半部分に科学的裏付けがあってはいけないと言うことはないと思います。数年前、所属する大学の文芸部で読書会を行ったところ、光景が目に浮かんでくるようで良い、という意見でまとまったように思います。
@@Q10: 科学ノンフィクションをお書きだとは存じませんでした。おもしろそうですので、セミナーまでには読みたいと考えています。
@@Q11: 瀬名様の文芸評論活動に関しては、あまり詳しくありません。何かの作品の「解説」に瀬名様がお書きになっているのを見たことがあるような気がする程度です。
@@Q12: すいません、読んでおりません。
@@Q13: ＳＦファンなど気にせず、やりたい分野でご活躍下さい。
@@Q14: 小説に科学的裏付けを持たせることで、現実味を持たせた小説。
読んだことで自分の知識が増えるような気がするのが良いです。
@@Q15: 「小説が売れない」という現状にあっては、「ＳＦ小説は売れない」という言説は事実でしょう。ただ、以前からＳＦ小説は売れなかったわけで、パイが小さくなれば、その分損益分岐点を割り込むのも（他の「売れている」小説と比べて）早いと思います。売れない理由は、１．小説としての評価が低くてもＳＦとして優れているとされる書物が存在する　２．そのような書物は優れた小説を読みたい読者には受け入れられない　３．小説としての評価が低くてもＳＦとして優れている書物のことをＳＦという　４．（２）により、そのような書物は読まれない　・・・　という意見を考えました。つまらない意見ですみません。別の理由として、「売れている物はＳＦだと思われない」というのはいかがでしょう。
@@Q16: １．よく売れているジャンルの小説をＳＦ的要素を付加して出版する
２．ＳＦ小説をよく売れているジャンルの小説のように書き換える
３．子供向けＳＦを子供によませ、小さいときから洗脳(笑)しておく。大人になったら、かってもらう。
@@Q17_1: 竹本泉
@@Q17_2: Ａ・Ｃ・クラーク
@@Q17_3: 野尻抱介
@@Q18: 科学者にＳＦを書いてほしい。小松左京が AKICON で「おれは文系だから、その辺（科学分野）のセンスが無いんだ」と言ってたのを聞いたことがあります。センスのある方に書いてほしいと思います。

@@serial: 59
@@name: (削除)
@@age: 3X
@@sex: male
@@Q1: d
@@Q2_1: SF
@@Q2_2: ミステリー
@@Q2_3: ホラー
@@Q3: e
@@Q4: d
@@Q5: b
@@Q6: k
@@Q7_1: a
@@Q7_2:
@@Q8_1: b
@@Q8_2: b
@@Q8_3: a
@@Q8_4: f
@@Q8_5: f
@@Q8_6: f
@@Q8_7: a
@@Q8_8: f
@@Q9: 私としては、瀬名さんの作品は全部 SF だと思うのですが。『パラサイト・イヴ』の展開にはちょっともどかしい思いをしたことは確かですし、『ブレイン・ヴァレー』や『八月の博物館』にみられる、説明の部分はあまりに完璧主義的で、ちょっとうるさいとも感じるのですが、それでも日本を代表する SF 作家のひとりだと思っています。……ご迷惑かもしれませんが。

@@Q10: すいません。あまり読んでいません。

@@Q11: 非常に真摯かつ適確な読み込みで、本業の評論家にも負けない優秀な評論になっていると思います。特にイーガンの解説には脱帽しました。

@@Q12:
@@Q13: Q9 と矛盾するようですが、SF かどうかをあまり意識してはいけないと思います。こうすれば SF になるだろうか、などと気を使った小説がおもしろくなるわけがありません。

@@Q14: 現実や固定観念に対して異議をさしはさむ小説。

@@Q15: 小説自体売れていないのでは。売れているのはごく一部の作家の作品だけでしょう。SF にはそうした「売れる作家」がいないから出版社にも敬遠されるのだと思います。決して小説自体が難しいとかそういうことではないはずです。
「売れる作家」がひとりふたり出てくれば、SF 全体も活性化するはず。それには映画やテレビとのタイアップなりなんなり、利用できるものは利用する必要があるでしょう。

@@Q16: 上に同じ。
@@Q17_1: グレッグ・イーガン
@@Q17_2: ティム・パワーズ
@@Q17_3:
@@Q18:

#Q7_2 が on になっていませんが、プロの方だと思います。

@@serial: 60
@@name: (削除)
@@age: 3X
@@sex: female
@@Q1: d
@@Q2_1: ミステリ
@@Q2_2: ＳＦ
@@Q2_3: 普通の小説（たとえば山本文緒や江國香織）
@@Q3: d
@@Q4: c
@@Q5: a
@@Q6: i
@@Q7_1: a
@@Q7_2:
@@Q8_1: a
@@Q8_2: f
@@Q8_3: f
@@Q8_4: f
@@Q8_5: f
@@Q8_6: f
@@Q8_7: f
@@Q8_8: f
@@Q9: 難しい質問ですね…(^^;
『パラサイト・イヴ』しか読んでないのですが、あれは非常に面白かったです。イッキ読みしました。特にラスト付近の、水道管を伝って何かが集まってくるところ。ぞわぞわっとしました。
ＳＦの面白さはやっぱり「うわっ！そう来たか！」という、既存の価値観および常識をぐるんっとひっくり返されたときの衝撃にあると思うんです。いわゆる「センス・オブ・ワンダー」ってやつですね。『パラサイト』はちゃんとそれができてた。読んでるときは特に「ＳＦ」という意識はありませんでしたが。
@@Q10: ごめんなさい、未読なのでパス。
@@Q11: ごめんなさい、これもパス。えと、『祈りの海』の解説は非常に素晴らしいと思いました。解説はかくあるべし、という見本のような。きちんとした解釈と、本文への愛にあふれた、傑作でした。
@@Q12: ごめんなさい、なにか申し上げられるほどよく読んでおりません。
@@Q13: 瀬名さんは非常に真摯にＳＦおよび文芸活動をとらえてらっしゃるんですね。このアンケートの姿勢の正しさに打たれました。頑張ってください。心から応援いたします。もっともっとたくさん小説を書いて下さいね。
@@Q14: 昔は宇宙が出てくるのがＳＦだと思ってました。今思えば、それってスペースオペラだったんですね。
今は、先ほども書いたとおり、「センス・オブ・ワンダー」が全てだと思っております。
@@Q15: 実際に書店で本を売ってる立場から申し上げますと、本当に売れないです（笑）。要するに、ミステリや普通の小説に比べて、お客様が少ない。読者が少ないんです、絶対的人数が。（逆にいえば、決まった数は売れます）まあ、純文学系もそうですけどね。
なぜか？慣れない方には敷居が高い、というのはあると思います。設定が難しい。ある程度読者が読み慣れることが必要です。なにせこの世に現存しないものが多いですから、かなり特殊な想像力が必要。専門用語もあるし。もちろん、そうでない読みやすいＳＦもいっぱいありますが。
@@Q16: これも難しい質問ですね…(^^;
敷居を低くして読者を広げる、に尽きるでしょうけど。
それにはどうすれば？ってことですよね。
ＳＦに薄いひとでも、すっと入り込めるようなものを書くこと、かなあ？あと、吸引力の強いもの。ミステリなどは、やはり謎の解決が知りたくてぐいぐい読んでしまいますから、ああいう力を取り込めるように、とかでしょうか。
@@Q17_1: 恩田陸
@@Q17_2: 菅浩江
@@Q17_3: ブラッドベリ
@@Q18: すみません、これも非常に難しいのでパス。

@@serial: 61
@@name: （削除）
@@age: 2X
@@sex: male
@@Q1: d
@@Q2_1: SF
@@Q2_2: 時代小説
@@Q2_3: 推理小説
@@Q3: e
@@Q4: e
@@Q5: b
@@Q6: i
@@Q7_1: a
@@Q7_2:
@@Q8_1: c
@@Q8_2: c
@@Q8_3: f
@@Q8_4: f
@@Q8_5: f
@@Q8_6:
@@Q8_7: a
@@Q8_8: b
@@Q9: 緻密に構成された良作と思います。事実、面白いとは思います。しかし、いささか違和感を感じ、そのために両手を上げて絶賛する気にはちょっとなれなません。
個人的に気になったのは、いささか説明が過剰なのではないか、説明の科学的事実、あるいはその厳密さにとらわれすぎているのではないか、と感じたところです。ただこれは、私が生化学系のことを苦手としており、きっちりと理解していないためかもしれません。
個人的には、SF 作品としては、異常な現象に対して何らかの説明が必要だと考えています。ただしその説明は、科学的である必要はまったくありません。どんな大ボラでもかまわないと思います。ただし、読者を「なるほど」あるいは「そういうものか」と納得させることができるだけの説明（言い訳とも言う）が必要です。
瀬名さんの作品、とくに長編では、説明が非常に豊富なのですが、そこで雑学的な知識を与える一方で、作品内の怪現象とあまりリンクしていないのではないかと思います。それが私の感じた違和感だと思います。
具体例をひとつあげます。『パラサイト・イブ』では、ミトコンドリアに関する説明はたくさんありますが、たとえば EVE01 の肝細胞が床をはいずり移動した力に関する説明はありません。ようはその説明が（例え大ボラでも嘘くさくても）欲しかった、というのが私の偽らざる気持ちです。
ただ、短編はそれほど違和感を感じませんでした。短いので違和感を感じる前に終わったのか、あるいは短いが故に説明が切りつめられて物語として必要な部分だけが残ったのが功を奏したのか、それはわかりません。
@@Q10: ほとんど読んでいないため、お答えすることができません。
@@Q11: よく知らないため、お答えすることは控えさせていただきます。
@@Q12: いくつかの「SF 系」サイトもしくは掲示板などのログを見る限り、きわめて冷静で理知的な言動であり、とりたてて言及するようなことは思い至りません。
@@Q13: とくにありません。
@@Q14: かつて藤子 F 不二雄は SF を「すこし・ふしぎ」の略として用いました。私はこの絶妙な略語を大変気に入っています。そこで実際「SF とはすこし・ふしぎな小説のことだ」と考えています。現実世界とはすこし違う、すこし・ふしぎな世界の、すこし・ふしぎな物語です。
ただし、Q9 で答えました通り、その不思議には何らかの説明が欲しいと考えています。繰り返しますが、その説明は科学的に正しい必要はありません。というより、あきらかに科学的に誤りであっても私はかまいません。必要なのは、読者が納得できるだけの（こじつけでもかまわない）理論またはヘリクツです。
そうした理屈っぽいすこし・ふしぎな小説が私にとっての「SF 小説」です。
@@Q15: 私は、SF 小説が売れないとは考えていません。ただし、この時の SF 小説、という括りは、非常に広範にわたります。強いて言うなら SF 的な要素も持っている作品、SF 的なガジェットを持った作品などもこの中に入ります（ただし、この定義もきわめて曖昧ではありますが）。
その一方で、非常にコアな SF 小説も存在し、それは売れていないと考えます。しかし、元来コアな作品群とはそういうものと思います。あるジャンルが非常に多様であるときに、
そのコアな部分、一見とっつきにくいが、そのジャンルを多く読みこなし、知識も豊富である者が楽しむような作品、それを「コアな」作品と私は呼んでいますが、そういった作品は読者数も少なく、そもそもあまり売れるようなものではありません。
ここで重要なのは、SF ファンが呼んでいる「SF」とはこのような「コアな」SF のことであり、その周辺に位置する作品は「SF モドキ」あるいは「エセ SF」などと呼ばれ、忌避されています（事実、私もそういう態度をとったことがあります）。
こうした「コアな」作品を読むファンからすると、確かに周辺に位置する作品はぬるま湯のようで、エセと呼びたくなる気持ちもわかります。
ですから、そういう「コアな」SF 小説が売れているかと言われれば売れていないでしょう。それはそもそも数が売れるようなものではなく、しかしある程度の売り上げはいつも確保できるようなものです。
一方で、周辺に位置する作品群は売れてはいるのですが、「SF は売れない」という表現が広まってしまったために、SF の名を冠することがなくなってしまいました。これでは「SF が売れている」とは思われないため、やはり SF は売れていないのだと考えられているのだ、

と思います。
@@Q16:　Q15の回答の表現をそのまま流用しますが、「周辺」的な作品をもっと積極的に評価するということが必要と考えます。
　多くの人にとって、いきなり「コアな」作品を手に取り、読むことは大変です。何が面白いのかわからないかもしれません。
　ですから、敷居は低く、コアなファンから見れば SF とは呼ばれないような作品を SF として評価していく、ということが重要なのではないでしょうか。
　これが、ファンの立場でできることです。
　その一方で、出版社の立場としては、もっとあざとく「SF」を前面に出して良いのではないかと思います。少なくとも、「SF」といって小難しいと思うような人はそう多くないんじゃないでしょうか。むしろハリウッド映画などを連想して手に取りやすいかもしれません。
　そうやって、周辺領域の作品を読む人を増やす。そうすれば、少なくともその一部は「コアな」作品を読むようになるかもしれません。いち SF ファンとしてはうれしいことです。
　少なくとも現在、SF が文芸の一ジャンルとして存在していることすら知らない人はあまりにも多いのです。文芸のジャンルとしての SF の認知度を上げること、これが「SF 小説」の活性化に繋がるのではないかと思います。
@@Q17_1: バリントン・Ｊ・ベイリー
@@Q17_2: 神林長平
@@Q17_3: コードウェイナー・スミス
@@Q18:

@@serial:　62
@@name:　（削除）
@@age:　2X
@@sex:　female
@@Q1:　a
@@Q2_1:　恋愛
@@Q2_2: ミステリー
@@Q2_3: 推理小説
@@Q3:　c
@@Q4:　a
@@Q5:　a
@@Q6:　d
@@Q7_1:　c
@@Q7_2:
@@Q8_1:　a
@@Q8_2:　b
@@Q8_3:　a
@@Q8_4:　f
@@Q8_5:　f
@@Q8_6:　f
@@Q8_7:　f
@@Q8_8:　f
@@Q9: 今まで、「ＳＦ」というジャンルについて考えたことがなかったので、自分のＳＦ観と絡めることは難しくてできませんが、瀬名さんの小説は大好きです。「パラサイト・イブ」でファンになったのですが、ミトコンドリアや脳など、私には親しみにくいテーマであるにもかかわらず、理科系の知識がなくても物語に引き込まれてしまい、一気に読ませる力量はさすがだと思います。
@@Q10:
@@Q11:
@@Q12:
@@Q13: 瀬名さんの著書で読んだのは、小説ばかりで、科学ノンフィクションなどはほとんど読んだことがないので、このアンケートにも、お役にたてることはほとんど書けず、大変申し訳ありませんでした。近いうちに必ず読んでみたいと思います。ＳＦセミナーでの講演も是非聞かせて頂きたいと思っています。楽しみです。
@@Q14: はっきりとはわかりませんが、物語の展開に科学が絡んでくる、というイメージしか思いつきません。
@@Q15:　実際、売れているのかそうでないかは知らないのですが、「ＳＦ小説」というと、難しいというイメージを持ってしまう人が少なくないのではないでしょうか。だから、読者層が限られてしまい、「売れない」と言われてしまうのかもしれません。
@@Q16:
@@Q17_1:
@@Q17_2:
@@Q17_3:
@@Q18:

@@serial: 63
@@name: (削除)
@@age: 2X
@@sex: male
@@Q1: b
@@Q2_1: ＳＦ
@@Q2_2: ミステリ
@@Q2_3: ライトノベル
@@Q3: d
@@Q4: b
@@Q5: a
@@Q6: j
@@Q7_1: a
@@Q7_2:
@@Q8_1: b
@@Q8_2: c
@@Q8_3: f
@@Q8_4: f
@@Q8_5: f
@@Q8_6: f
@@Q8_7: f
@@Q8_8: f
@@Q9: 今回はパスさせてください
@@Q10: 今回はパスさせてください
@@Q11: 今回はパスさせてください
@@Q12: 今回はパスさせてください
@@Q13: 瀬名さんには堅く生真面目な人というイメージがあります。
言い換えれば感性では無く、地道に積み上げた結果で勝負するとい
った感じです。
それはともかく、今のところ作家として独特の位置にいるのは確か
であり、余りＳＦを意識しないほうがいいと思います。
@@Q14: 真面目な顔をして話すバカ話。
先鋭的な内容（技術、思索、etc)を含むと読者に思わせる事が出来たらなお良し。
（もちろんその内容が現実的には全然先鋭的でなくても全く構わない）
そしてあいまいな表現ですが、「かっこ良さ」を持つものが理想です。

@@Q15: 売れていないと思います。
この当たりに限って言えば梅原氏のサイファイ理論の一部が適用出
来ると思います。

@@Q16: 「ＳＦ」という言葉に過剰な思い入れのある人間はビジネスとして
関わらない事が第一だと思います。
今月発売されベストセラー上位に入った茅田砂胡氏のスペースオペ
ラ「スカーレット・ウィザード」のあとがきに以下のような文章が
あります
>ＳＦにはほんものとにせものがあり、わたしが考えているような
>ＳＦはにせものの部類に入るので、ＳＦという呼称を使ってはい
>けないようなのです。
実際所謂ＳＦファンダム上がりの方がそのような書評をしているの
を見た事がありますが、そのような拘りを持った人がジャンルの中
心にいる限り、活性化は難しいと思います
@@Q17_1: 神林長平
@@Q17_2: 秋山瑞人
@@Q17_3:
@@Q18: 約20年間ＳＦファンであるつもりですが、ここ数年ミステリやライ
トノベル（ＳＦ業界内で言うところのティーンズノベルor ヤングア
ダルト）の方がメインになりつつあります。何かＳＦを読んでうま
いと思うことはあっても、凄いと思うことが少なくなっているんで
すよね。
但しライトノベルの楽しみ方は、一般的な小説はもちろん、Q14 で
答えたような意味でのＳＦとも異なると考えています。
・・・もっとも最近のＳＦ業界はライトノベルを「発見」し、自ら
を補完するものと位置付けているようですけどね

@@serial:　64
@@name:　（削除）
@@age:　2X
@@sex:　male
@@Q1:　c
@@Q2_1:　ＳＦ
@@Q2_2: ファンタジー
@@Q2_3:
@@Q3:　c
@@Q4:　b
@@Q5:　a
@@Q6:　g
@@Q7_1:　c
@@Q7_2:
@@Q8_1:　f
@@Q8_2:　f
@@Q8_3:　f
@@Q8_4:　f
@@Q8_5:　f
@@Q8_6:　f
@@Q8_7:　f
@@Q8_8:　f
@@Q9: すみません、一冊も読んでおりません。
@@Q10:　同上
@@Q11:　同上
@@Q12:
@@Q13:
@@Q14:　例えば､｢謎があって、それを推理する」といった決まった形式を持つ「推理小説」と違って、ＳＦ小説は定義が曖昧であるという印象があります。昔の作品は「科学的な IF を書く小説」であると思いますが。
ＳＦとは、「ミステリー」、「ホラー」といったジャンルの上を包含するより抽象的なカテゴリーなのかもしれません。
@@Q15: 私は、上記の理由で明確にＳＦと定義づけられないので、推理小説の骨格を持っていれば「ミステリー」、「ホラー」の骨格を持っていれば「ホラー」、「ある特手に出版社から中高生向けとして挿し絵付きで出され小説」は「ヤングアダルト」とかしてしまっているので、「ＳＦ」として残っているものは、ただ「今の科学から導き出される世界を構築して、その中の生活を書いただけ」という小説が残るので、地味で万人受けしないので売れないのではないかと思います。「売れなくなったからこの状況になったのか、この状況だから売れないのか」は昔のことは知らないので良く分かりませんが）
@@Q16:　SF 小説をＳＦ小説として売れば良いと思うのですが。「ＳＦ」だけをＳＦ小説としないで。自然と活性化されてくると思うのですけど。
@@Q17_1: 森岡浩之
@@Q17_2: 高野史緒
@@Q17_3: キース・ロバーツ
@@Q18: 特にありません。

@@serial:　65
@@name:　(削除)
@@age:　3X
@@sex:　male
@@Q1:　c
@@Q2_1:　ＳＦ
@@Q2_2: ファンタジー
@@Q2_3: ミステリィ
@@Q3:　d
@@Q4:　d
@@Q5:　a
@@Q6:　j
@@Q7_1:　a
@@Q7_2:
@@Q8_1:　c
@@Q8_2:　b
@@Q8_3:　a
@@Q8_4:　f
@@Q8_5:　f
@@Q8_6:　f
@@Q8_7:　f
@@Q8_8:　f
@@Q9: 途中までは良いのだが、ラストのまとめ方が今一つのように感じる。
途中までは、専門的な用語等を用いてＳＦ的にわくわくする展開なのに、ラストが陳腐。一般的には判り易いラストかも知れないが、あれだけわくわくしたのに何で良くあるような終わり方をするんだろうと感じた。
@@Q10: 済みません、あまり読んでません。
@@Q11: 本の終わりに付いている解説を幾つか読んでいます。
いつも、良くその作者や作品を研究しているなぁと感心しています。
@@Q12:
@@Q13:
@@Q14: わくわくさせてくれるもの。
自分では思っても見なかった世界や社会、考え方を見せてくれるもの。
科学的な内容は、その内容が本当に有るように感じさせる為の重要な要素の一つだと思います。
@@Q15: 私はライトノベルやマンガ、アニメを含めてＳＦ的な物は売れていると思っています。
ただ、その中で満足させてもらえる作品が少ないのかなぁと考えています。
そう言った自分が思い描くＳＦの閾値をどこの持って来るかで「売れている」となったり「売れていない」となったりするのではないでしょうか。
@@Q16:　あれはＳＦじゃ無い」と言う姿勢ではなく、「あれもＳＦだ、ただしｘｘの設定が弱い」といった姿勢にしてＳＦを活性化させる。
@@Q17_1: 神林長平
@@Q17_2: 野尻抱介
@@Q17_3: 秋山瑞人
@@Q18:

@@serial: 66
@@name: （削除）
@@age: -
@@sex: female
@@Q1: b
@@Q2_1: なんでも読みます。
@@Q2_2:
@@Q2_3:
@@Q3: d
@@Q4: b
@@Q5: a
@@Q6: j
@@Q7_1: c
@@Q7_2:
@@Q8_1:
@@Q8_2:
@@Q8_3:
@@Q8_4:
@@Q8_5:
@@Q8_6:
@@Q8_7:
@@Q8_8:
@@Q9: 「パラサイト・イヴ」を途中までとんでもなく夢中で貪るように
読みかけて、残念ながら終わりの前で魔法が解けて、すこし残念な
思いをしてから、瀬名さんの作品から、離れてしまっています。
でも、「八月の博物館」は、読んでみるつもりです。
SF は、SF、SF と何処からか切り出してきて、レッテルを貼って
陳列しないといけないほどに、絶滅種になっているのでしょうか？
不思議な気がするのですが。幼い頃からの本読みとしては。
@@Q10: この欄でいいのかな？
NHK の「ようこそ先輩」を、楽しく子達と観ました。
自分が自分で「わたしは、これが好き！」といえるものが、早い
うちに見つけられる、宣言できる、のはしあわせな事だと思いま
す。よりよい大人のナヴィゲーターが見つかればなおさら。
うちには、古本屋さんから、雑誌ニュートンを抱えてくる１２才の
男の子がいます。
本読みの子は、本読みの確率高し。
ますますの、ご活躍を。
@@Q11:
@@Q12:
@@Q13:
@@Q14: 小学校の図書室では、あまりジャンルで本は選ばれないです。
その子どもにとって、面白いか？面白くないか？それだけです。
小学校のとき、何度も借りた「宇宙人刑事（デカ）」あかね書房
か、偕成社かが、「二十億の針」創元 SF 文庫となって再び手元に
現れたときが、わたしの SF との再会かもしれません。
はじめて、自分で購入した文庫本はハヤカワ JA でしたが、SF 小説
を買ったという意識はなかったです。
@@Q15: 本読み自体が減少しているからなのか、本があふれすぎて選べないのか、よくわからないのですが、「面白ければ売れる」ではな
く、「売れ出せばみんなが買う」、という風潮のほうが、わたしには
不気味です。
@@Q16:
@@Q17_1:
@@Q17_2:
@@Q17_3:
@@Q18: 空欄が多くて申し訳ないです。
いちばん「SF」を意識していたのは、２０年位前だったのが
自分でもよくわかりました。
これからも「はっ・・・とするような想い」にたくさん出会う事ができますように。
面白いものには、きっと引き寄せられるはずなので。

@@serial: 67
@@name: （削除）
@@age: 3X
@@sex: male
@@Q1: b
@@Q2_1: 謎解き小説（ミステリ）
@@Q2_2: シミュレーション小説（ＳＦ，と思う）
@@Q2_3: 日常生活小説（灰谷健次郎「天の瞳」とか）
@@Q3: f
@@Q4: c
@@Q5: e
@@Q6: k
@@Q7_1: c
@@Q7_2:
@@Q8_1: b
@@Q8_2: b
@@Q8_3: b
@@Q8_4: a
@@Q8_5: a
@@Q8_6: a
@@Q8_7: a
@@Q8_8: f
@@Q9: 以前直接お伝えしたように，長編はいくつものアイディアを絡めていく力量には感嘆しますが，途中でトーンが変わるのについていけなかったので，Gene の方が好きです。途中で全体の枠組みをぶちこわすこと自体は他の作家にもありますが，それなりの布石が必要だと思います。
@@Q10: 科学ノンフィクションは，専門家だけが書くとわかりにくくなりがちですし，かといって素人が書くと嘘が多くて嫌になることが多いので，瀬名さんのような専門のバックグラウンドをもち，かつわかりやすい文章を書ける方の活動は応援したいと思います。
@@Q11: 意見も感想もありません。
@@Q12: あまり記憶していません。

@@Q13: 文芸評論やＳＦ論よりも小説や科学ノンフィクションを書いて欲しいです。

@@Q14: いくつかの（現実とは異なるか，あるいは実証されていない）仮定をおいて，基本的には論理的に仮想世界構築をした小説。叙述の順序や証明の満足はどうでもいいが，演繹的に導ける可能性が納得できないとＳＦとは呼びたくない。ただ空想しただけのものは「ファンタジー」と個人的には呼ぶ。
@@Q15: その言説を気にしたことがないのでわかりません。
@@Q16: 活性化して売れるようになってもすべてが読めるわけではないし，良質のものを選ぶのにかかる手間が増えるだけのような気がするので，売ることだけを目指して欲しくないです。
@@Q17_1: 眉村卓
@@Q17_2: オースン・スコット・カード
@@Q17_3: 瀬名秀明
@@Q18: ありません。

@@serial: 68
@@name: （削除）
@@age: 3X
@@sex: female
@@Q1: b
@@Q2_1: ファンタジー
@@Q2_2: いわゆる普通の小説
@@Q2_3:
@@Q3: d
@@Q4: b
@@Q5: b
@@Q6: e
@@Q7_1: c
@@Q7_2:
@@Q8_1: b
@@Q8_2: f
@@Q8_3: a
@@Q8_4: f
@@Q8_5: f
@@Q8_6: f
@@Q8_7: f
@@Q8_8: f
@@Q9: 瀬名さんの小説は「一気に読ませる力強さ」と「いつの間にか小説世界に入り込んでいる」構築力の強さが魅力だと思います。ＳＦもやはり独自の世界を強烈に作り上げる小説が多いと思いますが、イメージ先行でＳＦ→最先端科学→自分にはむずかしくてわからない、という雰囲気でやや損をしているかもしれません。あとは、瀬名さんの小説には感じませんが、ＳＦというと、なぜか少々poor な印象を受けるのはどうしてでしょう？　この点でもちょっと損をしている気がします。
@@Q10: 読んでいません。
@@Q11: ＢＫ１のものしか読んでいないのですが、そのままでよろしいのではないでしょうか？
@@Q12: 読んでいません。
@@Q13: 「月の博物館」とてもおもしろかったです！　まるで主人公の頭の中に入り込んだようで、まったく別の人の感じ方や行動のしかたが体験できて、たいへん新鮮に思えました。私小説以上に作者のことがわかったような気がする……というのは、わたしがうまいことひっかかったせいでしょうか？　ともかく、内容もドキドキして瑞々しくて、とても楽しかったです。
ＢＫ１で安原氏がすごい評をくだしていましたが……主人公は「人と比べて自分は」という考え方をあまりしない方のように思えました（そういうシーンもありましたが、そのシーンをのぞいては、主人公の決断などたいへんゆらぎが少ないと感じました）。このような思考回路の中にボンッ、と放り込まれるような小説では、一般の「良い人」と「くらべて」自分が「不良」と感じるような人は、ツラいでしょう。妬まれてもしかたないかもしれません。

@@Q14: つい最近まで、宇宙、未来、ロボットなど、曖昧なイメージでしたが、筒井康隆の「幻想の未来」を読んでから、まったく変わりました。うまくいえませんが、ある方向を嗜好する強烈なベクトルを持つ作品群、と感じています。
@@Q15: やはりそれほど売れていない気がします。みんな疲れていて、日常を離れて大きなものへ想像力を働かせる余裕がないせいだと思います。
@@Q16: 危機感を持たないことが、逆に活性化につながるのでは、と思います。「やおい小説」があれほど突飛なジャンルなのによく売れているのは、読んだ人が勝手におもしろがっているせいだと思います。ＳＦもジャンルの衰退なんて気にせずに、好きな人が勝手におもしろがって盛り上がっていれば、そのうち読まなかった人も「何がそんなにおもしろいの？」と興味を持つのではないでしょうか。
@@Q17_1: 上遠野浩平
@@Q17_2: 筒井康隆
@@Q17_3:
@@Q18: 今、子育ての真っ最中なのですが、子どもたちにもっと想像力を、と期待するなら、まず大人が想像力を働かせておもしろがっているところを見せる必要があると思います。そういう、大人が想像力を働かせておもしろがれる一分野として、ＳＦというのはたいへん広くて大きな分野だと思います。

@@serial: 69
@@name: （削除）
@@age: 3X
@@sex: female
@@Q1: b
@@Q2_1: ボーイズラブ（いわゆる「やおい」です）
@@Q2_2: SF・FT
@@Q2_3:
@@Q3: f
@@Q4: c
@@Q5: a
@@Q6: i
@@Q7_1: a
@@Q7_2:
@@Q8_1: f
@@Q8_2: f
@@Q8_3: f
@@Q8_4: a
@@Q8_5: f
@@Q8_6: f
@@Q8_7: f
@@Q8_8: f
@@Q9:
@@Q10:
@@Q11:
@@Q12:
@@Q13:
@@Q14: 基本的にはおもしろいものだと思っています。
ただ、現在は子育てなどでまとまった時間が取れないので、すぐに読めて頭も使わないでいいボーイズ系の小説を愛読する結果になっています。
SF を楽しむためには、ある程度の時間的・精神的・頭脳的余裕が必要だと思います。
@@Q15: 「売れない」と言っている人の「SF」定義は非常に狭いと思う。
以前、ファンダムで話題になった「SF 冬の時代」を説明すると、本をたくさん読む友達が、口を揃えて「え、SF って売れてるじゃん？」と言い、私の説明を聴くと、「ああ、確かにハヤカワや創元推理は、置いてない本や多いね」と言った。
結局、売れていないのは、伝統的な翻訳 SF の類であり、ジュニア小説に目を向けると、売れている作家はいる。
「売れていない」と言う人は、正確には「自分の好きなタイプの SF が」売れていないと思っているのだと思う。
@@Q16: とりあえず、評論家や作家が「こんなのは SF じゃない」という発言を雑誌等で行うのをやめること。
でも、素人目でみると、徳間やハルキ文庫もがんばってるし、活性化してると思います。
たぶん、この場合、売りたい SF というのは、いわゆるハード SF 系の、とっつきにくいタイプの SF だと思います。
そういう小説を数売るのは難しいので、いわゆる売れ線の小説シリーズを作って（作れるなら）、その売り上げでフォローされる範囲で出すしかないと思います。ボーイズなので読みたくないでしょうけど、菅野彰の「毎日晴天」シリーズの 1 巻目が、そういう話（に近い）ような気がします。
@@Q17_1: 大原まり子
@@Q17_2: 神林長平
@@Q17_3: 茅田砂胡
@@Q18:

@@serial:　70
@@name:　（削除）
@@age:　3X
@@sex:　female
@@Q1:　d
@@Q2_1:　海外文学（最近は1900年前後が多い）
@@Q2_2:　幻想文学
@@Q2_3:　ＳＦ
@@Q3:　d
@@Q4:　a
@@Q5:　a
@@Q6:　j
@@Q7_1:　c
@@Q7_2:
@@Q8_1:　b
@@Q8_2:　b
@@Q8_3:　f
@@Q8_4:　f
@@Q8_5:　f
@@Q8_6:　f
@@Q8_7:　f
@@Q8_8:　f
@@Q9:　ＳＦにしては身近な感じがして良いと思う。
素材が現実離れしすぎていないので感情移入しやすい。
@@Q10:
@@Q11:
@@Q12:
@@Q13:　あまり読んでいなくてすみません。
セミナーまでにはもう少し読みたいと思います。
@@Q14:　非日常的な、または極限状態での考え方や切り抜け方、
「その時、人がどうするか」に興味がある。
ＳＦはそうした設定を豊富に提示できるので面白い。
@@Q15:　映画やマンガなどビジュアルとしては人気が高いのでは。
しかしビジュアル的なものを文章で表現するのは限界があるし、読むのが面倒だから活字としては不人気。
@@Q16:　大衆向けの場合、文章なら身近な話題から発展させるか、
映画やアニメなど映像でも表現する。
（これが本来のＳＦファンにも評価されるかは別）
@@Q17_1:　アーシュラ・Ｋ・ル＝グィン
@@Q17_2:　トマス・Ｍ・ディッシュ
@@Q17_3:　フィリップ・Ｋ・ディック
@@Q18:　最近はほとんどＳＦを読んでいないので分かりません。
以前はＳＦの材料でしかなかった遺伝子工学や情報化社会などが現実性を持ってきて、ＳＦと現実の境があいまいなのは面白いと思う。

@@serial: 71
@@name: (削除)
@@age: 2X
@@sex: male
@@Q1: c
@@Q2_1: SF
@@Q2_2: ホラー
@@Q2_3: ミステリー
@@Q3: e
@@Q4: d
@@Q5: a
@@Q6: i
@@Q7_1: a
@@Q7_2:
@@Q8_1: a
@@Q8_2: a
@@Q8_3: f
@@Q8_4: f
@@Q8_5: d
@@Q8_6: f
@@Q8_7: f
@@Q8_8: f
@@Q9: パラサイト・イブを読んだときはまだSFファンでは無かった。
小説を読む際にあまりジャンルを意識して読むということはなかった。強いて言えばティーンズノベルとかヤングアダルトというジャンルの本を¥"小説¥"それ以外のミステリーなどを¥"普通の小説¥"と呼び分けていた。それはまた別の話か。それで、普通の小説であるところのパラサイト・イブは自分にとって怖い話を楽しむという快感を教わった本であるといえるかも。
「ページをめくってはいけない!めくったらそこに怖いことが書いてあるぞ!」って心の一部分が訴えてるのだけれどもめくらずにはいられないという感覚と読みながら「ほらやっぱり思った通り怖い!」と怖いんだか楽しいんだか判らない。というより両方が一緒になったようなそれまでには経験していなかった読書の楽しみ方を意識した
本であった。あんまりパラサイト・イブの説明になっていないか。

BRAIN BALLEYはちょうど、自分がSFファンであったということに気づいて意識してSFを読むようになった頃で短大に通ってたころだったけど、食費を削って青背を買って読むとかしていた頃。
海外SFを読むのが面白くてしょうがなかった。
不思議と日本のSFはあまり肌があわないなぁと思っていた。
はっきり言ってこれを新刊で買うのは苦しかった。
楽しんで読んだんだけど、当時難しすぎると感じたのは確か、
これからSFをもっともっとたくさん読んでもうちょっと
科学に詳しくなってから読み返そうと思った覚えがある。
ちなみに大人になって(もっと賢くなって)から読み返そう!と心に
誓うのは小さい頃からの癖だった。
ムーミンシリーズなんかそう思いながら読んだものだ。
残念ながらどれも未だに読み返していないけれど。
@@Q10: 特にありません。
@@Q11: とても好感がもてるスタイルだとおもいます。
@@Q12: 特に思うところはありません。
@@Q13: 大好き!もっと小説をいっぱい書いて欲しい。
瀬名秀明は謙虚すぎるのではないだろうか。
いやな奴になれ!という意味ではないけど、
もうちょっと自信家になってほしい。
「俺は瀬名秀明だーぜー!!正しいぜー。」って具合で。
なんか絶対無理だろうとは思います。
@@Q14: おたくのひとが好んで読む。
たくさん読むとおたくになる。
頭のいい人が読んでそう。

@@Q15: 書店員でもない、業界関係者でもない全くの一読者の意見では在るのだけれど。「売れないという言説」が一人あるきして悪しき循環をもたらしたのではないだろうか。最初に確かにあんまり売れないという事実は在ったかもしれないけど、売れない売れないと警戒しすぎた結果、実際には売れないという実体験を持たない書店や出版業界者まで過激に警戒するようになったのではないか。

とは言え、SFが売れていない時代には実際にはSFファンでなかった自分の経験で言えばSFだから特別に手に取りたくない。と言うような意識は実は少しだけあった。
当時はティーンズノベルの主な読者だったけれど、そのティーンズノベル読者のぼくは学校の図書室にあった古びたSF文庫の群を何と

なく古くさいという先入観で敬遠していた。「あー、なんか宇宙でヒーローが悪者をやっつけるとかそういう話でしょ。」とか幼い頃レンズマンにはまってたくせに思っていた。あんまり言いたくないけど、ファンタジーRPG にも夢中になっていたくせに、当時流行っていたと学会の本の影響で現実の世界で論理的でない考えに反発を覚えるようにいなっていたのだ。つまり全くのイメージ批判で SF を敬遠していたのだ。

そうだったのか!と学会のせいでぼくは SF に悪いイメージを持っていたのか!!
@@Q16: 業界を引っ張っていく強烈な個性を持った若い新人作家、
または新人ファンが登場すること。

最近のおたく界の例で言えば少年ジャンプも黄金期の後に低迷期がきた。すっかり疎くなったので今が何期なのかはわからないけれども、
低迷期は過ぎていたと思う。不調を脱するきっかけになったのは有望な新人の連載によってだった。

あと、2 ちゃんねるという巨大伝言板サイトの SF 板では昨今の SF ファンが SF をダメにした。
という意見がよく出てきて大変不愉快におもうことがある。

確かに昔の SF ファンのしでかしたことをみてみると偉大でとてもかわなんなぁ。いやここで感心せずに、いつかこいつらを越えたるで!と思わなければいかんのか!?そうなのか?などと考えたりするし、それら昔のファンに比べると、我々、SF セミナーや日本 SF 大会に来るだけで特に自分で企画を持たない人はいてもいなくてもいい存在なのか?これでいいのか?と考えたりもするけれど、なにも匿名でしかも SF 板にこずにはいられないような人に言われたくはない。

でも団子団子固まってる固まってると馬鹿にされている DASACON の参加者で「ああ、そうさ!俺たちは団結してるさ!」と集まってエロゲーの会社作ってめちゃめちゃもうけて脱税してしょっ引かれるとかするくらいの元気があった方がいいのかも。

とはいえ、あなたは SF ファンですかという設問にイエスとチェックをつけつつ新人作家/ファンが育ってくること。と答えるのはあんまり理想的ではないかもしれない。俺が SF を盛り上げて見せるさ!とかは言ってみたいものだ。

言えよ!
@@Q17_1: ダン・シモンズ
@@Q17_2: 梶尾真治
@@Q17_3: アーシュラ・k・ル・グイン
@@Q18: SF出版社はちゃんと面白い翻訳の新刊を毎月出版して欲しい。
文庫で!

@@serial: 72
@@name: (削除)
@@age: 3X
@@sex: male
@@Q1: c
@@Q2_1: SF
@@Q2_2: 歴史小説
@@Q2_3:
@@Q3: d
@@Q4: c
@@Q5: b
@@Q6: k
@@Q7_1: a
@@Q7_2:
@@Q8_1: b
@@Q8_2: f
@@Q8_3: f
@@Q8_4: b
@@Q8_5: f
@@Q8_6: a
@@Q8_7: f
@@Q8_8: f
@@Q9: 「パラサイト・イブ」は前半の研究室や手術の描写は興味深く、わくわくしながら読めたが、後半「化け物」が暴れ出してからはミトコンドリアがなぜ人間のごとき意識を持っているのかが引っかかり、しらけてしまった。
「パラサイト・イブ」は十分にＳＦであると思うが、その後半の展開において、「ＳＦ味」は薄い。だが、ＳＦにはエイリアンのくせにアメリカ人と変わらぬ価値観の奴とかがよくでてくるので、ミトコンドリアが擬人化されていても、その点だけで「こんなものはＳＦじゃない」ということはできない。しかし、おもしろいＳＦというのは、たとえエイリアンがステロタイプでも、それ以外の所にどこか外に突き抜けた部分があるように思う。「パラサイト・イブ」にはそういう部分があまり感じられず、内向きの印象を受けた。

@@Q10: 「小説と科学」はおもしろかった。特に「「理系」イメージのひとり歩き」のあたりには共感した。
以前「日本の理科教育が危ない」というシンポジュウムで、子どもが科学に対して「想像の余地がないからつまらない」というイメージを抱いているという報告を聞き愕然とした。ＳＦが売れないわけである。
私は高校で「理系」・「文系」を分ける必要はないと思う。

@@Q11:
@@Q12:
@@Q13: 私は高校で生物を教えていますが、授業のあとで、女の子が友達に「『ミトコンドリアと生きる』って本があるんだよ、知ってる？おもしろそうだよね。読みたいな」と話しているのを聞き、それなら私も読んでみようと思い買いました。この本は読みやすく、おもしろいので授業中に生徒に薦めています。
ポピュラーサイエンスものをこれからも是非書いてください。
@@Q14: 科学が物語と不可分の関係にあり、なおかつ日常の外に突き抜けた部分がある小説。早川書房の最近の作品でいえば、「過ぎ去りし日々の光」や「フラッシュフォワード」はお話としてはつらい部分があるものの、その結末のイメージの広がりはまさにＳＦだと思う。
@@Q15: 私が小学生の頃（３０年前）と比べれば、よく売れていると思う。ＳＦマガジンが小さな本屋にまで２冊も３冊も配本されるなんて夢のようだ。昔はマガジンもＳＦ文庫も隣町まで行かなければ買えなかった。
今の出版状況全体のことを考えたら、本当にＳＦが「売れない」と言えるのかどうか？
一部の映画ブームと結びついた時期のことを基準に考えているのではないか。
ただし、高校生が昔ほど読んでいないのは事実だと思う。
@@Q16: ＳＦ以前に、科学の人気のなさが気になる。残念ながら日本人は科学に対してマイナスのイメージを持っている人が多いようだ。子どもが、科学のおもしろさにふれる機会を増やしたい。
あと、子ども向けのＳＦシリーズを復活させたい。図書館に昔の本はあるが、新しいもので読ませたい。

@@Q17_1: 小松左京
@@Q17_2: バクスター
@@Q17_3: ソウヤー
@@Q18:

@@serial:　73
@@name:　（削除）
@@age:　2X
@@sex:　male
@@Q1:　b
@@Q2_1:　ＳＦ小説（おもに早川）
@@Q2_2:　科学読み物（ガードナーなど）
@@Q2_3:　その他学術入門書
@@Q3:　c
@@Q4:　b
@@Q5:　b
@@Q6:　g
@@Q7_1:　c
@@Q7_2:
@@Q8_1:　f
@@Q8_2:　f
@@Q8_3:　f
@@Q8_4:　f
@@Q8_5:　f
@@Q8_6:　f
@@Q8_7:　f
@@Q8_8:　f
@@Q9:
@@Q10:
@@Q11:
@@Q12:
@@Q13:
@@Q14:　イメージと言われても。私は昔のＳＦが好きですので、
イメージはあまりないです。
最近の男の子と女の子が出てきてドタバタっていうのは
ＳＦの要素ではあっても本来のＳＦでないと思ってます。
@@Q15:　ハヤカワの陰謀。もとい売れれば何でもいいとＳＦブランドが
ＳＦでないものまでに使われるようになってしまったため。
最近のＳＦアニメってのたまっているアニメなんだかなぁ。
@@Q16:　サイエンスを分かりやすく紹介する人材が日本は少ないと思う。
研究者にそこらへんのことが出きる人がいればいいと感じます。
つまりＳの部分が分かる人が少なくなっているのではというのが
私の判断です。ＳＦなんて分からないと。ファンタジーはそこそこ売れているみたいですから。（あれをファンタジーと呼ぶかどうかはまた別問題でややこしいですが。）科学啓蒙活動も必要なんじゃないかなぁということです
@@Q17_1:　アジモフ
@@Q17_2:　ハインライン
@@Q17_3:　横田順彌
@@Q18:　ハヤカワさん立ち直って欲しい。

@@serial: 74
@@name: (削除)
@@age: 3X
@@sex: male
@@Q1: c
@@Q2_1: ＳＦ
@@Q2_2: ミステリー
@@Q2_3:
@@Q3: g
@@Q4: d
@@Q5: c
@@Q6: k
@@Q7_1: a
@@Q7_2:
@@Q8_1: b
@@Q8_2: b
@@Q8_3: a
@@Q8_4: b
@@Q8_5: b
@@Q8_6: c
@@Q8_7: c
@@Q8_8: b
@@Q9: 『八月の博物館』は作者と同世代ということもありましたのか、亨の少年時代の描写に懐かしさを覚えました。瀬名作品のなかで一番好きです。
@@Q10:
@@Q11: ソウヤーやイーガンの文庫解説はよかったと思います。
ホラーは専門外なので、詳しいことは書けません。
@@Q12: 「ＳＦ業界」について表明されてきた違和感は、かなりの部分的を射ていると思います
『パラサイト・イヴ』がヒットしていたとき、どこか軽侮するような風潮が「ＳＦ業界」にあったのは事実です。それが「ＳＦ業界」内部の「村意識」と無関係だと思えません。
@@Q13: デビュー作が社会現象になるほど大ヒットしたことは、ある意味で不幸なことだと思いますが（いつまでも読者が１作目のイメージに呪縛される)、その呪縛を自力で振り切ってくれることを期待しています。
@@Q14: 「Science Fiction」の略でありますから、ジャンル全体が完全に「科学（技術)」と手を切ってしまうことは出来ないでしょう。
ですので、ＳＦにおける「科学」がカレーに入ってる人参のように扱われること、「初心者向けにあまり難しくないＳＦを」とか（「初心者」というのは具体的にどのような読者を想定しているのでしょうか？)、「ＳＦの９割は科学と関係がない」とかいう言説には、強い違和感を覚えます。
@@Q15: 先日、ＴＶニュースで週刊ベストセラーを報じるコーナーを観ていましたが、新書ノベルス部門で１位は茅田砂胡『スカーレット・ウィザード』５巻、週辺りの売り上げ７万５千部だそうです。
ＳＦのみが選択的に「売れない」のではないと思います。
@@Q16: 一番簡単なことは「ひとりの小松左京」が出ることですね。「ＳＦ」の看板を背負った、誰でも知ってるベストセラー作家。ジャンルそのものの活性化にはなるかどうか分かりませんが、みんなひとしなみに「売れる」ことを目指すというのは、言い方を変えれば「護送船団方式」ではありませんか。
@@Q17_1: グレッグ・イーガン
@@Q17_2: 野尻抱介
@@Q17_3:
@@Q18: 忌憚のない意見を言わせてもらえば、ハルキ文庫も徳間もまだ笛吹けど踊らずと言った感じ。
とくに徳間の日本ＳＦ新人賞には、正直言ってやや失望気味。「ＳＦ」を謳った長編小説の新人賞は、おそらく日本初なのに、受賞したのは結局、ＳＦ「風」ミステリーや学園ドラマ。第２回になるとちょっと変わってきましたが。

#Q7_2 が on になっていませんが、プロの方だと思います。

@@serial:　75
@@name:　（削除）
@@age:　3X
@@sex:　male
@@Q1:　b
@@Q2_1:　ＳＦ
@@Q2_2:
@@Q2_3:
@@Q3:　b
@@Q4:　b
@@Q5:　b
@@Q6:　i
@@Q7_1:　a
@@Q7_2:
@@Q8_1:　f
@@Q8_2:　f
@@Q8_3:　f
@@Q8_4:　f
@@Q8_5:　f
@@Q8_6:　f
@@Q8_7:　f
@@Q8_8:　f
@@Q9:　『パラサイト・イヴ』を第二部まで読んだだけなので、そこまでの感想。ＳＦには「科学をおもちゃにして遊ぶ」という言い方があるが、その感覚とはちょっと違うような気がする。科学読み物とホラー小説を交互に読んでいるような感じ。話はとても面白い。
@@Q10:
@@Q11:
@@Q12:
@@Q13:「ミドリムシは植物か動物か」というようなことを、ミドリムシ自身が悩むことはないと思う。
@@Q14:アニメ「キャプテン・フューチャー」の主題歌。
@@Q15:普通の小説を読む人よりＳＦを読む人の方がずっと少ないと思うからそう言われるのではないか。具体的な数字を見たことがないので実際のところは分からない。
@@Q16:作家の方々に、独創的でものすごく面白い話をたくさん書いてもらう。（言うだけなら簡単）
@@Q17_1:Ｒ・Ａ・ラファティ
@@Q17_2:
@@Q17_3:
@@Q18:

@@serial:　76
@@name:　（削除）
@@age:　2X
@@sex:　male
@@Q1:　b
@@Q2_1: ミステリー・冒険
@@Q2_2:　SF
@@Q2_3:　純文学
@@Q3:　e
@@Q4:　d
@@Q5:　b
@@Q6:　h
@@Q7_1:　c
@@Q7_2:
@@Q8_1:　b
@@Q8_2:　b
@@Q8_3:　a
@@Q8_4:　a
@@Q8_5:　f
@@Q8_6:　a
@@Q8_7:　f
@@Q8_8:　f
@@Q9: 好きです。マニアが「ＳＦじゃない！」と騒ごうと、なに構うものか。
@@Q10: 「なんてまじめな人なんだ…。」と思うことが多いです。
@@Q11: ｂｋ１でのコラム、楽しく拝読しております。
イーガンの短篇集『祈りの海』の解説も良かったです。
（私自身は表題作と「イェユーカ」さえあればあとはもうどうでもいいや、という極端な意見の持ち主ですが）
@@Q12: 内輪で受ければよし、という雰囲気への違和感は、私も（比較的）
新しいＳＦ読者として感じていたことであり、共感を覚えました。
@@Q13: いちど「ドラえもん」または「のび太くん」のコスプレを
してください。…ごめんなさい、冗談です。
@@Q14: 人類絶滅の危機と、それを回避しようとする努力の物語。
（昔見た小松左京さん原作映画『復活の日』の影響かと思われる。）
@@Q15: 早川のＳＦマガジンの部数は一万未満、と聞いたことがあります。
それは噂としても、ＳＦは全般的に売れてないんだろうな、と
いう気持ちはありました。他ジャンルの小説をたくさん
読んでいた私にとってもＳＦはちょっと敷居が高い印象が
あったことや、報道でよく聞く「若者の理系離れ」が原因で
そう思ったのでしょう。
@@Q16: あんなの「ＳＦじゃない、キーッ！」とか言いたがる
マニアを黙らせる。少なくとも、個人的にはそういう
人たちに支えられているジャンル、という印象があって
ＳＦを避けていた時期があったので。
@@Q17_1: ロバート・Ｊ・ソウヤー
@@Q17_2: ラリー・ニーヴン
@@Q17_3: スティーヴン・バクスター
@@Q18: もっと明るく！

@@serial:　78
@@name:　（削除）
@@age:　3X
@@sex:　female
@@Q1:　d
@@Q2_1: サイエンス・フィクション
@@Q2_2:　幻想
@@Q2_3:　時代
@@Q3:　e
@@Q4:　c
@@Q5:　a
@@Q6:　k
@@Q7_1:　a
@@Q7_2:
@@Q8_1:　b
@@Q8_2:　f
@@Q8_3:　a
@@Q8_4:　f
@@Q8_5:　f
@@Q8_6:　f
@@Q8_7:　f
@@Q8_8:　f
@@Q9:　瀬名さんは、いろんなジャンルの小説を多く読んでいる人に、考えさせたりワクワクさせる小説を書いている方なのだと思いました。独特な世界観をもつＳＦ小説は、マニアックな読み物だと思っている方もいるようですが、視点をかえたものの見方のできる、数少ないジャンルだと思います。そして、瀬名さんの小説がＳＦファンにとっても魅力的なのは、そういった感覚が楽しめるからだと思いました。
@@Q10:
@@Q11:
@@Q12:
@@Q13:
@@Q14: ちがった視点で、物事を考えることができる小説。

@@Q15: 売れているかどうかなんて、わかりません。ＳＦが売れていたから読みはじめた訳でもありません。読んでおもしろかった本の多くがＳＦだったから、ＳＦというジャンルを意識して、買っているだけですから、わたしとしては、ほどほどには売れていると思ってます。
「ＳＦ小説は売れない」という言説があるとすれば、それはＳＦという言葉が、他のジャンル小説に拡散したため、そうみえているだけだと思います。
@@Q16: 瀬名さんのような、作家が増えてくれればいいのではないでしょうか。
@@Q17_1: フィリップ・Ｋ・ディック
@@Q17_2: ジェイムズ・ティプトリー・ジュニア
@@Q17_3: コードウェイナー・スミス
@@Q18:

@@serial: 79
@@name: (削除)
@@age: 2X
@@sex: female
@@Q1: b
@@Q2_1: ＳＦ
@@Q2_2: ノンフィクション
@@Q2_3: マンガ分析関連
@@Q3: d
@@Q4: d
@@Q5: c
@@Q6: f
@@Q7_1: a
@@Q7_2:
@@Q8_1: b
@@Q8_2: c
@@Q8_3: a
@@Q8_4: f
@@Q8_5: f
@@Q8_6: f
@@Q8_7: f
@@Q8_8: f
@@Q9: 瀬名さんの作品をＳＦだと思って読んだ事は無い。パラサイト～は
科学現代小説、ブレイン～は少しオカルトより小説、そして今読んでいる八月～は大人向けジュブナイルだと感じた。その理由は、私がＳＦだと感じる要素が無かったからだ。ミトコンドリアにしても
八月～の認識うんぬんについても、未来の技術ではなく、むしろそれが現在の技術に近いように感じられたから。ＳＦに追いついたとよく言われるが、その流れのなかに、今２０歳の私はいるのかもしれないと思う。
@@Q10: 読んでません。
@@Q11: 読んでません。
@@Q12: すいません！これまた読んでません。
@@Q13: あ～、パラサイト～は売れているからという理由で手に取ったのですが、アイデアはスゲぇと思いつつ、難しい・・・、というふうに感じながら読んでいたことが否めません。ブレイン～は、おっ、なんか自分の世界入ってイッっちまったな、でもそんな突っ走りぶりも、ま、いっか、という感じ。でも、あのネタをストーリーに展開していったことは、Ｘファイル好きの私には合っていた。う～ん、今になって良く考えるとＳＦだったなぁ。どうも、あからさまな宇宙人っぽいイメージができると、私にとってそれはＳＦではなく、オカルトになってしまうようです。で、今読んでる八月～は、！！、変わったな～。こんなに変われるものなんだなぁ、人は、人そのものである文章は。と、感激した。ザッピングもまぁスムーズで、場面の切り替わりも苦にならず、理解できない用語がならぶこともないので、とても読みやすい。もう、ほんの少しで読み終わるのことが、寂しい。明日の電車で終わってしまうのだろう。そんな一つの作品として、とてもレベルアップした。以前の二つに比べての違いはそこ。一つの作品になっているということ。以前の二つは、分解してあったものをぁ w)・・u チつけてあった感じ。八月～は、一つで全て。分解はできない。そこがちがう。前二つも好きだが、やはり読者の素直な感想としては、八月が～が断然読みやすかったといえるだろう。でも、どんな物語であれ、試行錯誤しようとしていることが伝わってくる瀬名さんの作品は、好きだな。あと、下手な新人賞の作家より、遥かに文章は上手いと思いますよ。
@@Q14: マニア向け。好きな人しか読めない。知らない単語がいっぱい。
今は流行らない。なぜなら、わざわざ知らない単語を克服してまで読もうという読者でない人々は、少ないから。それに、ＳＦをやるなら今の時代、遥かにグラフィックで映し出されたもののほうが、有利であると感じる。時代感ってものだろう。
@@Q15: 売れる売れないなどと考えたことは無い。というか、そのモノ自体が面白いか面白くないかという本質的なところを、おざなりにしているように感じる。ＳＦは詰まるところアイデアというところがあるが、そのアイデアが出尽くし、ＳＦという未来に追いつき、そして若者はアイデアなどが出てくる状況のなかで育てられてはいない。としたら、売れる理由はない。ベテランだけじゃ駄目なんだ、柔らかい頭の奇才、そんな奴が沢山出てくる年代、波が必要なんだ、と、ふと思う時がある。
@@Q16: 上述したが、ウェーブが必要だ。２、３人いっきに期待されるような新人が出る。そんなことが起これば、火は、意外に簡単につくかもしれない。あとは媒体。小説だけでは駄目なのかもしれない。最初は違う媒体でヒットを出し、そこから小説に派生する。というか逆に言えば、アニメにしろ、マンガにしろ、ゲームにしろ、映画にしろ、日本製の、一部向けでない、純粋に面白いＳＦが一作品でもブレイクすれば、ＳＦそれ自体に火が付くのは簡単なのでは。そうすれば、ＳＦ小説も、今より読まれるかもしれない。それは一時の流行かもしれないが。
@@Q17_1: ニール・スティーブンソン
@@Q17_2: ハインライン
@@Q17_3: 藤崎しんご
@@Q18: 流行っては、いない。そして、目新しくも、無い。
もしかして悲しい状況かもしれない。

@@serial: 80
@@name: (削除)
@@age: 3X
@@sex: female
@@Q1: c
@@Q2_1: SF
@@Q2_2: ミステリー
@@Q2_3: ホラー
@@Q3: d
@@Q4: c
@@Q5: c
@@Q6: h
@@Q7_1: c
@@Q7_2:
@@Q8_1: b
@@Q8_2: f
@@Q8_3: f
@@Q8_4: f
@@Q8_5: f
@@Q8_6: b
@@Q8_7: a
@@Q8_8: f
@@Q9: パラサイト・イブは最後の方でイブが分離?したところから
リアリティがなくなった。SF 観というのはよくわかりません。
@@Q10: ミトコンドリアと生きるは面白かったですが、SF 観というのがよくわかりません。
@@Q11: 瀬名さんの解説はとても丁寧で秀逸だと思います。
もっといろいろ読みたいので、まとめて欲しいです。
SF 観というのが(以下略)。
@@Q12:
@@Q13: 瀬名さんの活動には真摯で真面目なので、非常に好感を持っています。
瀬名さんこそ、なぜ SF 観に拘るのですか?
@@Q14: 未来、ロボット、クローン、宇宙
……想像力貧困です。すみません。
@@Q15: 「売れない」というのはネットで初めてしったのですが、
特にハード SF について。
知らない世界が描かれていることが多いので、想像力をフル
に駆使して世界観を自分で構築しなければならないので、判り
やすいものが受ける向きには受けないでしょう。

国産ミステリが受けるのもそういう理由かも。
@@Q16: おもしろければ。
それにしても YA 分野での SF 傾向のものは SF 小説とは認められないのですか?
結構売れていると思うのですが。
@@Q17_1: ジョン・バーリイ
@@Q17_2: 池上永一←SF ではないと思う。
@@Q17_3:
@@Q18: 「いまの」ってなんですか?

@@serial: 81
@@name: (削除)
@@age: 3X
@@sex: male
@@Q1: d
@@Q2_1: 一般文芸
@@Q2_2: ＳＦ
@@Q2_3: ミステリ
@@Q3: e
@@Q4: c
@@Q5: b
@@Q6: j
@@Q7_1: c
@@Q7_2:
@@Q8_1: a
@@Q8_2: a
@@Q8_3: b
@@Q8_4: f
@@Q8_5: a
@@Q8_6: b
@@Q8_7: b
@@Q8_8: a
@@Q9: 僕は、キャラクターの心情に感情移入して次のストーリー展開にワクワクしながら作品を読むタイプなので、「BRAIN VALLEY」では登場人物の考え方や行動に違和感が感じられました。
孝岡が幻覚に悩まされた後、次々と開く自動ドアに導かれながらメアリーの部屋へやってくるシーンがあります。「待っていたわ」というメアリーの言葉から、彼女が自分の症状について何か知っているのは明白だから、普彼女に「あなたは何を知っているのか？」と強く詰問して当然と思っていたのですが、彼女の薦めでやすやすと催眠を受ける心情が理解できませんでした。
ジェイの死に対するメアリーの対応(記憶を取り戻した時のことも含めて)にも、僕は違和感を受けました。
また、そんな登場人物の心情ベースで作品を読むものですから、時々「これじゃ、この登場人物がかわいそうだ」と思ってしまうことがあります。作中の登場人物が、物語に精一杯関われていないと、そう思うのです。

ジェイは悲惨な役回りでした。話の上で悲惨な最期を遂げたということではありません。上巻では主人公を通して読者に科学解説をするための駒に使われ、下巻前半でただ広沢の狂気を際だたせるためだけにあっさり殺されてしまう、という風に読めました。
メアリーよって行われた終末医療(実験？)の悲惨な結果によって、ちょっとはレセプターの役割について主人公達は知見を得られたわけですが、それでもジェイの存在によって誰かの意志に変化が起きて、物語の流れが変わる重要なきっかけになった、といった感じではありません。

ジェイは前半あれだけ主人公と絡んでいながら、基本的に物語の流れに関わっていない、誰かほかの物語を引っ張っていく主役級の登場人物に動機を与えるような生き方をおくれていない。ジェイがいなくても、この事件は大体今回の事件と同じような展開になったのではないか。(広沢が暴走する可能性はありますが(笑))
ジェイ役の役者がもしいたら、今頃舞台裏でぶーたれていることでしょう。「あーあ、今回の役はやりがいがないなあ」なんて。
個人的には、ジェイの脳をスキャンしたときにジェイの意識(の一部)が研究所のコンピュータに残っていて、最後にハナのコンピュータ上の意識と共に、意志を持ったAIと戦う、というのを期待していたのですが、それはそれでまたベタかなと……(笑)。

また、ちょっとＳＦファン的な感想ですが、ジェイのような主要登場人物には是非、コンピュータやAI、脳科学といった、この物語のテーマに近い原因で殺されて欲しかった！(笑)。徹底的に野蛮で、暴力的なことが理由で物語から姿を消すのは、この作品の中で出る死人にはふさわしくない！(笑)なんて思っちゃったりしました。
あれだけ物語の前半に登場したジェイが死ぬというのは、上・下巻通してヤマ場の一つの大事件なのですから、本書のテーマに沿った大事件が起こって欲しかった、と言い換えることもできるかと思います。
「八月の博物館」の亨にしろジェイにしろ、僕の身の回りではあんなに理解力があって自分でモノを考えられる小学生なんかいなかった！ とはやはり思いましたが、それはまあ大した不満ではないと思っています。
ただ、「八月の博物館」でも、亨やみんなは一生懸命物語の中で生き抜いているのに、作者が自信を失くして顔を出すのは、やはり物語の中でがんばっている登場人物がかわいそうだ、と思ってしまうのです。
難しい文学理論は不勉強ですが、瀬名さんと僕とでは「物語」とはこんなものだ、という前提の“お約束”(みたいなものがあるとすれば)がズレているように感じました。
以上、素人が偉そうなこと書いてしまって申し訳ないです。でもこんな機会なかなかないので、ちょっとだけ感想を書いてみました。お気に障ったらお許し下さい。
取って付けるようで恐縮ですが、「BRAIN VALLEY」には感動しました。特に「神とは人間の脳の中に生まれたAIである」というアイデアには、大変驚かされました。

@@Q10: 「ミトコンドリアと生きる」「「神」に迫るサイエンス」を読みました。このような自著の科学面について解説し、興味を深めてくれる書籍の試みを、大変応援しています。
@@Q11: すみません。不勉強です。

@@Q12：すみません。不勉強です。
@@Q13：アンケートの締め切りを過ぎてしまいましたが、特別の配慮があって送らせていただきます。申し訳ありません。ちなみにセミナーのスタッフです。
@@Q14：「もし～」から始まる論理の積み重ねで、従来の価値観を超えるセンス・オブ・ワンダーを与えてくれる作品。
@@Q15：ＳＦは本質的に、大衆にまんべんなくアピールするスタイルの小説ではないと思う。だからそういった手法の小説群と比べて売れてはいない。特定の趣向に向けて書かれた専門書と考えると、他の専門分野と比べてパイは大きいと思う。

@@Q16：科学をもっと身近で目に見えるものにすること。
@@Q17_1：小松左京
@@Q17_2：アーサー・Ｃ・クラーク
@@Q17_3：筒井康隆
@@Q18：ＳＦを書いている作家の方も、これからも「この作品はＳＦか？」などと考えず、好きなもの、面白いと思ったものを書けばいいと思う。読む側も面白いと思ったものしか読まない。別にそれでも「ＳＦ」というジャンルはなくならないし、読み続ける人もいると思う。

＃集計作業後のご投稿であるため、今回は有効投稿として扱っておりません。

Q7_1 SFファンか a（はい）42名

	通し番号	1	2	3	9	10	12	16	17	18	20	21	22	24	25	27	30	36	37	42	43	44	48	49	50	51	52	54	56	57	58	59	60	61	63	65	69	71	72	74	75	78	79
	年齢	4x	2x	3x	3x	2x	3x	4x	2x	3x	4x	3x	2x	4x	3x	2x	3x	2x	3x	2x	4x	3x	3x	2x		4x	3x	3x	2x	3x	2x	3x	3x	2x	2x	3x	3x	2x	3x	3x	3x	3x	2x
	性別	m	f	m	f	m	m	m	m	m	m	m	m	m	f	m	m	f	m	m	m	f	m	m		f	m	f	m	m	m	m	f	m	m	m	f	m	m	m	m	f	f
Q1	SFセミナー	d	d	d	d	c	b	b	c	b	a	d	b	d	b	a	c	d	c	a	d	b	b	c	d	a	d	b	d	d	d	d	d	d	b	c	b	c	c	c	b	d	b
Q3	読む本の数	d	d	g	f	f	c	d	e	c	g	d	d	f	d	d	g	g	c	c	g	d	d	d	f	f	e	f	c	f	c	e	d	e	d	d	f	e	d	g	b	e	d
Q4	SF小説の数	d	c	d	d	c	c	b	d	b	b	c	b	e	b	d	c	d	c	c	e	b	b	c	c	c	d	d	c	d	b	d	c	e	b	d	c	d	c	d	b	c	d
Q5	科学ノンフィク	b	a	d	c	e	a	b	d	b	b	b	c	a	d	b	e	d	b	b	b	b	c	a	a	b	b	b	b	b	b	b	a	b	a	a	a	a	b	c	b	a	c
Q6	これまで読んだ	k	j	k	j	g	j	k	l	j	j	j	l	k	j	l	k	j	j	g	k	h	h	j	k	k	j	j	j	k	j	k	j	l	j	j	l	l	k	k	l	k	f
Q7_2	プロか否か			on	on	on								on				?			on	?										?								?			
Q8_1	パラサイト・イ	f	c	d	b	b	f	b	c	f	a	b	a	a	c	c	b	e	f	e	b	b	a	b	f	f	a	c	b	b	b	b	a	c	b	c	f	a	b	b	f	b	b
Q8_2	BRAIN VALLE'	b	f	b	b	f	f	f	f	f	a	f	b	a	f	e	b	e	f	f	a	a	a	a	f	f	c	b	b	b	f	b	f	c	c	b	f	a	f	b	f	f	c
Q8_3	八月の博物館	f	f	c	b	f	f	f	f	a	f	f	b	b	f	f	c	f	f	f	a	b	f	f	f	f	f	f	f	f	f	a	f	f	f	a	f	f	f	a	f	a	a
Q8_4	小説と科学	b	f	c	c	f	f	f	f	f	f	f	a	f	f	f	c	f	f	f	c	f	f	f	f	f	f	f	f	f	f	f	f	f	f	f	a	f	b	b	f	f	f
Q8_5	「神」に迫るも	f	f	c	a	f	f	f	f	f	d	f	c	b	f	e	c	f	f	f	b	f	f	b	f	f	f	f	f	f	f	f	f	f	f	f	f	d	f	b	f	f	f
Q8_6	ミトコンドリア	f	f	c	f	f	f	f	f	f	f	f	c	b	a	c	b	f	f	f	c	f	f	f	f	f	a	f	f	f	f	f		f	f	f	f	a	c	f	f	f	f
Q8_7	Gene	f	f	a	b	f	f	f	f	f	f	f	c	a	b	f	f	a	f	f	a	f	f	d	f	f	f	f	f	f	f	a	f	a	f	f	f	f	f	c	f	f	f
Q8_8	ハル	f	f	c	b	f	f	f	f	f	f	f	f	a	f	f	f	e	f	f	b	f	f	f	f	f	f	f	b	f	f	f	f	b	f	f	f	f	f	b	f	f	f

Q17_1	好きなSF作家	ル・	ヴァ	クラ	ヴァ	小川	筒井	ロバ	ヴォ	ジェ	イー	ヴァ	小松	ラフ	ティ	ジェ	ヴァ	ロバ	堀晃	ロバ	ラッ	小松	いと	秋山	アシ	アシ	高千	神林長平	ソウ	竹本	イー	恩田	ベイ	神林	神林	大原	ダン	小松	イー	ラフ	ディ	ニール・スティーヴンソン
Q17_2		ビジ	コニ	スタ	フレ	高瀬	イー	アシ	ギブ	デイ	ル・	クラ	クラ	ディ	コー	シェ	ハイ	ジェ	クラ	ニー	イー	ル・	バラ	グラ	クラ	ハイ	谷甲	ディレイニ	梶尾	クラ	ティ	菅浩	神林	秋山	野尻	神林	梶尾	バク	野尻抱介		ティ	ハインライン
Q17_3		イー	ハイ	ヴァ	鈴木	三雲	ダン	草上	小松	アシ	ブル	大原	アシ	篠田	シマ	ニー	レズ	野尻	ニー	オー	ラファテ-	ディ	山本	ハイ	マキ	佐藤大輔		コー	野尻抱介	ブラ	コードウ:	秋山	茅田	ル・	ソウヤー		コー	藤崎慎悟						

Q2_1	よく読むジャン	SF	SF	幻想	SF	SF	小林	SF	ライ	冒険	純文	SF	本格	SF	SF	SF	SF	SF	SF	SF	SF	SF	ファ	SF	SF	SF	冒険	SF	SF	SF	SF	SF	ミス	SF	SF	SF	ボー	SF	SF	SF	SF	サイ	SF
Q2_2		ミス	ミス	ミス	やお	ヤン	筒井	ミステリ	歴史	ミス	ファ	宇宙	幻想	ミステリ	冒険	ミス	ミス	ファ	ミス	ミス	SF	ヤン	ファ	ファ	SF	ミス	ノン	ファンタ:	ミス	SF	時代	ミス	ファ	SF/I	ホラ	歴史	ミステリ-	幻想	ノンフィクション					
Q2_3			文学	時代	ミス	戦史	海外	冒険小説	SF	ホラ	ホラー		海外	時代物		歴史	ファ	架空	戦争	ホラ	児童	ハー	ミス	ホラ	歴史	政治	ファンタジー			推理	ライ	ミステリ-	ミステリー			ホラ	普通					時代	マンガ分析関連

Q7_1 SFファンか b（いいえ）7名　c（わからない）23名

	通し番号	4	5	11	29	34	47	53	6	7	8	15	19	26	28	31	35	39	40	45	46	55	62	64	66	67	68	70	73	76	80
	年齢	3x	4x	3x	3x	3x		2x	2x	3x	2x	6x	1x	3x	3x	1x	2x	2x	3x	3x	2x	unde	2x	2x		3x	3x	3x	2x	2x	3x
	性別	m	m	f	f	m	m	m	f	m	m	f	m	m	m	f	m	f	m	f	m		f	m	f	m	f	f	m	m	f
Q1	SFセミナー	a	b	a	c	b	b	c	a	c	c	a	b	b	c	b	b		c	b	b	a	a	c	b	b	b	d	b	b	c
Q3	読む本の数	d	d	f	e	e	g	d	b	d	d	c	b	e	b	c	e	b	d	f	d	c	c	c	d	f	d	d	c	e	d
Q4	SF小説の数	c	a	a	c	c	c	c	a	b	c	a	b	a	b	b	b	b	c	c	b	a	a	b	b	c	b	a	b	d	c
Q5	科学ノンフィク	a	b	b	a	d	a	a	a	a	b	a	a	c	a	a	a	a	a	a	b	a	a	a	a	e	b	a	b	b	c
Q6	これまで読んだ	j	k	d	l	j	j	h	a	k	j	c	g	l	k	e	f	d	g	j	l	g	d	g	j	k	e	j	g	h	h
Q7_2	プロか否か	on	on																												
Q8_1	パラサイト・イ	c	a	f	c	f	c	f	b	d	c	a	a	f	b	b	d	b	d	c	f	f	a	f		b	b	b	f	b	b
Q8_2	BRAIN VALLE'	e	c	b	f	f	b	f	f	d	b	a	f	f	b	a	f	a	d	d	f	f	b	f		b	f	b	f	b	f
Q8_3	八月の博物館	f	f	f	f	f	f	b	b	f	f	a	f	f	f	f	f	a	f	e	f	f	a	f		b	a	f	f	a	f
Q8_4	小説と科学	f	f	b	f	f	b	f	a	a	f	a		f	f	f	f	f	f	f	f	f	f	f		a	f	f	f	a	f
Q8_5	「神」に迫るも	f	f	f	f	f	c	f	f	f	f	a	f	f	f	f	f	f	c	b	f	f	f	f		a	f	f	f	f	f
Q8_6	ミトコンドリア	f	f	f	f	a	f	f	c	f	f	f	f	f	f	f	f		f	b	f	f	f	f		a	f	f	f	a	b
Q8_7	Gene	f	b	f	b	f	b	f	b	f	f	a	b	f	f	b	f	f	f	f	f	f	f	f		a	f	f	f	f	a
Q8_8	ハル	f	f	f	f	f	f	f	b	f	f	a	f	f	f	f	f	f	f	f	f	f	f	f		f	f	f	f	f	f

Q17_1	好きなSF作家	野尻	カルヴィ-	ル・	レム	筒井	北野勇作		鈴木いずみ	ロバ	筒井	小松	谷甲	ブラ	広瀬	瀬名	平井	大原	神林	マシスン	森岡浩之	眉村	上遠	ル・	アシ	ソウ	ジョン・ヴァーリイ
Q17_2		クラ	安部公房	アシ	クラ	バラ	マイクル・コニ		ギブスン	瀬名	瀬名	星新	神林	光瀬	フレ	ダニ	田中	アシ	ヴォ	スティーヴ	高野史緒	オー	筒井	トマ	ハイ	ニー	池上永一
Q17_3		シェ	バーセル:	ロバ	ハイ	ウィ	コードウェイナ		レズニッ:	眉村	星新	フレ	栗本	ヴェ	沼正三		牧野	コードウ:	クライト:	キース・		瀬名秀明	ディ	横田	スティーヴン・バクスター		

Q2_1	よく読むジャン	ヤン	純文学	海外	軽い	ポス	SF	純文	SF	SF	児童	SF	戦記	SF	ソフ	ミス	SF	SF	ミス	SF	ミス	恋愛	SF	なん	謎解	ファ	海外	SF	ミス	SF	
Q2_2		翻訳	歴史小説	海外	歴史	新本	純文学		時代	科学	紀行	サイコ		ミス	歴史	ホラ	ノン	ホラ	ファ	古典	ホラ	ミス	ファンタ:		シミ	普通	幻想	科学	SF	ミステリー		
Q2_3		ポル	SF	SF	ファ	純文	日本古典		推理	教養	ホラ	物語		歴史小説	SF		ミステリ	歴史	本格	推理小説					日常生活/	SF	その	純文	ホラー		

資料請求先

【ファイルダウンロード】

本資料の大部分は、ＳＦセミナーのウェブページから PDF 文書としてダウンロードすることができます（無料、ただし Adobe Acrobat Reader が必要）。ご自由にダウンロードされてかまいませんが、その際はご自身の範囲にてご利用ください。ファイルの無断配信、無断転載はお断りいたします。

ＳＦセミナーのトップページ　http://www.sfseminar.org/

Acrobat Reader 無償ダウンロードページ　http://www.adobe.co.jp/products/acrobat/readstep.html

ダウンロードできる内容は、参考資料（「どれだけＳＦを読んでいるか？アンケート」「ＳＦセミナー２００１プログラムブック」）を除くすべてのページです。参考資料のうち、星野力氏による「どれだけＳＦを読んでいるか？アンケート」は、下記の URL で閲覧できます。

星野力教授の講義「科学技術とＳＦ」の HP　http://darwin.esys.tsukuba.ac.jp/SF/

そこで使われたアンケートフォーム　http://darwin.esys.tsukuba.ac.jp/SF/ankeito.html

アンケート結果　1998 年度　http://darwin.esys.tsukuba.ac.jp/SF/98/Ankeito.html

アンケート結果　1999 年度　http://darwin.esys.tsukuba.ac.jp/SF/99/Ankeito.html

アンケート結果　2000 年度　http://darwin.esys.tsukuba.ac.jp/SF/Ankeito.html

【ハードコピー（冊子）】

本資料のハードコピー（冊子形態）を、希望者に無料で配布しています。ご希望の方は、住所・氏名・電話番号・希望冊数などを明記のうえ、下記の連絡先（ＳＦセミナー実行委員会）までお申し込み下さい。

【ご意見・ご感想・ご質問】

皆様からのご意見・ご感想をお待ちしております。ＳＦセミナー実行委員会までお寄せ下さい。また、本資料についてのご質問も、同じく下記の連絡先で承っております。

【連絡先】

ＳＦセミナー実行委員会

住所：〒229-1103　神奈川県相模原市橋本 6-2-2-1805　ＳＦセミナー事務局

メールアドレス：JBB02104@nifty.ne.jp

講演資料

ＳＦセミナー２００１

「ＳＦ」とのファースト・コンタクト

―瀬名秀明、ＳＦに対するアンビバレントな思いを語る―

（非売品）

発行者：瀬名秀明

瀬名秀明事務所

住所：〒981-3133　仙台市泉区泉中央 4-19-1-902

事務所メールアドレス：RXX01703@nifty.com

2001 年 7 月 2 日　初版第 1 刷発行（PDF 形式）

2001 年 8 月 18 日　初版第 1 刷発行

印刷所：株式会社 栄光

〒721-8515　広島県福山市箕島町 6455-3

tel 0849-54-0124

fax 0849-53-3108